岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第403集

浅石（あさいし）遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

岩手県二戸地方振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

浅石（あさいし）遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。一方、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発も県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和の取れた施策が今日の課題となっております。

当事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会生涯学習文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、緊急地方道路整備事業に関連して、平成12～13年度にかけて行われた浅石遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって、縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡等の遺構と遺物・弥生時代中期～後期の遺物包含層が確認され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力とご支援を賜りました二戸地方振興局土木部、二戸市教育委員会をはじめとする関係各位に心より感謝申しあげます。

平成14年10月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は岩手県二戸市似鳥字嘔ノ坂19－１ほかに所在する浅石遺跡発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、緊急地方道路整備事業に伴い、県教育委員会生涯学習文化課と二戸地方振興局土木部との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡台帳の遺跡番号はＪＥ18－0396、遺跡略号は、調査年度ごとにＡＩ－00、ＡＩ－01である。

4．発掘調査期間、調査面積、調査担当者は以下のとおりである。

　平成12年６月５日～８月11日　1,760㎡　菊池貴広・長村克稔

　平成13年４月７日～７月６日　2,030㎡　菊池貴広・小松則也

　調査総面積　　3,790㎡

5．室内整理期間及び整理担当者は以下のとおりである。

　平成13年１月４日～平成13年３月31日　菊池貴広・長村克稔

　平成14年11月１日～平成14年３月31日　菊池貴広・小松則也

6．本報告の執筆・編集は菊池貴広が行った。

7．分析・鑑定は次の機関に依頼した。

　石質鑑定：花崗岩研究会

　火山灰分析：パリノサーベイ

8．発掘・整理・本報告書の作成にあたっては次の方々にご指導、ご協力を得た（順不同・敬省略）。

　能登　健・関　俊明・小島敦子（群馬埋文）・武田嘉彦（田舎館村埋文）・永嶋　豊・茅野嘉雄・佐藤智生・成田滋彦（青森埋文）・宇部則保（八戸市教委）・関　豊・柴田知二・鈴木　聡（二戸市教委）・町田　洋・新井房夫

9．野外調査参加者は以下の通りである。（順不同）

　田中すみ・古館礼子・上平恵子・上平久介・三浦一朗・川上良子・北口せつ・金田一堅・田畑サヨ・田畑サエ・田中舘信一・田中舘ひで・木戸口コマ・佐藤カオル・中山梅子・田口キヨ・山屋ソワ・宮澤長栄・田口季治郎・佐藤キヌ・田中ノブ・田口マリ・川上妙子

10．室内整理作業員は以下の通りである。（順不同）

　浅沼由美子・浅沼周子・伊藤信子・小沢達子・越場ミチエ・滝花益美・福士夕紀枝・吉田真由美・滝村テツ子・菅原陽子・小笠原千代子・細越澤幸子・伊藤尚子・三上ゆかり

11．土層の色調の観察は、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1989）を用いた。

12．本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

序言

例言

〔本　文〕

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 1
　1．位置と環境 …… 1
　2．地形と地質 …… 1
　3．周辺の遺跡について …… 2
　4．遺跡の基本層序 …… 7
Ⅲ．野外調査と室内整理 …… 11
　1．野外調査 …… 11
　2．室内整理 …… 12
Ⅳ．調査結果 …… 13
　1．遺構検出及び精査の状況について …… 13
　2．竪穴住居跡 …… 13
　3．住居状遺構 …… 25
　4．掘立柱建物跡 …… 25
　5．柱穴列 …… 27
　6．土坑 …… 27
　7．柱穴状ピット群 …… 33
　8．畝間状遺構 …… 36
　9．焼土遺構 …… 36
　10．その他 …… 36
　11．遺物包含層と遺物の出土状況について …… 38
Ⅴ．遺構外出土遺物 …… 45
　1．遺物の実測掲載基準について …… 45
　2．縄文時代・弥生時代の土器について …… 45
　3．土製品について …… 51
　4．その他の遺物について …… 52
　5．石器・石製品について …… 89
Ⅵ．まとめと考察 …… 127
　1．遺構 …… 127
　2．遺物 …… 133
　3．おわりに …… 148
分析鑑定 …… 150

〔図　版〕

第1図　岩手県全図 …… 2
第2図　遺跡位置図 …… 3
第3図　遺跡周辺の地形 …… 4
第4図　周辺の遺跡 …… 5
第5図　遺跡の基本層序 …… 7
第6図　凡例 …… 8
第7図　遺構配置図 …… 9
第8図　1号竪穴住居跡(1) …… 14
第9図　1号竪穴住居跡(2) …… 15
第10図　2号竪穴住居跡 …… 17
第11図　3号竪穴住居跡 …… 19
第12図　5号竪穴住居跡(1) …… 20
第13図　5号竪穴住居跡(2) …… 21
第14図　9号竪穴住居跡 …… 22
第15図　11号竪穴住居跡 …… 24
第16図　1号住居状遺構 …… 26
第17図　1号掘立柱建物跡 …… 26
第18図　2号掘立柱建物跡・1号柱穴列 …… 28
第19図　土坑(1) …… 31
第20図　土坑(2) …… 32
第21図　1号柱穴状ピット群 …… 34
第22図　2号柱穴状ピット群 …… 35
第23図　畝間状遺構 …… 37
第24図　焼土遺構及びその他の遺構 …… 38
第25図　遺物包含層セクション・旧河道 …… 40
第26図　遺物包含層断面(1) …… 41

第27図　遺物包含層断面(2) …… 42
第28図　Ⅲａ層遺物出土状況 …… 43
第29図　Ⅲａ・Ⅲｂ層遺物出土状況 …… 44
第30図　１号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 53
第31図　１号竪穴住居跡出土遺物(2) …… 54
第32図　１号竪穴住居跡出土遺物(3) …… 55
第33図　１号竪穴住居跡出土遺物(4) …… 56
第34図　３号竪穴住居跡出土遺物 …… 57
第35図　５号竪穴住居跡出土遺物 …… 58
第36図　９・11号竪穴住居跡・
　　１号住居状遺構出土遺物(1) …… 59
第37図　１号住居状遺構出土遺物(2) …… 60
第38図　１号住居状遺構出土遺物(3) …… 61
第39図　遺構外出土遺物(1) …… 62
第40図　遺構外出土遺物(2) …… 63
第41図　遺構外出土遺物(3) …… 64
第42図　遺構外出土遺物(4) …… 65
第43図　遺構外出土遺物(5) …… 66
第44図　遺構外出土遺物(6) …… 67
第45図　遺構外出土遺物(7) …… 68
第46図　遺構外出土遺物(8) …… 69
第47図　遺構外出土遺物(9) …… 70
第48図　遺構外出土遺物(10) …… 71
第49図　遺構外出土遺物(11) …… 72
第50図　遺構外出土遺物(12) …… 73
第51図　遺構外出土遺物(13) …… 74
第52図　遺構外出土遺物(14) …… 75
第53図　遺構外出土遺物(15) …… 76
第54図　遺構外出土遺物(16) …… 77
第55図　遺構外出土遺物(17) …… 78
第56図　遺構外出土遺物(18) …… 79
第57図　遺構外出土遺物(19) …… 80
第58図　遺構外出土遺物(20) …… 81
第59図　遺構外出土遺物(21) …… 82
第60図　遺構外出土遺物(22) …… 83
第61図　遺構外出土遺物(23) …… 84
第62図　遺構外出土遺物(24) …… 85
第63図　遺構外出土遺物（土製品１） …… 86
第64図　遺構外出土遺物（土製品２） …… 87
第65図　遺構外出土遺物
　　（土製品３・その他） …… 88
第66図　遺構外出土遺物（Ⅲａ層１） …… 94
第67図　遺構外出土遺物（Ⅲａ層２） …… 95
第68図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層１） …… 96
第69図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層２） …… 97
第70図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層３） …… 98
第71図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層４） …… 99
第72図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層５） …… 100
第73図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層６） …… 101
第74図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層７） …… 102
第75図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層８） …… 103
第76図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層９） …… 104
第77図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層10） …… 105
第78図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層11） …… 106
第79図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層12） …… 107
第80図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層13） …… 108
第81図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層14） …… 109
第82図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層15） …… 110
第83図　１号竪穴住居跡拡張推定図・
　　１号柱穴状ピット柱穴想定図 …… 129
第84図　ＩＤ５ｂ・ｃ、ⅡＤ１ａ～ｃグリッド …… 130
第85図　縄文時代後期土器集成図１ …… 134
第86図　縄文時代後期土器集成図２ …… 135
第87図　縄文時代後期土器集成図３ …… 136
第88図　足沢・大渕遺跡出土土器 …… 139
第89図　足沢・火行塚遺跡出土土器 …… 140
第90図　火行塚・弥次郎窪遺跡Ⅱ出土土器 …… 141
第91図　弥次郎窪遺跡Ⅱ・風張(1)遺跡Ⅱ
　　出土土器 …… 142
第92図　弥生土器集成図１ …… 143
第93図　弥生土器集成図２ …… 144
第94図　弥生土器集成図３ …… 145
第95図　石器・石製品器種別グラフ、
　　石質別グラフ …… 147
第96図　石錘製作想定図 …… 147

〔写真図版〕

写真図版１　縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡 …… 155
写真図版２　遺構 …… 156
写真図版３　火山灰堆積状況・弥生土器出土状況 …… 157
写真図版４　弥生土器出土状況・縄文時代後期土器集合写真 …… 158
写真図版５　弥生土器集合写真・ヒスイ製勾玉・玉類 …… 159
写真図版６　調査風景 …… 160
写真図版７　空中写真 …… 161
写真図版８　空中写真 …… 162
写真図版９　調査前風景 …… 163
写真図版10　１号竪穴住居跡(1) …… 164
写真図版11　１号竪穴住居跡(2) …… 165
写真図版12　２号竪穴住居跡 …… 166
写真図版13　３号竪穴住居跡 …… 167
写真図版14　５号竪穴住居跡(1) …… 168
写真図版15　５号竪穴住居跡(2) …… 169
写真図版16　９号竪穴住居跡 …… 170
写真図版17　11号竪穴住居跡 …… 171
写真図版18　１号住居状遺構 …… 172
写真図版19　１・２号掘立柱建物跡 …… 173
写真図版20　土坑(1) …… 174
写真図版21　土坑(2) …… 175
写真図版22　土坑(3) …… 176
写真図版23　土坑(4) …… 177
写真図版24　２号柱穴状ピット群 …… 178
写真図版25　畝間状遺構(1) …… 179
写真図版26　畝間状遺構(2) …… 180
写真図版27　その他の遺構・遺物包含層断面 …… 181
写真図版28　遺物包含層断面 …… 182
写真図版29　遺物出土状況 …… 183
写真図版30　作業風景 …… 184
写真図版31　現地説明会 …… 185
写真図版32　遺構内出土遺物(1) …… 186
写真図版33　遺構内出土遺物(2) …… 187
写真図版34　遺構内出土遺物(3) …… 188
写真図版35　遺構内出土遺物(4) …… 189
写真図版36　遺構内出土遺物(5) …… 190
写真図版37　遺構内出土遺物(6) …… 191
写真図版38　遺構内出土遺物(7) …… 192
写真図版39　遺構内出土遺物(8) …… 193
写真図版40　遺構外出土遺物(1) …… 194
写真図版41　遺構外出土遺物(2) …… 195
写真図版42　遺構外出土遺物(3) …… 196
写真図版43　遺構外出土遺物(4) …… 197
写真図版44　遺構外出土遺物(5) …… 198
写真図版45　遺構外出土遺物(6) …… 199
写真図版46　遺構外出土遺物(7) …… 200
写真図版47　遺構外出土遺物(8) …… 201
写真図版48　遺構外出土遺物(9) …… 202
写真図版49　遺構外出土遺物(10) …… 203
写真図版50　遺構外出土遺物(11) …… 204
写真図版51　遺構外出土遺物(12) …… 205
写真図版52　遺構外出土遺物(13) …… 206
写真図版53　遺構外出土遺物(14) …… 207
写真図版54　遺構外出土遺物(15) …… 208
写真図版55　遺構外出土遺物(16) …… 209
写真図版56　遺構外出土遺物(17) …… 210
写真図版57　遺構外出土遺物(18) …… 211
写真図版58　遺構外出土遺物(19) …… 212
写真図版59　遺構外出土遺物(20) …… 213
写真図版60　遺構外出土遺物(21) …… 214
写真図版61　遺構外出土遺物(22) …… 215
写真図版62　遺構外出土遺物(23) …… 216
写真図版63　遺構外出土遺物(24) …… 217
写真図版64　遺構外出土遺物(25) …… 218
写真図版65　遺構外出土遺物(26) …… 219

写真図版66　遺構外出土遺物(27) …… 220
写真図版67　遺構外出土遺物(28) …… 221
写真図版68　遺構外出土遺物(29) …… 222
写真図版69　遺構外出土遺物(30) …… 223
写真図版70　遺構外出土遺物(31) …… 224
写真図版71　遺構外出土遺物(32) …… 225
写真図版72　遺構外出土遺物(33) …… 226
写真図版73　遺構外出土遺物(34) …… 227
写真図版74　遺構外出土遺物(35) …… 228
写真図版75　遺構外出土遺物(36) …… 229
写真図版76　遺構外出土遺物(37) …… 230
写真図版77　遺構外出土遺物(38) …… 231
写真図版78　遺構外出土遺物(39) …… 232
写真図版79　遺構外出土遺物(40) …… 233
写真図版80　遺構外出土遺物(41) …… 234
写真図版81　遺構外出土遺物(42) …… 235
写真図版82　遺構外出土遺物(43) …… 236
写真図版83　遺構外出土遺物(44) …… 237
写真図版84　遺構外出土遺物(45) …… 238
写真図版85　遺構外出土遺物(46) …… 239

〔表〕

表1　周辺の遺跡一覧表 …… 6
表2　土器・陶磁器観察表 …… 111
表3　土偶観察表 …… 118
表4　スタンプ形等の土製品 …… 118
表5　円盤状土製品 …… 119
表6　石器・石製品観察表 …… 120

Ⅰ．調査に至る経過

浅石遺跡は『主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備事業』工事に伴って、事業計画区域内に位置することから、発掘調査を行うことになった。

本線は二戸市と浄法寺町、安代町を結ぶ幹線道路であるが、特に似鳥地区は幅員が狭く、カーブが多い中、交通量が多いため車両のすれ違い等に支障をきたしている。又、歩道も無く、児童等の歩行者にも危険な状態である。そのような中、今回、盛岡以北の新幹線開通予定に伴い、周辺市町村からの利用者が見込まれ、交通量の増大が考えられる。それに対応すべくアクセス道路としての性格から、交通の円滑化、安全確保のため、この時期に合わせて改築を行うものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から、『平成11年11月11日付二地土第1235－１号緊急地方道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について』の文書で、岩手県教育委員会に分布調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成11年11月15日に試掘調査を実施した。試掘の結果、土師器や縄文土器が多量に出土したことから、事前に発掘調査が必要な旨、『平成11年11月24日付教文第859号緊急地方道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）』により、二戸地方振興局土木部に通知した。

通知を受けた二戸地方振興局土木部では、岩手県教育委員会からの平成12年度埋蔵文化財発掘調査に係る事業集約の問い合わせに対し、調査を実施して欲しい旨の回答をした。

発掘調査開始に係る発掘調査承諾書については『平成12年２月16日付二地土第1707号』で財団法人岩手県文化振興事業団に提出した。　（二戸地方振興局土木部）

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．位置と環境

本遺跡は、二戸市似鳥字嘔ノ坂19－１ほかに所在し、ＪＲ東北本線二戸駅から南西方向に約4.2ｋｍ、また浄法寺町天台寺から北東方向に約７ｋｍに位置し、安比川右岸に形成された河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は、約140ｍである。安比川との比高は、10～20ｍである。

２．地形と地質

遺跡の立地する二戸市は、岩手県の北端部に位置して青森県に接し、北側は青森県名川町、同三戸町、西側は青森県田子町、岩手県浄法寺町、南側は一戸町、東側は九戸村、軽米町に隣接している。二戸市は、東を北上山地、西を奥羽山脈に挟まれた馬淵川水系中流域に立地する内陸の市で、面積は238.17ｋ㎡、人口約３万人の岩手県で最も新しい市政都市である。(1972年市政施行)

遺跡の載る火山性丘陵地帯は、八幡平の東側に位置する安比岳南麓付近を源とし、馬淵川最大の支流である安比川によって南北に二分されている。遺跡のある安比川の右岸は稲庭岳（標高1078ｍ）を中心とした火山性の山麓丘陵（稲庭岳山麓丘陵）で、東に向かって次第に高度を下げ、東端縁は馬淵川西端に達している。また南側は、八幡平から北東に茶臼岳、大黒森山、前森山、七時雨山、西岳などの火山が並び、北側と同様に火山性丘陵（七時雨山山麓丘陵）が広がっている。この七時雨山山麓丘陵もまた北側と同様にその東～北東端が馬淵川西端に達している。

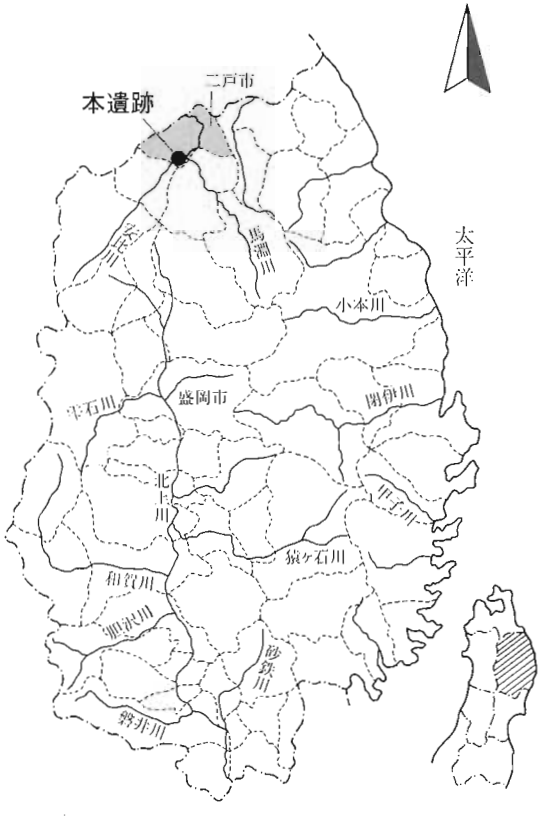
以上の火山性丘陵は、安山岩質岩類を主な基盤岩としているが、丘陵の北東縁の馬淵川西岸付近には新第三紀の末の松山層や門の沢層と呼ばれる凝灰岩質角礫岩や砂礫などが分布し、その上を第四紀の火山噴出物などが覆っている。

二戸市の地形は以上の馬淵川以西の火山性丘陵地、馬淵川流域、馬淵川以東の非火山性山地（北上山地）の三つの地域に大別される。この地域の北上山地には古い隆起準平原が広く分布しており、最高点は折爪岳（標高852m）である。北上山地は内陸部と沿岸部（三陸海岸地帯）との気象境界の位置も占めている。また、馬淵川流域には、数段の更新世・完新世の段丘が形成されている。

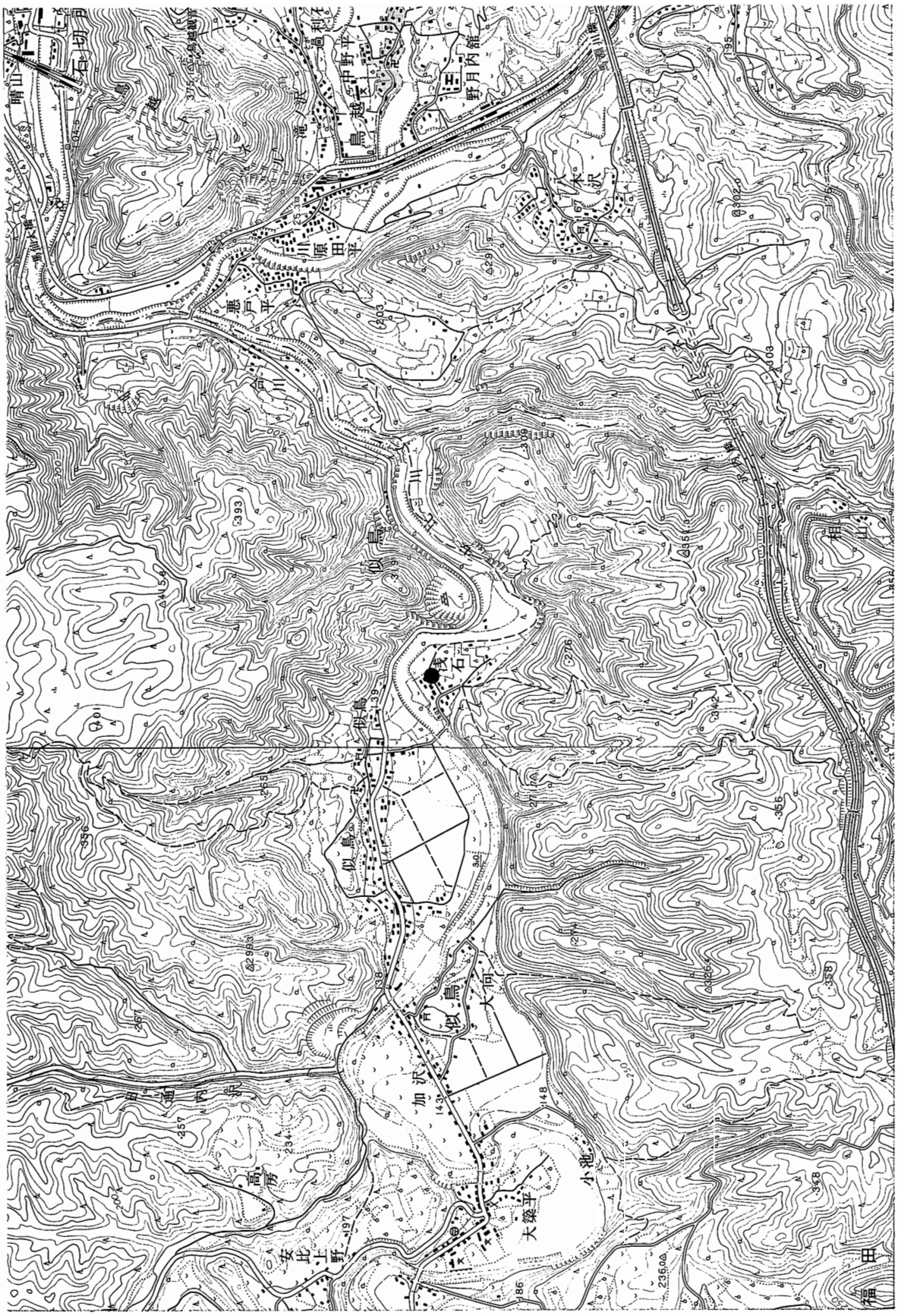
3．周辺の遺跡について

似鳥地区に所在する本遺跡近隣では、大向Ⅱ遺跡・大向上平遺跡（当センター調査）があり、平安時代を中心とした集落跡並びに畝間状遺構と畠の復旧痕跡が検出されている。また、大向上平遺跡では、縄文時代後期初頭の埋設土器内部からヒスイ製の大珠が出土している。

本遺跡に該期する遺跡としては、似鳥遺跡（二戸市教育委員会調査）が挙げられ、縄文晩期から弥生初頭にかけての竪穴住居が確認されている。二戸市内においては、弥生時代の遺構及び遺物が検出された遺跡として足沢遺跡・大渕遺跡・火行塚遺跡が上げられる。

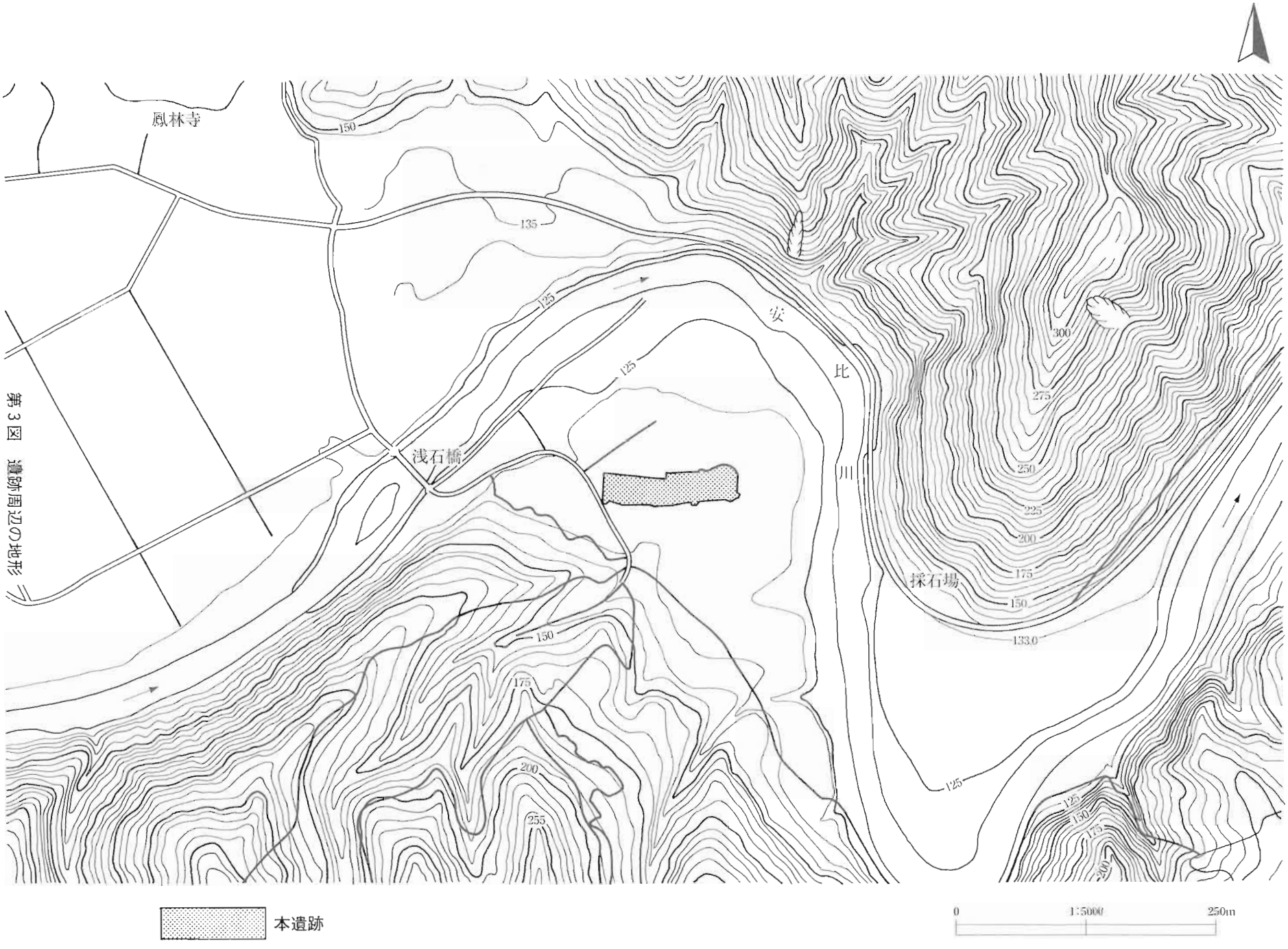


第１図　岩手県全図

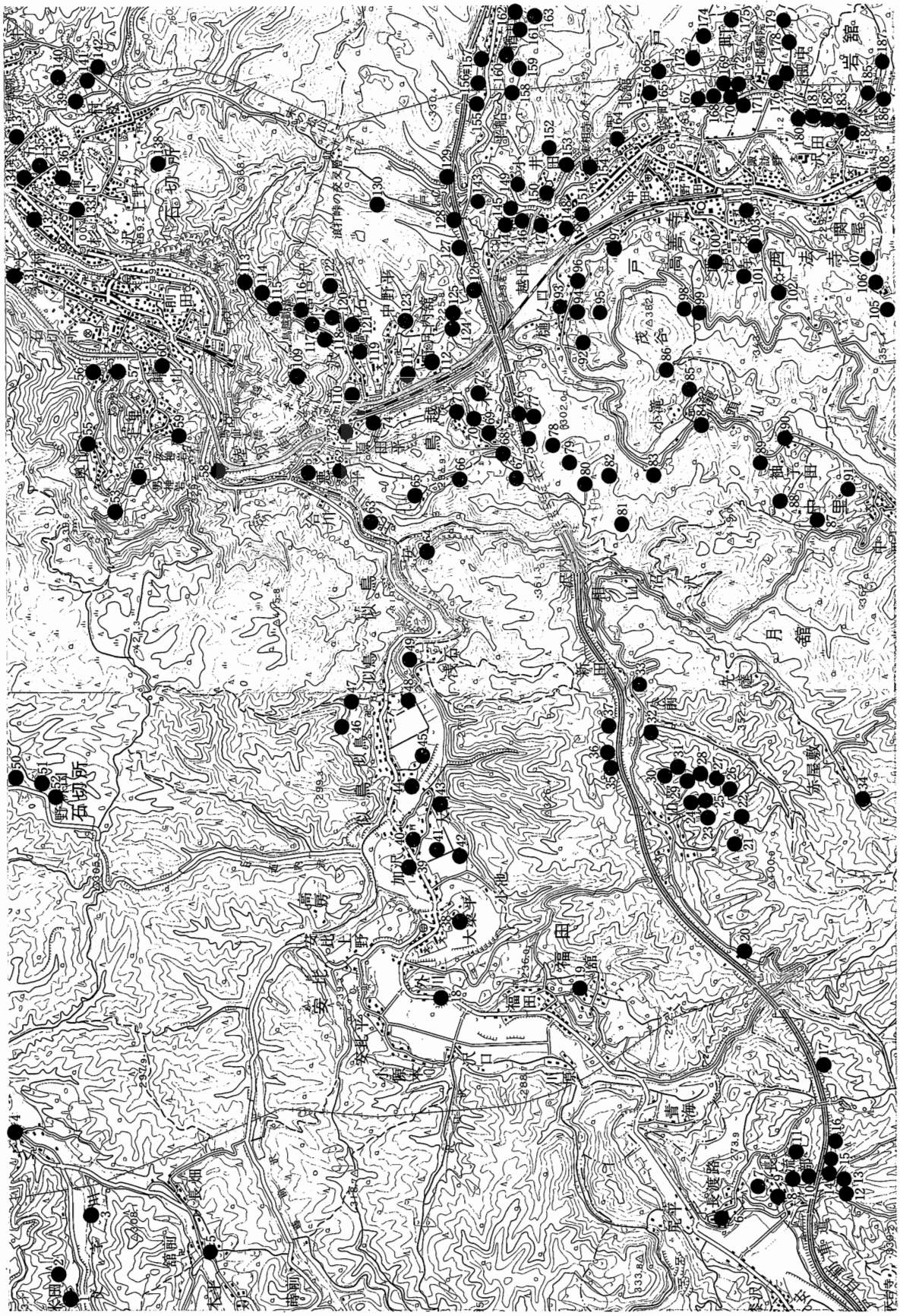


1：25,000　一戸・浄法寺

第2図　遺跡位置図


鳳林寺
浅石橋
安
比
川
採石場
150
135
125
125
150
175
200
255
300
275
250
225
200
175
150
133.0
125
125
150
175
200
本遺跡
0
1:5000
250m

第3図　遺跡周辺の地形



1：50,000　一戸・浄法寺

第４図　周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡一覧表

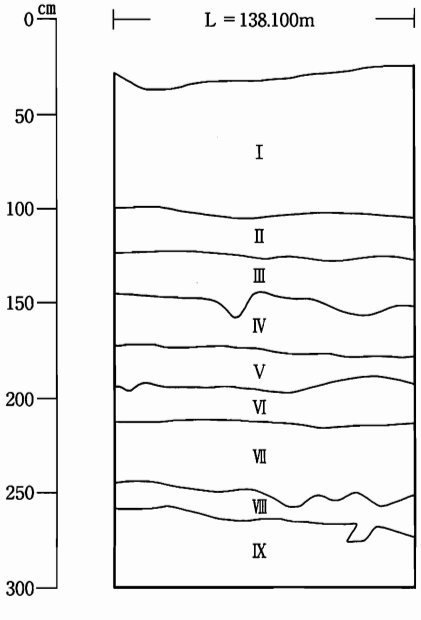
番号	遺跡名	種別	時　代
1	米田Ⅱ	散布地	縄文・古代
2	米田Ⅰ	散布地	縄文・古代
3	米田館	城館跡	中世
4	前田	散布地	縄文・古代
5	足沢館	城館跡	中世
6	長渡部館	城館跡	中世
7	蝦夷館	城館跡	中世
8	長流部館	城館跡	中世
9	上野Ⅰ	散布地	縄文
10	上野Ⅲ	集落跡	縄文
11	上野Ⅱ	散布地	縄文
12	上野Ⅳ	集落跡	縄文
13	上野Ⅴ	集落跡	縄文
14	上野Ⅵ	集落跡	縄文
15	上野Ⅶ	散布地	縄文
16	上野Ⅷ	散布地	縄文
17	縊沢	散布地	古代
18	川袋	散布地	縄文
19	福田館	城館跡	縄文・古代・中世
20	大久保	集落跡	縄文・古代
21	仲口	集落跡	縄文・古代
22	大倉Ｄ	散布地	縄文
23	日陰久保	散布地	縄文
24	福田久保	散布地	縄文・古代
25	大倉Ｂ	集落跡	縄文・古代
26	久保	散布地	縄文
27	大倉Ｃ	散布地	縄文
28	馬場塚Ⅰ	散布地	縄文・古代
29	大倉Ａ	散布地	縄文・古代
30	大倉Ⅱ	散布地	縄文・古代
31	馬場塚Ⅱ	散布地	縄文
32	笹森	散布地	縄文
33	八前	散布地	縄文
34	赤屋敷	散布地	縄文・平安
35	馬立Ⅱ	集落跡	縄文
36	馬立Ⅰ	散布地	縄文
37	馬立Ⅲ	散布地	縄文
38	上大梁平	散布地	縄文
39	大向上平	集落跡	縄文・平安
40	大向館	城館跡	中世
41	大向	集落跡	古代
42	大向Ⅱ	集落跡	古代
43	桑木田	散布地	縄文
44	沖野Ⅱ	散布地	縄文
45	沖野Ⅰ	散布地	縄文
46	大渡	集落跡	縄文・古代
47	似鳥館	城館跡	中世
48	水谷野	散布地	縄文
49	浅石	集落跡	縄文・弥生
50	上野新田	散布地	縄文・古代
51	野新田Ａ	散布地	縄文
52	野新田Ｂ	散布地	縄文
53	土川Ⅰ	散布地	縄文
54	土川Ⅱ	散布地	縄文・古代
55	横長根	散布地	縄文
56	火行塚	集落跡	縄文・弥生・古代
57	石切所館	城館跡	中世
58	駒木平	散布地	縄文
59	蒼前館	城館跡	中世
60	上里	城館跡	縄文・中世
61	悪戸平Ⅰ	集落跡	縄文・平安
62	舌崎	散布地	縄文
63	悪戸平Ⅱ	集落跡	縄文
64	楢館	城館跡	中世
65	下夕沢	散布地	縄文・弥生
66	和山	散布地	縄文・弥生・古代
67	堀切Ⅰ	散布地	縄文
68	堀切Ⅱ	散布地	縄文
69	竹林Ⅴ	散布地	縄文
70	竹林Ⅰ	散布地	縄文
71	八木沢館	城館跡	中世
72	八木沢Ⅰ	散布地	縄文・平安
73	川原田平Ⅰ	散布地	古代
74	川原田平Ⅱ	散布地	平安
75	親久保Ⅱ	散布地	縄文
76	親久保Ⅴ	散布地	縄文・弥生
77	親久保Ⅵ	散布地	縄文・弥生
78	親久保Ⅷ	散布地	縄文
79	親久保Ⅸ	散布地	縄文
80	親久保Ⅹ	散布地	縄文
81	親久保Ⅻ	散布地	縄文
82	親久保Ⅺ	散布地	縄文
83	小滝Ⅱ	散布地	縄文・平安
84	小滝	散布地	縄文
85	小滝館	城館跡	中世
86	小滝Ⅲ	散布地	縄文
87	馬場野Ⅱ	散布地	縄文・平安
88	袖子田Ⅲ	散布地	縄文・平安
89	袖子田Ⅱ	散布地	縄文・平安・中世
90	袖子田	散布地	縄文･平安
91	袖越	散布地	縄文・弥生・平安
92	樋ノ口Ⅲ	散布地	縄文・平安
93	樋ノ口館	城館跡	中世
94	樋ノ口Ⅰ	散布地	縄文・弥生・古代
95	樋ノ口Ⅱ	散布地	縄文・弥生・古代
96	親久保Ⅰ	集落跡	縄文・弥生
97	傘木	散布地	縄文
98	茂谷	散布地	縄文・平安
99	寺屋敷	散布地	縄文・平安
100	毘沙門堂	城館跡	平安・鎌倉
101	西法寺	散布地	弥生
102	西法寺Ⅱ	散布地	縄文
103	西法寺Ⅲ	散布地	縄文・中世
104	西法寺館	城館跡	中世
105	大平Ⅲ	散布地	縄文・弥生・中世
106	大平Ⅱ	散布地	縄文・弥生・中世
107	大平	集落跡	縄文・弥生・平安
108	関屋	散布地	縄文・弥生・奈良
109	宮古沢	散布地	縄文
110	上野平	散布地	縄文
111	野月内館	城館跡	中世
112	野月内館	城館跡	縄文・弥生・平安
113	首戸Ⅰ	散布地	縄文
114	平下夕	散布地	縄文？
115	首戸Ⅱ	散布地	縄文・平安
116	過利石	散布地	縄文・平安
117	滝ノ沢Ⅱ	散布地	縄文
118	滝ノ沢Ⅰ	散布地	縄文
119	中野平	集落跡	縄文・平安
120	中屋敷	散布地	縄文
121	上ミ平	散布地	縄文・弥生・平安
122	戸屋森	散布地	弥生・奈良
123	稲荷沢	散布地	縄文・弥生
124	野月道ノ下	散布地	縄文・弥生・平安
125	野月道ノ上	散布地	縄文
126	大越田Ⅲ	散布地	縄文
127	大越田Ⅰ	集落跡	縄文
128	大道沢Ⅰ	散布地	縄文
129	大道沢Ⅱ	集落跡	縄文
130	波打峠一里塚	一里塚	近世
131	大村	散布地	縄文
132	橋場	城館跡	中世
133	八幡下	散布地	縄文
134	九戸城	城館跡	中・近世
135	三ノ丸	城館跡	中・近世
136	八幡平	散布地	縄文・平安
137	在府小路	城館跡	中世
138	村松館	城館跡	中世
139	柿木平	散布地	縄文・古代
140	上穴牛	散布地	縄文・古代
141	天神下１	散布地	縄文・古代
142	天神下２	散布地	縄文・古代
143	小井田Ⅰ	集落跡	縄文
144	大道沢Ⅲ	集落跡	縄文・弥生
145	小井田Ⅱ	集落跡	縄文・弥生
146	小井田Ⅴ	集落跡	縄文
147	蒔前	散布地	縄文
148	越田橋Ⅰ	集落跡	縄文
149	小井田Ⅲ	集落跡	縄文・弥生・平安
150	小井田Ⅳ	集落跡	縄文
151	越田橋Ⅱ	集落跡	縄文
152	平船Ⅱ	集落跡	縄文
153	大沢Ⅰ	散布地	縄文・平安
154	大沢Ⅱ	散布地	縄文・弥生
155	平船Ⅰ	集落跡	縄文
156	古里Ⅰ	集落跡	縄文
157	楢山	集落跡	縄文・古代
158	古里Ⅱ	集落跡	縄文
159	楢山館	城館跡	中世
160	下楢山Ⅱ	集落跡	縄文
161	下林向	集落跡	縄文
162	内野Ⅱ	集落跡	縄文
163	内野Ⅰ	集落跡	縄文
164	大沢Ⅲ	散布地	縄文・平安
165	一戸城	城館跡	中世
166	北舘Ｆ	散布地	縄文・中世・近世
167	北舘Ｂ	散布地	縄文・古代
168	北舘Ａ	散布地	縄文・平安
169	上野Ｄ	散布地	古代
170	上野Ｇ	集落跡	古代
171	上野Ｂ	散布地	縄文・弥生・古代
172	上野Ｅ	散布地	縄文・古代
173	北舘Ｇ	散布地	縄文・平安
174	上野Ⅰ	散布地	縄文・弥生・平安
175	上野Ｊ	散布地	縄文
176	田中Ⅴ	散布地	縄文・平安
177	一戸田中	散布地	縄文・古代
178	一戸田中Ⅱ	散布地	縄文・古代
179	一戸田中Ⅲ	散布地	縄文・古代
180	田中Ⅳ	散布地	縄文・平安
181	田中Ⅲ	散布地	縄文・平安
182	田中Ⅱ	散布地	縄文・中世
183	田中Ⅰ	散布地	縄文・中世
184	馬場平	集落跡	縄文
185	館	散布地	縄文・弥生・古代
186	御所野	散布地	縄文・平安
187	下地切	散布地	縄文・弥生

4．遺跡の基本層序

本遺跡は、調査区の西側及び中央部が谷状の地形から運び込まれる土砂・礫・堆積土に覆われていた。この影響により、ＩＡ～Ｃグリッド、ＩＥ～Ｇグリッド、ⅡＡ～Ｃグリッド、ⅡＦ～Ｇグリッドにおいては、おそらく谷状の地形から流れる沢、崖錐性堆積物によって、土層が改変された様相を呈していた。このことから遺構は検出されず、遺物は出土するが小破片がほとんどで、弥生時代の土器・縄文時代の土器が混在して出土する状況であった。ＩＣ・ＩＤグリッド、ⅡＣ・ⅡＤグリッドでは、Ⅲａ・Ⅲｂ層と付した層が形成され、遺物が出土すると同時に遺構も確認された。この区域は、他の区域と比較して、微高地となっており、各遺構が沢跡・崖錐性堆積物に影響を受けないことから、竪穴住居跡を構築する好条件の区域と言える。

また、遺構・遺物が集中して確認される区域では、Ⅲａ層上部に十和田ａ降下火山灰と類似する火山灰層が覆っていた。この火山灰は、水成の二次堆積によって形成されたものである（場所によっては人為的な堆積の様相を呈する場所もあった）。色調は、本遺跡周辺で確認される十和田ａ降下火山灰と異なる印象を持つ（火山灰の詳細についてはⅥ章を参照）。

概ね本遺跡で構成される基本土層は下記の通りである。



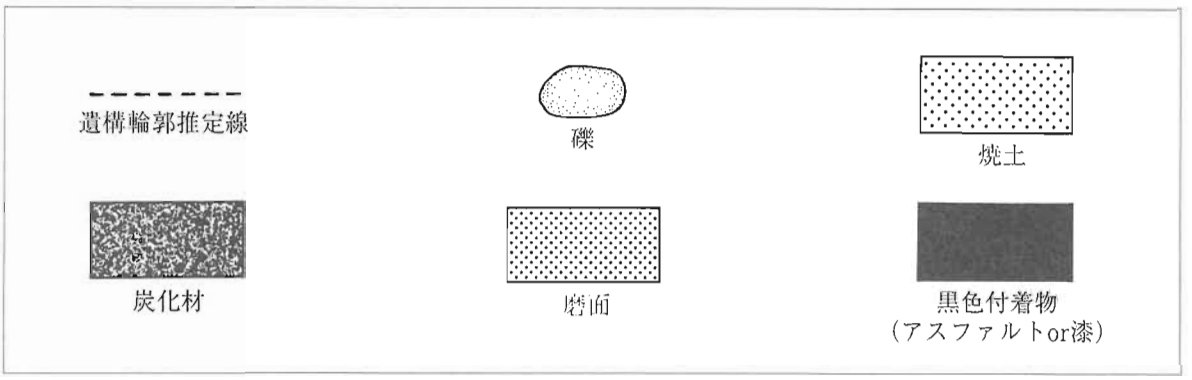
基本土層

Ⅰ．7.5YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性やや強　しまりやや疎（表土）
Ⅱ．10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや密（Ⅲa層）
Ⅲ．7.5YR 2/1　黒色　シルト　粘性中　しまりやや密（Ⅲb層）
Ⅳ．10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（To-Nb?パミス含）
Ⅴ．10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（無遺物層）
Ⅵ．10YR 4/4　褐色　シルト　粘性中　しまり疎
Ⅶ．10YR 3/3　暗褐色　シルト　粘性中　しまり疎
Ⅷ．サンド
Ⅸ．10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり密

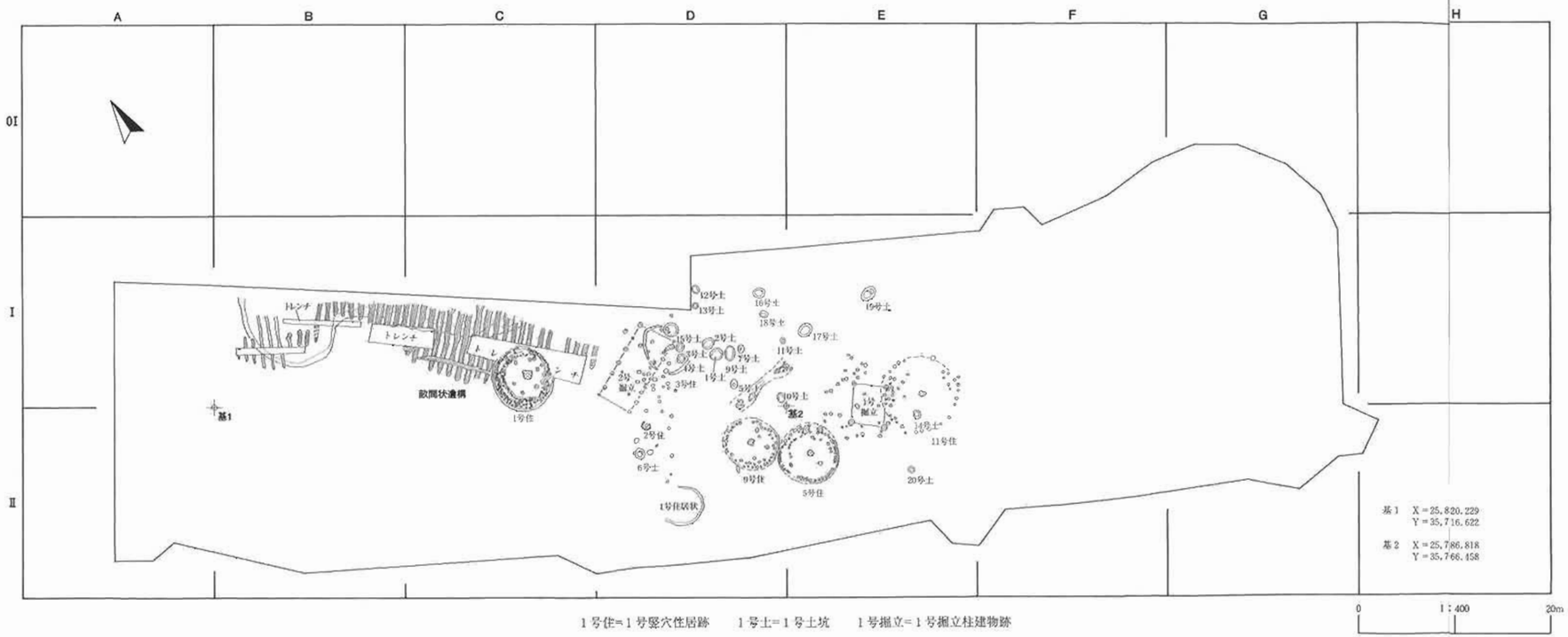
第５図　遺跡の基本層序

なお、本遺跡内及び遺構の埋土等で、十和田起源のテフラが確認される。遺構の記載・土層注記等には、次の略号を使用した。

十和田ａ降下火山灰＝Ｔｏ－ａ　十和田中掷浮石＝Ｔｏ－ｃｕ　十和田南部浮石＝Ｔｏ－Ｎｂ



第６図　凡例



1号住＝1号竪穴住居跡　1号土＝1号土坑　1号掘立＝1号掘立柱建物跡

第7図　遺構配置図

Ⅲ．野外調査と室内整理

１．野外調査

⑴調査経過

野外調査は、当初の面積は1,760㎡で平成12年６月１日～７月31日の予定であった。遺構・遺物が調査区の東側（平成13年度調査範囲）に延びることが予想され、また、同区域（当初の調査区境界付近）で竪穴住居跡が確認されたことから、平成12年度も更に東側に2,030㎡を追加して調査を行った。

⑵グリッドの設定

調査区の設定は、任意の基準点１～４を４点間が直線を通るように設定し、基準点１からこれと平行及び直行する線を４ｍ間隔で引き、４×４ｍの方眼とした。グリッドは､20×20ｍのメッシュで、北西端を基準に南北方向の北からⅠ・Ⅱ・Ⅲ……の番号を付し、東西方向の西からＡ・Ｂ・Ｃ…のアルファベットを24等分の大グリッドとした。更に、この大グリッドを４×４ｍの小区画に細分し、南北方向の北から数字の１～５、東西方向の西からアルファベットのａ～ｅを付し、大グリッドを25等分の小グリッドに区画した。

調査区の名称は、大グリッドではＩＡ１ａ・ＩＢ１ａというように呼称した。なお、当初は単年度調査の予定であったため、平成13年度調査で、南北方向の北に０Ｉグリッドを追加し、東西方向の東にＤ～Ｈグリッドを追加した。各基準点の平面直角座標軸第Ｘ系による成果は次の通りである。

基準点１　Ｘ＝25,820.229　Ｙ＝35,716.622　Ｈ＝141.363

基準点２　Ｘ＝25,786.818　Ｙ＝35,766.458　Ｈ＝136.256

⑶粗掘・遺構検出

幅約１ｍ、長さ約10～15ｍの試掘溝を設定し、遺構検出面確定後、重機による粗掘りを行った。粗掘り終了後、鋤簾・両刃鎌等を用いて検出を行った。

⑷遺構名の付け方

検出された遺構には、第１号竪穴住居跡・第２号土坑などと検出順に遺構名を付し、野外調査時に遺構に認定できなかったものは、室内整理で遺構名の通し番号が欠番になったものに、番号をくり上げて遺構名を付した。

⑸遺構の精査と実測

遺構の精査は竪穴住居跡は４分法、土坑は２分法で精査し、必要に応じて使い分けた。原則として竪穴住居跡・土坑・柱穴状ピットの作図は平面図・断面図共に20分の１で実測し、遺物の出土状況・炉跡については、10分の１の縮尺で実測した。

⑹遺物の取り上げについて

遺構内出土遺物については、埋土上位・中位・下位・床面（底面）に分けて取り上げた。遺構外の出土遺物については、調査区に設定した小グリッド別に出土した層位を記して取り上げた。

⑺写真撮影について

野外調査における写真撮影は、35ｍｍ判2台（モノクローム・カラーリバーサル１台ずつ）と６×７㎝版モノクローム１台を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を適宜撮影した。６×７㎝版モノクロームについては撮影を省略した遺構もある。他にポラロイドカメラ１台をメモ的に使用している。

2．室内整理

(1)遺物の処理

遺物は水洗・注記を行った後、接合・復元作業を行った。これらの作業終了後、遺物の仕分を行い、掲載遺物の登録を行った。その後、実測・拓本・写真撮影・トレース・図版作成の順に行った。

(2)遺構図面

野外調査で得られた図面類は、平面図、断面図の点検、標高値の確認等を行い必要に応じて合成した。その後トレース、遺構図版作成の順に進めた。

(3)図版について

遺物図版については、遺構内・遺構外に分けて、遺構内は遺構名の通し番号順に、遺構外（包含層）の土器については、時代時期別・文様・器種等によって掲載した。遺物の縮尺は、土器・礫石器・円盤状土製品については３分の１、剥片石器と円盤状土製品以外の土製品については２分の１の縮尺で掲載した。

遺構図版については、竪穴住居跡・土坑は50分の１を基本とした。原則として竪穴住居跡の炉跡等の断面は25分の１で掲載した。柱穴状ピット群は80分の１、畝間状遺構は160分の１で掲載した。

遺物の写真図版についての縮尺は土器は約３分の１、石器・土製品は約２分の１で掲載した。掲載番号については、土器・土製品・陶磁器の順で１から通し番号にし、石器・石製品については、遺構・層位の順に１から通し番号にしている。

(4)遺構の掲載順番について

竪穴住居跡については、検出した順番で通し番号を付したことから、遺構番号順に掲載した。欠番になっている部分は、当初は遺構と想定したものが、調査中に認定されないと判別出来たものである。

(5)遺物の掲載順番について

遺構内の土器については遺構ごとに、遺構外のものは、土器・土製品・石器・石製品の順に掲載し、更に土器は、縄文時代前期～弥生時代後期の時代順に掲載した。石器については層位ごと、器種ごとに細分して掲載した。

遺構・遺物図版の凡例については、第６図を参照

Ⅳ．調査結果

1．遺構検出及び精査の状況について

本遺跡の土層は黒色土及び黒褐色土で構成されていたため、平面プランによる遺構確認は困難であった。このことから、試掘溝を設定し断面観察で遺構の有無を判断していった。２・３号竪穴住居跡については、調査時に遺構と判断せず、遺物の取り上げのため、掘り下げ作業中に炉を確認し、グリッド線に合わせたベルト（４×４ｍ区画）の断面から、竪穴住居跡の壁を確認しようと何度か観察を試みたが黒色土のため、壁を把握することができず、遺物についても供伴関係を吟味して、取り上げることが出来なかった。１・５・９号竪穴住居跡及び１号住居状遺構の確認は試掘溝によって、炉・柱穴を確認してから、床面・柱穴・炉をたよりに精査を行った。

２号柱穴状ピット群と呼称したものについては､2号竪穴住居跡の炉精査後、炉検出面より、約40～50cm掘り下げて検出されたもの（２号柱穴状ピット群ＰＰ25～41）もある。このことから、２号竪穴住居跡に伴う可能性のある柱穴状ピットもあったと思われるが、判別することは出来なかった。

前述した状況の中で、今回の発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡６棟（うち４棟は縄文時代後期中葉～後葉)、住居状遺構１棟、掘立柱建物跡２棟、土坑20基、柱穴状ピット96基、その他として、炭化材・溝・焼土遺構が上げられる。

2．竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第８・９図・写真図版10・11）

（位置）　ＩＣ３ｅ・４ｅグリッドに位置する。

（検出状況）　試掘溝設定時に住居の壁を確認し、畝間状遺構精査後Ⅲｂ層上面で検出した。

（平面形・規模）　平面形はほぼ円形を呈する。径6.74×6.53ｍ。拡張前の規模は5.35×4.3ｍと思われる。

（拡張）　柱穴の配置から、３時期（２回の拡張）が推定される（第83図参照)。

（埋土）　黒褐色土の単層からなる。

（壁）　黄褐色の砂礫層を壁とする。壁高は60cmを測る。

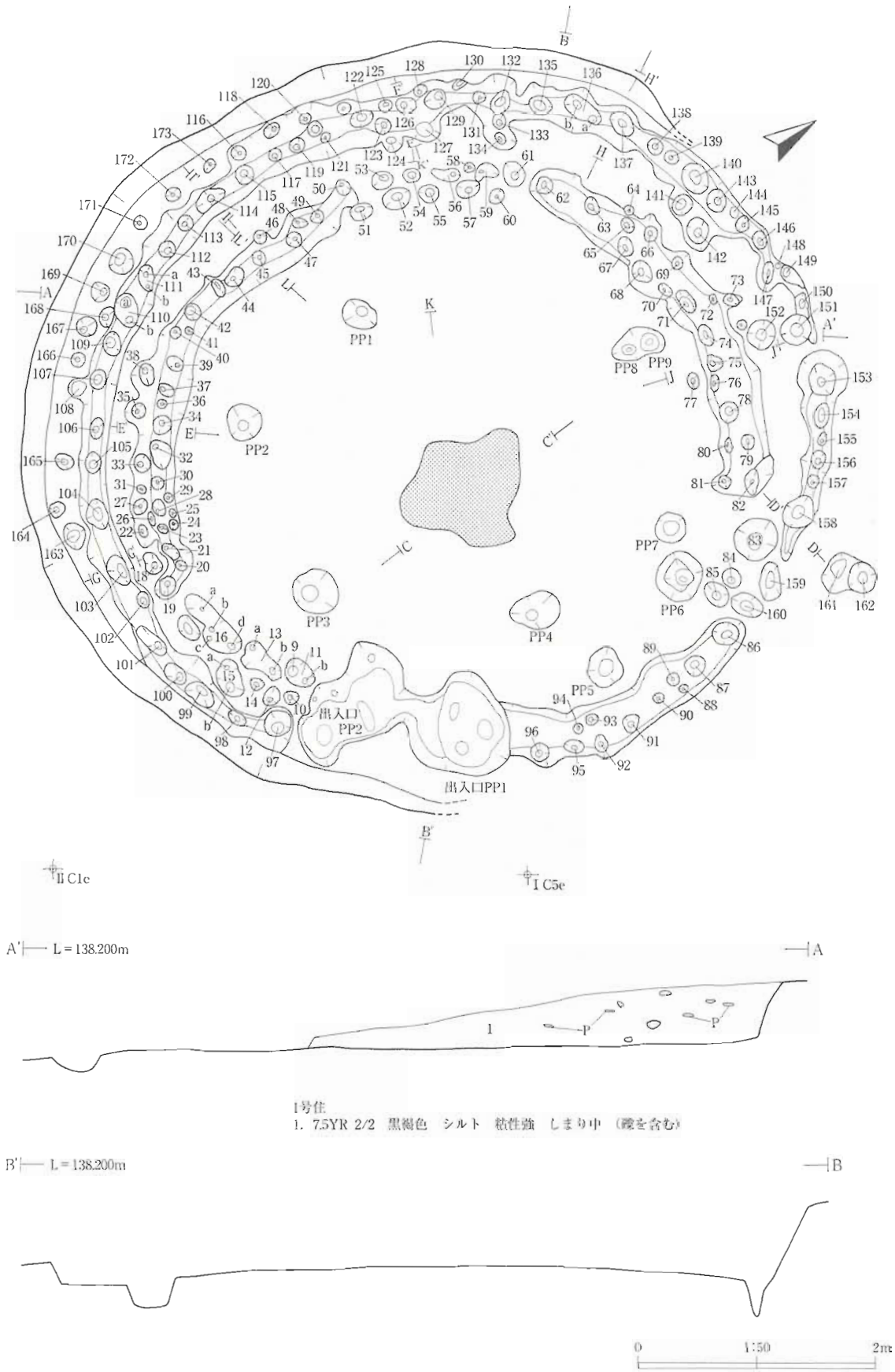
（床）　黄褐色の砂礫層を床とし、ほぼ平坦で固く締まる。貼り床は施されていない。

（柱穴）　検出された柱穴は、壁柱穴と思われる小形のものを含め173基である。壁柱穴より大形の柱穴を主柱と考えると、柱穴の配置はＰＰ７を除いて、６本ないし７本による五及び六角形状の配置が推測される。開口部径は22～43cm、深さは27～56cmの範囲のものである（第83図参照)。

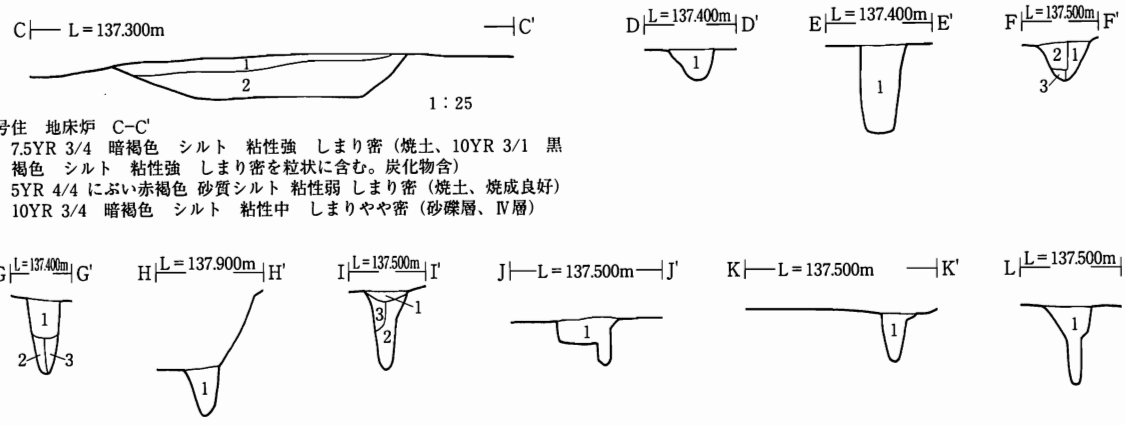
（壁柱穴）　３時期に分かれる。ＰＰ10～96は拡張前の壁柱穴と思われる。ＰＰ97～160は、一回目の拡張時に構築されたものと思われる。ＰＰ163～173は、二回目の拡張時に構築されたものと推測される。前記した壁柱穴は、壁溝内に構築され、柱痕跡が認められるものもある。

（炉）　床面ほぼ中央に位置する。地床炉である。規模は径113×105cm、焼土の厚さは最大で27cmを測る。焼成は良好である。

（壁溝）　拡張前の規模は、幅28～40cm、深さ9.4～21.4cmの範囲である。一回目の拡張時の規模は、幅18～35cm、深さ8.5～20cmの範囲である。



第８図　１号竪穴住居跡(1)



1号住　地床炉　C-C'
1. 7.5YR 3/4　暗褐色　シルト　粘性強　しまり密（焼土、10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性強　しまり密を粒状に含む。炭化物含）
2. 5YR 4/4 にぶい赤褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり密（焼土、焼成良好）
3. 10YR 3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまりやや密（砂礫層、Ⅳ層）

1号住　D-D'
1. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中（小礫を含む）

1号住　E-E'
1. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり中（小礫を含む）

1号住　F-F'
1. 7.5YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまりやや密（柱痕跡）
2. 10YR 3/3　暗褐色　砂質シルト　粘性強　しまり密（黒褐色土含）
3. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性強 しまり密（掘り過ぎ・Ⅳ層）

1号住　G-G'
1. 7.5YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまり密（サンドを少量含む）
2. 10YR 3/1 黒褐色　砂質シルト　粘性強　しまり疎（柱痕）
3. 10YR 3/3 暗褐色　砂質シルト　粘性強　しまり疎（柱を埋めた土）

1号住　H-H'
1. 7.5YR 2/2 黒褐色　シルト　粘性強　しまり中

1号住　I-I'
1. 7.5YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまりやや密（サンド含）
2. 7.5YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまりやや密（柱痕跡）
3. 10YR 3/3　暗褐色　砂質シルト　粘性強　しまり密（黒褐色土含）

1号住　J-J'
1. 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密（小礫を若干含む）

1号住　K-K'
1. 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密（小礫を若干含む）

1号住　L-L'
1. 10YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密（小礫を若干含む）

0　1:50　2m

PPNo	開口部径(cm)	深さ(cm)
1	30×22	38.0
2	31×30	27.5
3	40×38	52.0
4	43×30	39.2
5	33×28	34.8
6	38×38	56.1
7	26×25	17.8
8	12×10	51.7
9	16×15	50.0
10	11×11	18.9
11	26×21	a26.6 b32.0
12	17×13	27.6
13	40×23	a24.5 b28.4
14	10×10	14.3
15	34×20	a24.5 b28.4
16	63×25	a34.0 b31.2 c29.8 d36.0
17	24×15	28.4
18	19×15	19.3
19	16×14	15.2
20	10×8	20.3
21	17×10	54.3
22	11×6	18.3
23	9×8	9.5
24	8×8	9.8
25	7×6	17.5
26	12×6	17.3
27	15×12	31.3
28	15×9	25.5
29	7×7	16.9
30	12×11	16.0
31	8×5	16.1
32	25×18	23.0
33	15×14	28.9
34	17×16	23.7
35	11×11	8.0
36	7×8	8.5
37	14×9	5.2
38	19×12	4.7
39	13×10	10.5
40	9×9	18.7
41	7×5	20.7
42	14×12	13.8
43	16×9	10.4
44	19×12	8.8

PPNo	開口部径(cm)	深さ(cm)
45	12×12	26.0
46	11×(10)	9.6
47	12×12	24.4
48	13×8	9.4
49	10×10	40.3
50	12×11	13.9
51	20×13	29.7
52	24×17	22.7
53	19×15	20.2
54	13×11	10.6
55	18×15	30.3
56	25×10	22.6
57	22×15	45.4
58	8×8	8.4
59	19×11	18.4
60	14×12	23.5
61	20×19	13.2
62	14×14	16.3
63	15×12	29.6
64	9×8	4.8
65	13×10	15.8
66	13×11	29.0
67	18×(13)	7.5
68	19×16	15.2
69	10×9	15.4
70	13×8	17.7
71	22×13	26.2
72	10×5	18.1
73	12×9	11.2
74	19×(12)	22.1
75	(13)×12	19.4
76	13×6	20.6
77	12×10	8.2
78	18×16	16.8
79	13×11	?
80	12×6	5.4
81	11×9	19.3
82	23×13	19.2
83	38×36	28.9
84	16×14	34.8
85	23×18	11.4
86	20×19	20.8
87	17×17	21.2
88	7×7	9.4

PPNo	開口部径(cm)	深さ(cm)
89	11×11	14.7
90	8×7	14.3
91	16×14	27.4
92	13×10	14.2
93	11×9	10.1
94	8×7	9.8
95	17×12	22.8
96	15×15	20.6
97	22×21	17.1
98	16×8	17.1
99	26×16	24.3
100	21×13	18.5
101	31×10	42.5
102	12×9	16.9
103	26×15	34.6
104	25×18	36.5
105	18×17	6.0
106	18×11	12.7
107	15×13	32.2
108	14×13	9.7
109	20×15	20.0
110	29×20	a41.3 b20.8
111	22×14	a28.6 b27.1
112	15×13	17.8
113	12×12	24.3
114	28×12	24.8
115	16×15	26.7
116	13×12	13.9
117	10×10	13.6
118	16×10	41.4
119	13×12	2.2
120	13×13	29.6
121	8×6	18.6
122	22×14	35.7
123	12×12	23.5
124	8×6	8.0
125	11×10	5.8
126	18×13	21.5
127	14×11	19.8
128	12×9	1.3
129	19×15	26.5
130	(9)×7	8.2
131	12×10	8.8
132	24×21	24.7

PPNo	開口部径(cm)	深さ(cm)
133	12×11	18.4
134	9×7	16.8
135	21×15	20.3
136	37×16	a24.6 b19.1
137	23×17	29.4
138	14×14	26.6
139	12×11	26.2
140	25×23	26.0
141	18×14	25.0
142	19×18	23.8
143	18×16	25.9
144	8×8	8.9
145	12×11	31.4
146	15×(11)	23.6
147	18×9	3.0
148	5×5	6.0
149	8×5	20.9
150	(20)×10	12.4
151	26×23	5.2
152	25×22	25.5
153	24×23	46.9
154	21×13	20.5
155	9×7	2.2
156	16×12	8.9
157	11×9	3.8
158	28×25	10.9
159	32×17	39.8
160	27×19	39.7
161	36×(18)	12.8
162	24×23	47.8
163	23×20	27.0
164	14×12	16.0
165	17×13	9.5
166	13×12	16.9
167	18×17	22.7
168	17×13	14.8
169	17×15	21.4
170	21×20	19.3
171	10×10	23.5
172	13×11	29.2
173	14×9	45.1

第９図　１号竪穴住居跡(2)

（出入り口施設）　住居東側に位置する。ＰＰ１・２としたものが、出入り口と思われる。ＰＰ１・２の平面形は共に不整で、規模はＰＰ１が86×60cm、深さ50.3cm、ＰＰ2が112×46.8cmを測る。ＰＰ１・２の柱間は115cmを測る。

遺物（第30～33図・写真図版32～35）

出土量は大コンテナ約2.5箱分である。埋土中位～下位からの出土が多数を占める。床面から小破片が数点出土している。土器の器種は、深鉢が多数を占めるが、復元可能な遺物は注口土器・鉢・壺が多い。１～７・12は注口土器及び壺と思われるものである。１～４は沈線・貼付瘤・縄文が施される。５・６は微隆線による入組状の文様が施される。５はⅡ文様帯に三単位？、Ⅱｂ文様帯に四単位？、Ⅰ文様帯に三単位？、口縁部に四単位？のそれぞれ貼付瘤が施される。頂部には把手状の突起を有す。器面は赤色顔料が塗布され、光沢のあるミガキが施される。６も５同様にⅡ文様帯に３～４単位、Ⅱｂ文様帯に四単位？の貼付瘤が施される。貼付瘤は縦方向（２単位？）・横方向（２単位）の又状を呈する。器面は光沢のあるミガキが施される。７は無文で先鋭の貼付瘤（四単位？）が施される。12は小型の壺で、光沢のあるミガキが施される。

８～11・13～17は、沈線・縄文（磨消縄文）・刻目帯がそれぞれ施されるものである。19～21は、粗製の深鉢である。21には櫛歯状の沈線文が施される。なお、埋土上位で円盤状の土製品が1点が出土しているが割愛した。

石器については、石匙１点、掻・削器４点、磨製石斧１点、石錘９点、その他として礫石器が３点である。１は石匙である。２～４は掻・削器類である。２は削器を想定させる。３は基部が円形の石鏃を想定させる。

５～９は石錘である。両端部の両面に調整の施されているものである。８は凹をもつ。10～12は凹石及び敲石である。10・12は敲石＋凹石＋磨石の複合石器である。13は細かい敲打・研磨によって器形・刃部が成形される石斧である。

（時代時期）　出土した遺物から、縄文時代後期後葉の遺構と考えられる。

2号竪穴住居跡（第10図・写真図版12）

（位置）　ⅡＤ１ｃグリッドに位置する。

（検出状況）　遺物包含層を掘り下げていく段階で、Ⅲｂ下層面で石囲炉を確認した。

（平面形・規模）　土層断面で住居の壁を確認し、平面プランを推定させようと考えたが、確認することは出来なかった。径13×10cm～径50×29cmの礫が床面及び床面より高いレベルで、散在して見られた。埋土とともに住居内に入った可能性も考えられる。

（壁）　不明。

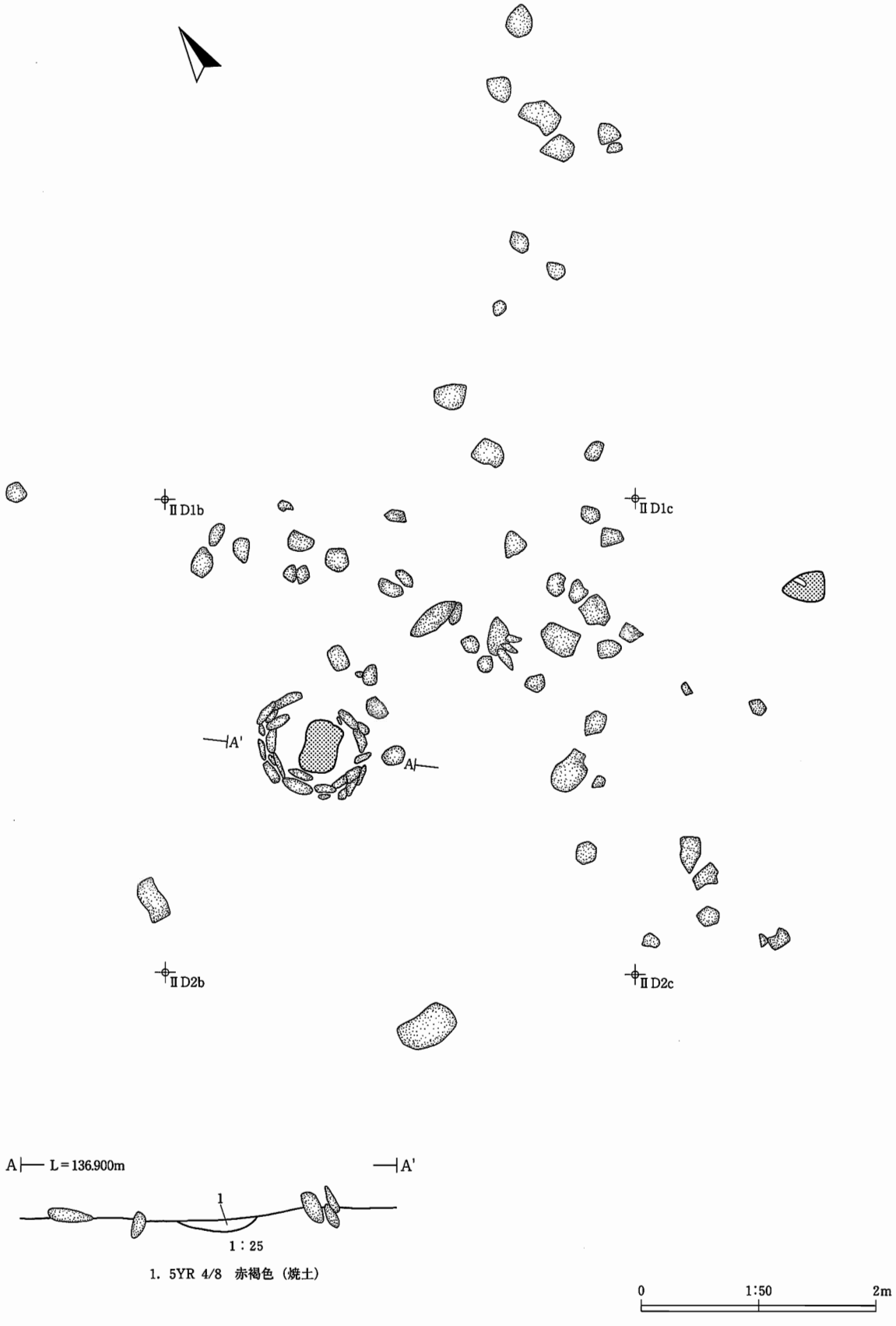
（柱穴）　床面と想定した面で、何度か検出を試みたが検出されなかった。

（床）　石囲炉を検出した面を床と想定した。床面は黒色土で、貼り床は認められず、床面と想定した面をしまり等で範囲の確認を試みたが、確認出来なかった。

（炉）　石囲炉である。大小23個の偏平な自然礫を縦・又は斜位にして構築され、二重に配置されている部分もある。平面形はほぼ円形を呈し、北側に開口する。規模は94×87cmを測る。焼土は径44×29cm、厚さ最大で４cmを測る。焼成は良好ではない。

（焼土）　石囲炉から東側に位置する。径36×24cm、厚さ７cmを測る。

（時代時期）　石囲炉周辺から遺物が出土しているが、遺構に伴うものとして認識せずに取り上げを行ったため、詳細については不明である。炉の形態から、縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡の可能性は考えら



第10図　2号竪穴住居跡

れないことから、縄文時代晩期～弥生時代中期の可能性が考えられる。なお、時期については、Ⅵ章において再度検討を行った。

3号竪穴住居跡（第11図・写真図版13）

（位置）　ＩＤ４ｂグリッドに位置する。

（検出状況・精査）　遺物包含層と想定した遺物の掘り下げ段階で、炉を確認した。炉確認後、炉検出面を床と想定し、床面精査中に周溝を確認した。壁を確認することは出来なかった。

（平面形・規模）　平面形は、周溝の平面形から楕円形を呈すると思われる。周溝から想定した規模は、径4.7×（4.7）ｍを測る。（　　）推定値

（壁）　不明

（埋土）　黒褐色土と思われる。

（柱穴）　本遺構に伴う柱穴を判別する事が出来なかった。

（床）　Ⅳ層を床とする。固く締まる。貼り床は施されていない。

土器埋設炉と思われる。3個体の土器が東西方向に並ぶ。近接して確認されることから、石囲炉の可能性も考えられる。

（壁溝）　灰白色の火山灰が含まれない黒色土のプランとして確認した。幅13～23cm。床面と埋土が似通っているため、深さは判断出来なかった。埋土は、黒褐色土を主体とする。

遺物（第34図・写真図版35・36）

出土遺物は、炉に埋設された3個体である。22は炉東側に設置され、口縁部は破損し、頸部が炉面に露出した状況であった。甕形を呈しＬＲ縄文が施される。23は炉西側に設置され、口縁部は破損し、22同様頸部が炉面に露出した状態であった。甕形を呈しＬＲ縄文が施される。24は22と23の間に設置され、小破片で半円状を描く様に検出された。甕形土器の胴部である。ＲＬ縄文が施される。

（時代時期）　遺物から縄文時代晩期（大洞Ｃ２）もしくは弥生時代前期後半～中期前半の遺構の可能性が考えられる。

5号竪穴住居跡（第12・13図・写真図版14・15）

（位置）　ⅡＥ１ａ・ⅡＥ１ｂグリッドに位置する。

（検出状況）　試掘溝設定時に炉・壁を確認した。検出面はⅢｂ層である。

（平面形・規模）　平面形はほぼ円形を呈する。規模は径6.22×6.2ｍを測る。

（拡張）　柱穴の配置から、２時期（１回の拡張）が推定される。

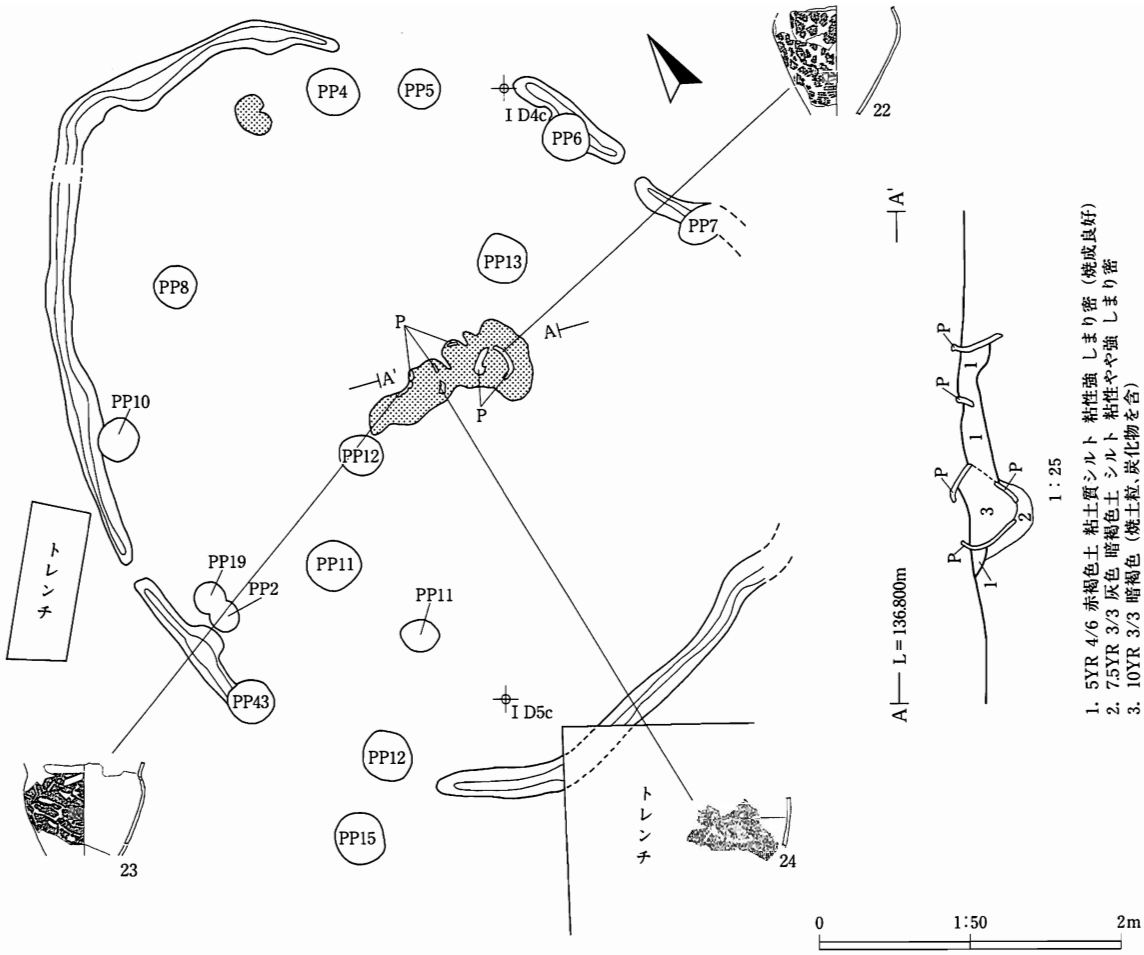
（埋土）　概ね黒褐色土を主体とし、炭化物を少量含む。

（壁）　住居中央部から南西側は概ねＴｏ－ｃｕと灰黄褐色土からなり、北東側については黒褐色土が壁となるが、埋土と壁の色調・土質が似通っていることから、明瞭に把握することは出来なかった。

（床）　南西側は灰黄褐色土、北東側は黒褐色土を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。貼り床は施されていない。壁高は30～50cmを測る。

（柱穴）　主柱穴と思われるものは規模から、ＰＰ68の1基が考えられる。

（壁柱穴）　２時期に分かれると思われる。ＰＰ21～37、ＰＰ62～67、ＰＰ48～59、は拡張前の壁柱穴の可能性がある。ＰＰ１～19、ＰＰ38～47は拡張時に構築されたものと思われる。柱痕跡は確認することが出来



第11図　3号竪穴住居跡

なかった。

（炉）　床面ほぼ中央に位置する。地床炉である。規模は径70×64cm、焼土の厚さは最大で6cmを測る。焼成は良好である。

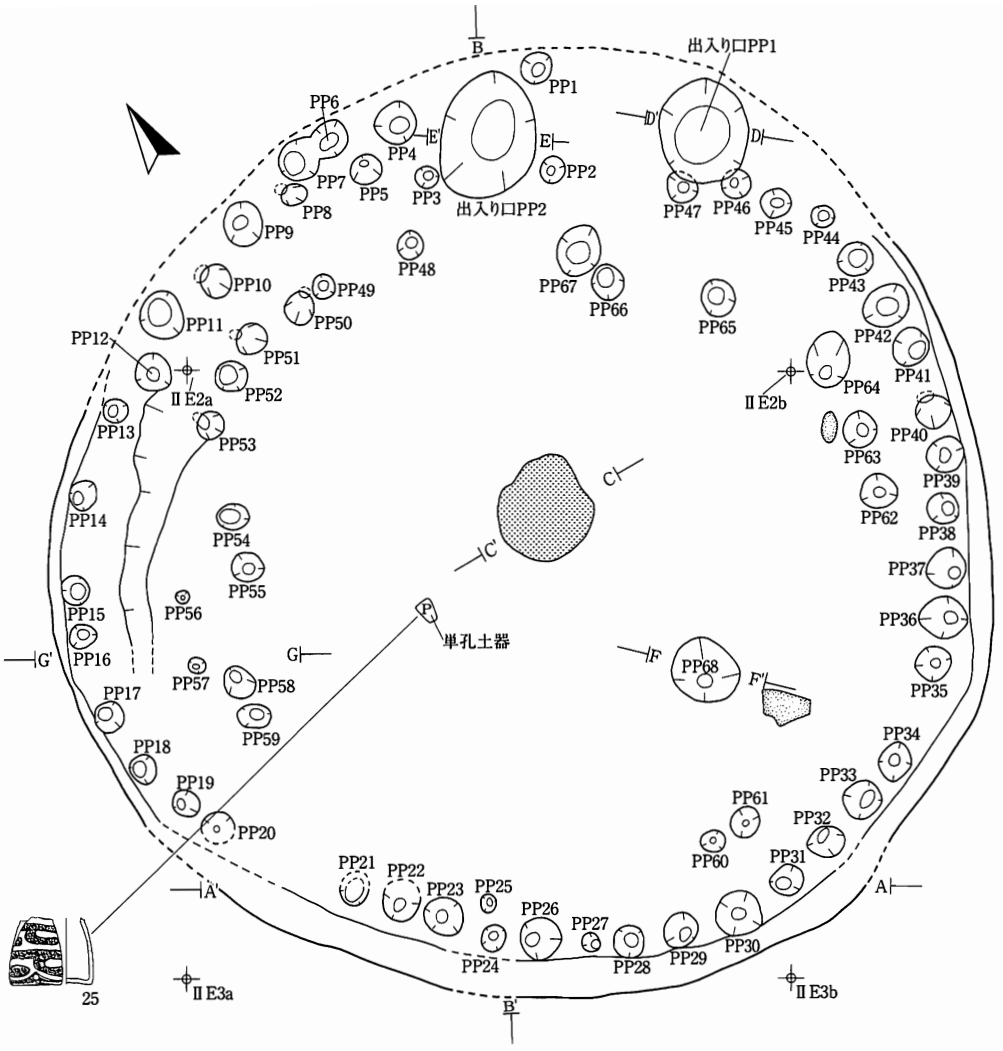
（出入り口施設）　住居北東側（傾斜方向）に位置する。ＰＰ１・２としたものが、出入り口と思われる。ＰＰ１・２の平面形は共に楕円形を呈し、規模はＰＰ１が68×58cm、深さ32cm、ＰＰ２が80×62cm、深さ35cmを測る。ＰＰ１・２の柱間は約140cmを測る。

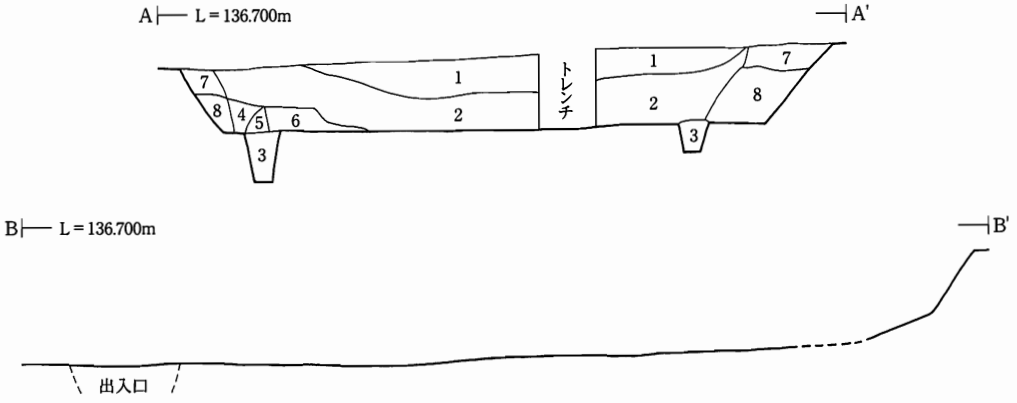
（棚状の段について）　住居西側に棚状の段が確認された。段は盛土で構築されたものでなく、素掘りで構築されたものである。出入り口及び棚状の施設が想定されるが、棚状の面に壁柱穴が確認されるこから、性格については判断することは出来なかった。

遺物（第35図・写真図版35～36）

出土量は、8,755ｇである。埋土下位から鍵状の入組状文が施される単孔土器㉕が、炉に隣接し、ほぼ床面に位置するところから、台付㉖が出土した。埋土上位～中位にかけて、小破片が30数点出土する状況であった。

（時代時期）　出土した遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

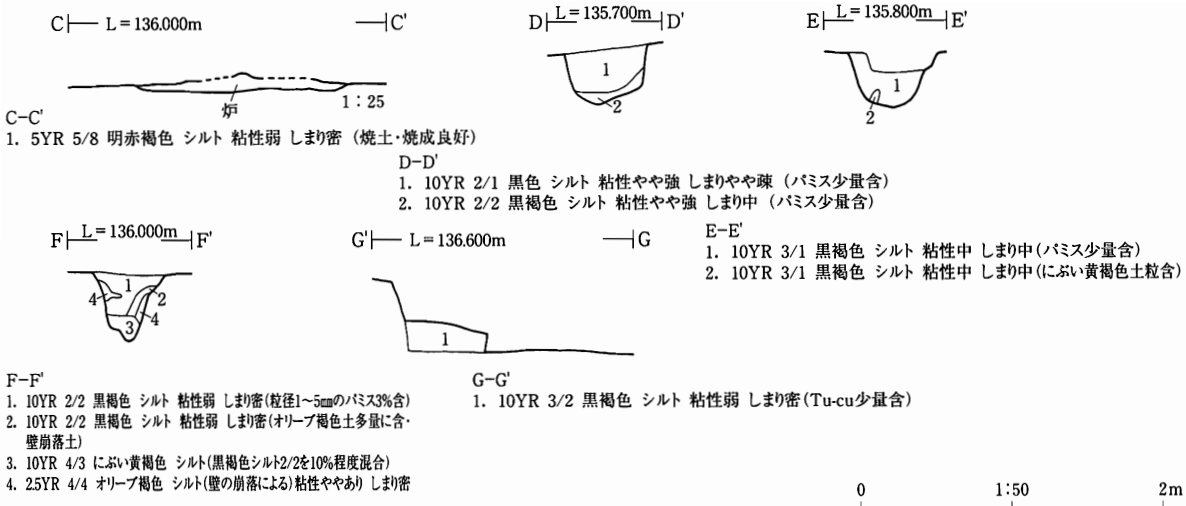




5号竪穴住居跡埋土
1. 10YR 3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（炭化物少量含・パミス含）
2. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（炭化物少量含）
3. 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 粘性弱 しまり中（床となる灰白色火山灰ブロック含）
4. 10YR 3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり中
5. 10YR 2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中（砂含）
6. 10YR 7/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性弱 しまり密（暗褐色土ブロック含）
7. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密（To-cu50%含・壁崩落土）
8. 10YR 5/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 しまりやや密（To-Nb少量含・壁崩落土）

0 1:50 2m

第12図　5号竪穴住居跡(1)



5号住居

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
1	22×20	24.5	
2	18×18	27.2	
3	16×13	25.4	
4	28×28	17.8	
5	20×20	24.9	
6	(27)×23	26.6	
7	(27)×27	27.5	
8	18×14	20.8	
9	30×25	24.6	
10	21×20	37.2	
11	29×28	38.7	
12	25×24	18.9	
13	17×14	34.2	
14	19×18	30.1	
15	18×17	25.6	
16	18×15	29.2	
17	20×19	27.4	

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
18	19×17	26.8	
19	18×16	38.2	
20	(22)×22	30.0	
21	(24)×20	22.2	
22	(27)×24	32.6	
23	28×24	28.5	
24	17×14	20.6	
25	13×10	11.2	
26	27×26	38.2	
27	12×11	29.5	
28	20×20	36.6	
29	23×20	27.0	
30	30×30	26.8	
31	21×19	41.0	
32	22×20	25.6	
33	35×25	23.7	
34	25×23	19.7	

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
35	23×23	45.0	
36	33×27	31.8	
37	27×26	33.2	
38	20×19	22.5	
39	24×21	24.0	
40	23×23	27.4	
41	24×24	24.8	
42	33×25	不明	
43	45×23	43.4	
44	15×14	13.2	
45	21×20	27.1	
46	20×18	24.4	
47	23×20	22.9	
48	19×19	21.1	
49	16×15	29.3	
50	20×19	28.5	
51	20×19	31.8	

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
52	22×19	27.8	
53	18×18	21.5	
54	21×18	11.2	
55	21×18	22.1	
56	10×9	10.8	
57	13×10	14.4	
58	23×18	12.0	
59	22×16	11.2	
60	16×14	24.2	
61	20×19	41.0	
62	24×23	42.1	
63	24×22	26.5	
64	36×28	27.0	
65	23×22	27.8	
66	24×22	17.3	
67	35×30	19.1	
68	46×39	45.4	

第13図　5号竪穴住居跡(2)

9号竪穴住居跡（第14図・写真図版16）

（位置）　ⅡＤ１ｄ・１ｅ・２ｄ・２ｅグリッドに位置する。

（検出状況）　試掘溝設定時及び撹乱除去時に、柱穴・炉を確認した後、竪穴住居跡と想定し、Ⅲｂ層中で検出した。

（平面形・規模）　平面形はほぼ円形を呈する。規模は（5.71）×5.36mを測る。（　）は推定値

（拡張）　柱穴の配置から、２時期（１回の拡張）が推定される。

（埋土）　黒褐色土を主体としパミスを多く含む。

（壁）　Ⅲｂ層を壁とする。直立ぎみに立ち上がる。

（床）　ほぼ平坦で固く締まる。南側は褐色のＴｏ－ｃｕを含む層を、他の面はパミスを含む黒色土を床としている。貼り床は施されていない。

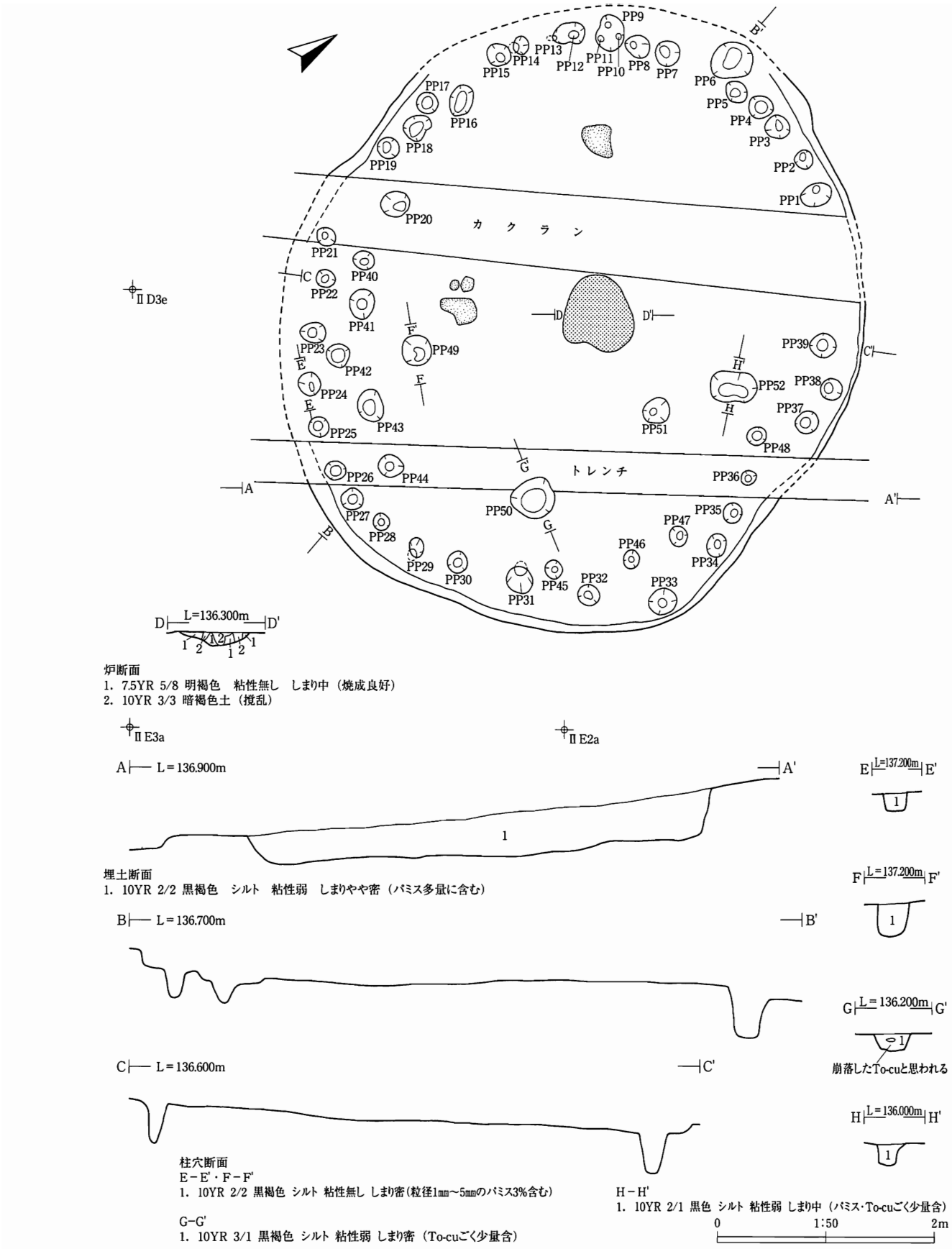
（柱穴）　３基検出された。主柱穴はＰＰ49～52と思われる。他の位置にも存在する可能性が考えられる。

（壁柱穴）　２時期に分かれると推測される。ＰＰ40～48、は拡張前の壁柱穴の可能性がある。ＰＰ21～27、ＰＰ31～34は拡張時に構築されたものと思われる。柱痕跡は確認することが出来なかった。

（炉）　床面ほぼ中央に位置する。地床炉である。規模は66×66cm、焼土の厚さは11cmを測る。焼成は良好である。

遺物（第36図・写真図版37）

出土量は、243ｇである。埋土及び床面から小片が数十点出土する状況であった。



第14図　9号竪穴住居跡

9号住柱穴　規模

PPNo.	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
1	28×21	33.9	
2	18×16	21.0	
3	23×21	12.0	
4	23×21	18.8	
5	21×19	9.0	
6	40×36	41.8	
7	24×23	32.3	
8	23×20	26.0	
9	33×26	16.0	重複
10	33×26	17.2	重複
11	33×26	25.4	重複
12	29×18	47.3	
13	29×18	26.8	
14	16×14	31.2	
15	22×21	43.2	
16	29×21	32.0	
17	19×18	21.4	
18	25×19	18.9	

PPNo.	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
19	20×19	20.2	
20	25×22	25.0	
21	19×17	14.6	
22	18×14	29.7	
23	22×18	15.4	
24	23×21	20.9	
25	18×17	21.0	
26	20×17	18.8	
27	19×18	27.5	
28	16×14	22.4	
29	19×13	47.0	
30	21×18	45.7	
31	24×22	46.4	
32	20×19	28.2	
33	26×26	41.0	
34	22×17	27.9	
35	17×17	38.0	

PPNo.	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
36	14×12	18.2	
37	21×21	42.0	
38	20×19	32.5	
39	25×21	38.0	
40	19×16	15.3	
41	26×23	19.2	
42	22×21	16.4	
43	29×24	19.2	
44	23×20	20.0	
45	18×15	11.2	
46	16×14	9.2	
47	19×16	20.2	
48	16×14	31.8	
49	27×27	16.8	
50	41×37	17.0	
51	24×23	22.9	
52	43×26	20.0	

（時代時期）　詳細な時代を決定する遺物に欠くことから、竪穴住居跡の形態・周辺から出土する遺物から、縄文時代後期中葉～後葉の遺構と考えられる。

11号竪穴住居跡（第15図・写真図版17）

（位置）　ＩＥ４ｃ・ｄ・ｅ及びＩＥ５ｃ・ｄ・ｅグリッドに位置する。

（検出状況）　遺物の取り上げを行っていく過程で、炉・柱穴を確認した時点で、住居と想定した。礫を含む褐色土面で検出した。

（平面形・規模）　平面形はほぼ円形を呈すると推測される。規模は（8.1）×（7.45）ｍを測る。（　）は推定値

（拡張）　ＰＰ24～26の柱穴の配置から2時期が推測されるが、判然としない。

（埋土）　黒褐色土を主体とし、パミスを含む。

（壁）　沢による流出で、消失したものと思われる。

（床）　黒褐色及び黄褐色シルトに多量の礫を含む無遺物層を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。貼り床は施されていない。

（柱穴）　検出されなかった。

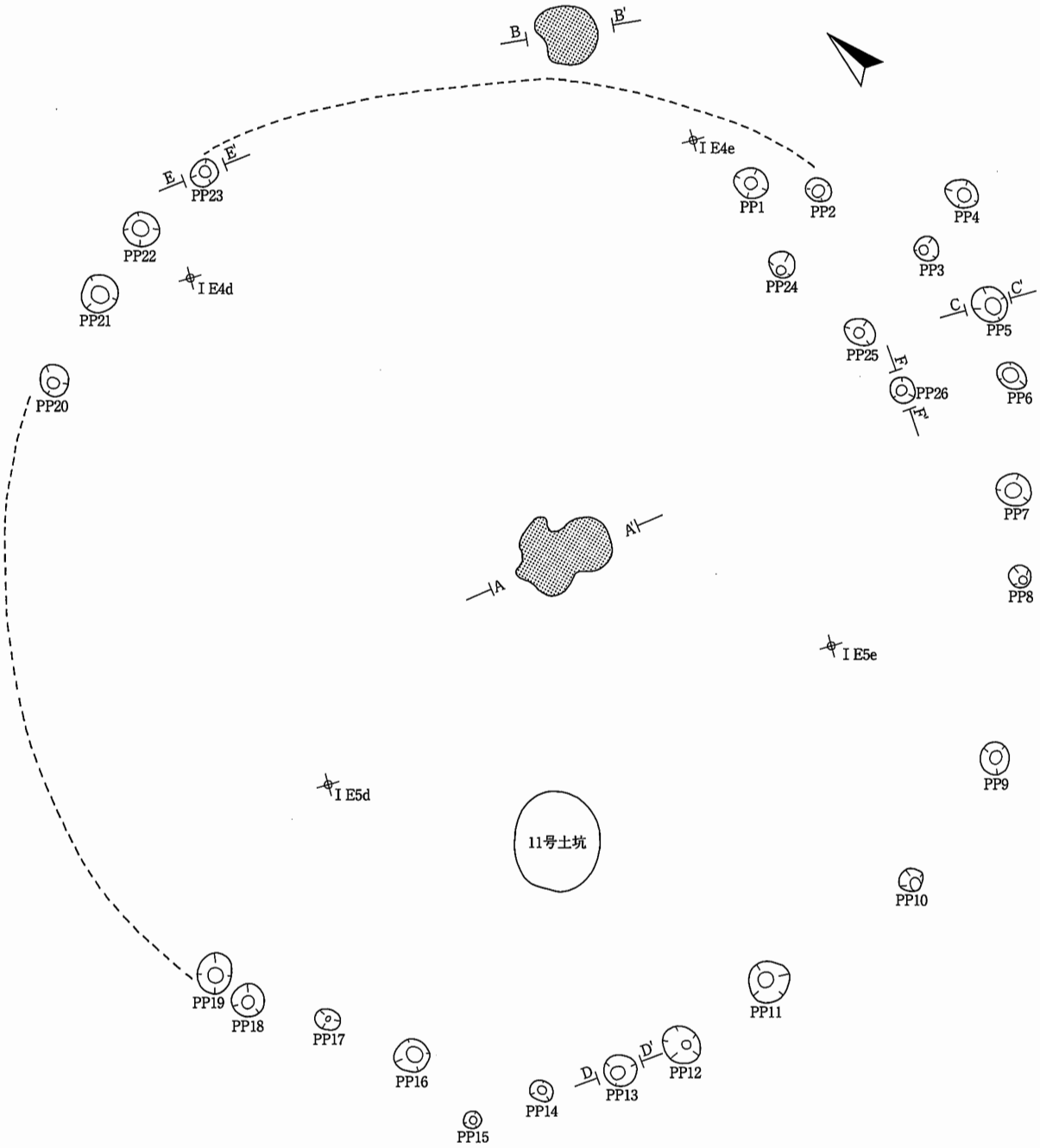
（壁柱穴）　ＰＰ１～23が相当すると思われる。

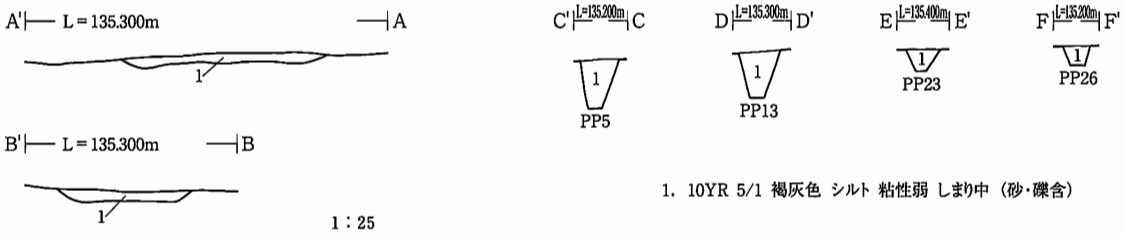
（炉）　床面ほぼ中央に位置する。地床炉である。規模は74×39cm、焼土の厚さは3cmを測る。焼成は良好ではない。

遺物（第36図・写真図版37）

出土量は、1,190ｇである。床面直上から完全な個体となる鍵状の入組状文が施される壺㉟が、他のものは床面直上から小破片が出土した。

（時代時期）　遺物番号35の文様形態から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。





1：25

1. 10YR 5/1 褐灰色 シルト 粘性弱 しまり中（砂・礫含）

11号竪穴住居跡　炉
1. 7.5YR 6/8 橙色 シルト 粘性中 しまり密（部分的に撹乱を受けている。植物の根か。）

0　1:50　2m

第15図　11号竪穴住居跡

11号住居柱穴　規模

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高	備考
1	25×23	17.4	134.810	
2	19×18	13.4	134.818	
3	18×18	16.2	134.288	
4	26×21	16.1	134.773	
5	29×26	33.3	134.624	
6	23×23	30.3	134.644	重複
7	27×24	27.0	134.686	重複
8	17×17	36.2	134.604	
9	25×22	34.8	134.760	

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高	備考
10	19×18	30.5	134.755	
11	33×32	26.0	134.652	
12	31×26	42.0	134.658	
13	24×23	29.2	134.802	
14	17×14	7.2	135.022	
15	13×13	21.0	134.955	
16	27×26	28.0	134.980	
17	19×15	17.9	134.998	
18	26×24	27.1	134.915	

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高	備考
19	33×32	14.7	135.179	
20	25×21	19.2	135.098	
21	28×28	23.2	135.053	
22	27×26	24.2	135.000	
23	22×19	12.6	135.090	
24	20×19	32.7	134.633	
25	24×20	13.8	134.810	
26	19×19	11.5	134.807	

3. 住居状遺構

1号住居状遺構（第16図・写真図版18）

（位置）　ⅡＤ３ｃグリッドに位置する。

（検出状況）　遺物が他の区域と比較して集中して出土したため、試掘溝を設定し断面観察で確認した。検出面はⅢｂ層である。

（平面形・規模）　平面形は楕円形を呈するものと思われる。南北軸は3.75mを測る。

（埋土）　黒褐色土を主体とし、パミスを含む。自然堆積と思われる。

（壁）　Ⅲｂ層を壁とする。壁高は25.4～64.7cmを測る。外傾して立ち上がる。

（床）　黒褐色土を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。貼り床は施されていない。

（柱穴及び壁柱穴）　検出されなかった。

遺物（第36～38図・写真図版37～39）

出土量は14,700ｇ出土した。埋土上位～中位にかけてまとまって出土した。平行沈線を弧線状もしくはＳ字状に区切るもの（38・40・43・44）、鍵状の入組状文が施されるもの（39・45）が出土している。

石器は、磨製石斧・石錘・凹石・敲石等が出土した。21の磨製石斧については、先端部に研磨調整がみられる。石斧として使用後、転用したものと想定される。26・27は、磨石＋敲石の複合石器である。また、28の敲石は、黒色の付着物がみられる（アスファルト？）。

（時代時期）　出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。

4. 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第17図・写真図版18）

（位置）　ＩＥ５ｂ・ｃ及びⅡＥ１ｂ・１ｃグリッドに位置する。

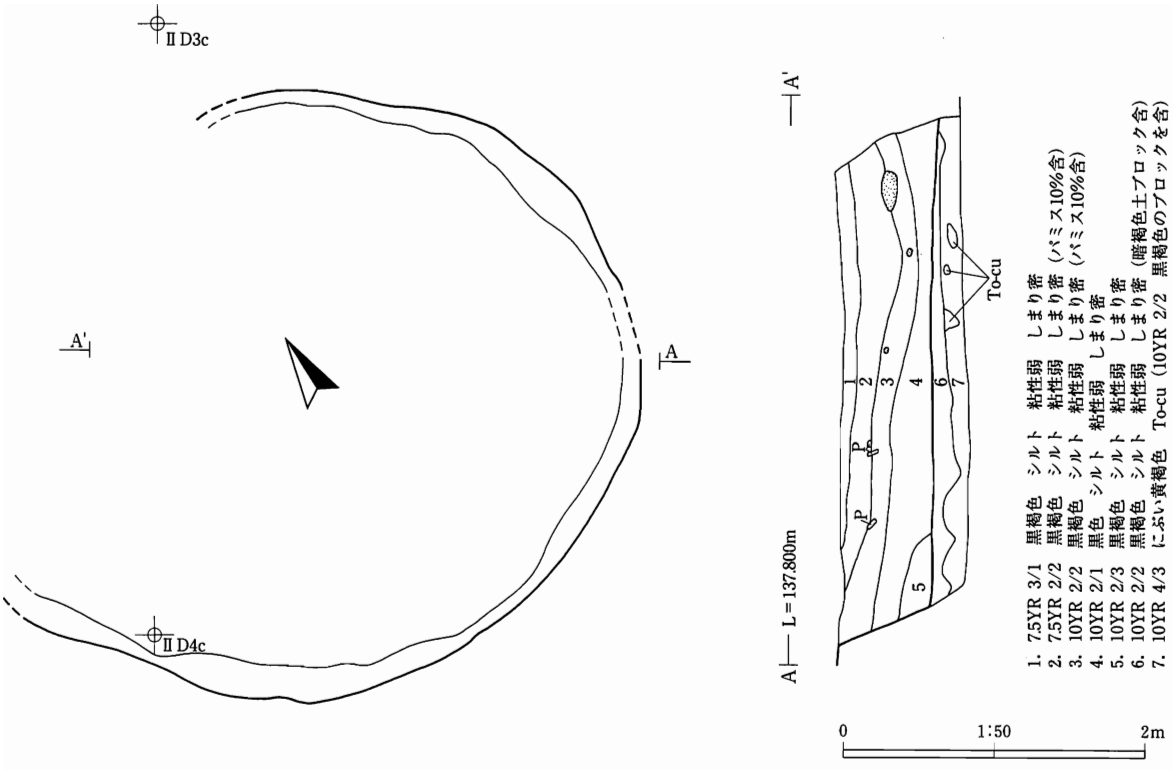
（検出状況）　Ⅲｃ層（無遺物層）から掘り込まれている可能性があるが、プランが明瞭に確認できるⅣ層（Ｔｏ－ｃｕ）面で検出した。

（規模）　桁行ＰＰ14とＰＰ17の間4.1m、ＰＰ28とＰＰ33の間4.25mを測る。梁行ＰＰ14とＰＰ28の間3.5m、ＰＰ17とＰＰ33の間3.5mを測る。

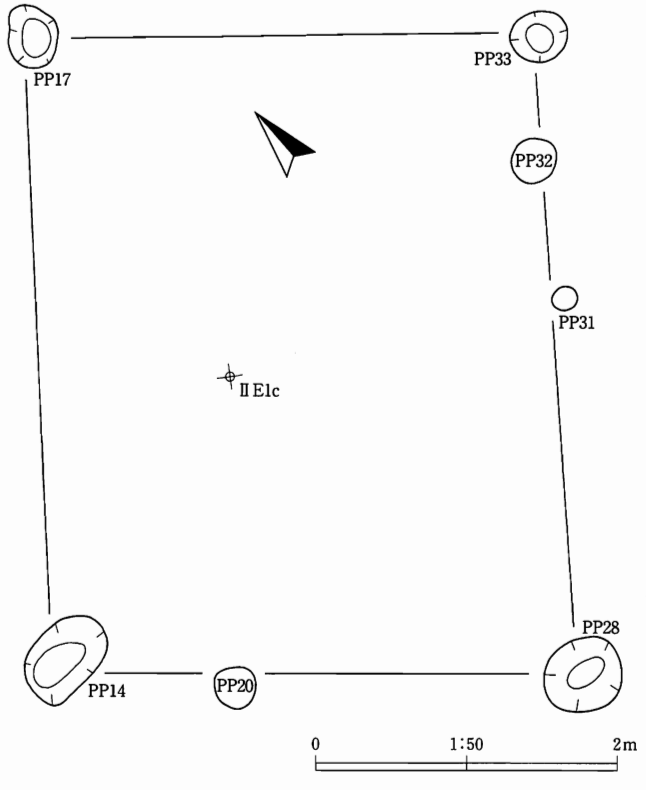
（埋土）　黒色土の単層と思われる。柱痕跡は認められなかった。

（出土遺物）なし。

（時代時期）　検出面・位置（５号竪穴住居跡に隣接する）から、縄文時代後期中葉～後葉と考えられる。



第16図　1号住居状遺構



PPNo.	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
14	59×40	23.2	
17	40×32	22.9	
20	28×27	12.7	
28	53×49	17.0	
31	18×16	9.8	
32	31×28	11.5	
33	38×32	17.8	

第17図　1号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡（第18図・写真図版19）

（位置）　ＩＢ４ａ・ｂ及びＩＢ５ａ・５ｂグリッドに位置する。

（検出状況）　Ⅳ層面で検出された。

（規模）　桁行5間（総長7.6m）、梁行1間（総長3.75m）である。

（柱間規模）　桁行はＰＰ１とＰＰ２の間1.55m、ＰＰ２とＰＰ３の間1.45m、ＰＰ３とＰＰ４の間1.55m、ＰＰ４とＰＰ５の間1.25m、ＰＰ５とＰＰ６の間1.15m、ＰＰ８とＰＰ９の間2.25m、ＰＰ９とＰＰ10の間1.1m、ＰＰ10とＰＰ11の間1.35m、ＰＰ11とＰＰ12の間1.55mを測る。梁行はＰＰ１とＰＰ８の間3.75m、ＰＰ２とＰＰ９の間3.75m、ＰＰ３とＰＰ10の間3.8m、ＰＰ４とＰＰ11の間3.85m、ＰＰ５とＰＰ12の間3.83mを測る。

（埋土）　黒褐色土の単層からなるものがほとんどと思われる(平面観察では柱穴痕跡は認められなかった)。

（出土遺物）　ＰＰ５から縄文土器片１点出土した。流れ込みと思われる。

（時代時期）　時代時期を決定する資料に欠き、詳細は不明である。

5．柱穴列

1号柱穴列（第18図・写真図版19）

（位置）　ＩＢ４ｂ・５ｂグリッドに位置する。

（検出状況）　Ⅳ層で検出された。

（規模・方向）　ＰＰ１～７が東西方向に並ぶ。全長は3.36mで、柱穴間はＰＰ１とＰＰ２の間72cm、ＰＰ２とＰＰ３の間40cm、ＰＰ３とＰＰ４の間38cm、ＰＰ４とＰＰ５の間54cm、ＰＰ５とＰＰ６の間82cm、ＰＰ６とＰＰ７の間50cmを測る。

（埋土）　黒褐色土の単層からなるものがほとんどと思われる(平面観察では柱穴痕跡は認められなかった)。

（出土遺物）　なし。

（時代時期）　時代時期を決定する資料に欠き、詳細は不明である。

6．土坑

1号土坑（第19図・写真図版20）

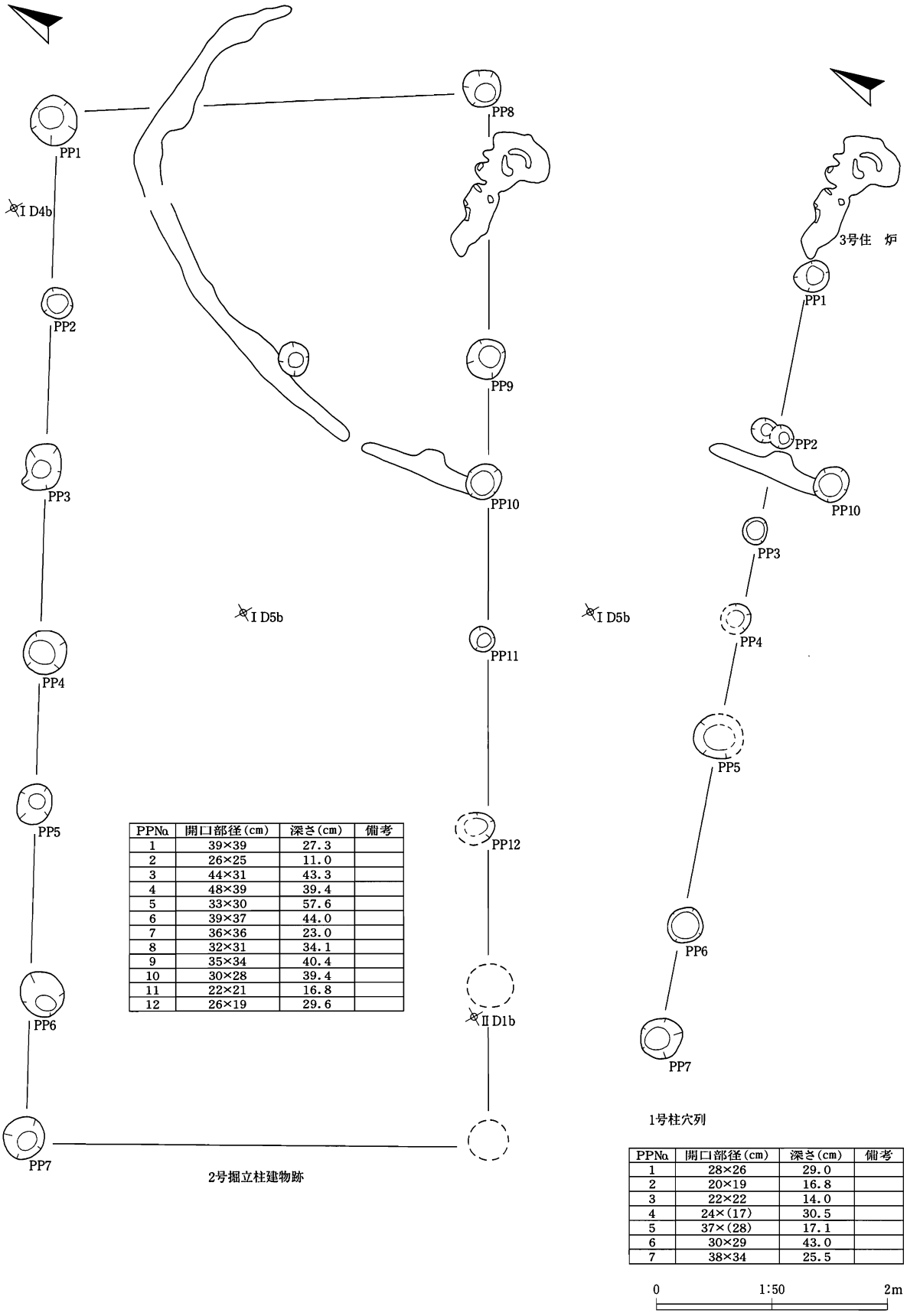
ＩＤ４ｄグリッドに位置する。Ⅲａ層で検出された。開口部径128×110cm、底部径111×89cm、深さ９cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形はⅢ状を呈する。埋土はパミスを含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁はにぶい黄橙色火山灰？が相当し、底面はⅢｂ層で、おおむね平坦で、底面に礫が散在して見られた。出土遺物はない。

2号土坑（第19図・写真図版20）

ＩＤ４ｃグリッドに位置する。Ⅲａ層で検出された。開口部径123×96cm、底部径98×72cm、深さ11cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形はⅢ状を呈する。埋土はパミスを含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁はⅢａ層に相当し、底面はⅢｂ層でおおむね平坦である。出土遺物はない。

3号土坑（第19図）

ＩＤ４ｃグリッドに位置する。Ⅲａ層下で検出された。開口部径84×77cm、底部径64×55cm、深さ13cmを測る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形はⅢ状を呈する。埋土はＴｏ－Ｎｂを少量含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層に相当し、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。



2号掘立柱建物跡

PPNo	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
1	39×39	27.3	
2	26×25	11.0	
3	44×31	43.3	
4	48×39	39.4	
5	33×30	57.6	
6	39×37	44.0	
7	36×36	23.0	
8	32×31	34.1	
9	35×34	40.4	
10	30×28	39.4	
11	22×21	16.8	
12	26×19	29.6	

1号柱穴列

PPNo	開口部径(cm)	深さ(cm)	備考
1	28×26	29.0	
2	20×19	16.8	
3	22×22	14.0	
4	24×(17)	30.5	
5	37×(28)	17.1	
6	30×29	43.0	
7	38×34	25.5	

第18図　2号掘立柱建物跡・1号柱穴列

4号土坑（第19図）

ＩＤ４ｃグリッドに位置する。Ⅲａ層で検出された。開口部径90×73cm、底部径69×50cm、深さ24cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形はⅢ状を呈する。埋土はＴｏ－Ｎｂを少量含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

5号土坑（第19図・写真図版20）

ＩＤ４ｅグリッドに位置する。Ⅲａ下面で検出された。開口部径77×（68）cm、底部径40×40cm、深さ54cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は筒状を呈する。埋土はＴｏ－Ｎｂをごく少量含む黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

6号土坑（第19図・写真図版20）

ⅡＤ２ｂグリッドに位置する。Ｔｏ－ｃｕ面で検出された。開口部径113×105cm、底部径60×59cm、深さ38cmを測る。ＰＰ32･33と重複する。平面形は楕円形を呈し、断面形は碗状を呈する。埋土は、上部にＴｏ－ｃｕ、黒褐色土・黒色土の４層で構成される。自然堆積と思われる。壁・底面はⅣ層で、おおむね平坦である。出土遺物はない。

7号土坑（第19図・写真図版21）

ＩＤ４ｄグリッドに位置する。Ⅲｂ層上面で検出した。開口部径70×60cm、底部径28×11cm、深さ49cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形はＶ字状を呈する。埋土は灰白色火山灰を含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層である。出土遺物はない。

8号土坑（第19図・写真図版21）

ＩＤ５ｄグリッドに位置する。Ⅲｂ層上面で検出された。開口部径79×68cm、底部径39×29cm、深さ35cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は碗状を呈する。埋土はにぶい黄褐色の火山灰？を含む、黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

9号土坑（第19図・写真図版21）

ＩＤ4ｄグリッドに位置する。Ⅲｂ層で検出された。開口部径144×106cm、底部径120×88cm、深さ45cmを測る。平面形は小判形状を呈し、断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒色土を主体で構成される。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

10号土坑（第19図・写真図版21）

ＩＤ５ｅグリッドに位置する。Ⅲａ層で検出された。開口部径102×81cm、底部径82×64cm、深さ15cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形はⅢ状を呈する。埋土は黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁はⅢａ・ｂ層で、底面はⅢｂ層に相当する。底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

11号土坑（第19図・写真図版22）

ＩＤ４ｅグリッドに位置する。Ⅲａ層で検出された。開口部径60×53cm、底部径34×24cm、深さ12cmを測る。自然堆積と思われる。平面形はほぼ円形を呈し、断面形はⅢ状を呈する。埋土は黒褐色土の単層からなる。壁・底面は、Ⅲａ層に相当する。底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

12号土坑（第19図・写真図版22）

ＩＤ２ｃグリッドに位置する。Ⅲａ層で検出された。開口部径83×65cm、底部径58×41cm、深さ36cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。埋土はＴｏ－Ｎｂを含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁はⅢａ・ｂ層に相当し、底面はⅢｂ層に相当する。底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

13号土坑（第19図・写真図版22）

ＩＤ３ｃグリッドに位置する。Ⅲａ層で検出された。開口部径61×57cm、底部径45×39cm、深さ11cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁はⅢａ・ｂ層に相当し、底面はⅢｂ層に相当する。底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

14号土坑（第19図）

ＩＥ５ｃグリッドに位置する。Ⅳ層で検出された。開口部径75×65cm、底部径59×49cm、深さ11cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁・底面はⅣ層で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

15号土坑（第19図・写真図版22）

ＩＤ４ｂグリッドに位置する。Ⅲｂ層で検出された。開口部径148×135cm、底部径120×104cm、深さ25cmを測る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色土と暗褐色土で構成される。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

16号土坑（第19図）

ＩＤ３ｅグリッドに位置する。Ⅲｂ層で検出された。開口部径104×91cm、底部径81×67cm、深さ26cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土はパミスを含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層に相当し、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

17号土坑（第20図・写真図版23）

ＩＥ４ｂグリッドに位置する。Ⅲｂ層上面で検出された。にぶい黄橙色の火山灰？を切る。開口部径145×116cm、底部径102×73cm、深さ28cmを測る。平面形は小判形状を呈し、断面形は北東側がゆるやかに立ち上がり、南西側は外傾する。埋土は黒褐色土で、色調及びパミスの含有量で3層で構成される。自然堆積と思われる。壁はにぶい黄橙色の火山灰？に相当し、底面はⅢｂ層下位に相当する。底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

18号土坑（第20図・写真図版23）

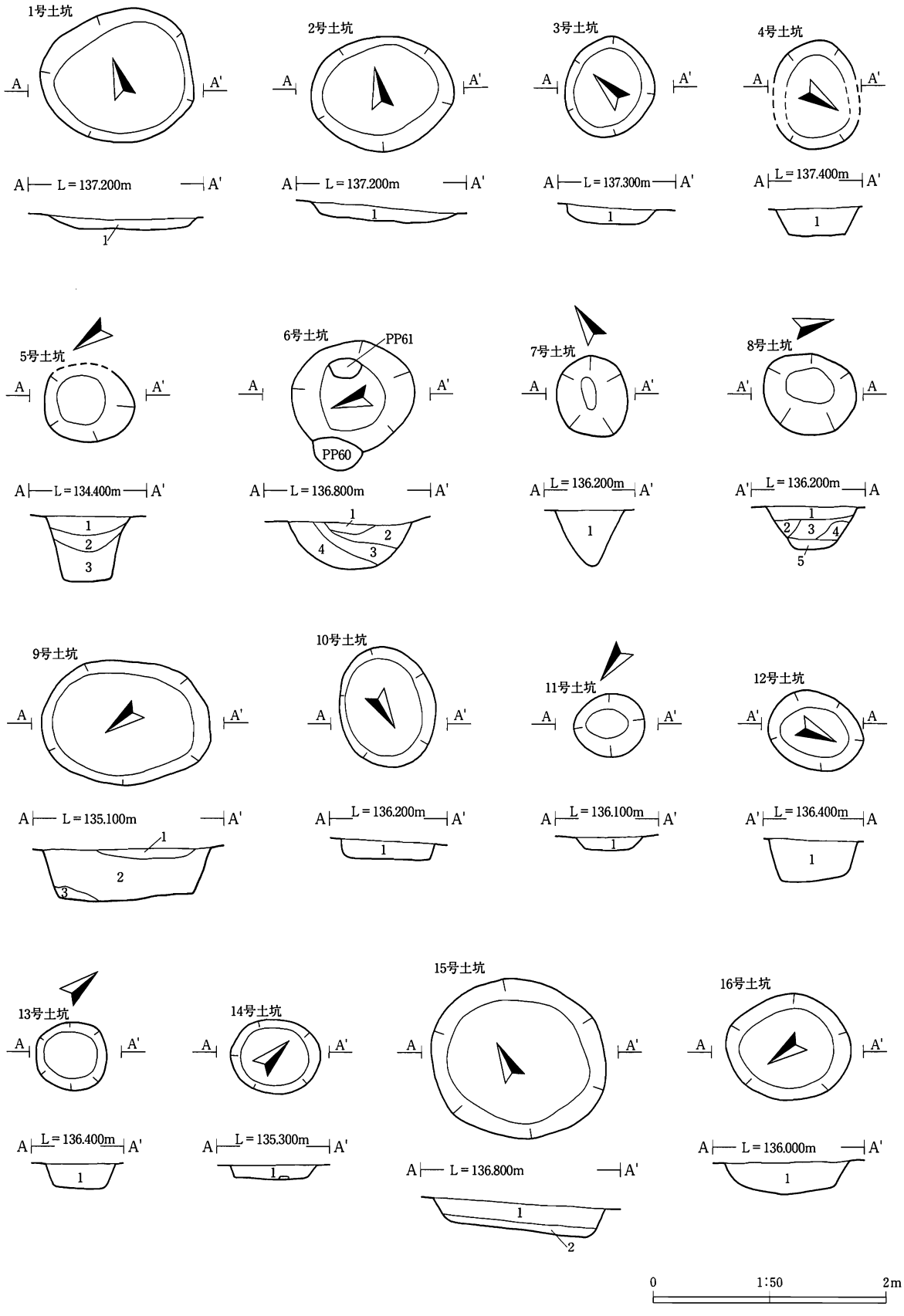
ＩＤ３ｅグリッドに位置する。Ⅲｂ層上面で検出された。開口部径71×61cm、底部径57×36cm、深さ40cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土の単層からなる。自然堆積と思われる。壁・底面はⅢｂ層で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

19号土坑（第20図・写真図版23）

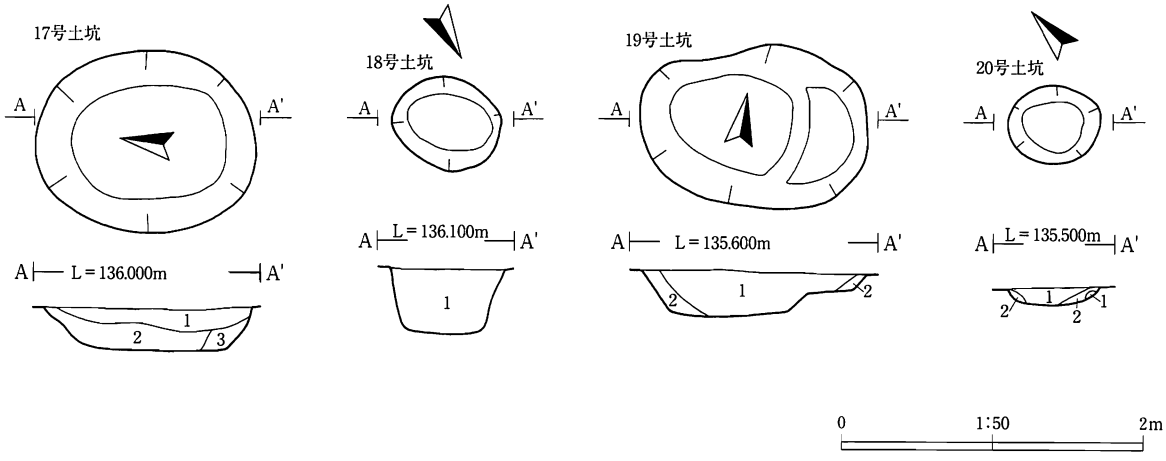
ＩＥ３ｃグリッドに位置する。Ⅳ層で検出された。開口部径152×108cm、底部径122×60cm、深さ28cmを測る。平面形は不整な小判形を呈し、断面形は北西側は外傾し、南東側は括れる。埋土は、黒褐色土と暗褐色土で構成される。自然堆積と思われる。壁・底面はⅣ層（褐色土）で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。

20号土坑（第20図・写真図版23）

ⅡＥ２ｄグリッドに位置する。Ⅳ層で検出された。開口部径62×52cm、底部径39×33cm、深さ11cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は暗褐色の火山灰（十和田起源？）と十和田起源と思われる火山灰ブロックを含む黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。壁・底面はⅣ層で、底面はおおむね平坦である。出土遺物はない。


1号土坑
A
A'
A L = 137.200m A'
1
2号土坑
A
A'
A L = 137.200m A'
1
3号土坑
A
A'
A L = 137.300m A'
1
4号土坑
A
A'
A L = 137.400m A'
1
5号土坑
A
A'
A L = 134.400m A'
1
2
3
6号土坑
PP61
PP60
A
A'
A L = 136.800m A'
1
2
3
4
7号土坑
A
A'
A L = 136.200m A'
1
8号土坑
A'
A
A' L = 136.200m A
1
2
3
4
5
9号土坑
A
A'
A L = 135.100m A'
1
2
3
10号土坑
A
A'
A L = 136.200m A'
1
11号土坑
A
A'
A L = 136.100m A'
1
12号土坑
A'
A
A' L = 136.400m A
1
13号土坑
A
A'
A L = 136.400m A'
1
14号土坑
A
A'
A L = 135.300m A'
1
15号土坑
A
A'
A L = 136.800m A'
1
2
16号土坑
A
A'
A L = 136.000m A'
1
0
1:50
2m

第19図　土坑(1)



1号土坑
1. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（パミス10%含）

2号土坑
1. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（パミス10%含）

3・4号土坑
1. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-Nb少量含）

5号土坑
1. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（粒径1～5㎜To-Nb?を3%含）
2. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（粒径1～5㎜To-Nb?を1%含）
3. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり密（黒色土ブロック含）

6号土坑
1. 10YR 6/4　にぶい黄褐色　粘性無　しまりやや密（To-cu軽石・土壌化している。）
2. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中（To-cu少量含）
3. 10YR 2/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり中
4. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（サンド・To-cuか）

7号土坑
1. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（灰白色パミス（To-aではない。）粒径1～2㎜をごく少量含）

8号土坑
1. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（粒径1～3㎜の灰白色パミス3%含）
2. 7.5YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密
3. 7.5YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（10YR 4/3 にぶい黄褐色の火山灰？をブロック状に含）
4. 7.5YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（10YR 4/3 にぶい黄褐色の火山灰？をブロック状に含）
5. 10YR 2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密

9号土坑
1. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（パミス含）
2. 7.5YR 2/1　黒色　シルト　粘性中　しまりやや疎（To-Nb?含）
3. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性やや強　しまり疎

10号土坑
1. 7.5YR 2/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり密（パミスごく微量に含）

11号土坑
1. 7.5YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（パミスごく微量に含）

12土坑
1. 7.5YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（粒径2～20㎜のTo-Nbを20%含）

13土坑
1. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中（パミスごく微量に含）

14土坑
1. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（粒径2～20㎜のパミス及び30～70㎜の礫含）

15号土坑
1. 10YR 2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（粒径2～10㎜パミス2%含）
2. 10YR 3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり密

16号土坑　旧13号土坑
1. 7.5YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや密（To-Nb?20%含）

17号土坑
1. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや疎（粒径2～10㎜ごく微量に含）
2. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（粒径2～20㎜のパミス・礫含）
3. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密

18号土坑
1. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや密（パミス・炭化物少量含）

19号土坑
1. 7.5YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（径3～5㎜のTo-Nbごく少量含）
2. 7.5YR 3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり密

20号土坑
1. 10YR 3/4　暗褐色　テフラ？　粘性弱　しまり疎（十和田起源火山灰と思われる）
2. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（十和田起源火山灰をブロック状に含）

第20図　土坑(2)

7. 柱穴状ピット群

ＩＤ・ⅡＤグリッド、ＩＥ・ⅡＥグリッドにおいて、柱穴状のピット群が検出された。ＩＥ・ⅡＥグリッドで検出された一群を１号柱穴状ピット群、ＩＤ・ⅡＤグリッドで検出された一群を２号柱穴状ピット群と呼称する。

１号柱穴状ピット群については、検出面（Ｔｏ－ｃｕ面）及び位置（５号竪穴住居跡と隣接）から、時代時期は縄文時代後期中葉～後葉の可能性が考えられる。

２号柱穴状ピット群で検出されたものについては、２・３号竪穴住居跡・２号掘立柱建物跡・１号柱穴列と同一区域・同一面で検出されている。前記した遺構群に伴う可能性を否定できないが、判別することはできなかった。このことから、１号柱穴状ピット群として一括にして掲載・記載することとした。

１号柱穴状ピット群（第21図・写真図版19）

（位置）　ＩＥ５ａ～ｄ及びⅡＥ１ａ～ｄグリッドに位置する。

（検出状況）　Ⅲｂ・Ⅲｃ層から、掘り込まれた可能性も考えられるが、プランが比較的明瞭に判断できる。Ⅳ層（Ｔｏ－ｃｕ）面で検出した。

（規模・形状・埋土）　直径は大きいもので30～40cm、20～29cmのものが大半を占める。平面形はおおむね楕円形・円形を呈する。埋土は黒色土単層である。柱痕跡は確認できなかった。

（性格・配置）　しっかりとした規則性はないが、１号掘立柱建物跡を囲うように位置する一群と柱穴列状に列をなすものが認められる（Ⅵ章参照）。

（出土遺物）　なし。

（時代時期）　検出面・位置から縄文時代後期中葉～後葉の遺構と考えられる。

２号柱穴状ピット群（第22図・写真図版24）

（位置）　ＩＤ４ａ～ｃ・ＩＤ５ａ～ｃ・ⅡＤ１ａ～ｃグリッドに位置する。

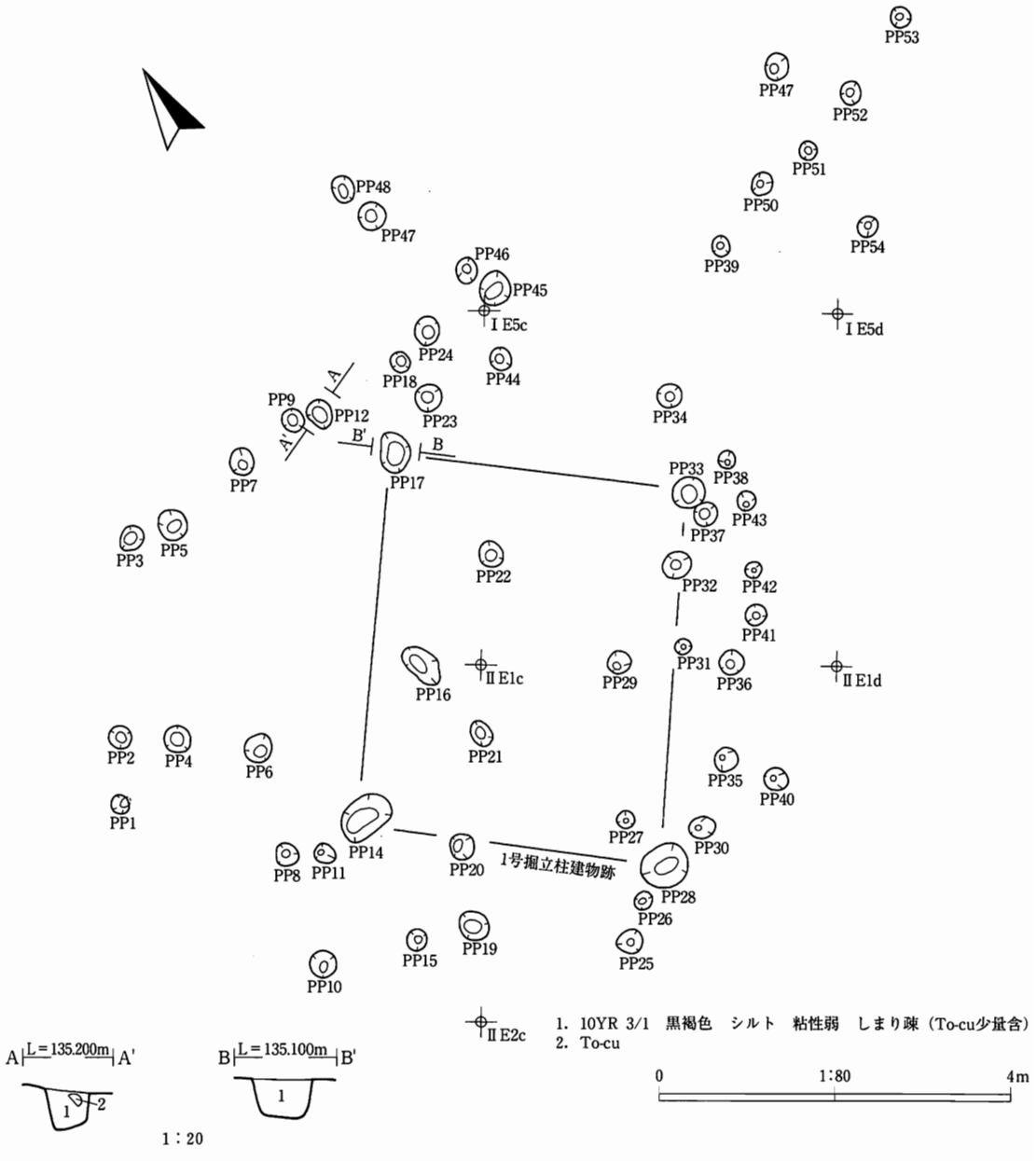
（検出状況）　Ⅳ層上面で検出された。

（規模・形状・埋土）　直径は大きいもので40～55cm、小さいものが18～22cmで、25～35cmのものが大半を占める。深さは最も深いもので40～48cm、最も浅いもので10～16cm、おおむね20～32cmが大半を占める。平面形は、不整なものも若干みられるが、おおむね楕円形・円形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とするものがほとんどであるが、ＰＰ35～41は、Ⅲａ層上部とほぼ同類の火山灰が埋土に認められた。

（性格）　掘立柱建物跡・竪穴住居跡に伴うものも含まれる可能性が考えられるが、判別することは出来なかった。

（出土遺物）　なし。

（時代時期）　詳細な時代時期は、判断出来なかった。なお、ＰＰ１～34とＰＰ35～41のそれぞれの柱穴群は、埋土が異なることから時期も異なると考えられる。



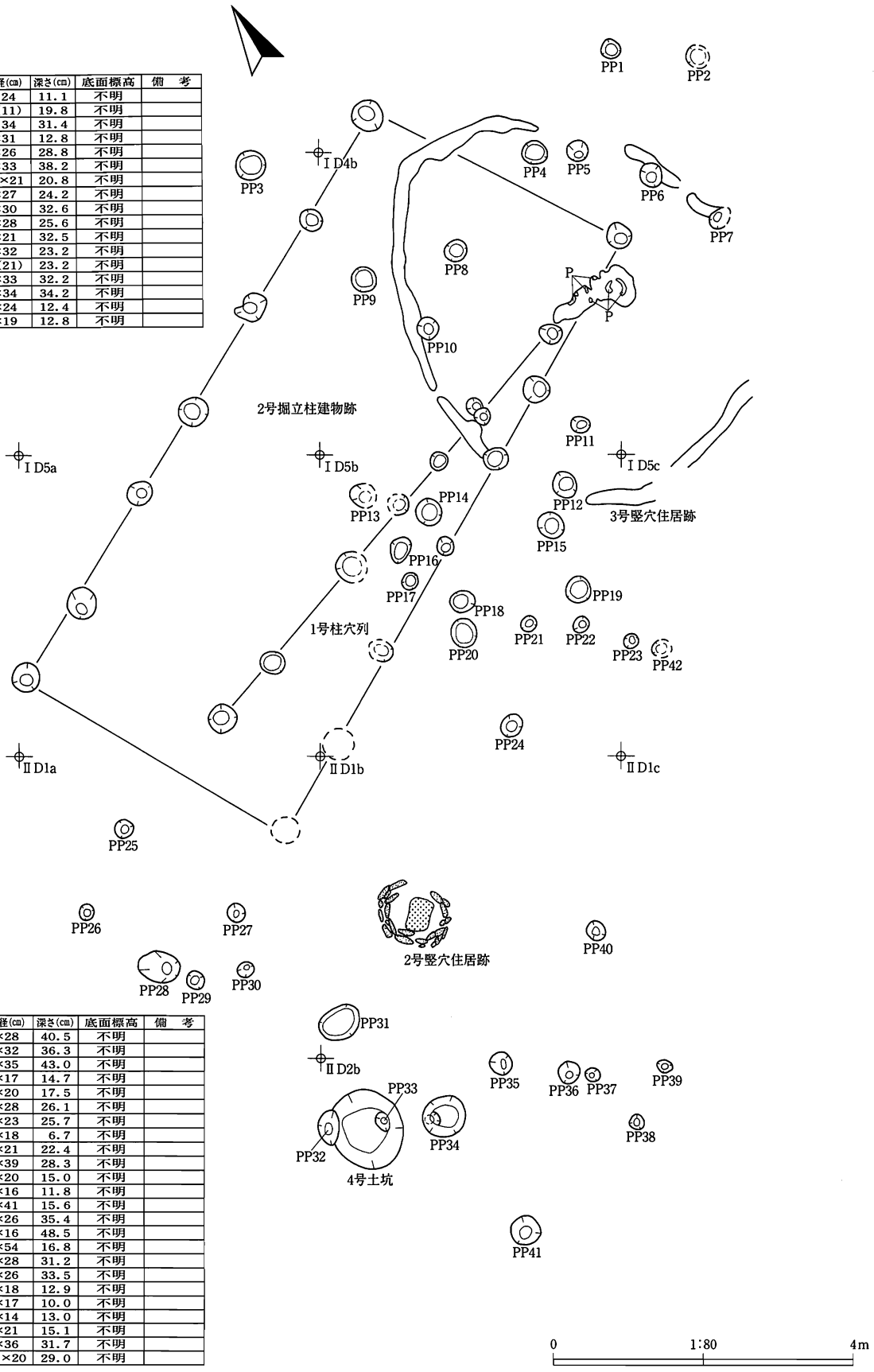
PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高	備　考
1	21×18	23.9	135.375	
2	27×24	10.2	135.163	
3	28×23	14.8	135.022	
4	28×27	19.4	135.001	
5	33×31	16.8	134.992	
6	34×30	26.7	134.923	
7	28×26	20.5	134.895	
8	25×25	10.1	135.229	
9	24×23	11.0	134.920	
10	31×29	17.4	135.282	
11	22×21	10.6	135.202	
12	30×25	20.8	134.810	
13	23×22	15.0	134.826	
14	59×40	23.2	135.045	掘立柱建物跡
15	24×20	12.2	135.264	
16	51×28	15.1	134.925	
17	40×32	22.9	134.770	掘立柱建物跡
18	22×20	17.0	134.750	

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高	備　考
19	33×32	14.7	135.179	
20	28×27	12.7	135.115	
21	29×20	9.6	134.964	
22	28×26	14.0	134.865	
23	30×28	17.1	134.747	
24	32×28	13.3	134.762	
25	27×27	19.0	135.000	
26	20×18	8.0	135.045	
27	18×18	11.0	134.910	
28	53×49	17.0	134.905	掘立柱建物跡
29	25×22	7.7	134.778	
30	29×24	15.0	134.260	
31	18×16	9.8	134.740	
32	31×28	11.5	134.680	掘立柱建物跡
33	38×32	17.8	134.620	
34	28×27	12.8	134.672	
35	28×24	14.5	134.800	
36	26×26	17.4	134.660	

PP№	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高	備　考
37	26×24	9.8	134.652	
38	18×16	8.2	134.668	
39	21×19	38.4	135.100	
40	26×23	12.0	134.775	
41	23×21	12.5	134.640	
42	17×16	12.4	134.636	
43	21×20	12.0	134.620	
44	26×22	9.7	134.865	
45	36×35	15.0	134.786	
46	26×23	14.5	134.760	
47	31×29	12.5	134.815	
48	30×24	13.5	134.810	
49	27×24	27.0	134.984	
50	24×21	23.4	135.034	
51	19×19	18.1	135.083	
52	24×22	18.8	135.064	
53	24×21	23.4	135.030	
54	22×21	28.0	134.942	

第21図　1号柱穴状ピット群

PPNo.	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高	備　考
1	25×24	11.1	不明	
2	31×(11)	19.8	不明	
3	38×34	31.4	不明	
4	35×31	12.8	不明	
5	27×26	28.8	不明	
6	34×33	38.2	不明	
7	(25)×21	20.8	不明	
8	28×27	24.2	不明	
9	32×30	32.6	不明	
10	29×28	25.6	不明	
11	26×21	32.5	不明	
12	34×32	23.2	不明	
13	33×(21)	23.2	不明	
14	33×33	32.2	不明	
15	34×34	34.2	不明	
16	34×24	12.4	不明	
17	21×19	12.8	不明	



PPNo.	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高	備　考
18	33×28	40.5	不明	
19	33×32	36.3	不明	
20	35×35	43.0	不明	
21	20×17	14.7	不明	
22	21×20	17.5	不明	
24	29×28	26.1	不明	
25	26×23	25.7	不明	
26	19×18	6.7	不明	
27	22×21	22.4	不明	
28	54×39	28.3	不明	
29	22×20	15.0	不明	
30	20×16	11.8	不明	
31	55×41	15.6	不明	
32	41×26	35.4	不明	
33	28×16	48.5	不明	
34	55×54	16.8	不明	
35	31×28	31.2	不明	
36	29×26	33.5	不明	
37	18×18	12.9	不明	
38	17×17	10.0	不明	
39	18×14	13.0	不明	
40	25×21	15.1	不明	
41	41×36	31.7	不明	
42	(22)×20	29.0	不明	

第22図　2号柱穴状ピット群

8．畝間状遺構

畝間状遺構（第23図・写真図版25･26）

（位置）　ＩＢ・ＩＣグリッドに位置する。

（検出状況）　Ⅱ層上面でにぶい黄褐色の砂及び小礫が、溝状のプランとして検出された。検出時に畝頂部を削ってしまったため、作付け幅及び畝間幅は本来の形状ではない。

（規模・形状）　41条検出された。畝頂部を削ってしまったため、本来の畠の形状を把握できたものはほとんどないが、調査区境界面で良好な断面資料が得られた。規模は、作付間隔は100cm、畝の上幅50～60cm、畝の幅90～100cm、畝の高さ16～24cmを測る。畝頂部が削られたものの規模については、溝幅20～58cm、溝の間隔は38～68cm、畝の幅は90～100cm（100cmが大半を占める）を測る。長さは調査区外に延びるが、調査区内で計測可能なもので８ｍを越える。平面形は溝状を呈し、畝頂部が削られていないものの断面形は、不整なカマボコ状を呈する。

（埋土）　にぶい黄褐色の砂・粒子の細かい礫。

（性格）　沢の氾濫によって、埋没し、放棄された畠跡と推測される。

（出土遺物）　摩滅した縄文土器が４点出土した、流れ込みと思われる。

（時代時期）　時代を決定する資料に欠き不明。

9．焼土遺構

焼土遺構（第24図・写真図版27）

ⅡＤ２ｃグリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。 形状はほぼ円形を呈し、規模は径31×29cm、厚さは８cmを測る。焼成は良好である。時代時期は、検出面から縄文時代後期の遺構と考えられる。

10. その他

遺構として認定するべきかどうか、判断に悩んだものを記載・掲載した。

溝及び炭化材と焼土（第24図・写真図版27）

ＩＤ５ｄ・ｅ及びＩＥ５ａグリッドに位置する。Ⅲａ層中で検出された。溝については、上端幅0.7～1.35ｍ、下端幅0.2～0.55ｍ、深さ28cmを測る。堆積層は浅黄橙色及びにぶい黄橙色火山灰の水成堆積による。すくなくとも4回の堆積が認められる。火山灰の間に他の堆積物がないことから、短期間に堆積したものと思われる。底面はおおむね平坦で、炭化材が検出された。

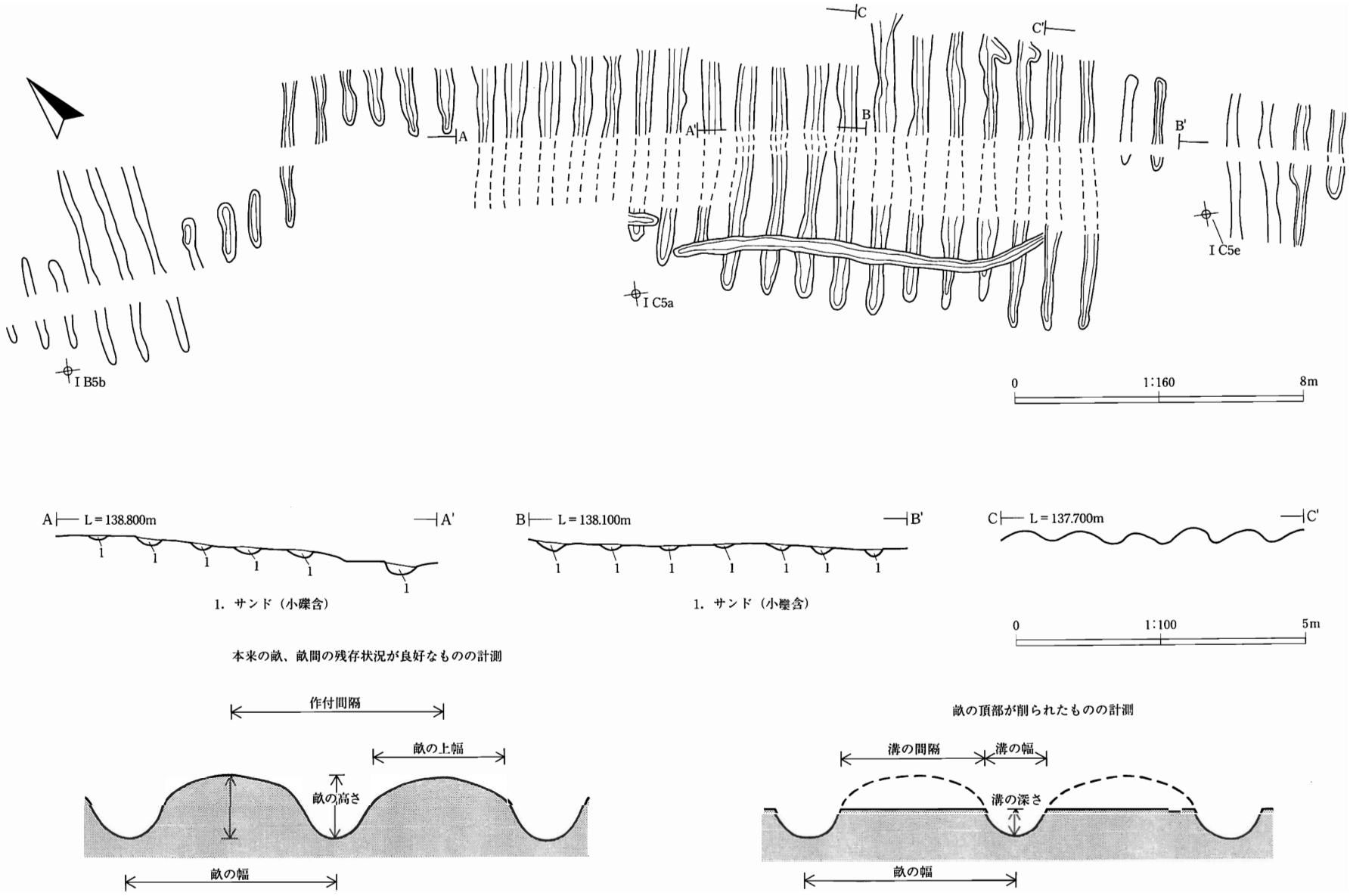
また、溝の東方向に礫・焼土・炭化材が検出された。焼土は厚さ5cmで焼成は良好ではない。炭化材は厚さ１～４cmである。光沢はない。礫は人工的に設置した痕跡及び加熱を受けた痕跡は確認されなかった。

性格は、人工的溝もしくは雨裂溝等の自然的な溝か判別できなかった。遺物・焼土・炭化材は溝内に流れ込んだものと思われる。出土遺物は、溝底面及び焼土・炭化材・礫内・周辺から、弥生時代中期土器・石器が散在して出土した。検出面・出土遺物から弥生時代中期のものと思われる。

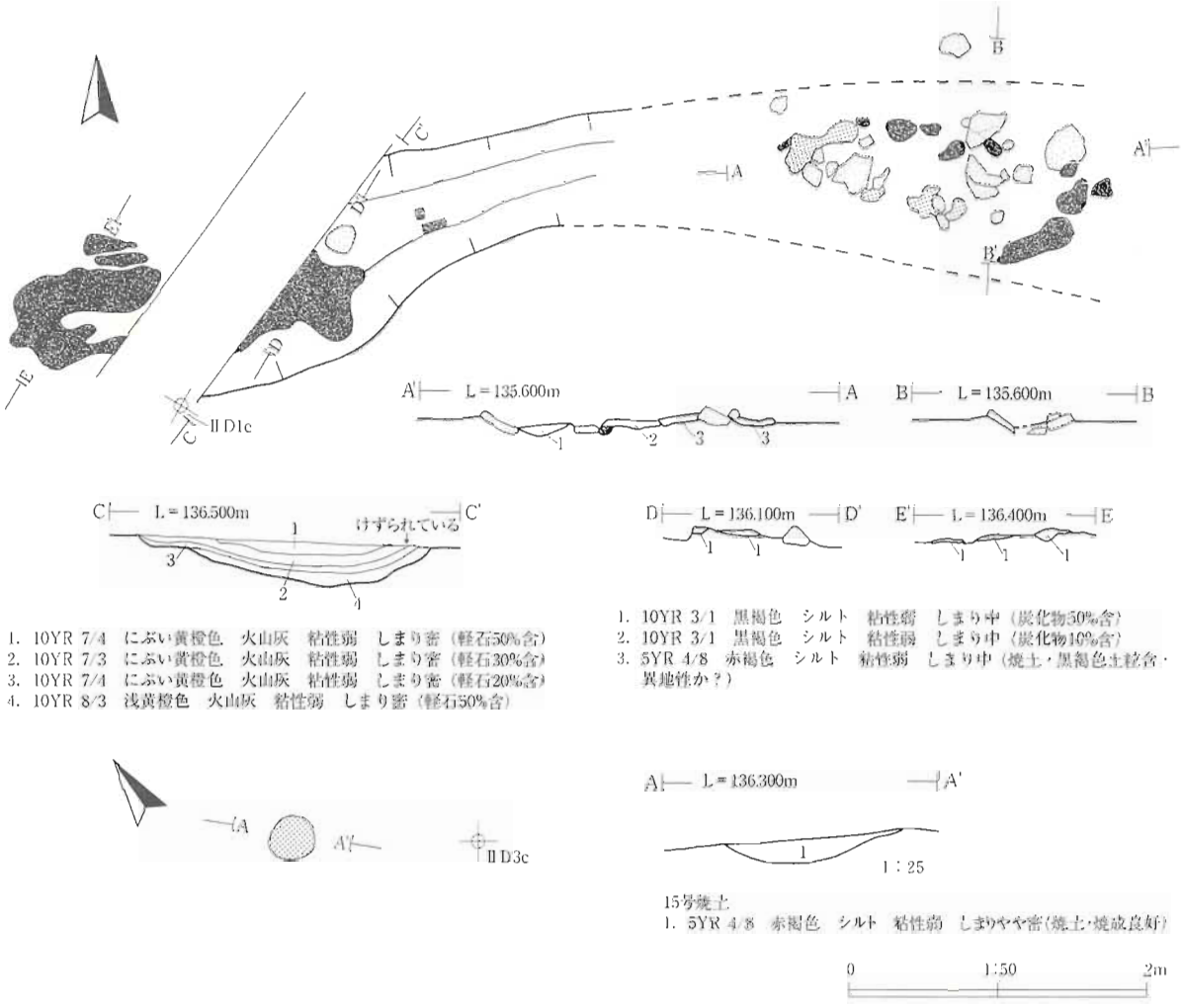
炭化材（第7図）

ＩＤ４ｃ・ｅ・ＩＤ５ｄ・ｅ・ⅡＤ２ｄグリッドに位置する。Ⅲａ層で点在して確認された。規模は、直径60～90cm、厚さ2～5cmを測る。焼成による炭化材か自然炭化か判別することは出来なかった。

炭化材の樹種はクリである。なお、炭化材を除去した面から、弥生時代の土器及び石製品が出土した。


A
A'
B
B'
C
C'
I B5b
I C5a
I C5e
0
1:160
8m
A
L = 138.800m
A'
1
1. サンド（小礫含）
B
L = 138.100m
B'
1
1. サンド（小礫含）
C
L = 137.700m
C'
0
1:100
5m
本来の畝、畝間の残存状況が良好なものの計測
作付間隔
畝の上幅
畝の高さ
畝の幅
畝の頂部が削られたものの計測
溝の間隔
溝の幅
溝の深さ
畝の幅

第23図　畝間状遺構



第24図　焼土遺構及びその他の遺構

11. 遺物包含層と遺物の出土状況について

(1)遺物の出土状況と包含層形成について（第25～29図・写真図版27～29）

遺物は調査区全域で出土し、Ａ～Ｃと区分けした中でＡ区の出土量が圧倒的に多かった。Ｂ・Ｃ区は、山の裾野を開析する谷状地形によって形成された旧河道が調査区を南北方向に横切る。この旧河道の影響によって、地層はインボリューション状となっていた。遺物は晩期と後期が同一層で若干（大コンテナ約半箱分）出土したが、遺構は確認されなかった。

Ａ区においては、遺物包含層が形成されていた。Ⅲａ層については、黒褐色を呈し、上面には浅黄橙色・にぶい黄橙色の十和田起源火山灰（一見十和田ａ降下火山灰に似ている）が、粒状に確認される。出土遺物は、連弧文・波状文・鋸歯文・列点文等が施される弥生時代中期を中心（おおよそ90%）に、交互刺突文が施される弥生時代後期の土器が十数点、縄文時代前期・後期の土器も若干出土する。

Ⅲａ層が分布する範囲は、ＩＤ・ＩＥグリッドが大半で、調査区の地形が南北の北方向に傾斜することから、地形の緩斜面と平坦面に分布する状況であった。（傾斜の比較的強い南側では、一切出土しない）。また、ＩＥ３～５・ａ～ｂグリッドでは、数十個の礫と共に遺物が出土する状況であった。

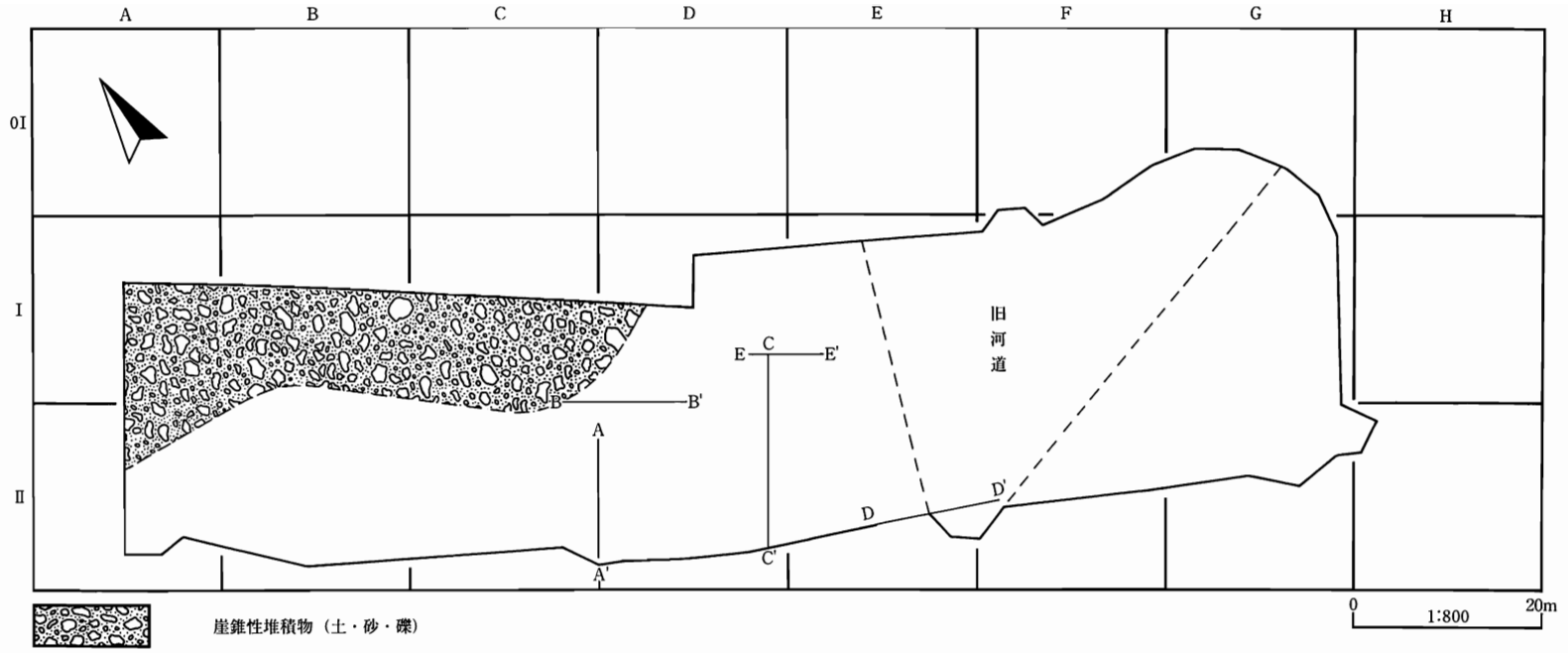
出土遺物から弥生時代中期～後期に形成されたものと考えられるが、前述したように、縄文時代前期・後期及び弥生時代後期の遺物が出土することと、Ⅲａ層の上部に接して位置する浅黄橙色・にぶい黄橙色の十和田起源火山灰が仮に十和田ａ降下火山灰（西暦915年初夏）と想定すると、二次堆積（水成堆積したものか、人為的もしくは雨水による再々堆積？）とはいえ、火山灰とⅢａ層の間に他の堆積物が存在しないことは、時間差が開きすぎるのではないかと考えられる。この二つの条件から、純粋に弥生時代中期～後期頃に形成された包含層と断定することは、難しいと考える。

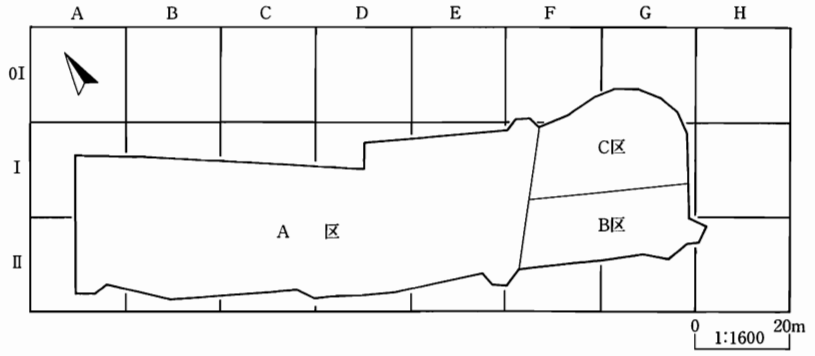
Ⅲｂ層は、黒褐色を呈し、径１～10㎜の浮石及びパミス（十和田南部浮石）が含まれる。Ⅲａ層とⅢｂ層を区分する条件は、土層の色調・質感・出土状況であるが、Ⅲｂ層上面に部分的にオレンジ色状のにぶい黄褐色火山灰？（十和田八戸火砕流堆積物や県南に見られる十和田中掫火山灰に似ていると数人からご助言をいただいた）が斑状に分布する。この火山灰？を確認した段階になると、弥生時代中期～後期の遺物は一切出土せず、縄文時代後期中葉～後葉の遺物が出土する。上面は場所によっては縄文時代晩期前葉～中葉の土器が若干出土する場所もあった。層厚が30～50㎝であったことから、短期間の堆積で形成されたものではないと考え、当初はⅢｂ層と一括せず土層を細分することを試みたが、黒色土中のため細分出来なかった。

Ⅲａ・ｂ層の遺物の出土状況は、場所によってはⅡＥ１ｃ・１ｄグリッドのⅢｂ層の様に捨て場を想定させる場所もあったが、大半は径３～20㎝の小破片が散在して出土する状況であった。

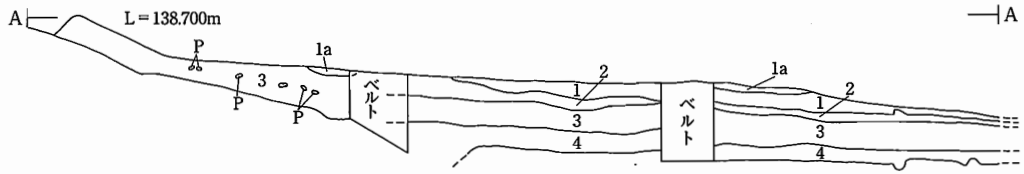
⑵遺物の接合状況について（第29図参照）

接合を行った土器の中で、個体としての接合率は90～100％のものはほとんどなく、大半は30～80％程度である。４×４ｍのグリッドで取り上げた遺物は、中には東西方向に24ｍ・12ｍ離れたもの同士が接合したものもある。しかし大半はそのグリッド内・隣り合うグリッド同士が接合する状況であった。

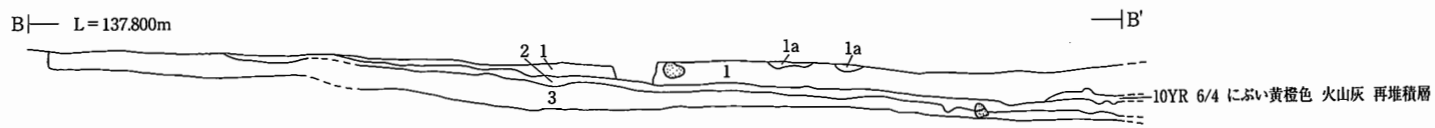




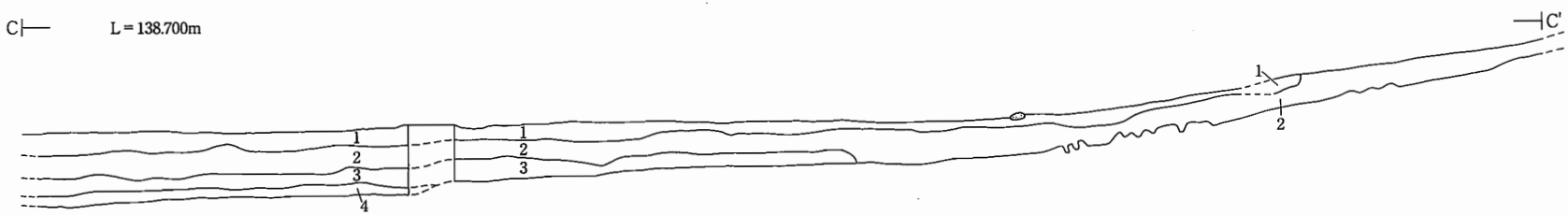
第25図　遺物包含層セクション・旧河道



1a. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性中　しまり疎（To-a粒少量含）
1. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性中　しまり密
2. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや密（Ⅲa層）
3. 7.5YR 2/1　黒色　シルト　粘性中　しまりやや密（Ⅲb層）
4. 7.5YR 2/1　黒色　シルト　粘性中　しまりやや密（Ⅲb層）



1a. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-a粒含）
1. 10YR 3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（Ⅲa層）
2. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（10YR 6/4 にぶい黄橙色十和田起源火山灰・Ⅲa）
3. 7.5YR 2/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり中（Ⅲb層）

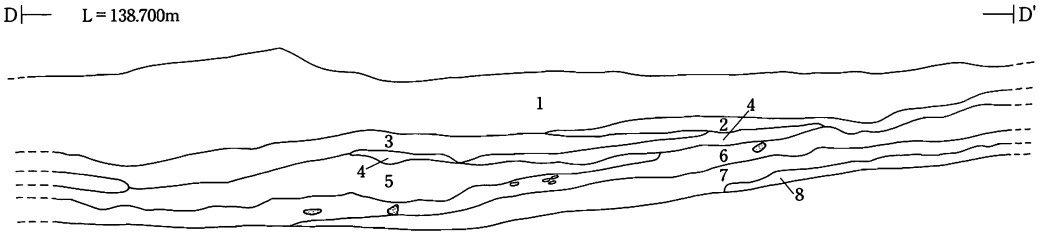


包含層C－C'

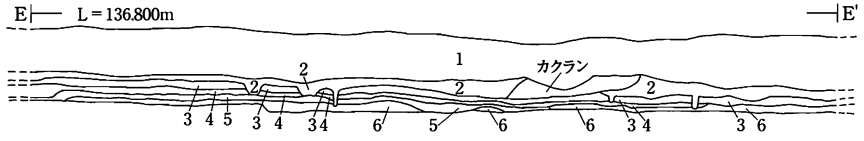
1. 10YR 3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや密（Ⅲa層）
2. 7.5YR 2/1　黒色　シルト　粘性中　しまりやや密（Ⅲb層）
3. 10YR 3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（無遺物層）
4. 10YR 4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまり密（To-cu含）

0　1:100　4m

第26図　遺物包含層断面(1)



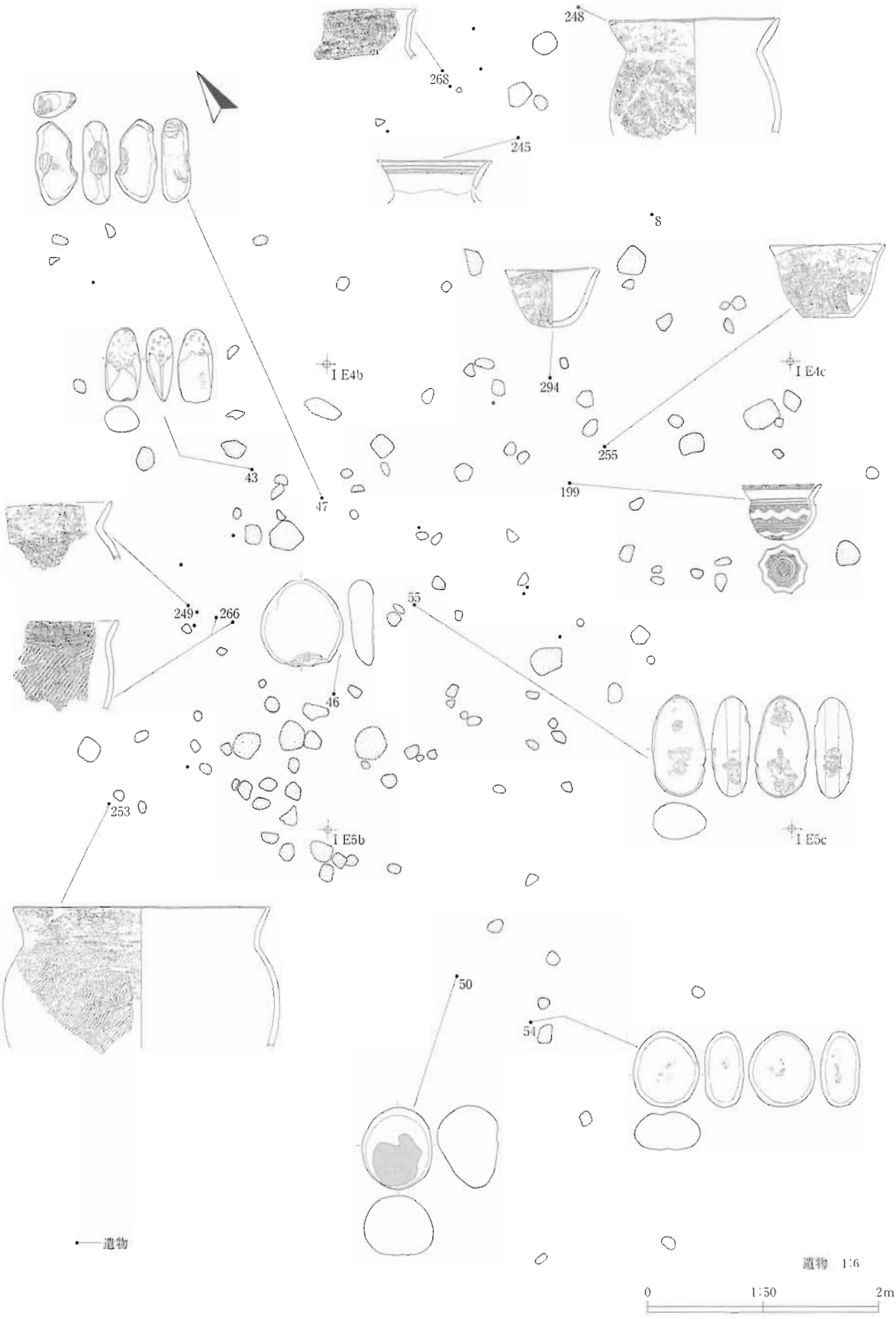
1. 10YR 4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（耕作土）
2. 10YR 4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（灰白色火山灰ブロックを含）
3. 10YR 3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（礫を80%含）
4. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（To-Nbと思われるパミス含）
5. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（褐色の火山灰をブロック状に含・礫約60%含）
6. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-Nbと思われるパミス含・縄文後期遺物包含層）
7. 7.5YR 2/1　黒色　シルト　粘性中　しまり中（パミス含・無遺物層）
8. To-cu（10YR 5/4 にぶい黄褐色土 or To-cuがブロック状に含）



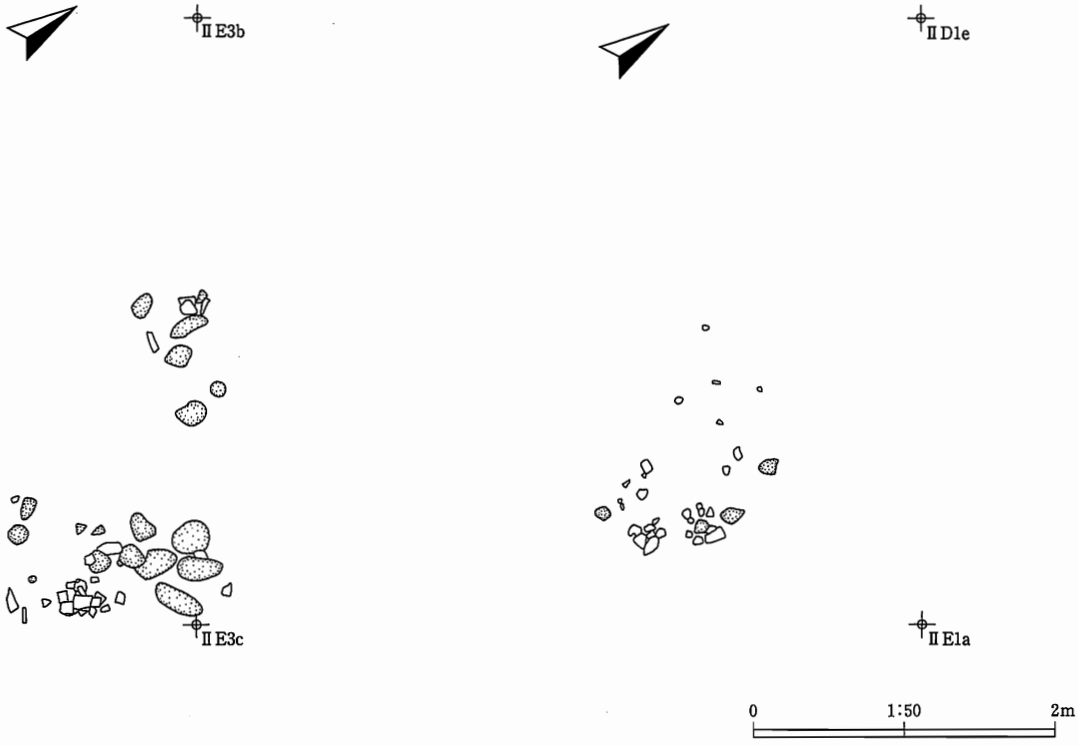
1. 10YR 3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり密（道路）
2. 10YR 3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり密（黒褐色土ブロック少量含）
3. 2.5Y 4/3　黒褐色　シルト　粘性中　しまり密
4. 10YR 5/3　にぶい黄褐色　火山灰　粘性中　しまり密（水成堆積のラミナ・十和田起源の火山灰）
5. 10YR 4/3　にぶい黄褐色　火山灰　粘性中　しまり密（水成堆積のラミナ・十和田起源の火山灰）
6. 10YR 2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（炭化物少量・パミス約1%含・Ⅲa層）

0　1:100　4m

第27図　遺物包含層断面(2)



第28図　Ⅲ a 層遺物出土状況



第29図　Ⅲａ・Ⅲｂ層遺物出土状況

V. 遺構外出土遺物

1. 遺物の実測掲載基準について

今回の発掘調査で、遺構内外合わせて、土器・土製品が大コンテナで31箱、石器・石製品が大コンテナで9箱、合わせて40箱出土した。大半が遺構外の出土遺物（包含層）である。時代時期は縄文時代前期・縄文時代後期中葉～末葉・晩期前葉～中葉・弥生時代中期～後期・中世（13～15世紀）・近世（16世紀末・18世紀）である。

これらの実測掲載基準は、土器・土製品については、残存状況・接合状況が個体の約3分の1以上のものを原則として、実測掲載することとした。その中で、出土地点が不明なもの、同類の文様・器種が多量なもの（縄文時代後期中葉の刻目帯・平行沈線をS字状及び弧線状に区画するもの・粗製深鉢）については、更に残存状況・文様・器種について着目し精選した。また、破片資料についても同様である。

縄文時代後期中葉～後葉の土器と弥生時代中期の土器の出土量を比較すると、前者の出土量が多かった。岩手県全体の弥生時代中期及び後期の遺物出土量が少ない状況から、貴重な資料と考え、弥生土器に関しては、前記した基準とは別に小破片の遺物でも実測掲載した。実測掲載点数は380点である。

石器・石製品については、原則として残存状況が良好なもの（80%以上）を実測掲載することとしたが、室内整理期間が限られていることから、更に出土地点が不明なもの、出土地点・層位・石質・形状が同類のもの（特に石錘）が多い場合は更に精選して、点数を削減した。時間的都合上から剥片石器については、平成13年度の室内整理作業から片面実測とした。実測掲載点数は221点である。

以上、遺物の実測掲載の基準について述べたが、前記した文様・出土地点・層位・残存状況による精選は、時間の都合が大きな要因となっている。このことから、客観的で公平な掲載基準を試みたが、恣意的な掲載基準になっている部分もあることをお詫びも含めお断りしておきたい。

2. 縄文時代・弥生時代の土器について

今回の発掘調査で出土した土器・土製品の時代時期は、縄文時代前期・後期中葉～末葉・晩期前葉～中葉・弥生時代中期～後期である。この中で、縄文時代後期中葉～後葉・弥生時代中期が大半を占める。

ここでは、縄文時代・弥生時代の遺物を従来の土器型式と文様等に着目し、下記の通り分類を行った。

第Ⅰ群　縄文時代前期の土器（第39図53、写真図版40）

53は円筒下層d式に比定される土器である。木目状撚糸文が施される。胎土に繊維を含む。

第Ⅱ群　縄文時代後期の土器（第39～52図54～179、写真図版40～49）

縄文時代後期中葉～後葉に位置付けられる土器群で、十腰内Ⅲ～Ⅳ式期に相当する。これらを文様等に着目して次の通りに分類した。

第Ⅱ群1類　平行沈線を弧線もしくは連続するS字状の沈線によって区切るもの（54～61）。

器種は深鉢・鉢にみられる。口縁部形態は、平縁のものと、波状口縁のものがある。57は本類の土器群の中で、粗雑な施文が施される。波状口縁の単位は六単位？と思われる。

第Ⅱ群2類　鍵状の入組状文が施されるもの（62～83）。

器種は深鉢・壺に多く認められる。1点のみであるが注口土器にも認められた（114）。沈線文によって入組状文が構成され、帯状文内が無文のものと沈線文もしくは磨消縄文手法によって、入組状文が構成され、帯状文内に羽状縄文が施されるものがある。62・82・83は変形的な鍵状入組文が施される。

第Ⅱ群3類　木葉状の入組状文が施されるもの（84～92）。

器種は注口土器・壺に多く見られ、鉢・小型土器にもそれぞれ1点みられる。沈線文もしくは磨消縄文手法によって、入組状文が構成される。大半は帯状文内に羽状縄文が施される（87・89・92を除く）。89の入組状文については、木葉状を呈さないが本類とした。

第Ⅱ群4類　刻目帯が施されるもの（93～109）。

上記に分類した土器群に属すと思われるが、破片資料で文様全体を知りえないもので刻目帯に着目し、一括した。刻目帯が1帯のもの（93～101）と2帯のものがある（102～109）。刻目帯は口縁部及び頸部に施されるものが大半であるが、口唇部に施されるもの（93）、底部に施されるもの（98）、内面に施されるもの（104）がある。また、108は充填刺突によって、複数段の刻目帯を表現したものと思われる。

第Ⅱ群5類　斜沈線文が施されるもの（110～112）

実測掲載点数は3点である（遺構内含む）。不掲載資料にも数点認められたが、全体的に上記した文様に比較して出土数は少ない。

第Ⅱ群6類　沈線文・刻目帯・貼付瘤が施され、光沢のあるミガキが施される注口土器・壺・香炉形土器？を一括した（113～122）。

第Ⅱ群7類　筒形土器・単孔土器？を一括した（123・124）。

第Ⅱ群8類　上記した文様以外のもの、また、破片資料のため文様全体を知りえないもの（125～142）。

第Ⅱ群9類　粗製深鉢・無文土器・台付・底部を一括した（143～175）。

器面に施文される原体は、おおむね単節縄文・0段多条・羽状縄文（1種の原体と2種の原体）の3種である。他には遺構内の土器で、口縁部と平行に原体圧痕が施されるもの（36）、後述する無文土器・数点の出土であるが、櫛歯状文も認められる（21・166）。口縁部は、肥厚するものが大半である。

縄文が施される土器群の中で、口縁部に着目すると折り返しの口縁部を持つもの（143･144）。頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの（145～152）・やや内湾するもの（153～157）がある。また、1点のみの出土であるが、波状口縁を呈するものもある（158）。底部資料として7点（160～166）を掲載し、不掲載遺物（総点数は100点を越える）を含め、観察を行ったが、網代痕・木葉痕が明瞭に認められるのはわずかであった。大半の底部資料にケズリ・ナデ等による調整が施されていることから、調整時に前記した痕跡が消失したものと思われる。なお、159はⅡ群土器の中で最も小さい土器である。

無文土器については、内外面ナデ・ミガキによる調整が施される。167～169は、縄文が施される粗製深鉢に見られない器形で、頸部から口縁部にかけて屈曲し外反する特徴を持つ。他の遺物は、深鉢形（170）・壺形（172）・てづくねによる鉢形（173）がある。なお、167･168については、塗膜状の黒色付着物（漆？）が認められる。

その他にアスファルトの付着が認められる遺物として、176・177がある。それぞれ、注口土器の注口部である。

第Ⅱ群10類　縄文時代後期末葉に位置付けられる土器（178･179）

第Ⅲ群　縄文時代晩期に位置付けられる土器群（第53図、180～191・写真図版50）

全体で20数点出土した。Ⅲａ層及びⅢｂ層上面で出土したものが、ほとんどである。時期は前葉期と中葉期の土器である。器種は、壺・鉢・台付鉢・皿である。これらの土器を時期別に次の通りに分類した。

第Ⅲ群1類　晩期前葉期に位置づけられ、大洞Ｂ式に比定されるもの（180～185）。

第Ⅲ群2類　晩期中葉期に位置づけられ、大洞Ｃ２式に比定されるもの（186～191）。

第Ⅳ群　弥生時代中期に位置づけられる土器群（第53～61図、192～297・写真図版50～57）

すべてⅢａ層から出土した遺物で、弥生時代中期に位置付けられる土器群を一括し、文様・原体・器種等で更に下記の通りに分類した

第Ⅳ群１類　山王Ⅲ層式期に類似する文様（変形工字文・連弧文・波状文・山形文）が施されるもので、ＬＲ縄文が施される土器群を一括した（192～219）。

192～194は突起（切り込みを有す）を有する甕形土器で、ＬＲ縄文施文後、平行沈線文が施される。磨消縄文手法による。

193･194は沈線間に縦位（下方向から）の刺突状の沈線が施される。共に他のⅣ群土器群と比較して胎土に海綿骨針が顕著に認められる。

195は浅鉢形土器である。196は甕形土器の頸部と思われる。変形工字文が施され、内外面にすすが付着し、器面は本群の中で比較的、光沢があるしっかりとしたミガキ調整が施される。197は高坏である。変形工字文が施されるもので、二次加熱を受けている。沈線幅は１㎜弱で内外面ミガキによる調整である。

次に述べる土器群は、波状沈線文・連弧文・山形沈線文が施される土器群である。本群において、もっとも多い文様である。198～206は波状沈線文が施される土器群で、沈線文によって縄文地と無文帯を区画する。器種は、鉢及び浅鉢形が多い。すべて磨消縄文手法が施される。口唇部は突起（切り込みを有す）を有するもの（199）と平縁（200～203）のものがある。これらは、口縁部と平行に一条もしくは二条の沈線が施される。口縁部と沈線文間は、縄文が施される。なお199は赤色顔料が塗布される。

207・208は連弧文が施される土器である。207は、口縁部に二ヶ所に粘土焼成前の孔を有す。対になる部分が欠損しているため、不明であるが、田舎館式期の土器に見られる甕と蓋にみられる二個一対の孔の可能性も考えられる。２～３条の平行沈線文と３条の連弧文によって、縄文帯と無文帯を区画する。

208は壺形土器である。口縁部（もしくは台端部）に縄文が施される。前述した平行沈線文と波状沈線文及び山形状沈線文による縄文帯と無文帯で構成するものではない。無文部に節が見受けられることから、全面に一旦縄文を施した後、沈線による区画で、磨消縄文手法が行われたと思われる。

209・210は山形状沈線文（鋸歯状）が施される土器で、器種は鉢形の土器である。平行沈線文と山形状沈線文によって縄文帯と無文帯を区画する。特徴は、前述した土器同様である。両者共に赤色顔料が塗布される。

211は平行沈線と山形状沈線文で構成され、口唇部から平行沈線間に縦位に２～３㎜程の沈線が施される。212は平行沈線文・山形状沈線文が施される。沈線は他の土器と比較して、浅く施文される。口唇部に刻目が施される。213は器種は不明確である。沈線文によって、狭い縄文帯と無文帯を区画する。沈線幅は上記した沈線文の中で一番広く深い（重層連弧文か？）。

上述した文様以外の遺物として、214・215は沈線文によって区画された縄文地に刺突を有する土器である。胎土・原体は両者共に類似し、両者共に器種は不明確である。刺突は214は左斜め方向、215は上位は左斜め方向、下位は右斜め方向に刺突が施される。両者共に原体はＬＲ縄文が施され、胎土の雰囲気も類似する。

216は鉢形器である。上記した沈線文の中で比較的細い沈線によって、縄文部と無文部を区画する。磨消縄文による手法と思われる。217は高坏である。平行沈線文・山形状沈線文が施される。沈線は他の土器と比較して、浅く施文される。口唇部に刻目が施される。二つの切り込みを有し、ハの字状の沈線文が突起から懸垂する。二次加熱を受けている。

218は、底部に二条の沈線文が施される。器種は判別することは出来なかった（高坏？）。219は結節沈線文状の刺突列が施される。縄文はＬＲ縄文が施され、沈線文によって、縄文地と磨消縄文が施される。後述するⅣ群２・３類とは、原体・胎土が異なる（Ⅳ群1類土器群と類似する）ことから本類とした。

第Ⅳ群２類　二枚橋式期の土器と文様及び器形が類似し、大半の土器にＲＬ縄文が施される土器群（220～224）

220・221は長頸の甕形土器である。220は波状の口縁部に突起を有し、刻目が施される。口縁部に６条の平行沈線が施される。平行沈線内に縦位沈線と横位の結節沈線文？によって変形工字文状の沈線文が施される。頸部にも結節沈線文？と変形工字文状の沈線文が施される。原体は口縁部に斜位方向のＲＬ縄文と胴部に原体を斜位にし、縦走するＲＬ縄文が施される。二枚橋式期の長頸甕形土器は口縁部から頸部にかけて直立ぎみであるのに対して、220はゆるく外反する。221は口縁部の平行沈線文に縦位の沈線が施され、頸部には縄文地に平行沈線文が施される。

222・223は胎土及び文様から同一個体と思われる。222の口唇部に横方向からの刺突（刻目？）を有し、223の頸部に棒状の工具によって、右方向に引いたいわゆる結節沈線文？（列点文？）が施される。胴部には原体を斜位に縦走及び斜走するＲＬ縄文が施される。頸部は屈曲する。

224は一見二枚橋式にみられる結節沈線文に似ているが、粘土粒を右方向に寄せ、二枚橋式期の土器と比較して粘土粒が大きく、粘土粒間が広い。原体は無節で×状の細い沈線文が施される。

第Ⅳ群３類　井沢～田舎館式期の土器と文様及び器形が類似し、大半の土器にＲＬ縄文が施される土器群（225～229）

225は、台付鉢と思われる。口縁部に突起（粘土粒貼付）を有し、口唇部に縦位の刻目が施される。胴部上半には平行沈線文と変形工字文が施され、変形工字文屈曲部に粘土粒を有す。平行沈線文と変形工字文間及び変形工字文内の三角形を呈する空間に充填刺突が施される。Ⅳ群1類に認められた平行沈線文と波状及び連弧文によって縄文帯と無文帯を区画するものではない。縄文地に鋸歯文が施される。原体はＲＬ縄文で口縁部は斜位にほぼ縦走・やや斜走する。胴部原体は横位で斜走する。無文部及び内面の器面調整は、光沢のあるミガキが施される。内外面に部分的にすすが付着する。鋸歯文以外の文様・器形は、二枚橋式～井沢式（宇鉄Ⅱ含）に類する。

226は甕形土器である。井沢式土器と類似するものと思われる。口唇部はＲＬ縄文の原体回転が施される。口縁部は斜位の縦走するＲＬ縄文が施され、頸部の平行沈線間に二列の列点文（棒状の工具で左方向から施文）が施される。胴部は横位で斜走するＲＬ縄文が施される。胎土は良好で、口縁部内面は光沢のあるミガキによる調整が施される。

227は口縁部はゆるやかな小波状を呈す。口縁部に二条一対の平行沈線文、頸部に五条の平行沈線文と鋸歯文が施される。平行沈線文と鋸歯文間に磨消縄文手法による無文帯が構成される。縄文は口縁部が斜位で縦走する。胴部は、横位で斜走する。外面の無文部及び内面はナデによる調整が施される。田舎館式期の土器と比較すると鋸歯文の沈線幅は本土器が太く、口縁部については、田舎館式期の土器はやや強く外反するのに対し、227はゆるやかに外反する。228は甕形土器の頸部と思われる。縄文地に平行沈線文・鋸歯文が施される。

229は壺形土器と思われる。田舎館式土器に見られる壺形土器の文様と類似する。頸部は平行沈線文が施され、鋸歯状の貼付隆帯が三単位・沈線による鋸歯文が三単位合わせて、六単位で構成されている。鋸歯状の貼付隆帯及び鋸歯文の下に位置する一条の貼付隆帯上には縦位の刻目が施される。胴部は斜位の縦走する

ＬＲ縄文が施される。節の大きさはⅣ群1類土器と比較して大きい。

田舎館式期の壺形土器は口縁部が内湾するものがほとんどで、最大径が胴部中央部に位置し、底部から胴部中央部にかけて直線的に外反する。229は、全体形を把握することはできないが、長胴の甕もしくは壺の様相を呈する。また、頸部については、229は外反するのに対して、田舎館式土器は内湾する。文様については沈線は田舎館式土器と比べ太く、表現は適切ではないが、だらしない（退化？）。また、隆帯についても同様（退化？）で、田舎館式期の土器と比較して太い特徴がある。

最後にこのⅣ群3類とした井沢～田舎館式土器と類似する文様が構成される土器群は、田舎館式期の土器と比べ、胎土は良好で、節は大きく、器厚は厚いという特徴を持つ。

第Ⅳ群４類　上記したⅣ群1～3類に区分されないもの（230･231）。

230は甕形土器である。口唇部に斜め方向の刻目を有し、口縁部は平行沈線文が施され、平行沈線文間に刺突が施される。また、平行沈線文によって区画し、無文帯を構成する。頸部から胴部上半は、平行沈線文間にくずれた変形工字文が施され、変形工字文間に逆ハの字状及びハの字状の刺突列が施される。変形工字文の下に位置する二条の鋸歯状文は縄文地に施され、Ⅳ群１類のような平行沈線と鋸歯（波状）文によって縄文帯と無文帯を構成するものではない。鋸歯状文は沈線文幅は３～４㎜程度での太さで、Ⅳ群３類の土器と比較して太い。縄文はＬＲ縄文で、節の雰囲気はどちらかというとⅣ群１類に類する。縄文地に部分的に磨消縄文手法が行われ、無文となっている部分もある。外面は口縁部にすすが付着し、内面はほぼ全面にすすが付着する。

231は甕形土器である。口縁部に三つの切り込み持つ突起を有し、口縁部は無文帯、頸部は平行沈線文でボタン状の貼付文を有す。胴部上半には方形に区画された沈線文内に細長い充填刺突が施される。充填刺突内には縄文の節が認められる。また、胴部中央付近に平行沈線文とＲＬ縄文が認められる。磨消縄文手法である。

第Ⅳ群５類　蓋形・脚部資料を一括した（232～236）。

蓋形土器

232の文様は平行沈線及び渦状の沈線文で構成される。沈線に沿う様に斜め方向から刺突が施される。232は207・209・210の底部に類し、蓋頂部は円形の沈線文内に縄文を施し、円形沈線文の外は連弧状の沈線文が施される。内面の沈線幅は他の土器と比較して一番狭く（約0.5㎜程）、内外面に部分的にすすが付着し、外面に赤色顔料が塗布される。沈線文は連弧文を意識して、施された様相が考えられる。

233は文様は沈線文とＬＲ縄文によって構成されるものである。胎土には径１～３㎜程の礫が含まれ、Ⅳ群１～５類の土器群と比較すると文様及び胎土は粗雑な印象を持つ。

234はＲＬ？縄文が施される。条の単位の中で重複がある。把手部に焼成前の孔が認められる。内面は一条の横位沈線文によって、無文帯と縄文部が区画される。Ⅲｂ層から出土していることから、第Ⅱ群土器の可能性も考えられる。以上述べた蓋形土器は原体、胎土、文様はⅣ群1類と類似すると思われる。

脚部資料

235は平行沈線文間に縦位の細い沈線状の刻目が施され、山形状沈線文と平行沈線文によって縄文帯と無文帯を区画する。磨消縄文手法である。粘土焼成前の二つの孔を有す。対になる部分が欠損しているため、不明であるが、田舎館式期土器に見られる甕形土器と蓋形土器に認められる二個一対の孔の可能性も考えられる。

236はＬＲ縄文（０段多条？）と平行沈線文が施される土器である。節はⅣ群土器の中で比較すると小さい

部類に入る。以上述べた脚部資料は、原体、胎土、文様はⅣ群1類と類似すると思われる。

第Ⅳ群6類　粗製土器を一括した。その中で、沈線文の有無・口縁部及び頸部の器形・施文（縄文か無文かによって）更に下記通りに分類した（237～297）。

(1)口縁部及び頸部に2～3条の平行沈線文が施される土器（237～247）

甕形土器の口縁部の大半は外反し（237～242･244）、口縁部は平縁のものと、突起（切り込み）を持つものがある（242･244）。壺形土器は、平縁（245･246）と小波状を呈し口唇部にＬＲ？縄文の原体回転が施されるものがある（247）。また、縄文施文されるものはすべてＬＲ縄文が施され、無文帯及び沈線文部は磨消縄文手法である。

(2)口縁部が残存している資料で縄文が施される土器（248～279）

この群の土器は口縁部はほぼ平縁で、無文帯となるものがほとんどである。粗製の甕形土器の一般的な見解に口縁部から頸部にかけて、強く外反するものは山王Ⅲ層式期に多く、直立ぎみ、もしくはやや内傾するものは、二枚橋式期（口唇部が小波状を呈するものが多い）及び田舎館式期（宇鉄Ⅱ式期含）に多いという見解がある。このことから、口縁部に着目するとあくまでも主観であるが、①強く外反するもの。②外反するもの。③ゆるやかに外反するもの。以上3つに大別することが出来る。後者の二枚橋式期及び田舎館式期に見られるものは確認出来なかった。

この上記した①～③について見ると、①に該当するものは、248～253である。これらの土器群は、原体はすべてＬＲ縄文が施される。②に該当するものは、254～268である。265（原体は無節のＬで本群で1点のみの出土）を除いてすべてＬＲ縄文が施される。264～266は他の土器と比較して、口縁部が短い特徴を持つ。269～271は鉢形土器と思われる。③に該当するものは、272～275である。

上記以外の特徴を持つ土器で口唇部に指頭圧痕による小波状を呈するものがある（276～279）。器種はすべて甕形土器で、原体もすべてＬＲ縄文が施される。原体の節は①～③とした土器より、比較的大きい傾向がある。

(3)胴部及び底部資料（280～292）。

ＲＬ縄文が施される土器は282・285である。ＬＲ縄文が施される土器は、280・281・283・284・286・287である。288は綾繰文によって頸部の無文帯を区画する。Ｒの撚糸文が施される。289・290も同様にＲの撚糸文が施される。289は内外面にすすが付着する。上述した土器同様に、縄文施文後にナデによる調整で器面を調整している。底部資料については、大半はケズリ・ナデ等の調整は認められる。2点のみであるが、網代痕跡が認められる。Ⅱ群同様、調整時に消失したものが大半と思われる。291･292は台である。台付鉢の台と思われる。

(4)無文土器（293～297）

293は甕形土器で口縁部形態は上述した(2)①に属す。内外面共にナデによる調整が施され、外面頸部・内面ほぼ全面にすすが付着する。294は鉢形を呈し、口縁部形態は上述した(2)③に属す。外面は口縁部ヨコナデ・胴部縦方向のケズリによる調整が施される。内面はナデによる調整が施される。295は外面は294・296・297と比較して丁寧なナデ（かるいミガキ）調整が施される。内面はナデによる調整が施される（胎土からⅤ群の可能性も考えられる）。

第Ⅴ群　弥生時代後期に位置付けられる土器群（第62図298～306、写真図版57）

298・299は甕形土器の同一個体である。口唇部に原体Ｒの撚糸文が施され、2ヶ所に刺突を施し、口縁部に小波状（突起？）を持つ。口縁部と頸部に部分的に整然としない交互刺突文が施される。頸部は変形工字

文的な連弧文と連弧文間に構成される菱形文内に縦位の鋸歯状の沈線文が施される。

縄文は、口縁部と胴部上半から底部にかけて施される。横走する綾繰文が口縁部に２列と沈線文と縄文を区切る様に１列、また底部端部に１列施される。胴部上半から底部まで縦走する綾繰文が何十列にも施される。

綾繰文は原体の端部を結束したものと思われ、特殊な撚糸文である。なお、口縁部の2列の綾繰文間の無文部は磨消縄文によるものではない。

器形は大形の甕で、口縁部の器厚は他の部位より厚い。折り返し口縁ではなく、粘土成形時に厚く成形したものと思われる。全体器厚はⅣ群土器と比較すると薄く器形も大きい。

なお、本県における298・299と同類と思われる土器が出土した遺跡としては、親久保Ⅱ遺跡（一戸町）が上げられる。

300～302は、破片資料で全体把握することは出来ないが、おそらく甕形土器と思われる。300・301は整然としない交互刺突文が施される。302は連弧文と平行沈線文間に交互刺突文ではなく、刺突列が施される。303・304は壺形土器である。303は口唇部に原体回転、口縁部に整然としない交互刺突文が施される。交互刺突文は口縁部を一周せず、途中で途切れる。口縁部に平行に原体圧痕（R）が施される。304は平行沈線文と鋸歯状沈線文によって、文様が構成される。305は器種は破片資料のため判然としなかった。文様は鋸歯状の沈線文が施される。縄文は原体圧痕ではなく回転による施文と思われる。

306は上述した土器群と胎土が近似していることから、本群とした。Rの撚糸文が施される。底部は平坦である。

上述した土器群の胎土はすべて良好で淡い黄色を呈し、類似する原体を用いている。胎土・原体からⅣ群土器（弥生時代中期）と区分することは容易であった。

土器の時代時期は、交互刺突文が退化することと、特殊な撚糸文が施されることから、斉藤邦雄氏の分類（斉藤1993）による特殊撚糸文段階（赤穴式相当段階後半）、小田野哲憲氏による小田野編年（小田野1987）Ⅴ期に相当する弥生時代終末期の土器群である。

3. 土製品について

土製品（第63～65図307～376、写真図版57～60）

遺構内外から約100点近く出土した（円盤状土製品が多数である）。その中で、小破片で土製品か土器か判別出来なかったものについては割愛した。実測掲載点数は69点である。

307～316は土偶である。肩のはったいわゆる「いかり」の状態が表現され、竹管刺突・鋸歯状沈線文から縄文時代後期中葉～後葉の土偶である。317については、Ⅲａ層から出土した弥生時代前期～中期前葉の土偶の足部と思われる。なお、316の接合面にはアスファルトが付着する。318～320はいわゆるスタンプ形と呼ばれる土製品である。321は土錘である。これらも層位・文様から縄文時代後期中葉～後葉の遺物である。322～326は、Ⅲａ層から出土した遺物である。322・323・326は、器種を判別することができなかった。324の勾玉・325の耳飾りなどは、縄文時代後期～晩期の遺跡でみられる遺物である。このことから、流れ込みによる混入の可能性も考えられる。

327～376は、円盤状土製品である。Ⅲｂ層からの出土である。側縁部を打ち欠きによって、成形したもの（327～363）と側縁部を研磨調整によって成形したもの（364～376）がある。370・371は、表面に黒色の付着物がみられる（アスファルト？）。

4．その他の遺物について

その他の遺物（第65図377～381、写真図版60）

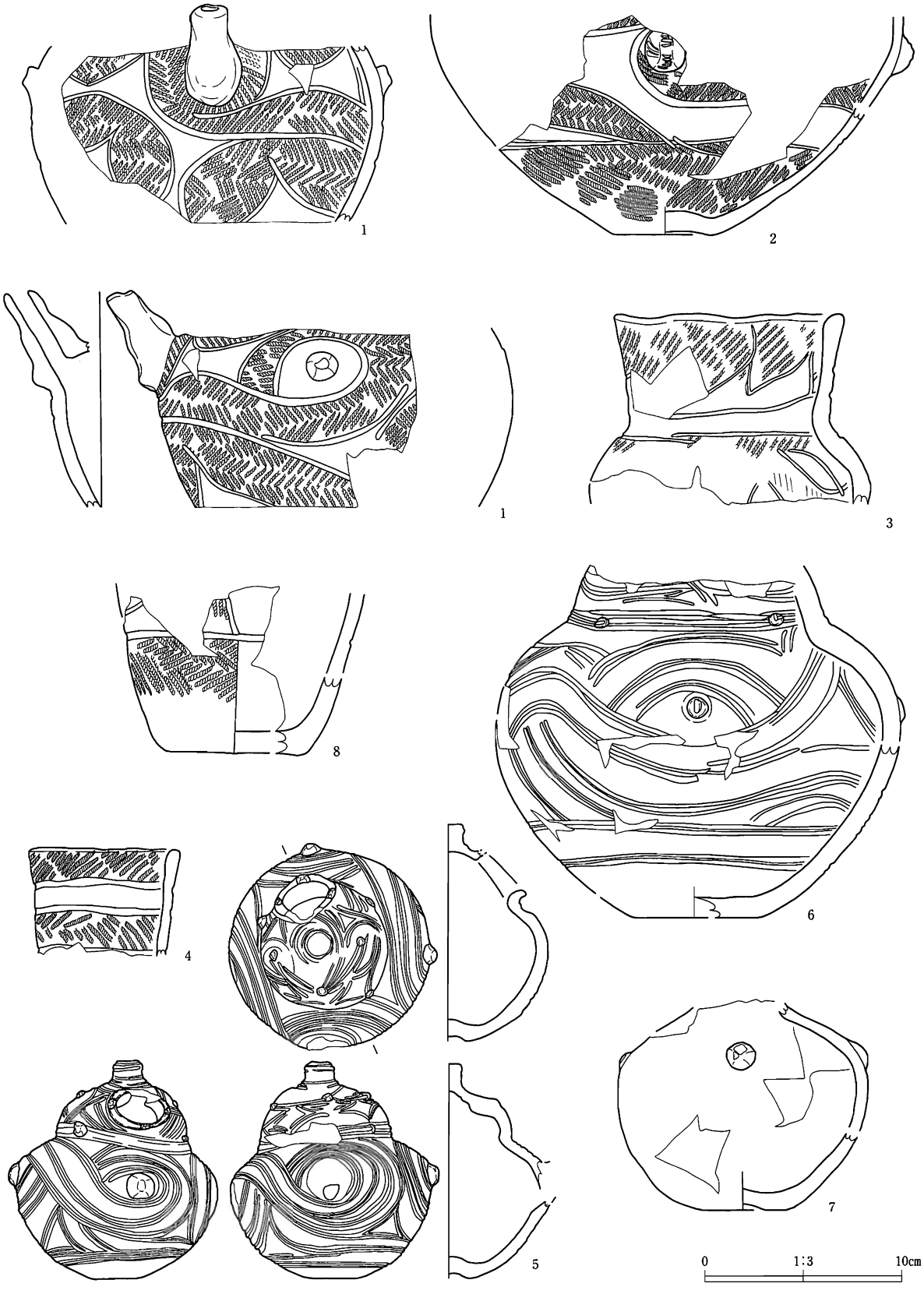
377は、Ⅲａ層上面から出土した。内・外面にミガキ調整が施される。縄文時代後期中葉～後葉の台付の可能性が考えられるが、胎土・器厚の違いがある。奈良時代の遺物の可能性も考えたが、判別できなかった。上述した分類項目にあてはめることを避けた。

378は、十和田ａ降下火山灰がブロック状に堆積する落ち込みから出土した。非ロクロ成形の土師器の坏である。内面は非黒色処理で、ミガキ調整が施される。外面は、口縁部ヨコナデ、体部及び底部はケズリの調整が施される。８世紀末～９世紀初頭の遺物と思われる。

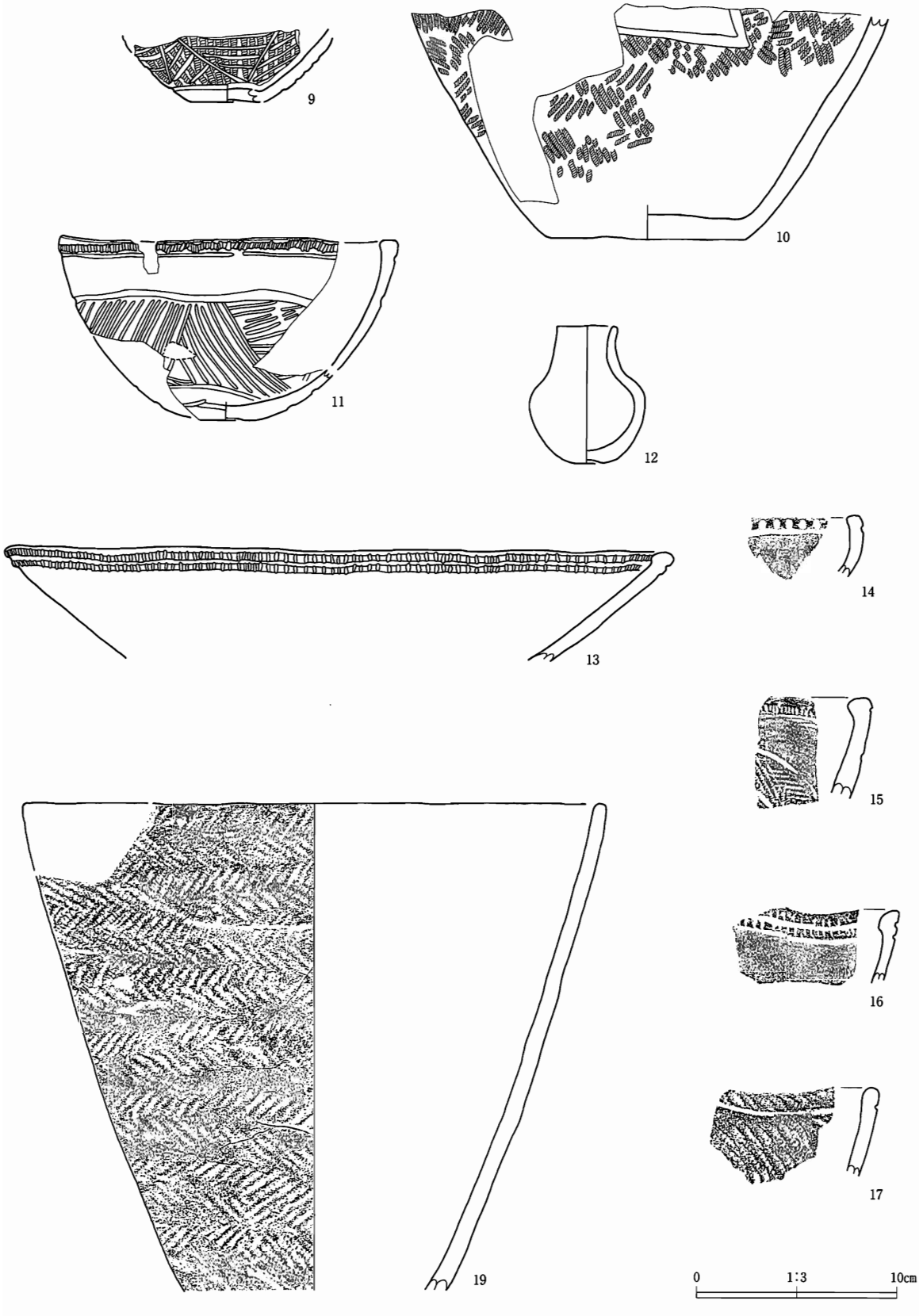
379は、Ⅲａ層上面から出土した、青白磁の皿である。見込みに「ねこかき」が施される。産地は中国で、12世紀代の遺物である。

380は、Ⅲａ層上面から出土した、青磁である。産地は中国と思われる。器種は小破片のため、判別することは出来なかった。中世の遺物と思われる。

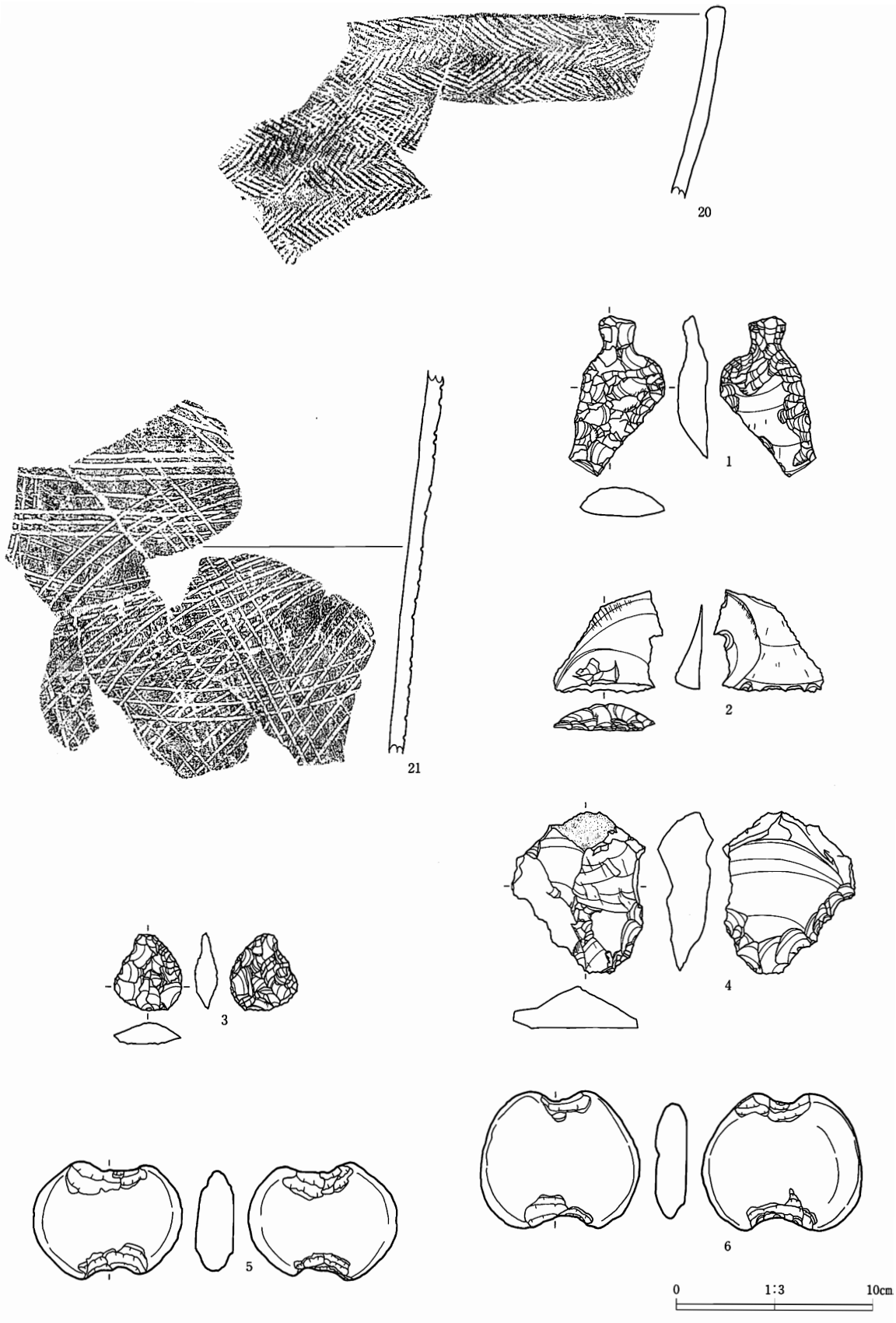
381は、Ⅲａ層上部の火山灰から出土した、瀬戸・美濃産の陶器皿である。内外面に長石釉が施釉される。いわゆる「志野」と呼ばれるものである。16世紀末～17世紀初頭の遺物である。



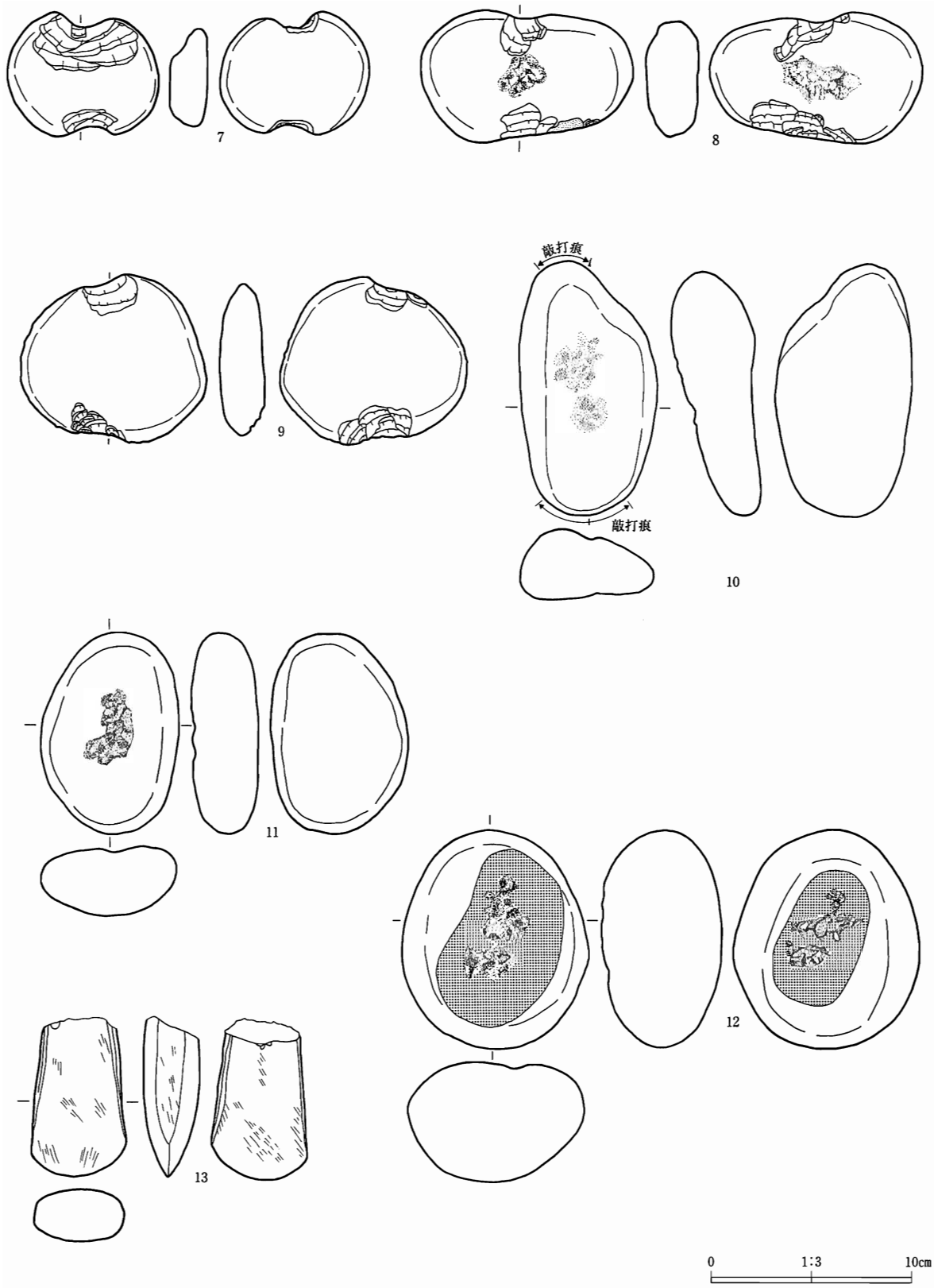
第30図　1号竪穴住居跡出土遺物(1)



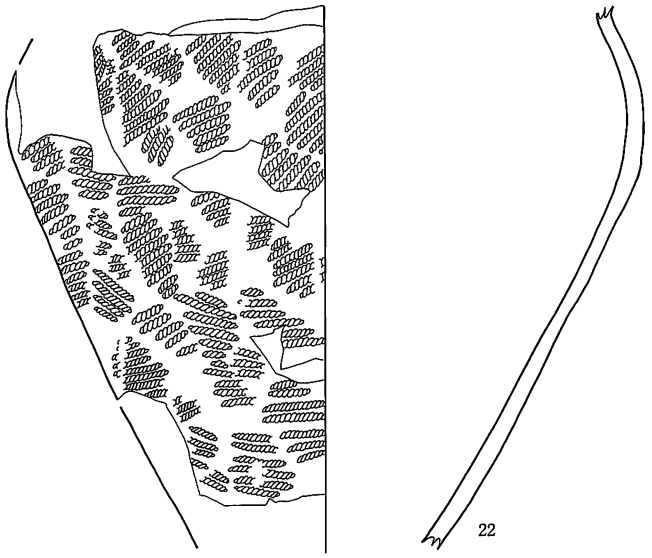
第31図　1号竪穴住居跡出土遺物(2)

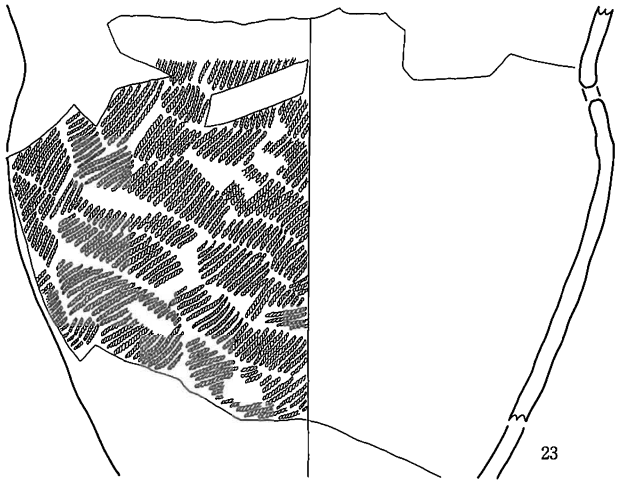


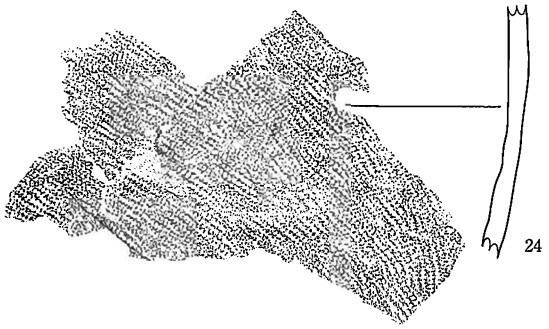
第32図　1号竪穴住居跡出土遺物(3)



第33図　1号竪穴住居跡出土遺物(4)

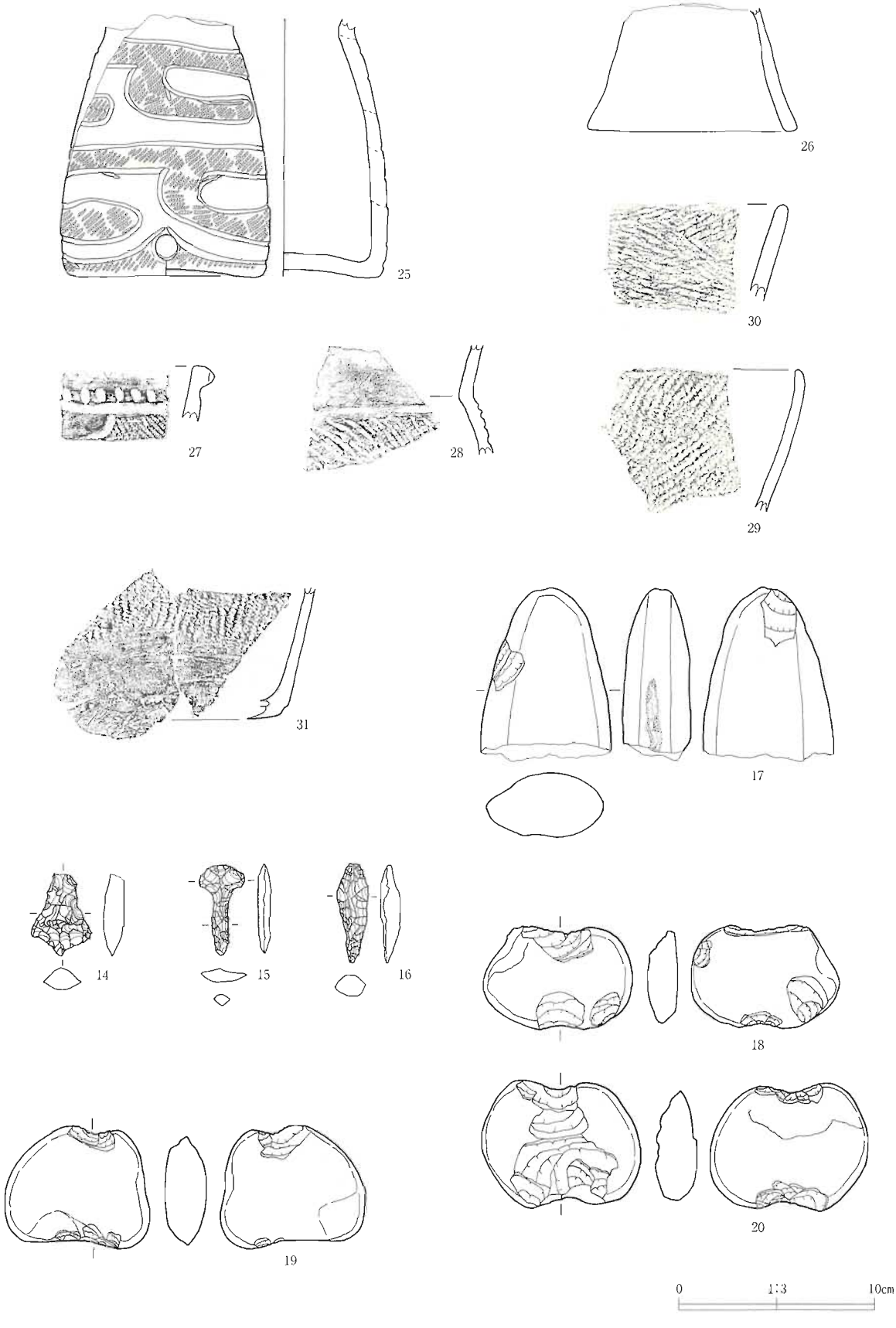




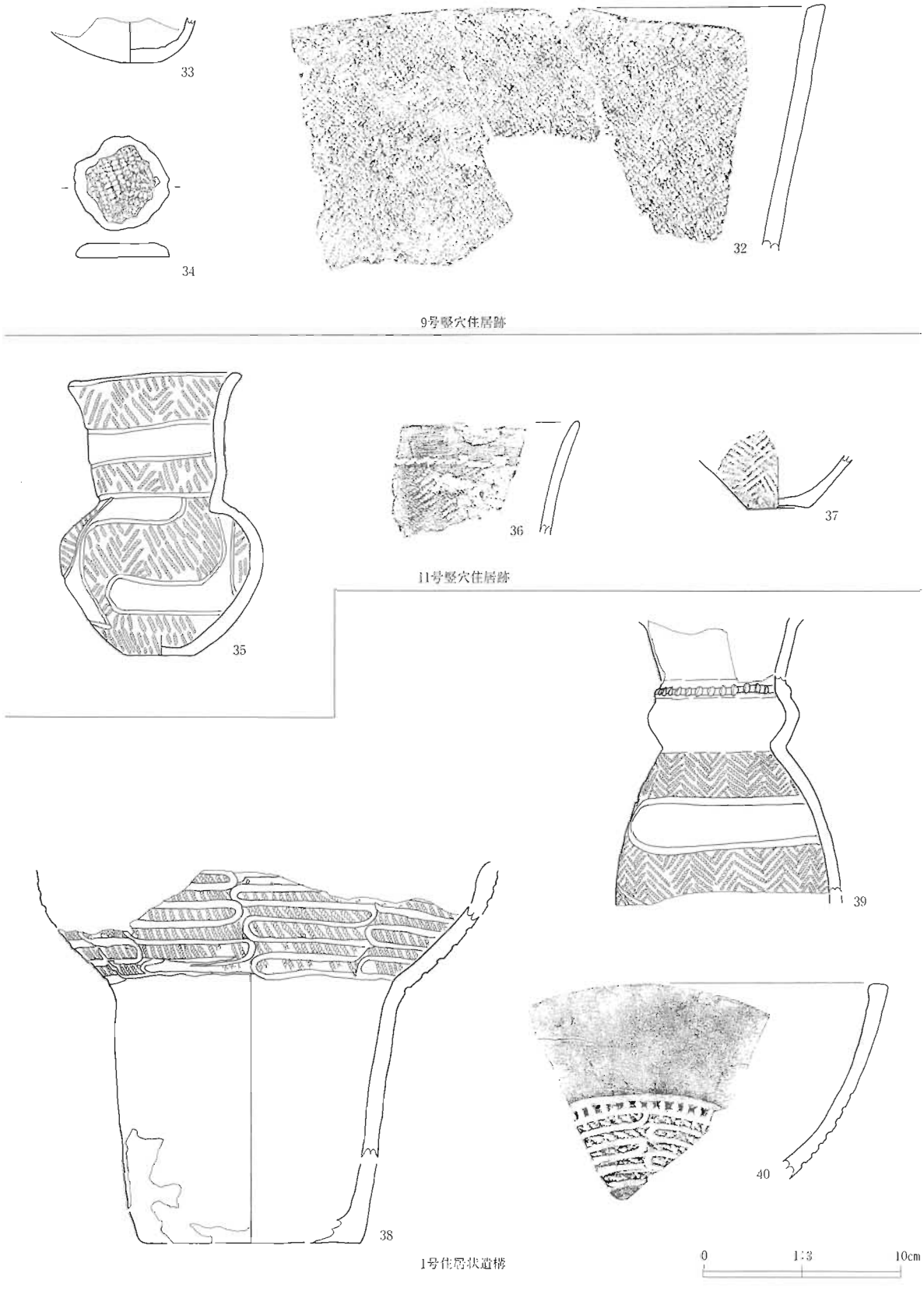


0　1:3　10cm

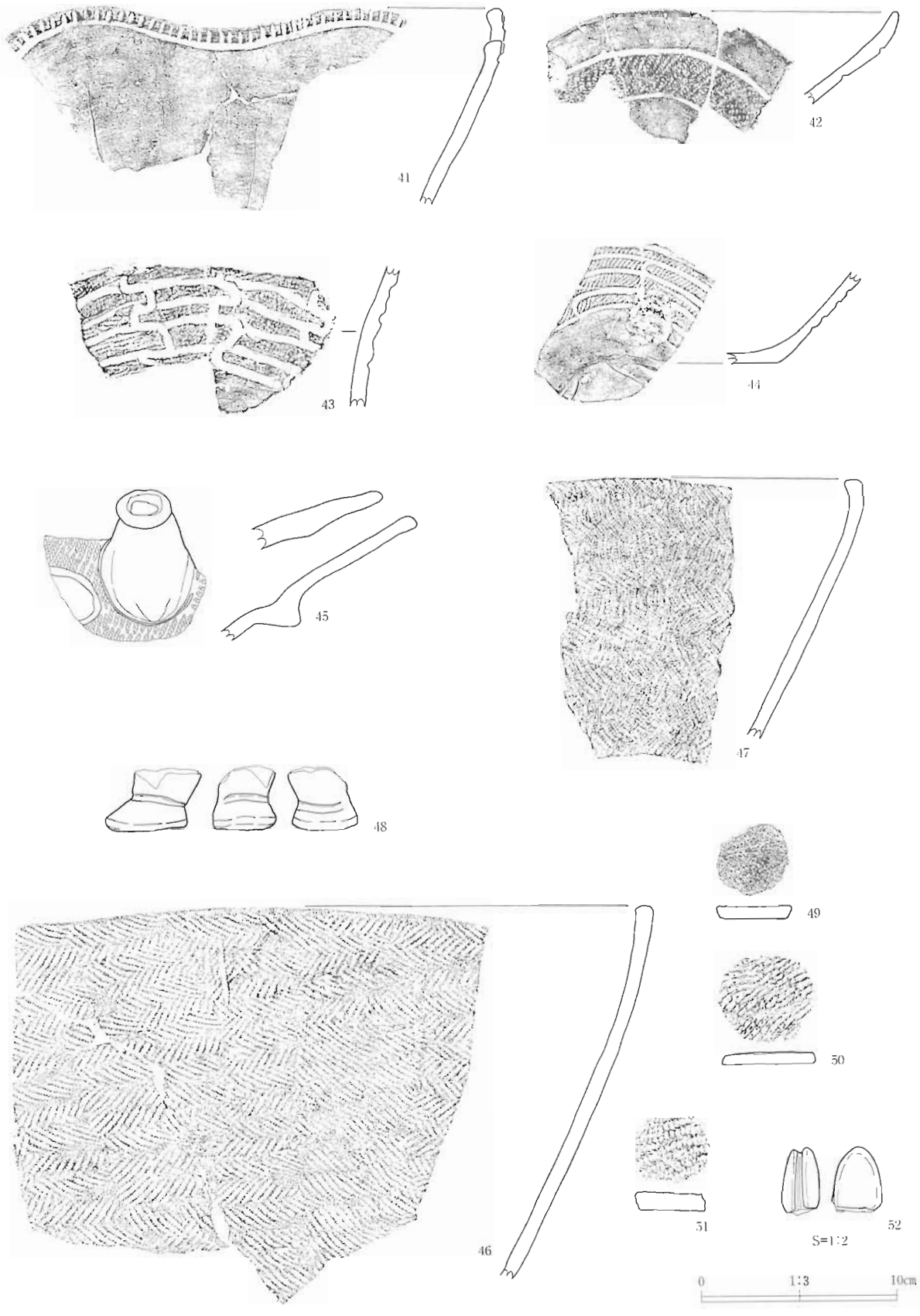
第34図　3号竪穴住居跡出土遺物



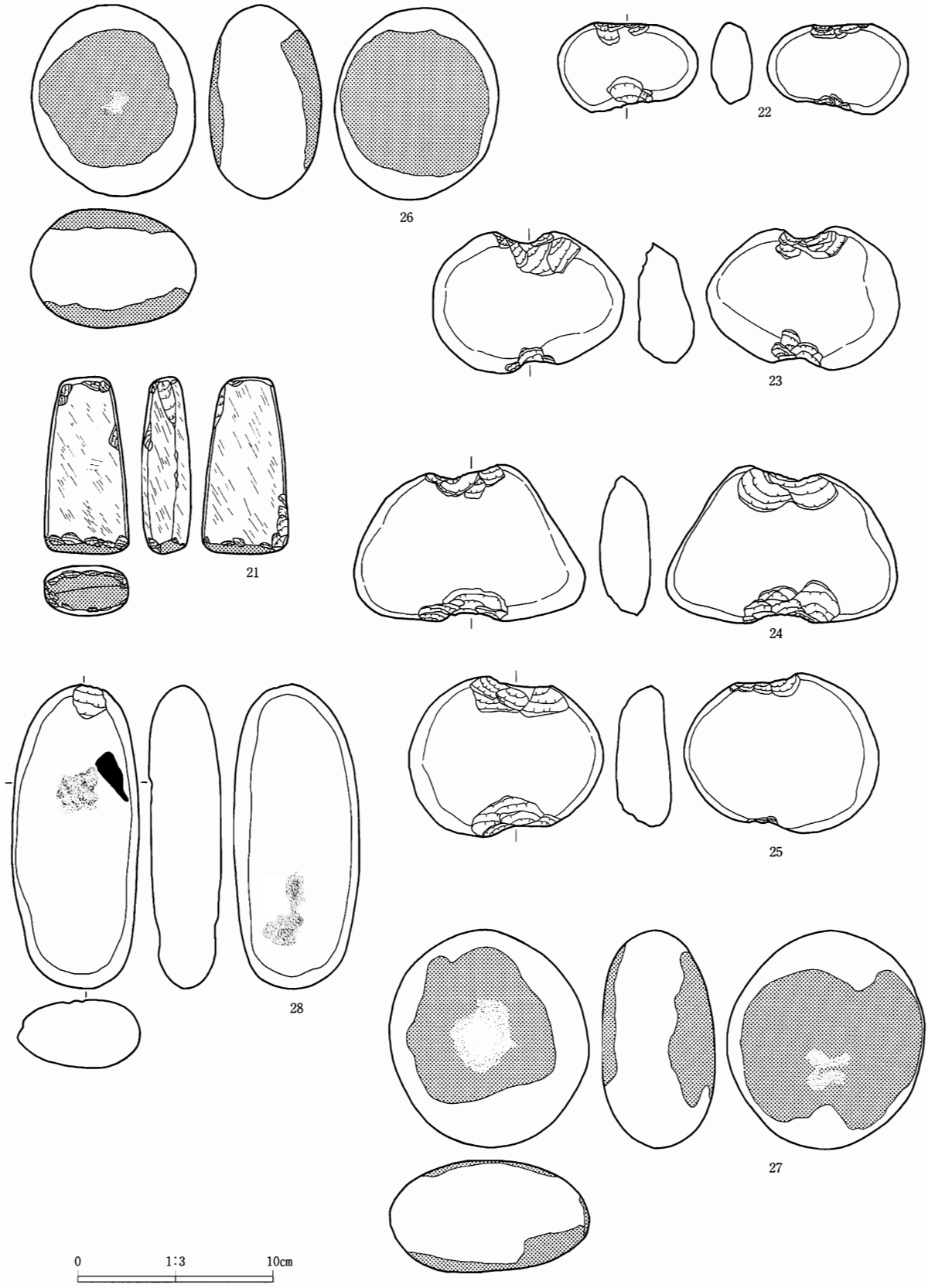
第35図　5号竪穴住居跡出土遺物



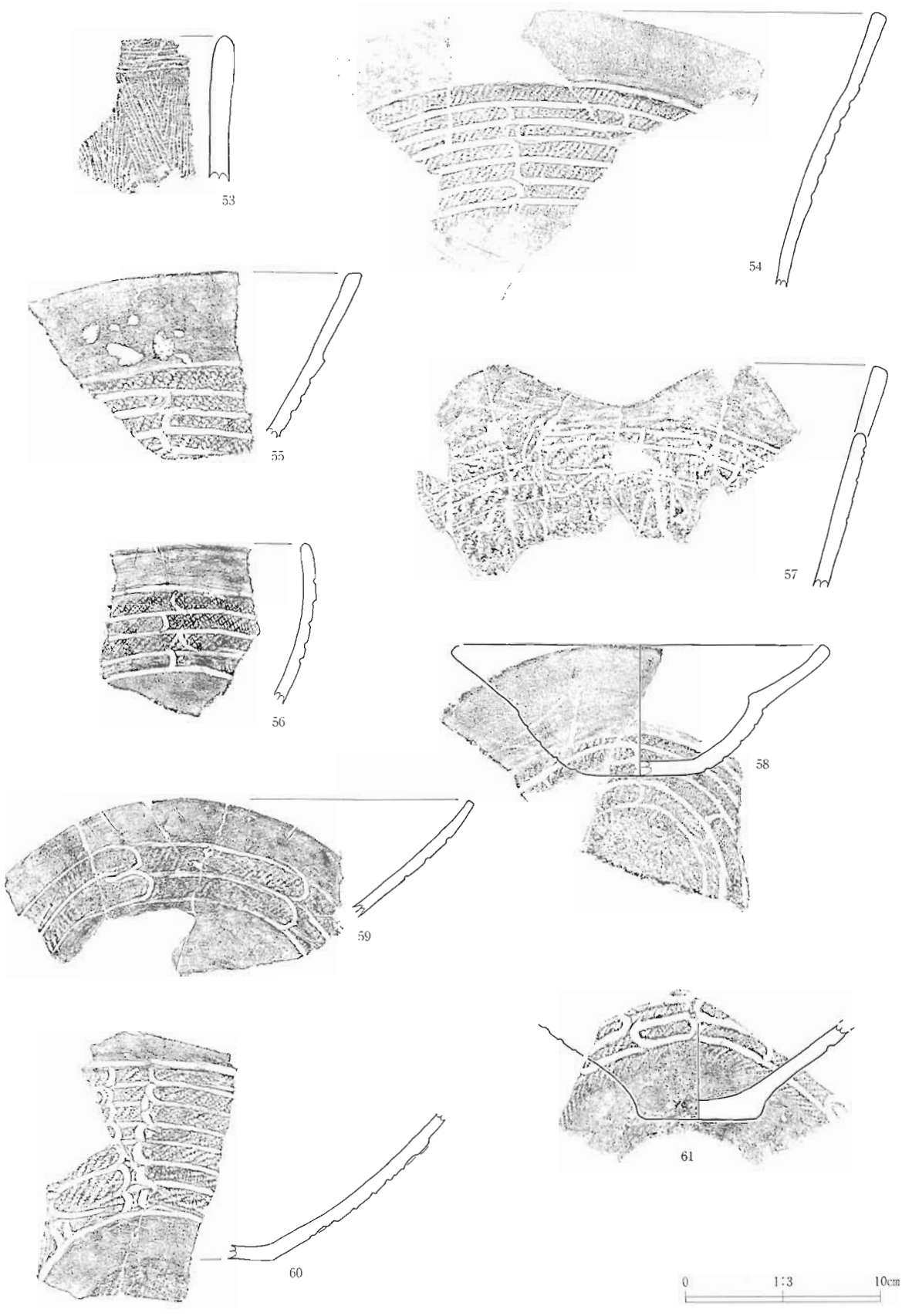
第36図　9・11号竪穴住居跡・1号住居状遺構出土遺物(1)



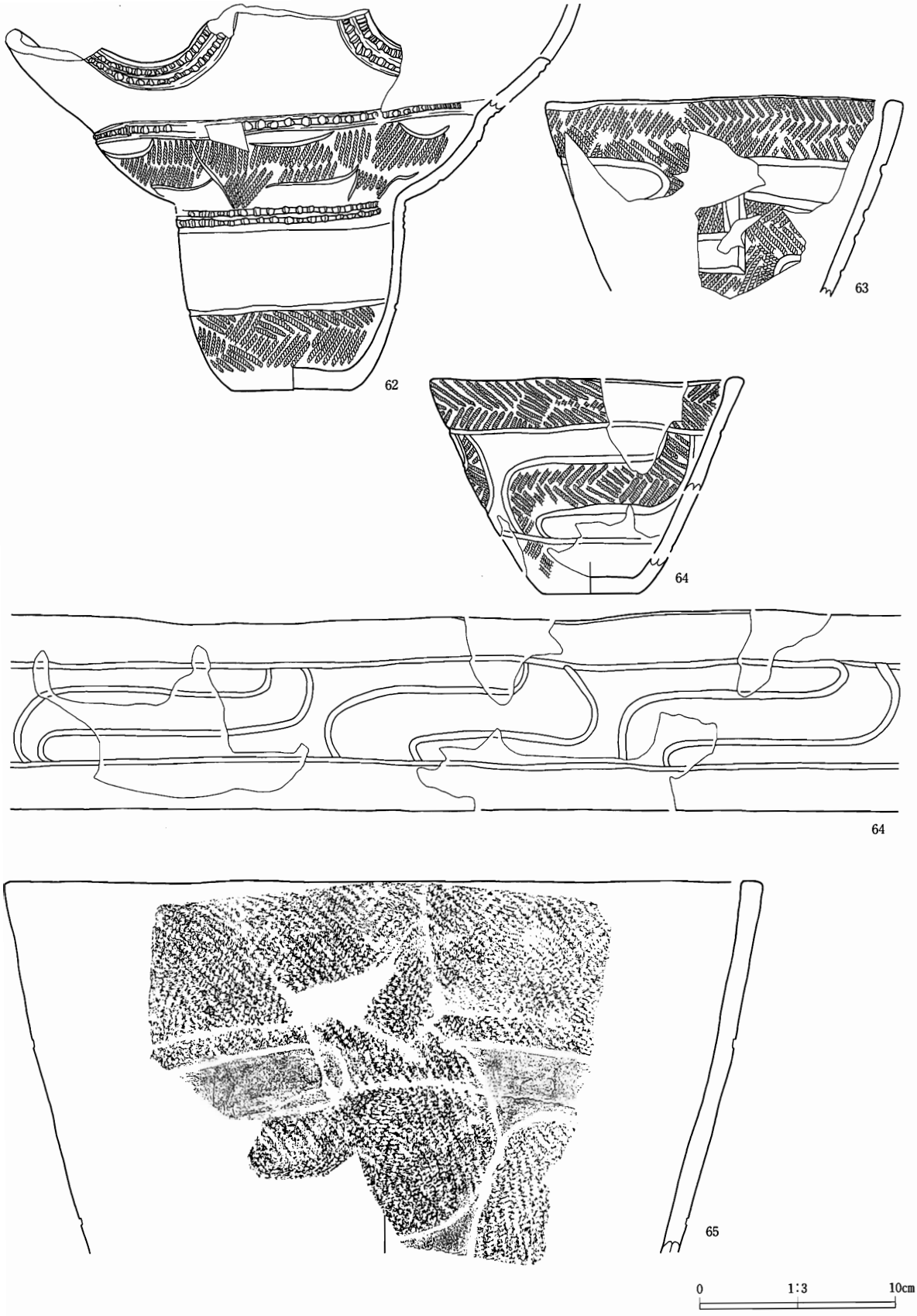
第37図　1号住居状遺構出土遺物(2)



第38図　1号住居状遺構出土遺物(3)

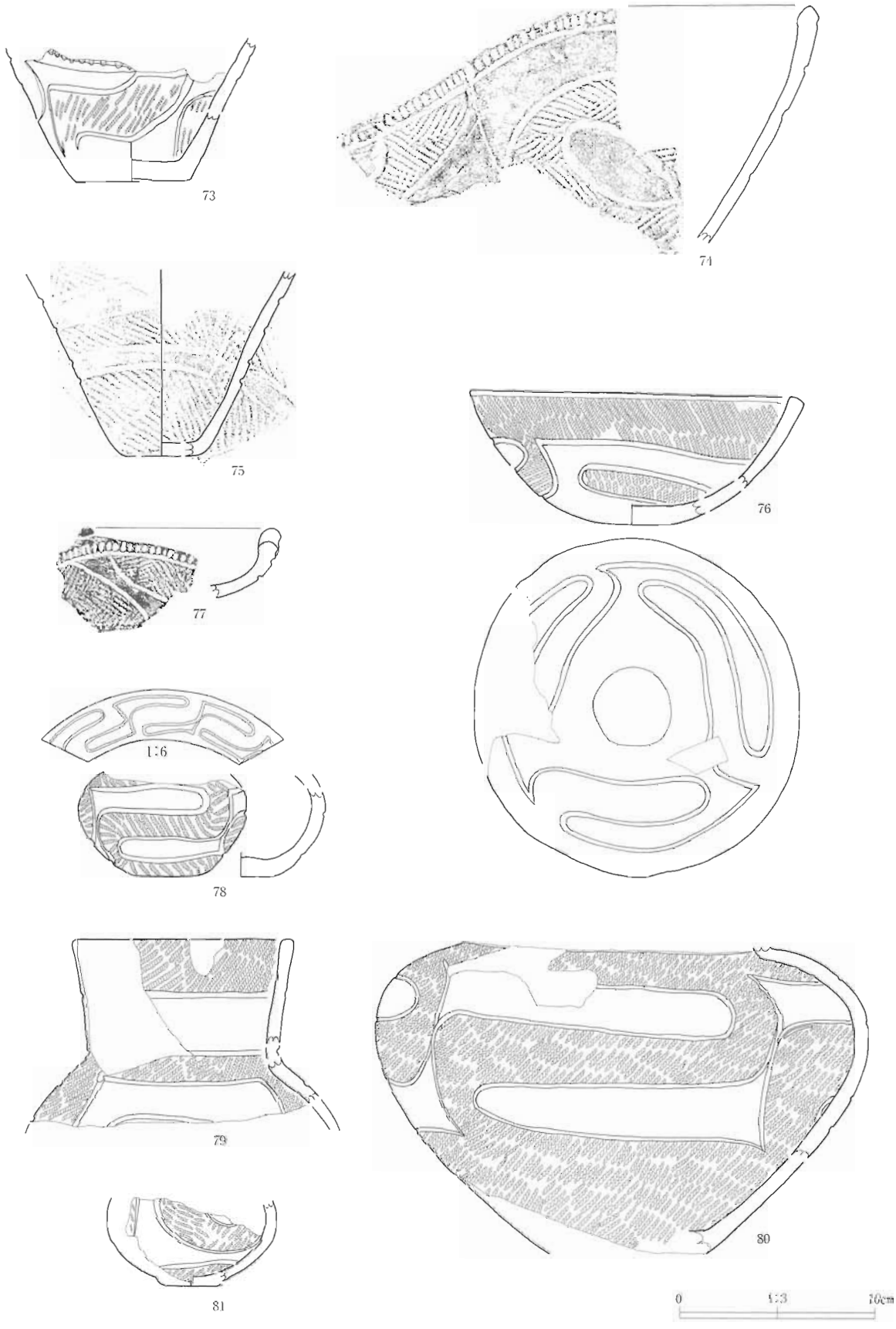


第39図　遺構外出土遺物(1)

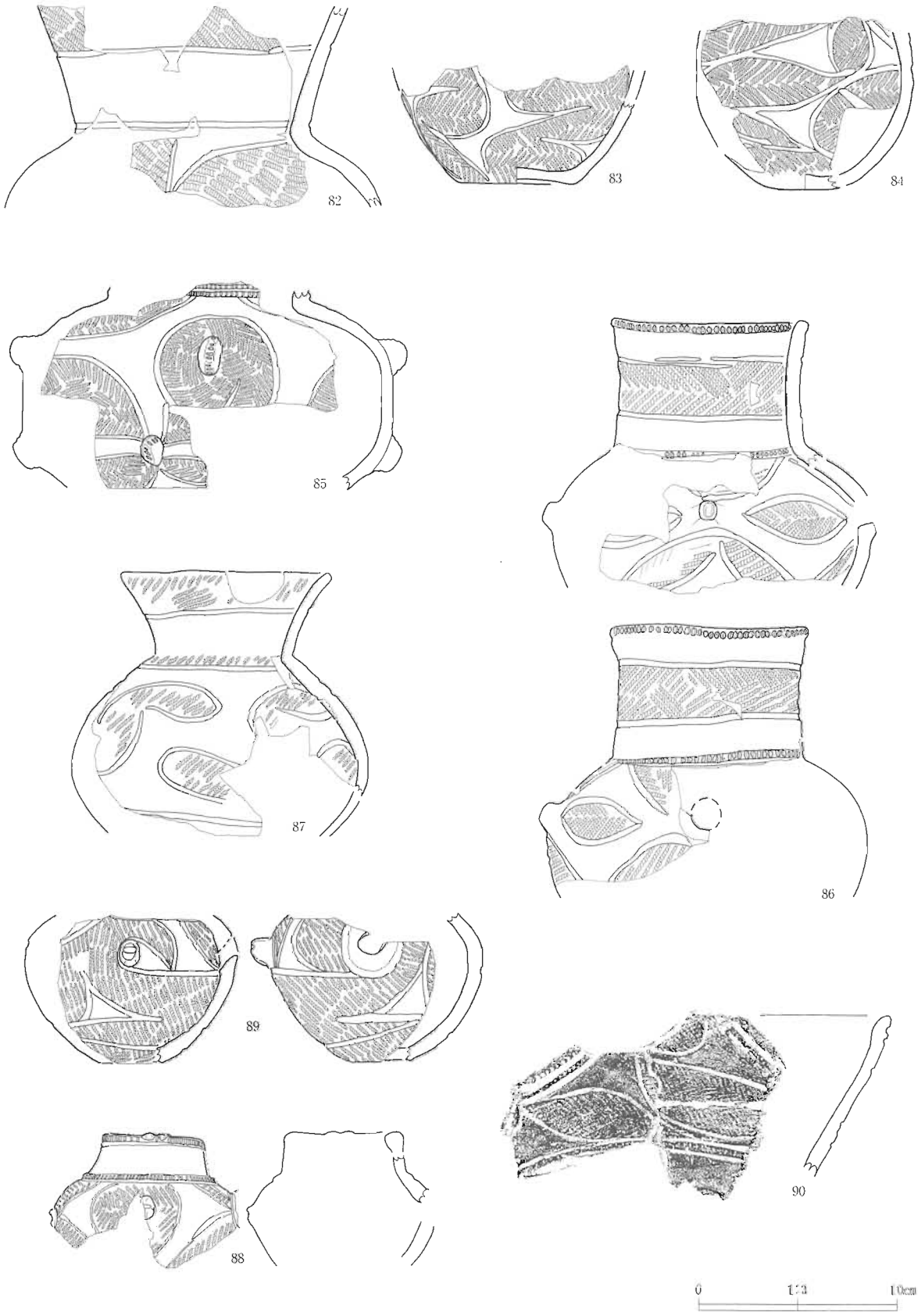


第40図　遺構外出土遺物(2)

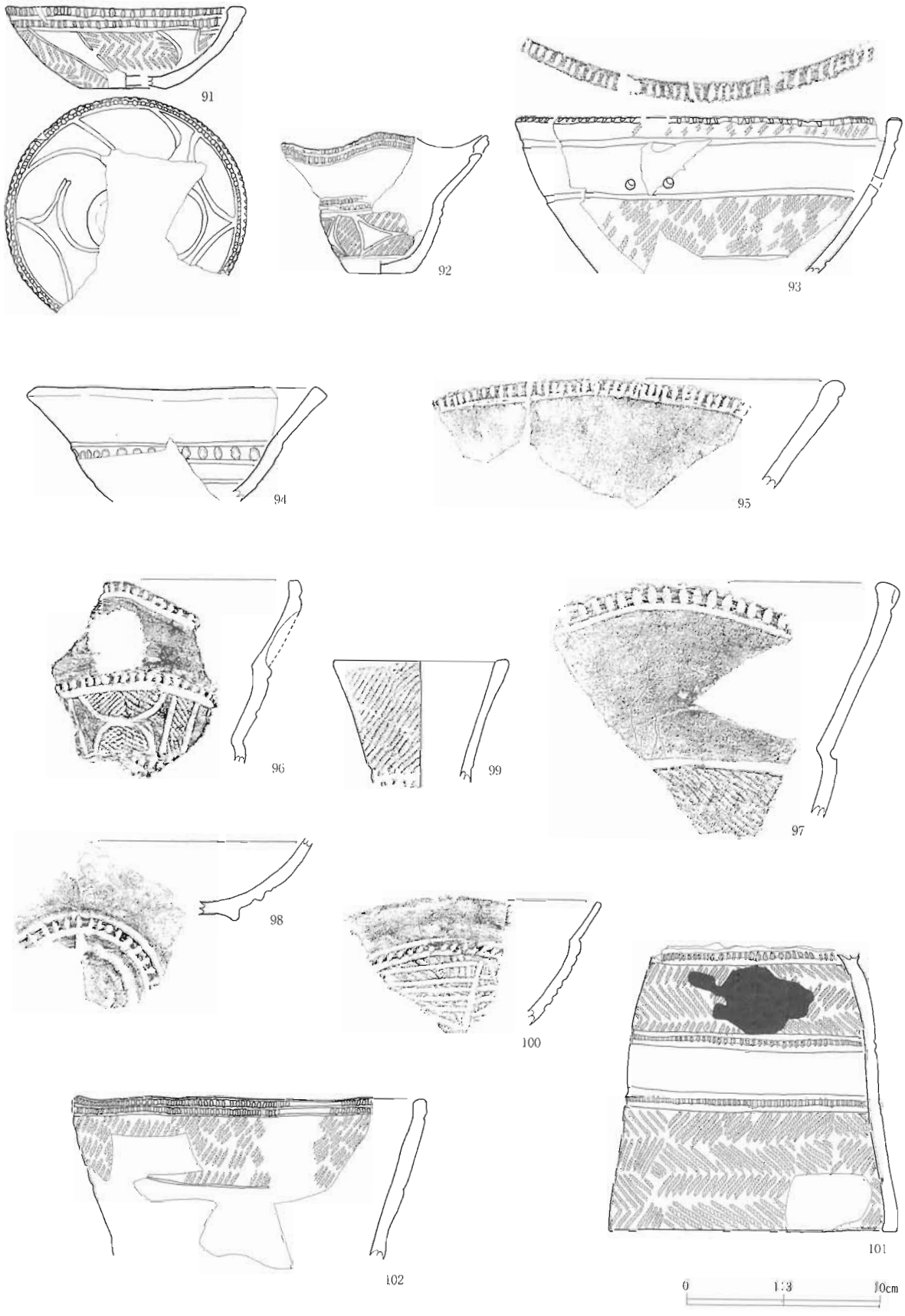
第41図　遺構外出土遺物(3)



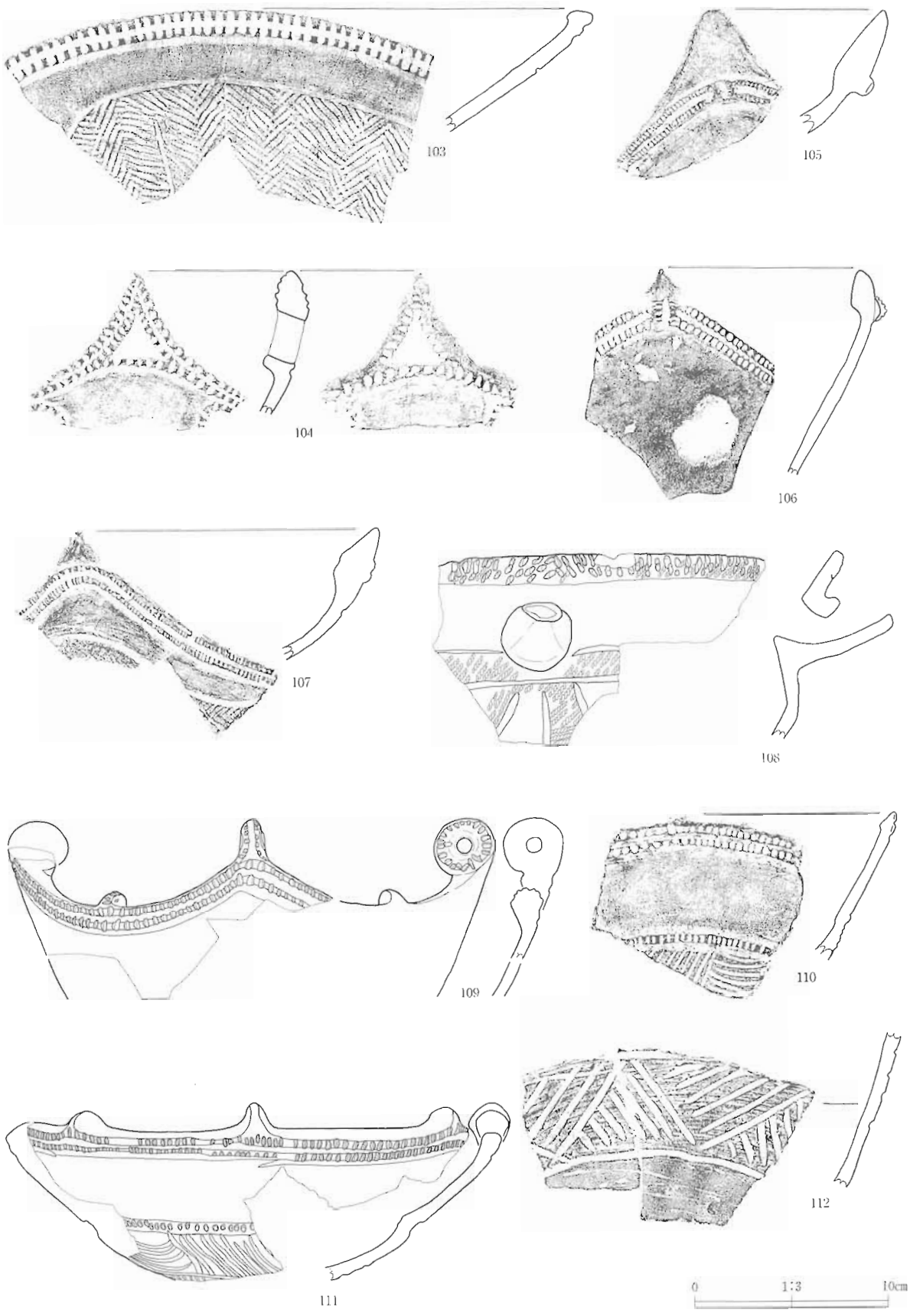
第42図　遺構外出土遺物(4)



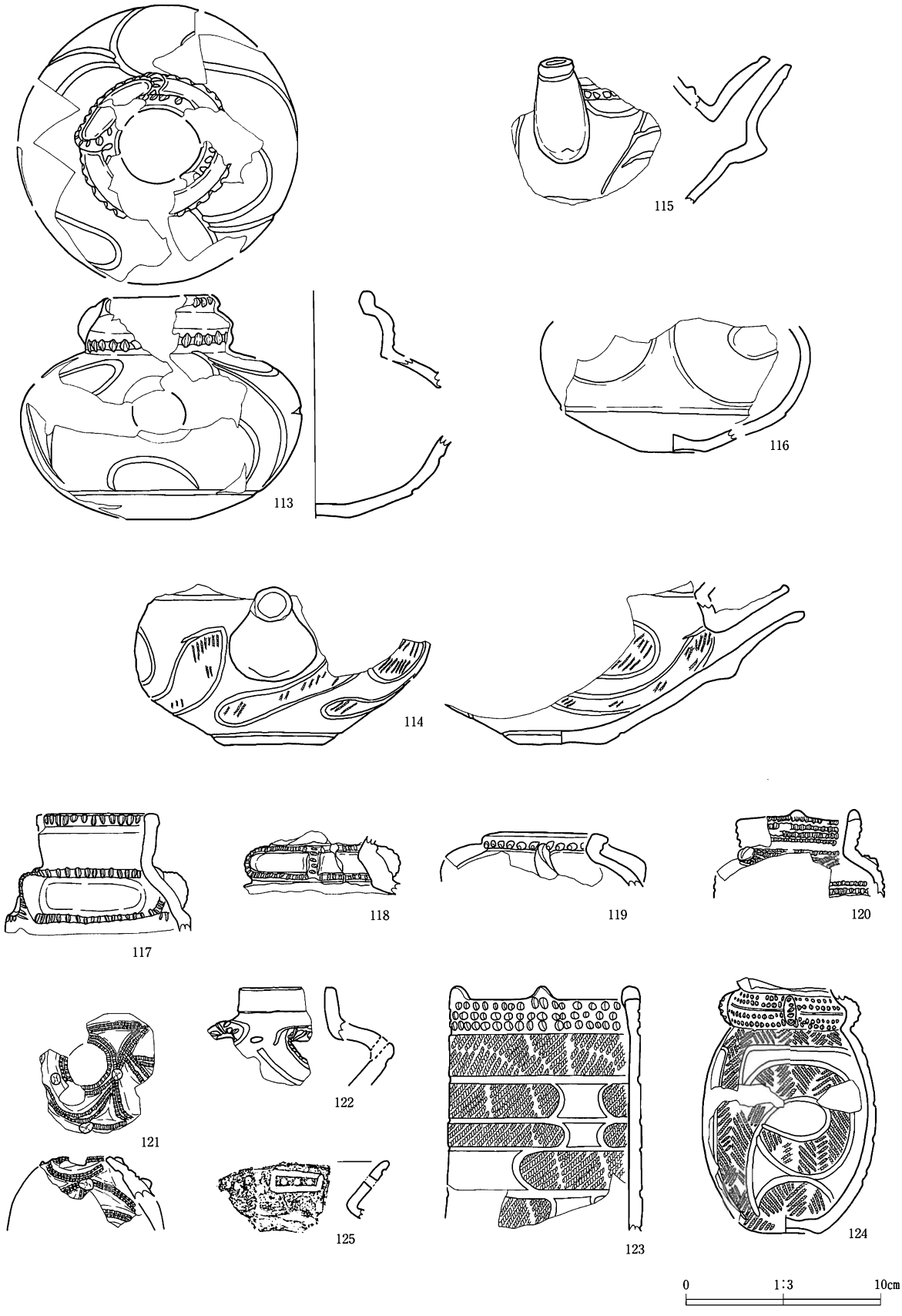
第43図　遺構外出土遺物(5)



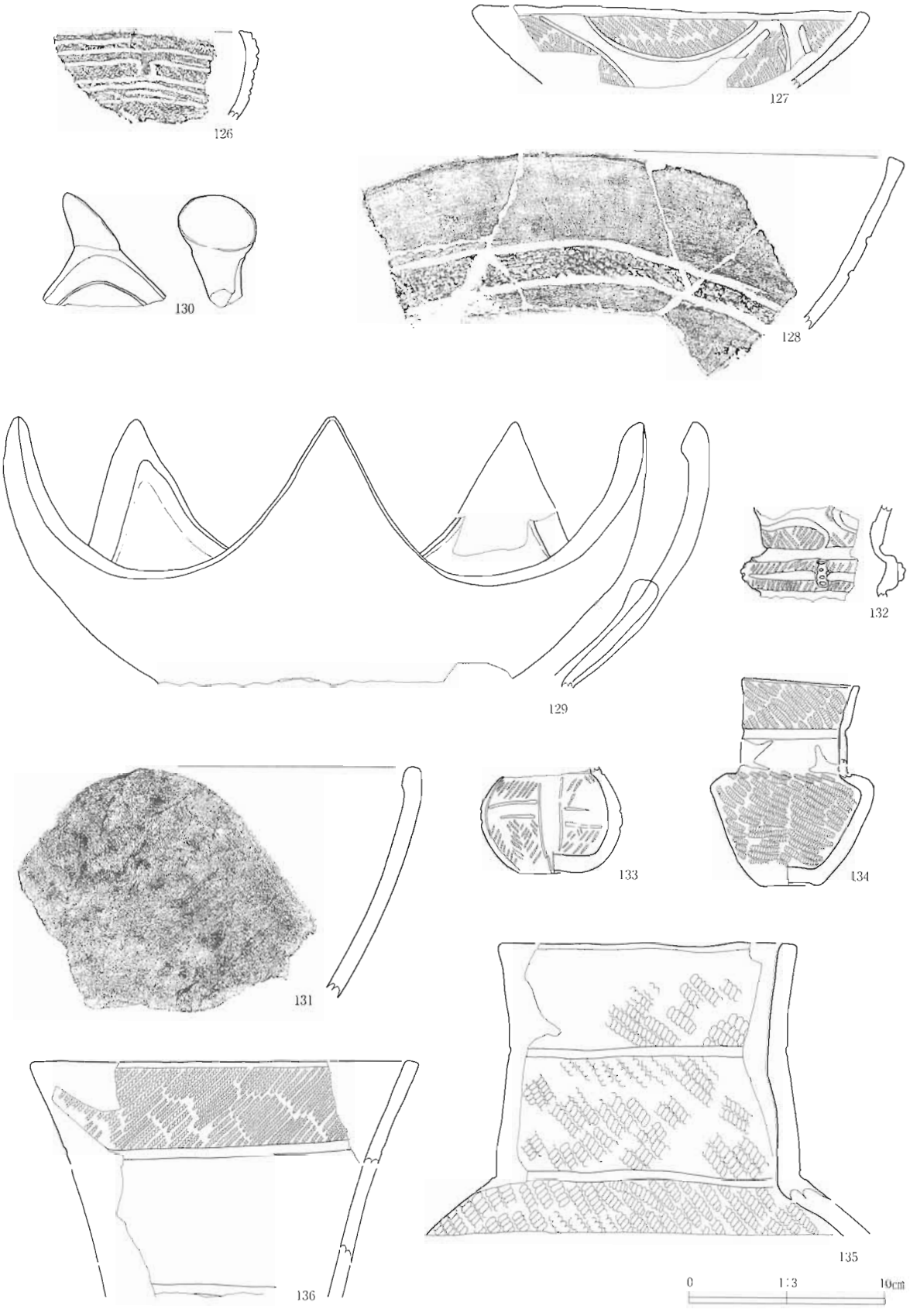
第44図　遺構外出土遺物(6)



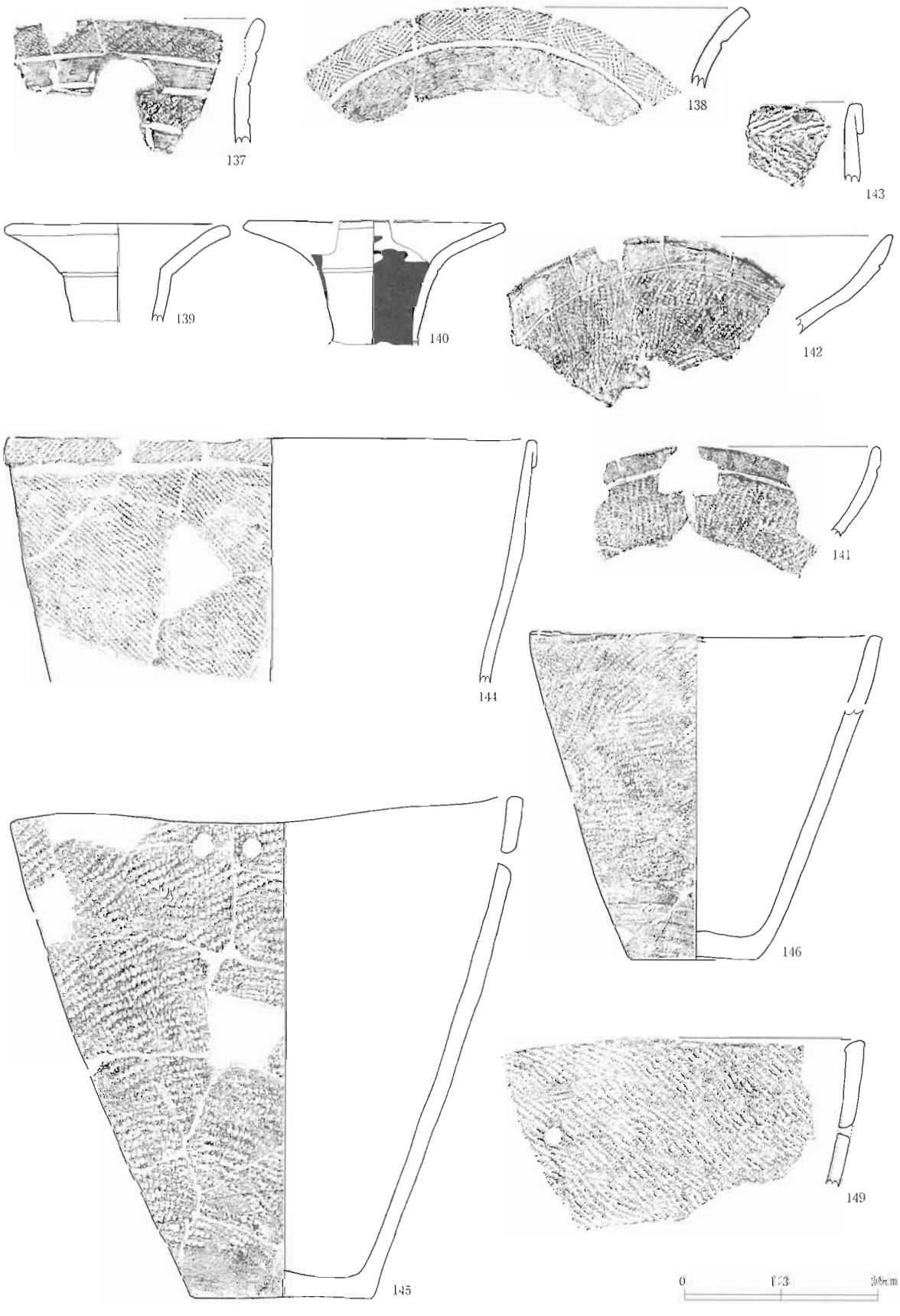
第45図　遺構外出土遺物(7)



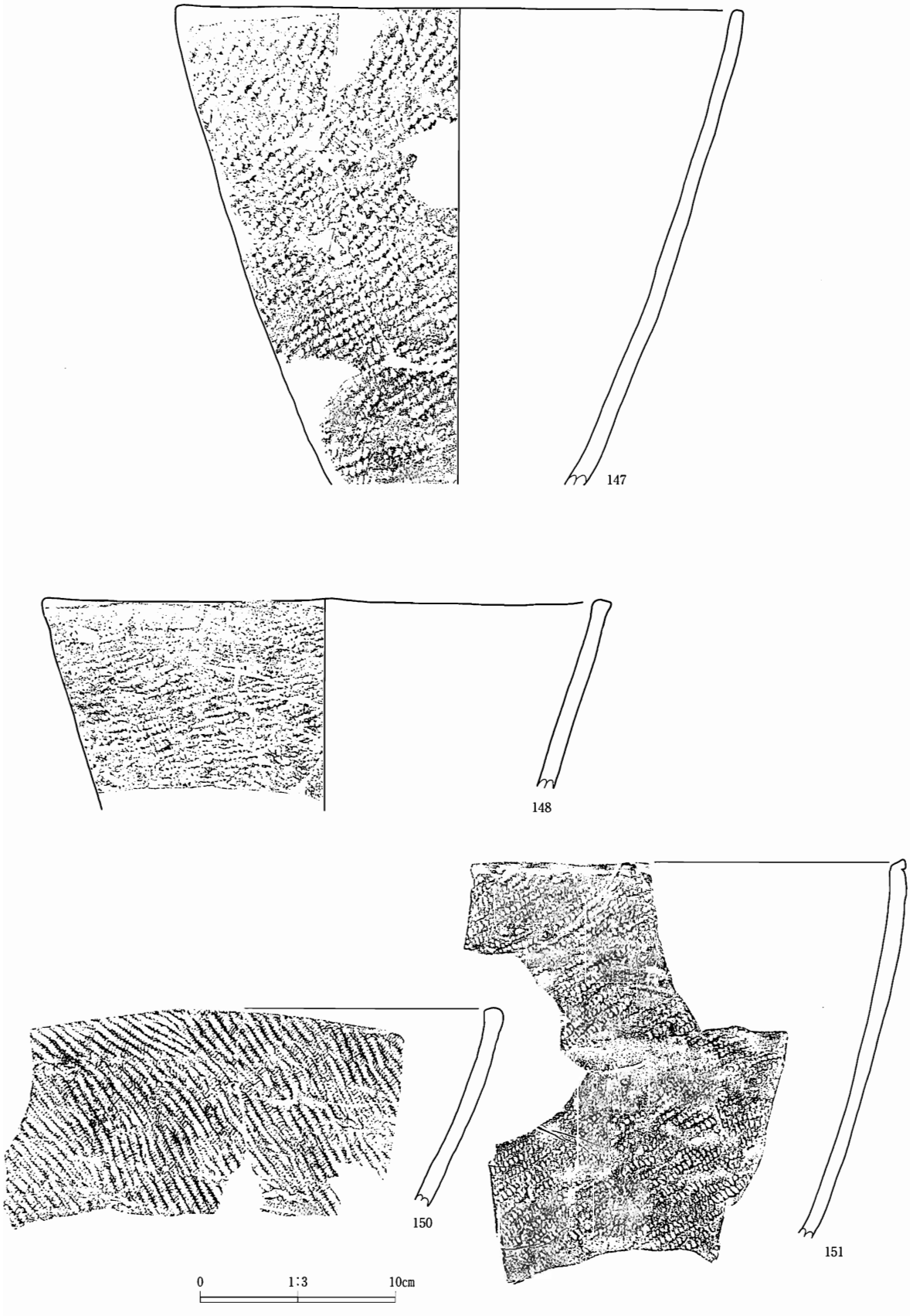
第46図　遺構外出土遺物(8)



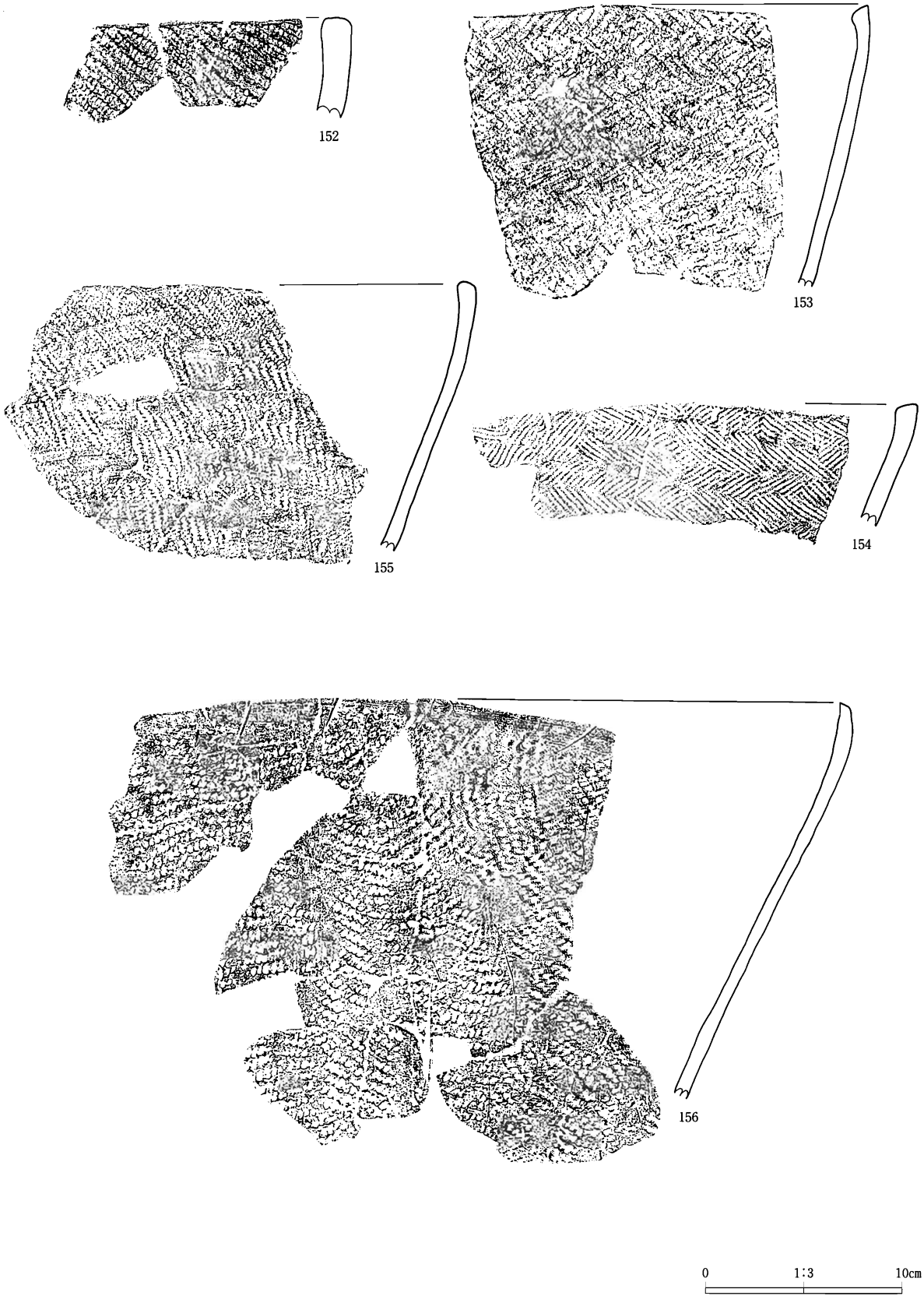
第47図　遺構外出土遺物(9)



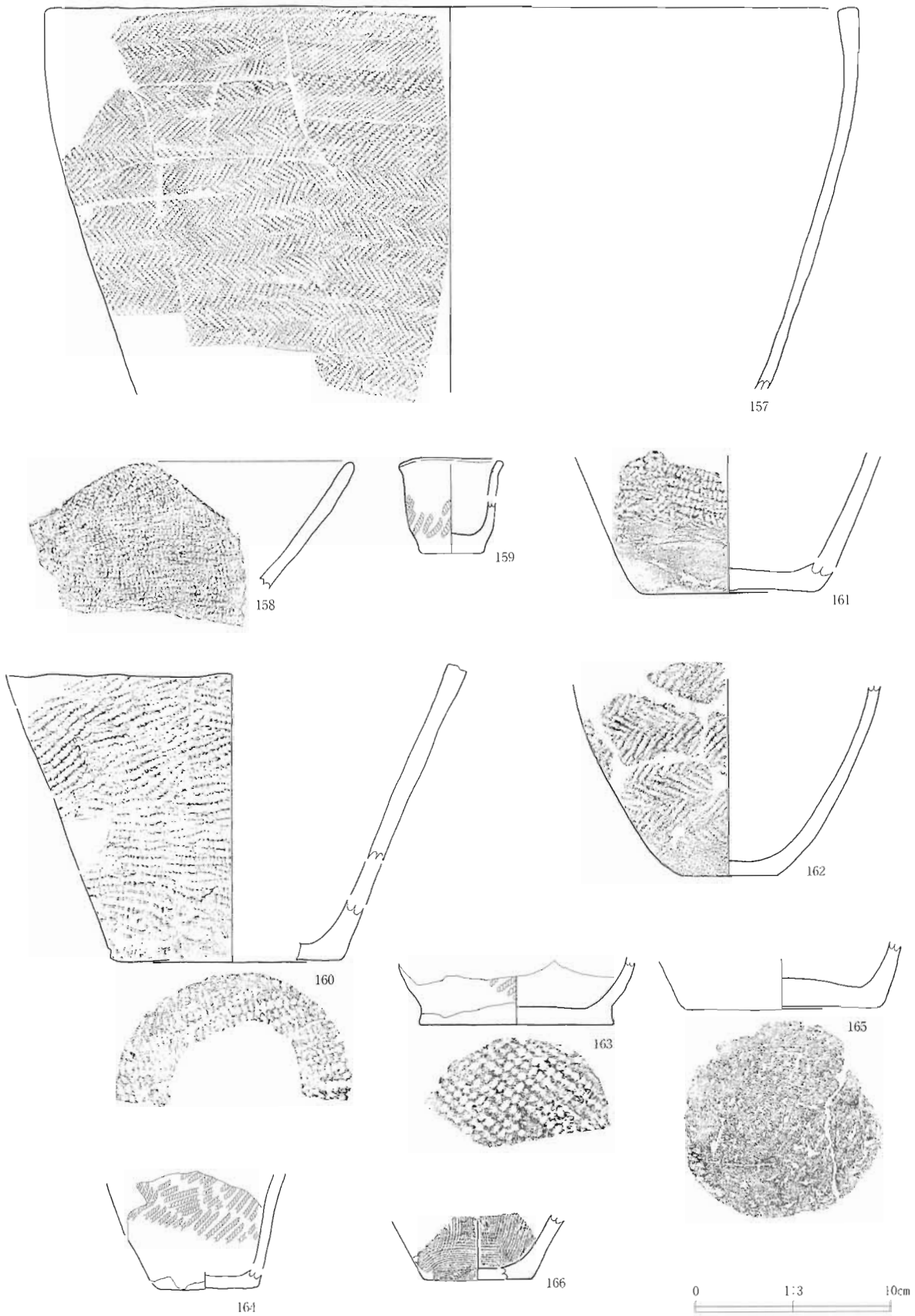
第48図　遺構外出土遺物(10)



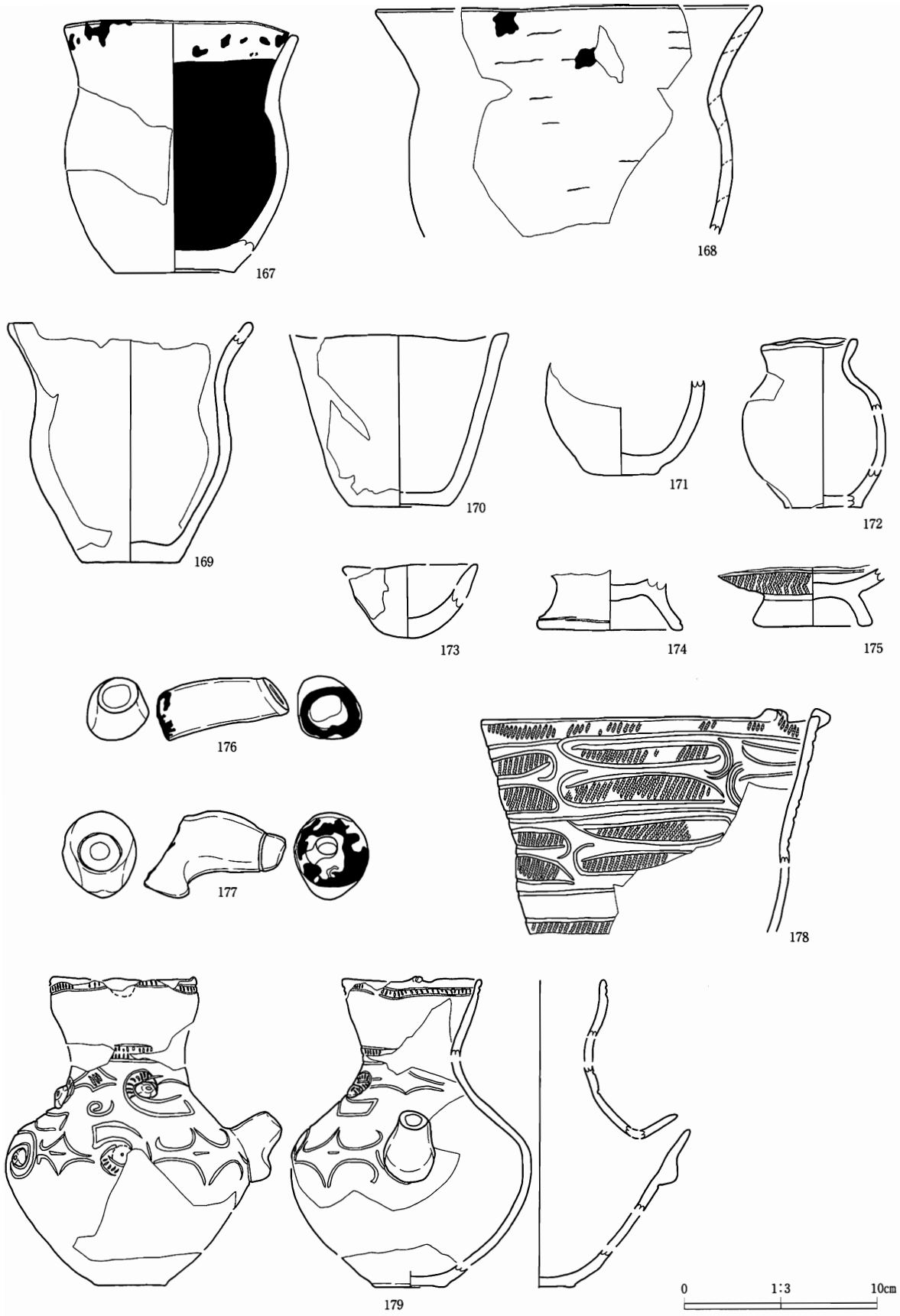
第49図　遺構外出土遺物(11)



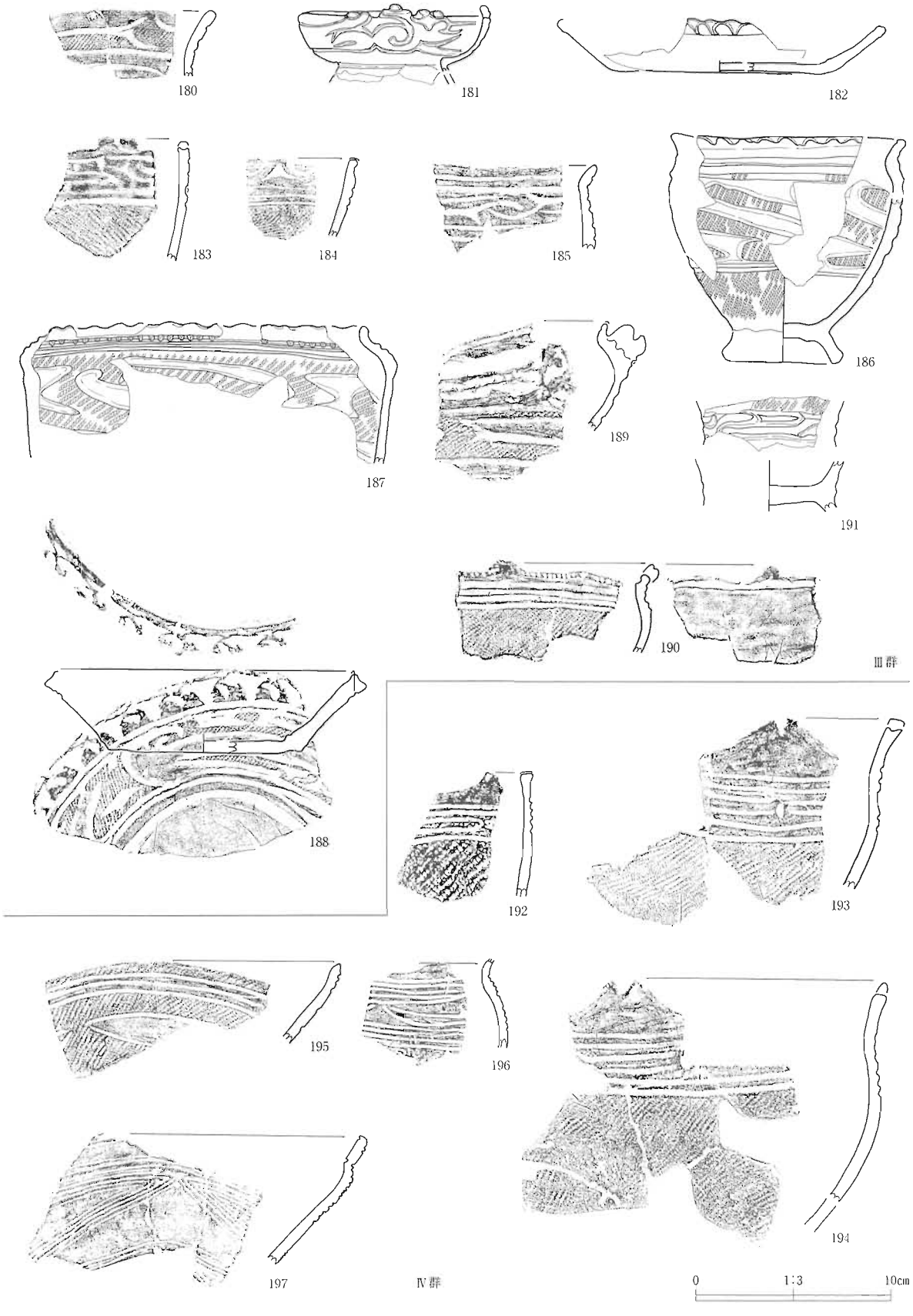
第50図　遺構外出土遺物(12)



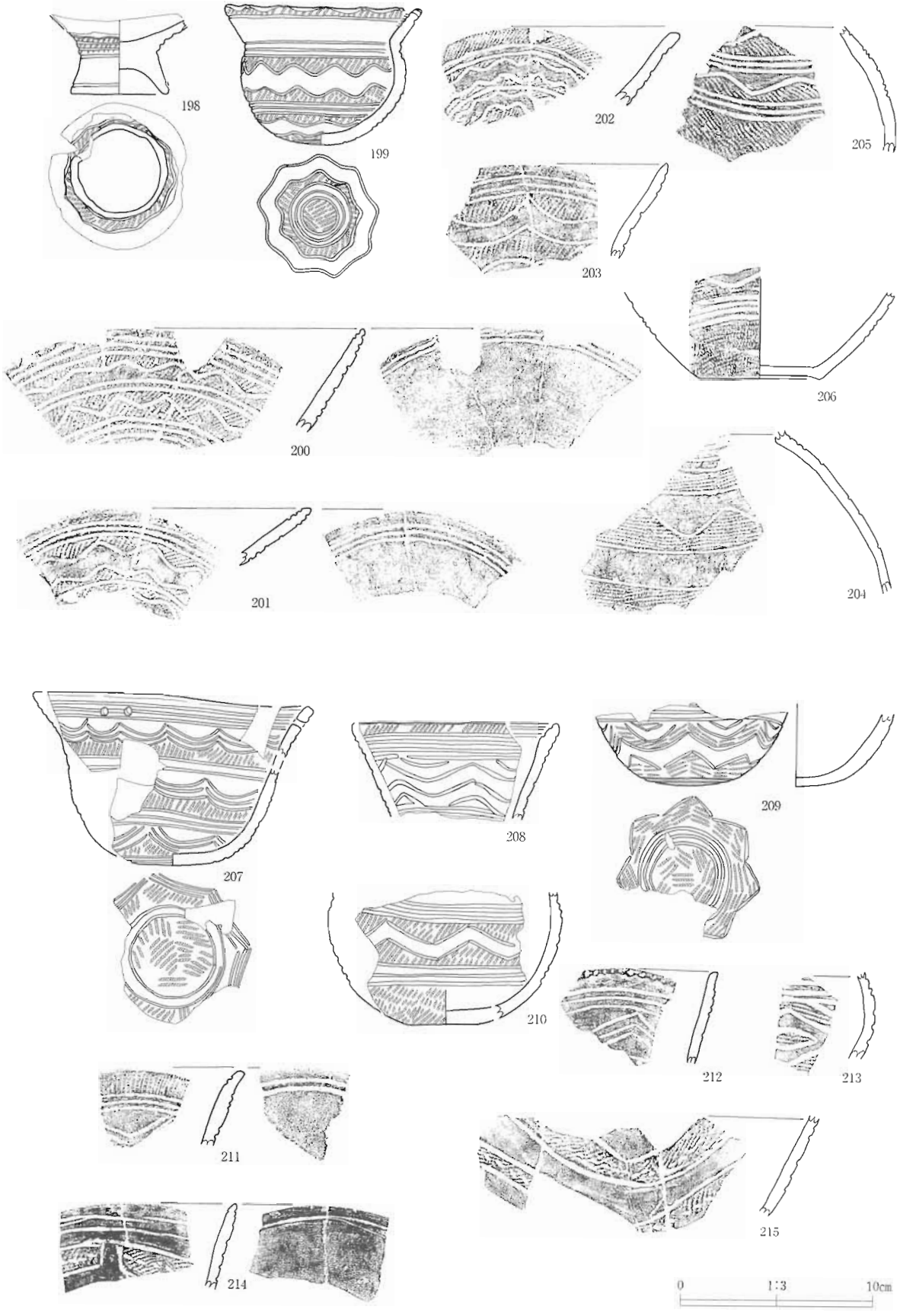
第51図　遺構外出土遺物(13)



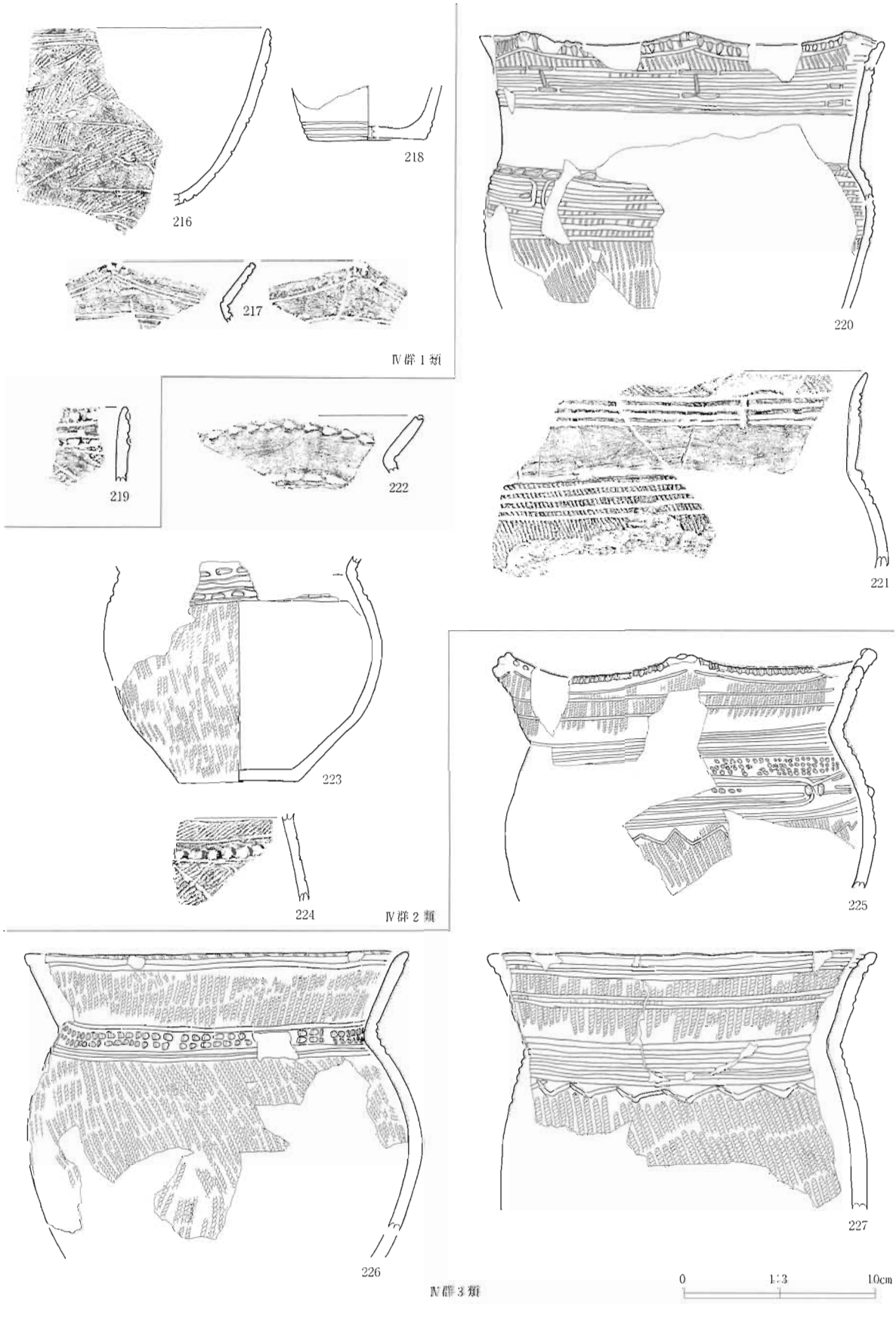
第52図　遺構外出土遺物(14)



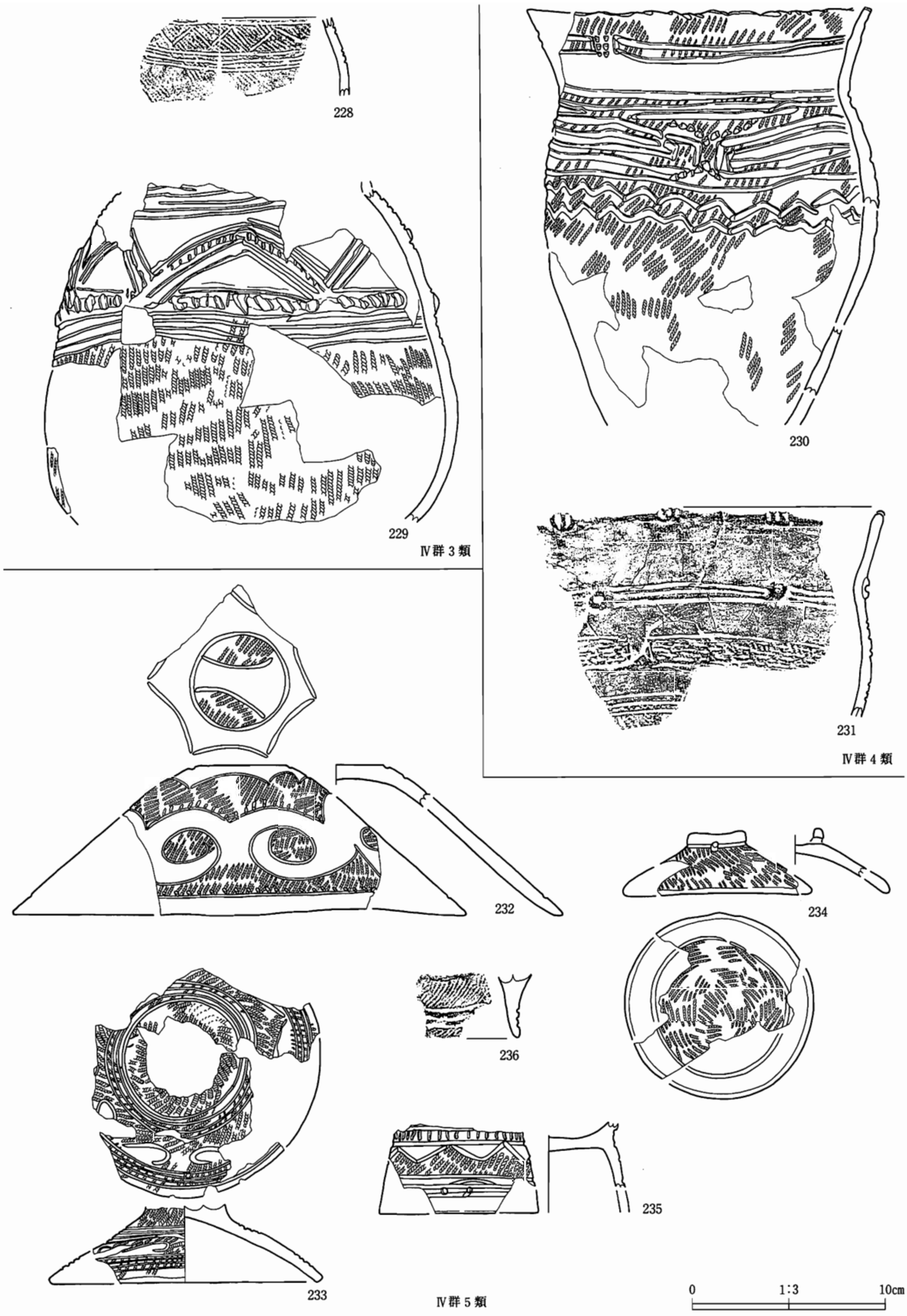
第53図　遺構外出土遺物(15)



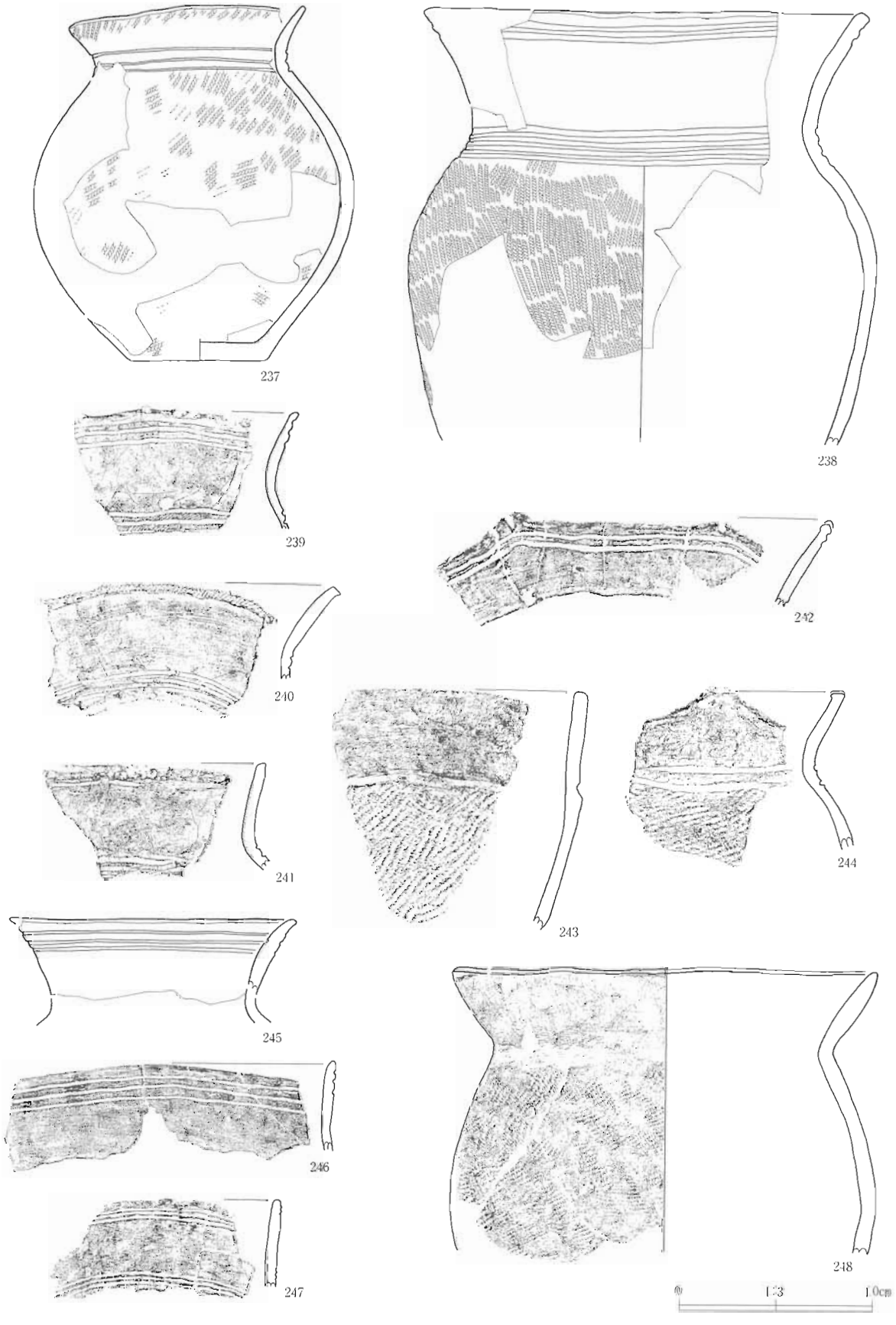
第54図　遺構外出土遺物(16)



第55図　遺構外出土遺物(17)

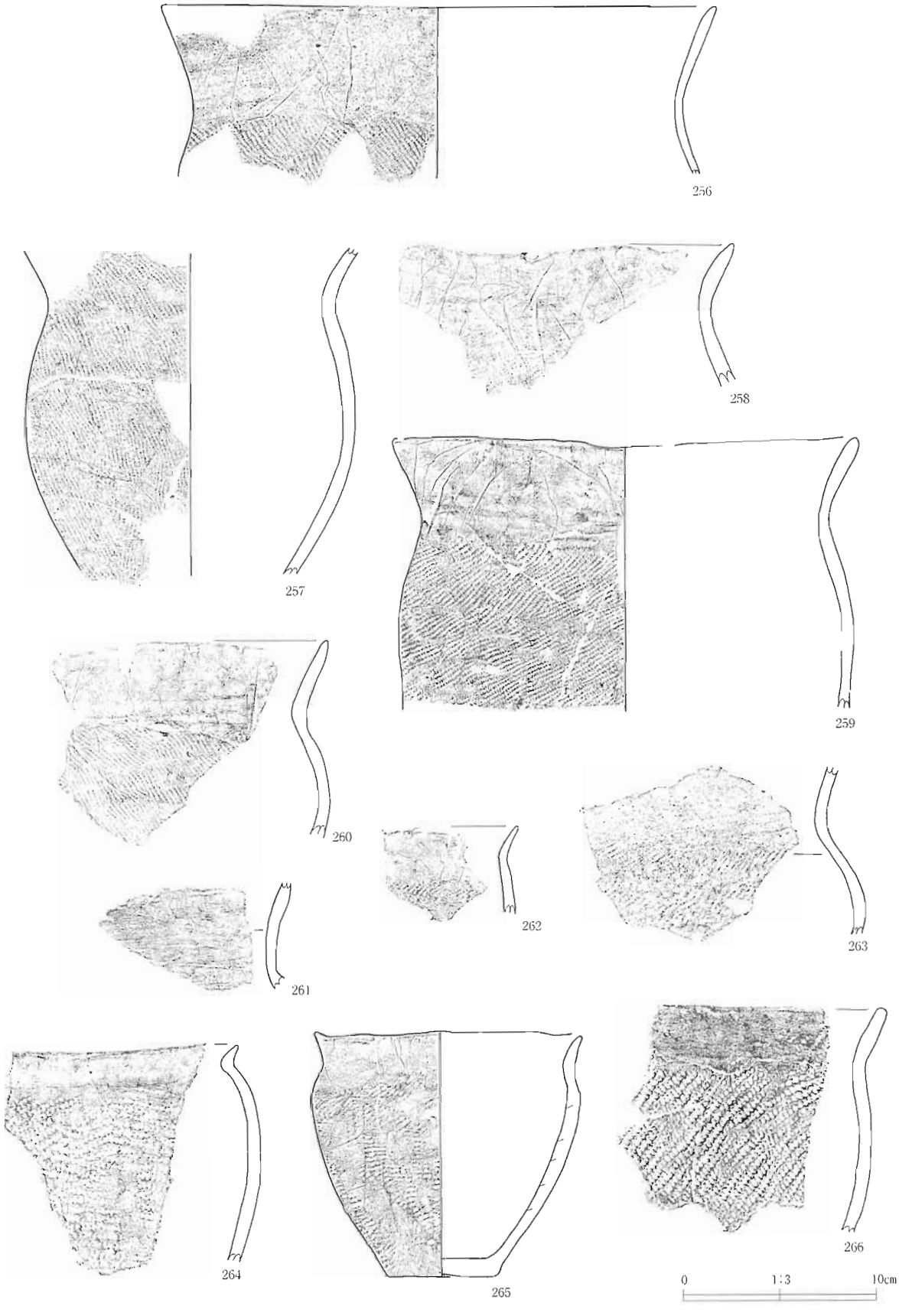


第56図　遺構外出土遺物(18)

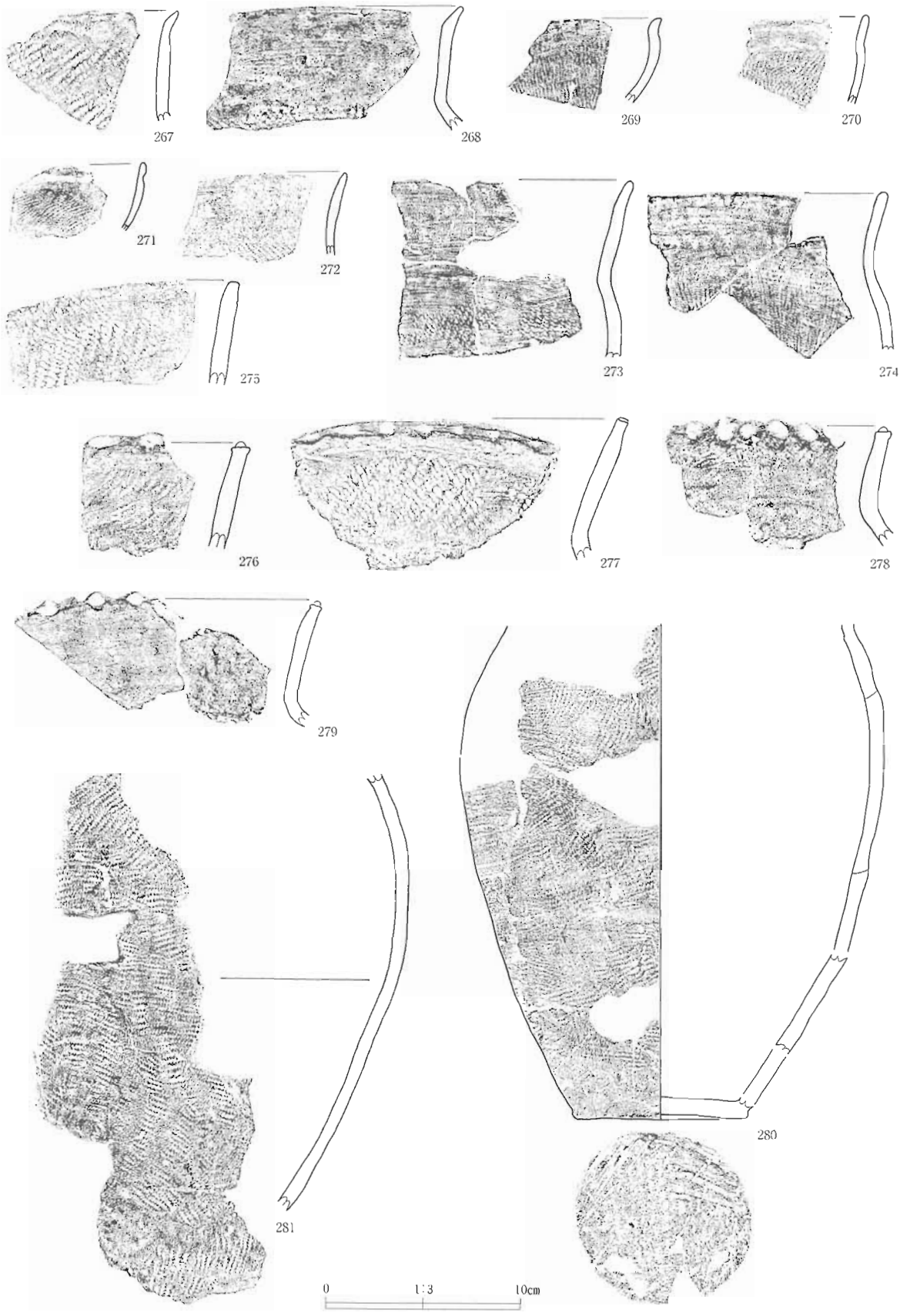


第57図　遺構外出土遺物(19)

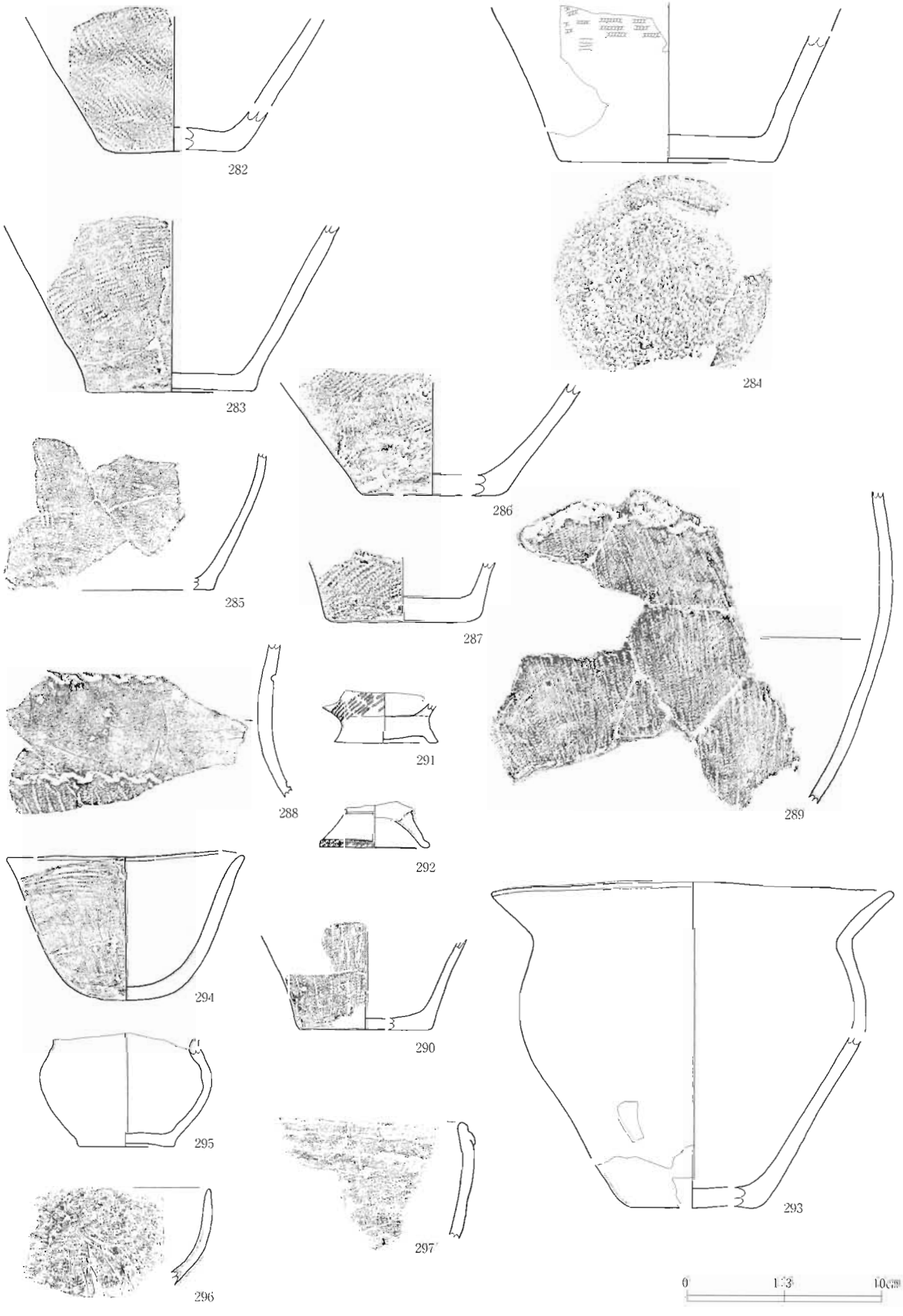
第58図　遺構外出土遺物(20)



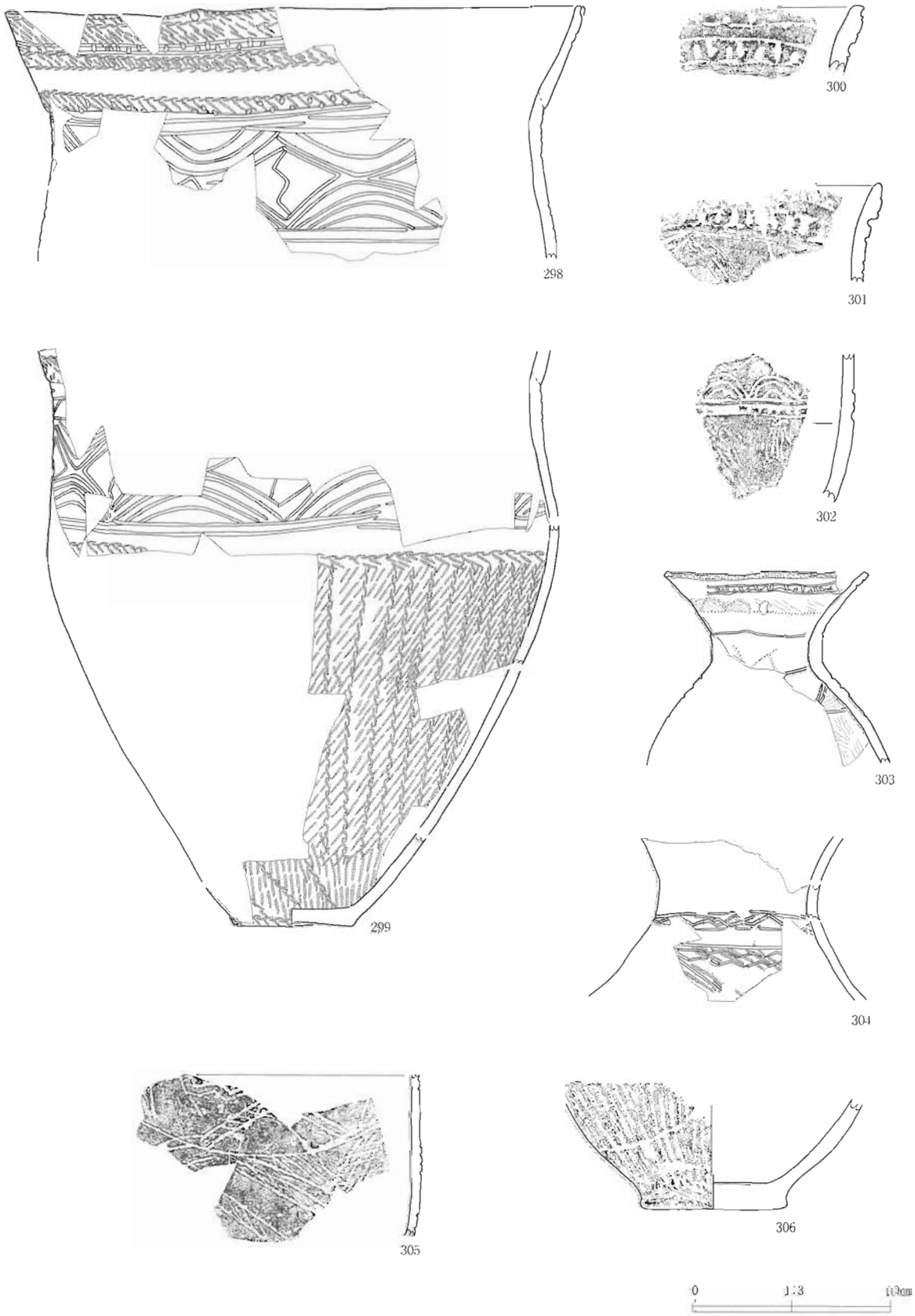
第59図　遺構外出土遺物(21)



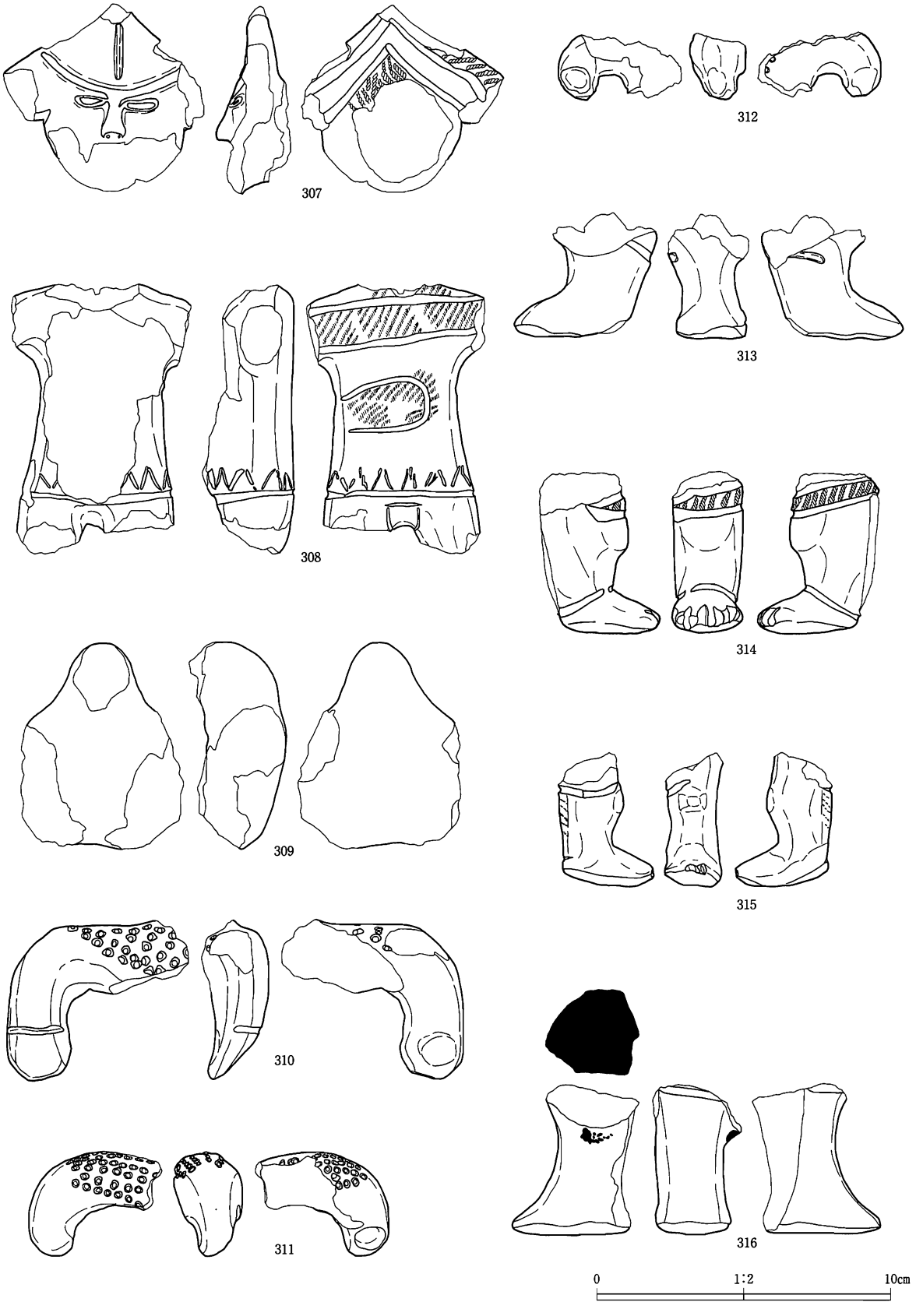
第60図　遺構外出土遺物(22)



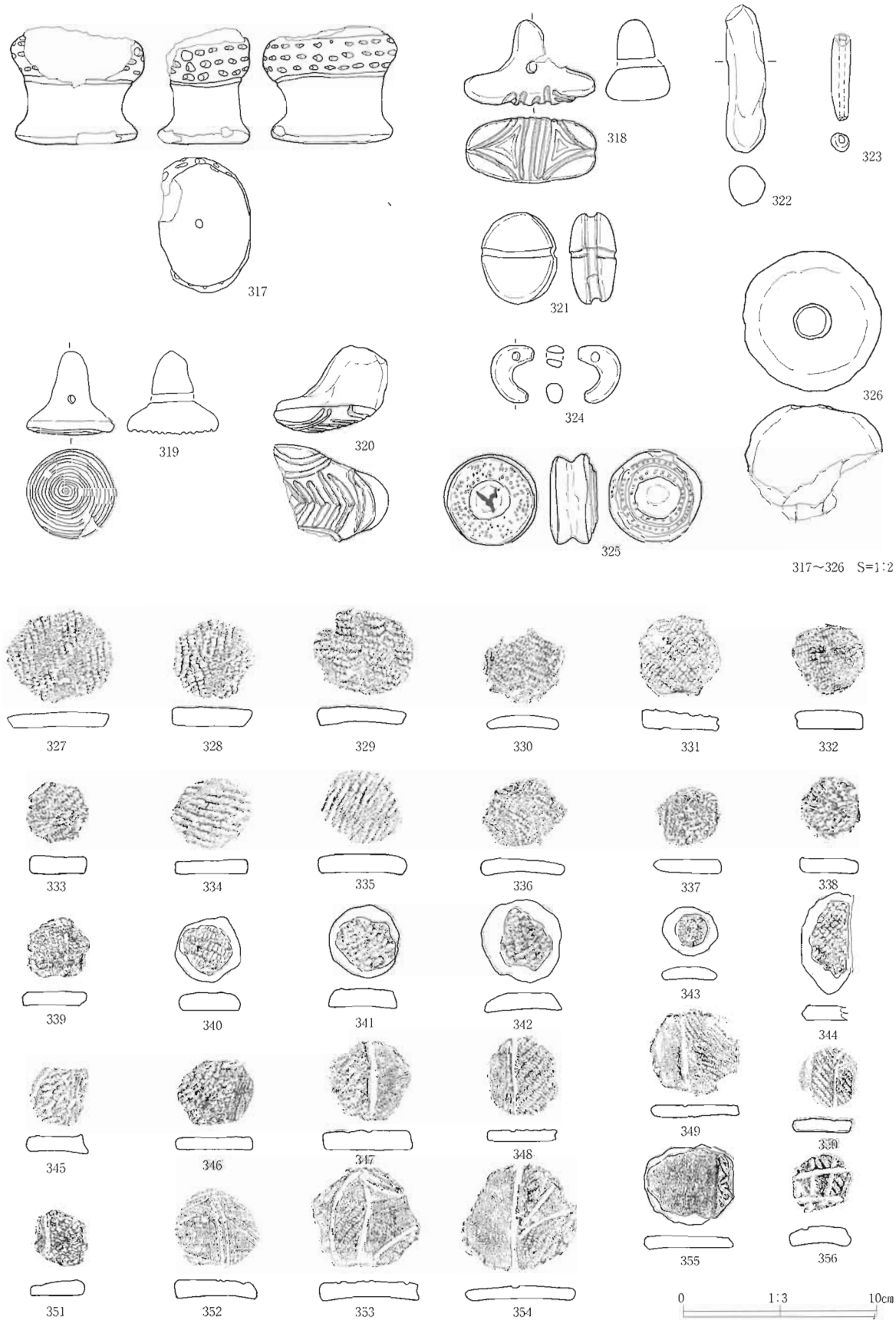
第61図　遺構外出土遺物(23)



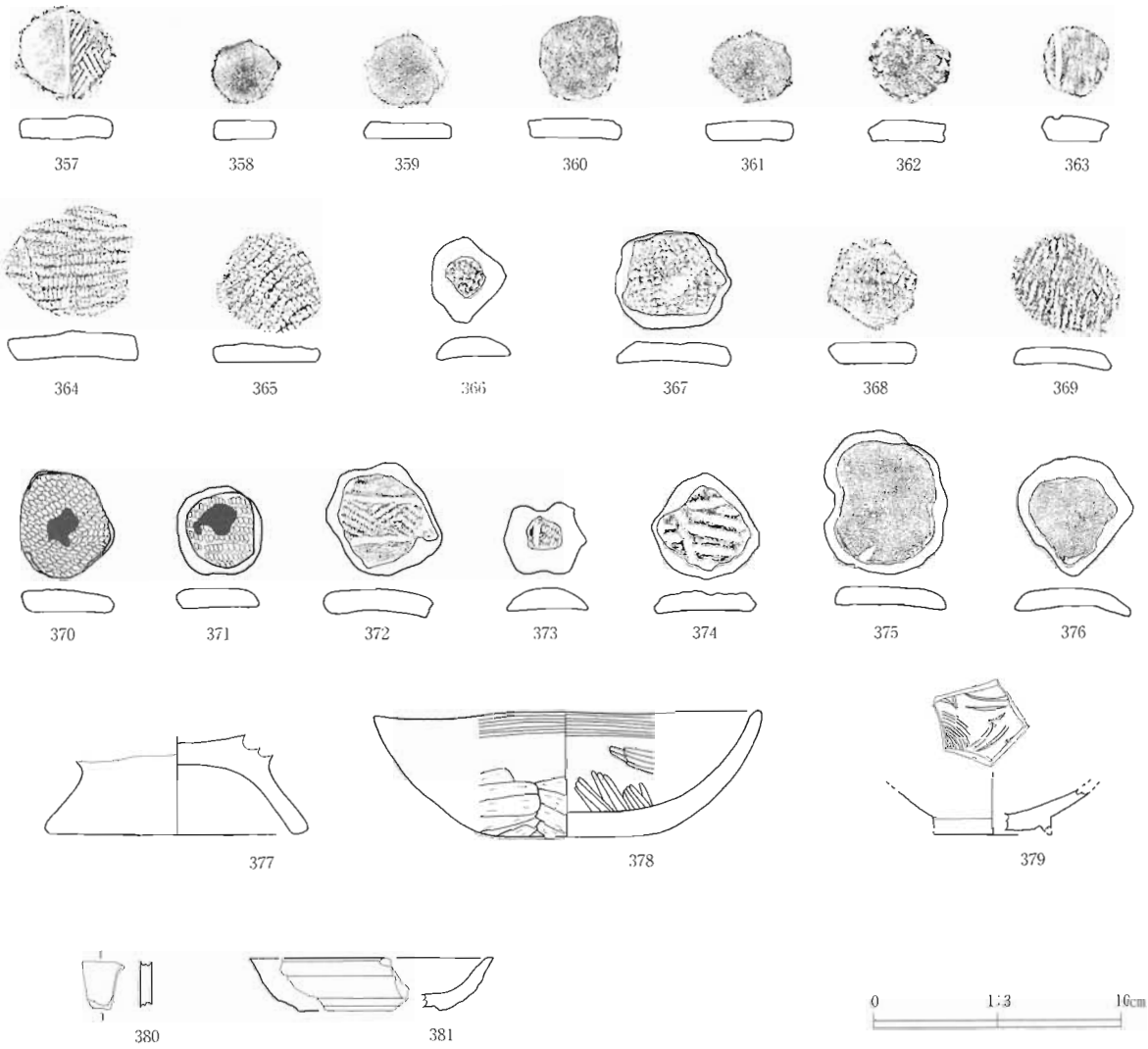
第62図　遺構外出土遺物(24)



第63図　遺構外出土遺物（土製品１）



第64図　遺構外出土遺物（土製品２）



第65図　遺構外出土遺物（土製品３・その他）

5．石器・石製品について

石器・石製品として、遺構内外含め447点を登録し、221点を掲載・記載した。おもな内訳は、石鏃32点、石錐10点、石匙７点、掻・削器５点、異形石器２点、石篦１点、石核３点、磨製石斧17点、打製石斧４点、石錘87点、敲石４点、磨石15点、凹石17点、石棒２点、勾玉１点、玉類１点である。

掲載基準は、いわゆる定型石器と呼ばれるもの、使用痕が明確に認められるものについて実測・掲載した。なお、定型石器の中で、剥離調整が粗く使用痕跡が明確に認められなかったもの、また、他に破損しているもの、出土地点が不明なものは割愛した。石錘については、他の石器中で出土数が多いことから、石質・グリッド・剥離調整に偏りがないように50％の実測掲載をするように務めた。実際は時間的都合により30％弱にとどまった。

これらの石器をⅢａ層（弥生中期～後期の土器出土）から出土したものとⅢｂ層（縄文後期中葉～後葉）から出土したものに区分した。各層内で器種ごとに掲載・記載した。なお､2号竪穴住居跡の床面と想定できる面で出土したものについても、炉の形態から、縄文時代後期中葉～後葉の時期以降と考え、Ⅲａ層の枠内で掲載・記載した。なお、石錘については、Ⅲａ層から出土したものでも、縄文時代後期中葉～後葉のものと形態・製作技術が似ていると判断したものは、Ⅲｂ層の枠内で掲載・記載した。傾向として、石錘の数が非常に多いことが上げられる。

Ⅲａ層から出土した石器及び石製品

石鏃（第66図29～39、写真図版60）

扁平で左右対称、尖頭部とそれより幅の広い基部を有する小形の石器を石鏃とした。ほぼ全面（両面）に剥離調整が施される。茎の有無等により、１～３類に分類した。

１類：無茎のもの（29）

外形は尖頭部から基部にかけて、弧線状を呈する。基部は破損しているため、形態は不明である。石質は頁岩である。

２類：有茎のもの（30～38）

基部のかえしの形態によってさらに細分した。

ａ：直線的なもの（30･31）

鏃身は二等辺三角形状を呈する。

ｂ：鈍角なもの（32～38）

35の基部にアスファルトと思われる黒色の付着物が認められる。34はｂ類の中で比較的剥離調整が粗い。36は片面は全辺に剥離調整が施されるが、もう一方の面は、側縁部のみに剥離調整が施される。

３類：いわゆる「アメリカ式」に相当するもの（39）。１点のみの出土。珪質頁岩製である。

石錐（第66図40、写真図版60）

鋭い尖頭部を有し、孔を穿つのに用いられたと考えられる石器を石錐とした。40の１点である。ツマミを持たないもので、ほぼ全面に剥離調整が施される。

石篦（第66図41、写真図版60）

１点のみの出土である。ほぼ全側縁に両面或いは片面調整が施され、平面形が篦状を呈する石器を石篦とした。石質は硬質頁岩で、両側縁に急斜度の両面調整が施されている。長さ3.9cm・幅1.3cmと小さく、厚さ0.8cmと平面形に対して厚手である。形態は石錐に似るが、先端部の調整が尖化ではなく平坦化を意図したも

のであり、石錐とは異なると考えた。

石斧（第66図42～44、写真図版60･61）

調整方法の違いから1･2類に分類している。

１類：細かい敲打・研磨によって器形・刃部が成形されるもの（42･43）

いわゆる磨製石斧である。42は両側縁基部に敲打痕を残す。他の面は研磨調整が施されている。43は、中央部から先端部にかけて、研磨調整が施され、他は自然面が残置する。

２類：剥離調整によって成形されるもの（44）

いわゆる打製石斧である。44は剥離調整は３辺の側縁部を中心にほぼ全面に剥離調整が施される。石質は本遺跡で、１点のみの「めのう」である。

石錘（第66図45～48、写真図版61）

一端部の両面（45）と一端部片面（46）に剥離調整が施されるものがそれぞれある。46は敲打痕も認められる。石錘の未製品の可能性も考えられる。47は両端部と長軸頂部に敲打痕と剥離調整が施される。

48は四辺の側縁部すべてに敲打痕による調整が施される。47･48敲石としての性格も考えられる。

磨石（第66・67図49・50、写真図版61・62）

平坦面に磨痕がみられるものである。

凹石（第67図51～55、写真図版62）

礫に凹みがみられるものを凹石とした。51～53は礫の平坦面に凹みがみられるもので、凹部は概ね平坦面中央部に1面につき1ヶ所あり、両面にみられる。54～55は、平坦面及び側面に凹みが認められる。55は、平坦面・側面の中央部からはずれる位置に凹みが施され、それぞれの面に2ヶ所みられる。55は他のものと比較して凹みが深い。

石錘？十敲石（第67図56、写真図版63）

56は、平坦面中央部に敲打痕と側縁部に剥離調整が施される。

側縁部に溝を有す石器もしくは石製品（第67図57、写真図版63）

本遺跡で、１点のみの出土である。石錘的な用途もしくはペンダント的な用途で使用されたと推測されるが、性格を判断することは出来なかった。

飾り玉（第67図58、写真図版63）

本遺跡で、１点のみの出土である。

Ⅲｂ層から出土した石器及び石製品

石鏃（第68図59～79、写真図版63）

扁平で左右対称、尖頭部とそれより幅の広い基部を有する小形の石器を石鏃とした。石材は全て頁岩である。茎の有無等により１～３類に分類した。

１類：無茎のもの（59）

基部が丸みを帯びる円基鏃に属する。

２類：有茎のもの（60～77）

基部のかえしの形態によってさらに細分した。

ａ：直線的なもの（60～65）。65は本遺跡出土石鏃中唯一細身である。鏃身が正三角形状のもの（60～62）、二等辺三角形状のもの（63～65）がある。なお、61と63にはアスファルトと思われる黒色付着物がみられる。

b：鈍角なもの（66～77）

鏃身が正三角形状のもの（66･67）、二等辺三角形状のもの（68～77）がある。

3類：その他

基部が破損しているもの（78）、また、未製品と思われるもの（79）。78は破損しているが、本遺跡で出土した石鏃の中で、大型のものと推測される。79は完形のものである。形状は他の石鏃と比較すると異形で、剥離調整も粗い。未製品の可能性も考えられる。

石錐（第68図80～86、写真図版63）

鋭い尖頭部を有し、孔を穿つのに用いられたと考えられるものを石錐とした。すべて側縁全部に両面調整が施される。円柱形（葉巻形）のツマミを持つもの（80～82）とツマミを持たないもの（83～86）がある。

石匙（第68・68図87～91、写真図版63・64）

一端部に両側縁から抉りを入れることによってつまみ部を作出し、他側縁に刃部を有する石器である。主な剥離調整は、主に片面に施され、主に1辺の側縁部に刃部を持つ。縦型のもの（87・88）と横型のもの（89～91）がある。91は他の石器と比較して、剥離調整が粗い（未製品か）。

掻・削器類（第69図92・93、写真図版64）

定型的な形状を呈さず、側縁部1片もしくは1片に刃部を有するもの。

異型石器（第69図94・95、写真図版64）

両面・側縁部のすべてに剥離調整が施される。石錐と同様に尖頭部を有するが、孔を穿つのに用いられるほど石錐と比較して鋭くない。円形に剥離調整された部分は、スクレイパー的な用途を想定させるが、厚さは3～4㎜程度と薄く、掻く、削るという用途として使用した際、耐久性があるのか疑問がある。なお、94の石質は透明度のある黒曜石である。

石核（第69・70図96～98、写真図版64・65）

石核と思われるものは16点出土した。97・98は緑色頁岩、96は黒色頁岩である。96は、①打面形成→②剥片剥離→③再び打面形成或いは作業面に打面転移して剥片剥離、の②→③が繰り返し行われ全体が作業面となっており、球形状を呈する。一方、97・98は打面転移をほとんど行っておらず、このため礫面が広範囲に残置している。

石斧（第70・71図99～114、写真図版65・66）

調整方法の違いから1～3類に分類している。

1類：細かい剥離・敲打・研磨によって器形・刃部が成形されるもの（99～111）

いわゆる磨製石斧である。表面形に大きな違いはなく、短冊形や撥形を呈する。すべてに研磨調整が施される。101・102・107には、剥離調整がみられることから、おそらく石斧成形時における研磨調整の前段階の粗い剥離調整が残置しているものであろう。大きさはまちまちであるが108～111は全体的に小型のものである。

2類：剥離調整によって成形されるもの（112・113）

いわゆる打製石斧で、2点のみの出土である。112は側縁部を中心にほぼ全面に剥離調整が施される。113は剥離調整は主に両側縁部に施されているが、連続的ではない。ホルンフェルス製である。

3類：側縁部に敲打痕・剥離調整が認められる未製品と思われるもの（114）

114は側縁部中心に敲打痕・剥離調整が認められ、両面には明瞭な研磨調整が施された痕跡を把握することは出来なかったが、おそらく若干の調整が施されたものと思われる。磨製石斧の未製品の可能性が考えら

れる。

石錘（第71～76図115～188、写真図版66～77）

礫の両端部に対になる抉入を有するもの。本遺跡では点数が最も多く、450点が出土している。まず調整方法から以下のように分類した。

1類：剥離によるもの（115～175）

さらに調整部位から以下の4種に細分した。

a：両端部の両面に調整の施されているもの（115～123･125～159）

b：両端部に、片面ずつ表裏対称に調整の施されているもの（124･160～164）

c：両端部のいずれか片面に剥離調整がみられないもの（165～173）

d：長軸に剥離調整が施されるもの（174･175）

2類：敲打の痕跡がみられるもの（176～188）

石質は大半が安山岩であることから、安山岩を意図的に用いていたことが推測される。また、形状は小判型状・楕円状のものが大半であることから、石材同様形状にも意図的なものを窺わせる。

1類とした剥離調整であるが、礫の短軸両端部に抉りを有するものが大半である。1類1bとした片面ずつ表裏対称な部分を中心に剥離調整が施されるものは、作業工程を想定させるものである（Ⅵ章参照）。また、1類1cとした 両端部のいずれか片面に剥離調整がみられないものは、素材の形状を利用したものであり、未調整端部部分は、調整が不必要であったための所産と思われる。

2類としたものの石質は多孔質な安山岩製のものを多く使用する傾向がある。石質による調整方法の相違が窺われる。また、敲打される部分は両端部の頂部に施されるものがほとんどである。

敲石（第76･77図189～192、写真図版78･79）

礫の平坦面・側縁部や周辺部に敲打痕が認められるもの。素材は円形・楕円形・扁平長楕円形などの形状を呈し、石質は全て安山岩である。

敲石十磨石（第77図193～195、写真図版79）

礫の平坦面に磨面・敲打痕がみられ、側縁部に敲打痕が認められるもの。193は礫の平坦面に磨面が認められ、側縁部に敲打痕が認められる。このことから、「磨る」部分「敲く」部分を使い分けたことを推測させる。

磨石（第78･79図196～207、写真図版80～82）

円形・扁平楕円形・小判型状の円礫を用い、その縁辺或いは平坦面に磨面が見られる石器である。素材石質は安山岩が多数を占める。使用部位・形態により分類した。

1類：側面に磨痕がみられるもの（196～199）

能動的な「磨る」という行為による所産と考えられるもの。196は、使用部位の形状が側縁に対して垂直な「［」状を呈するものである。198～199は側縁に対して斜向する「＜」状を呈する。

2類：平坦面に磨痕がみられるもの（200～207）

受動的な「磨れる」という行為による所産と考えられるもの。磨痕の範囲が1類に比べ広い。形状は、円形及び小判型状の楕円形の礫を用いているものが多い。

2類が安山岩が多数を占めるのに対し、1類は安山岩以外の石質を用いる傾向がある。

凹石（第80・81図208～215、写真図版82～84）

礫の平坦面に凹みがみられるものである。石質はすべて安山岩である。凹部は概ね平坦面中央部に1面に

つき１ヶ所もしくは２ヶ所あり、片面だけにあるもの（208・209）、両面にあるもの（210～215）がある。

凹石十敲石（第81図216・217、写真図版84）

前記した凹石とした石器群と同様に礫の平坦面に凹みがみられ、側縁部に敲打痕が認められるもの。

石皿（第82図218、写真図版85）

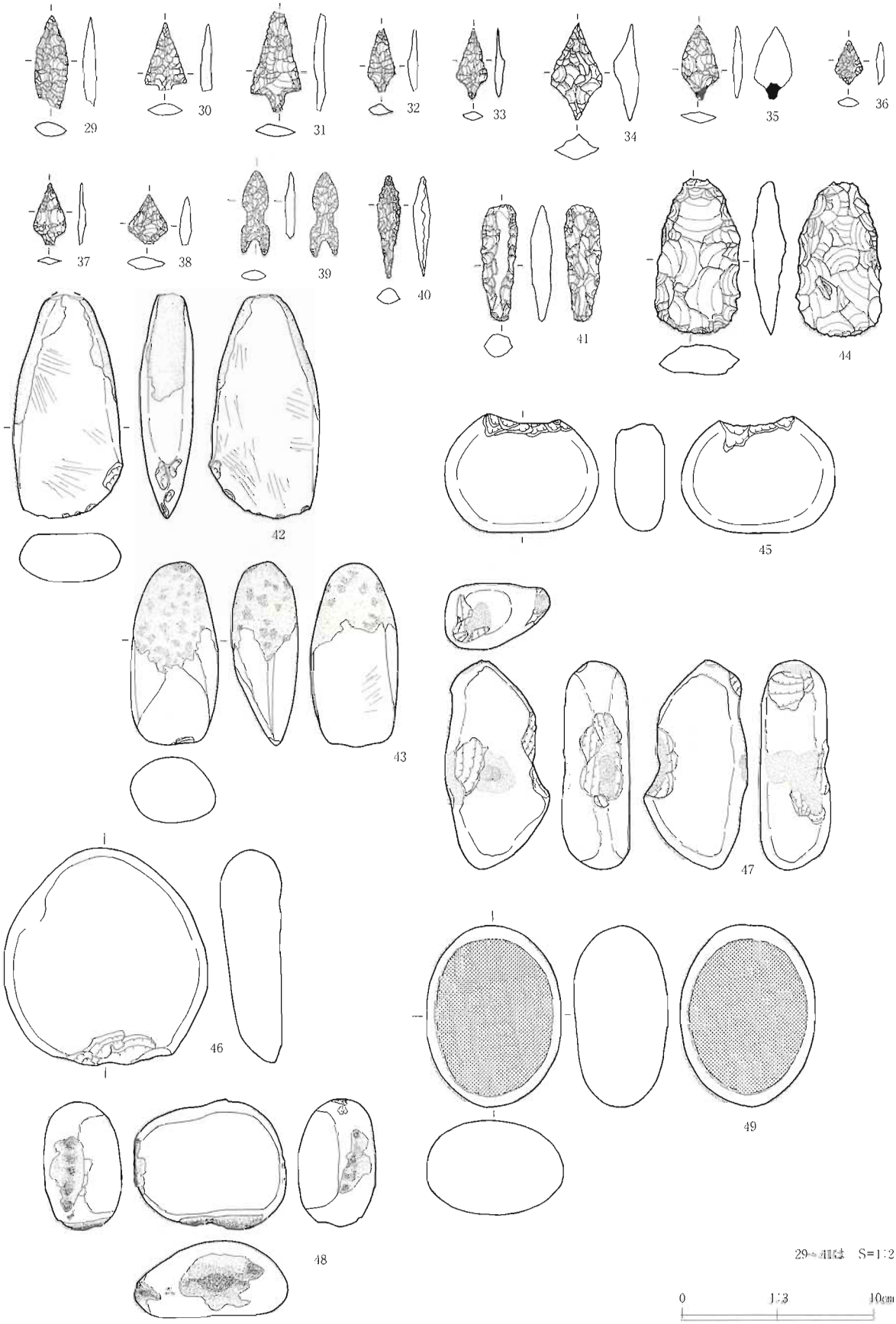
本遺跡で１点のみの出土である。敲打痕が認められることから、表面は礫を敲打・研磨によって、稜をつくりだし石皿としたものと思われる。裏面にも研磨調整がみられるが、表と比較して、研磨した面がせまい。

石棒（第81図219・220、写真図版84・85）

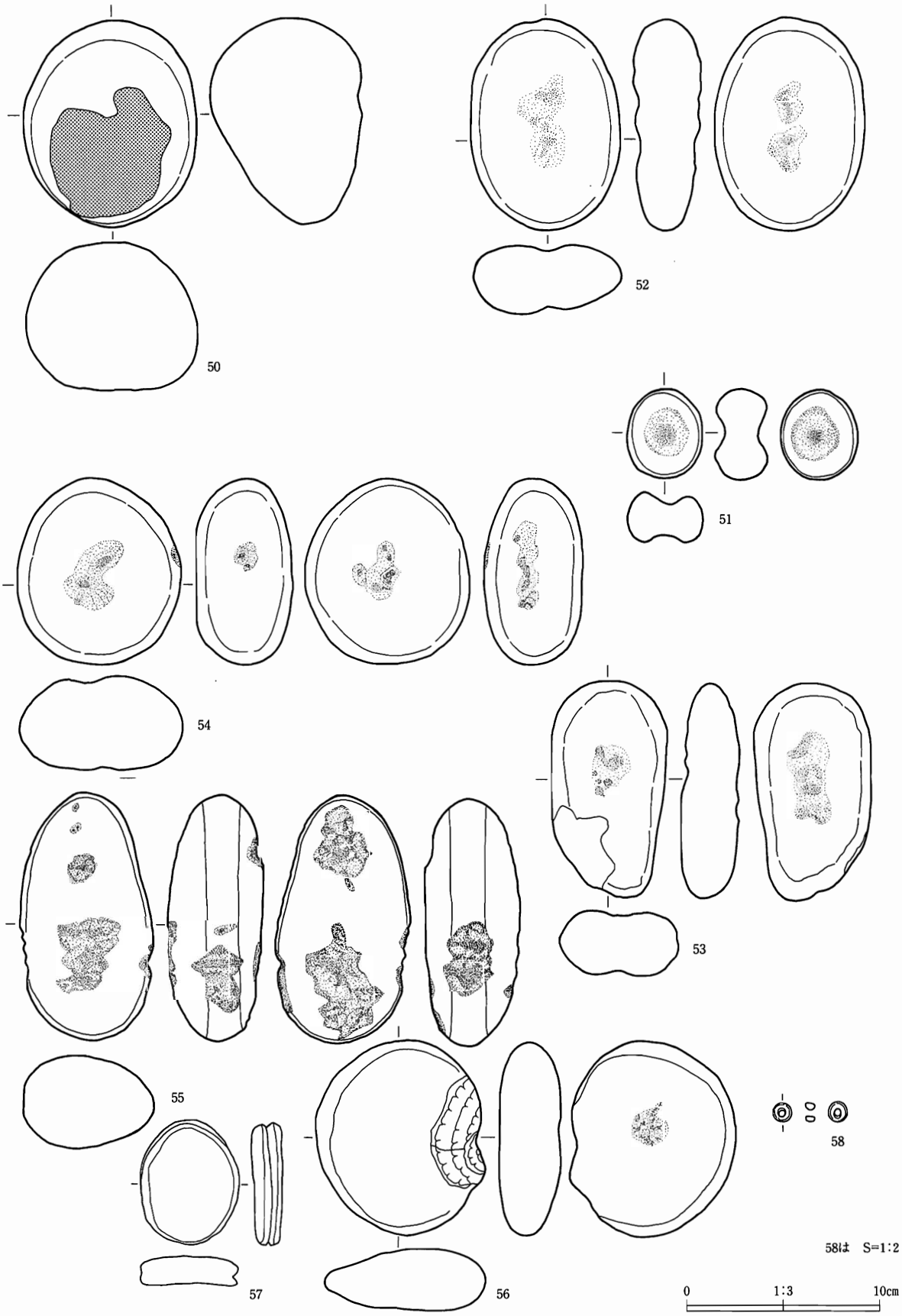
本遺跡で２点のみの出土である。全て欠損品で、頁岩製である。

勾玉（第81図221、写真図版85）

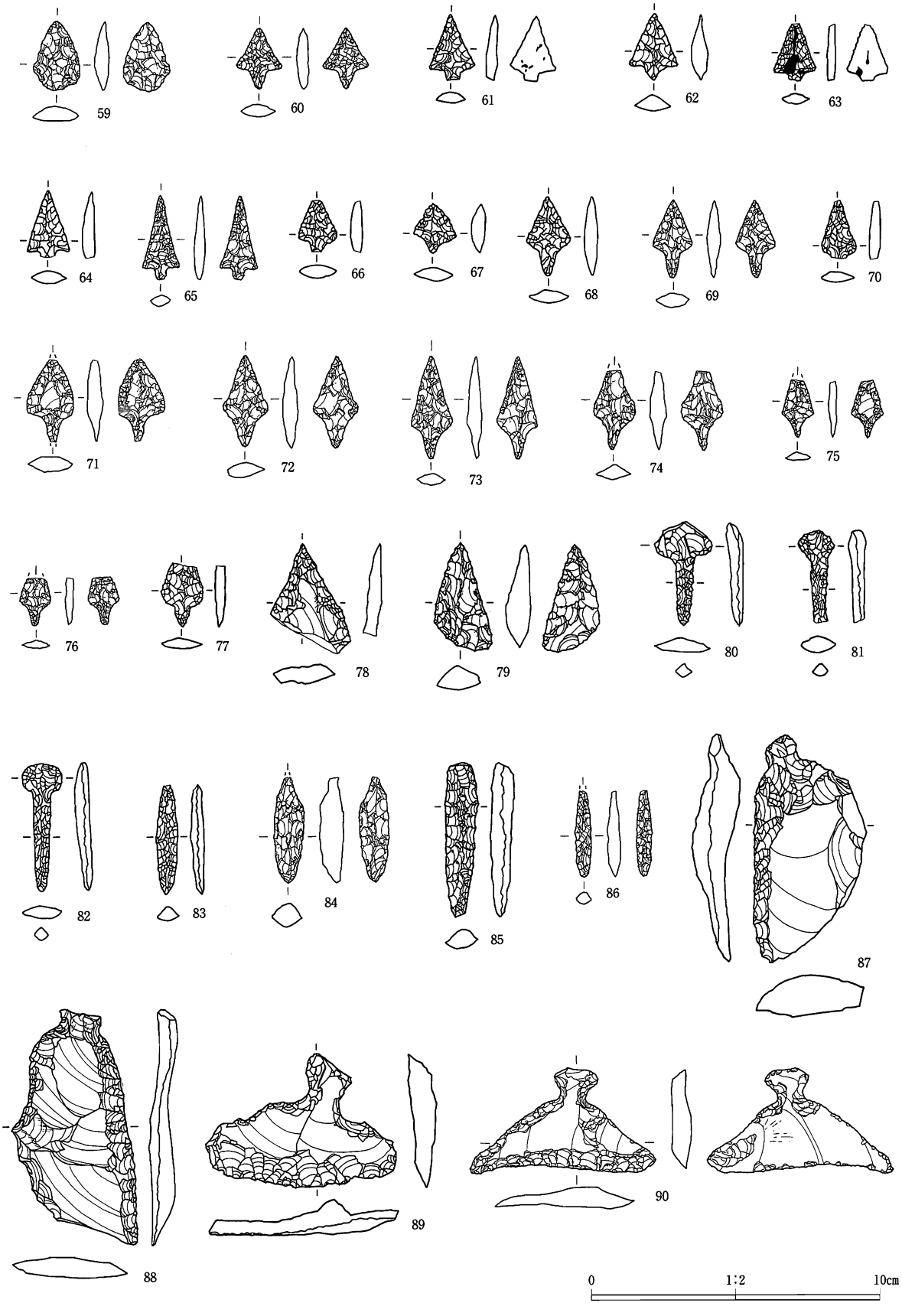
石質はヒスイ製である。穿孔方向は片面穿孔である。研磨調整が施される。側縁部に溝状の浅い凹みが認められる。穿孔を施し、原石と分離した痕跡か、もしくは、破損した製品を再加工を施した製品の可能性が考えられる。



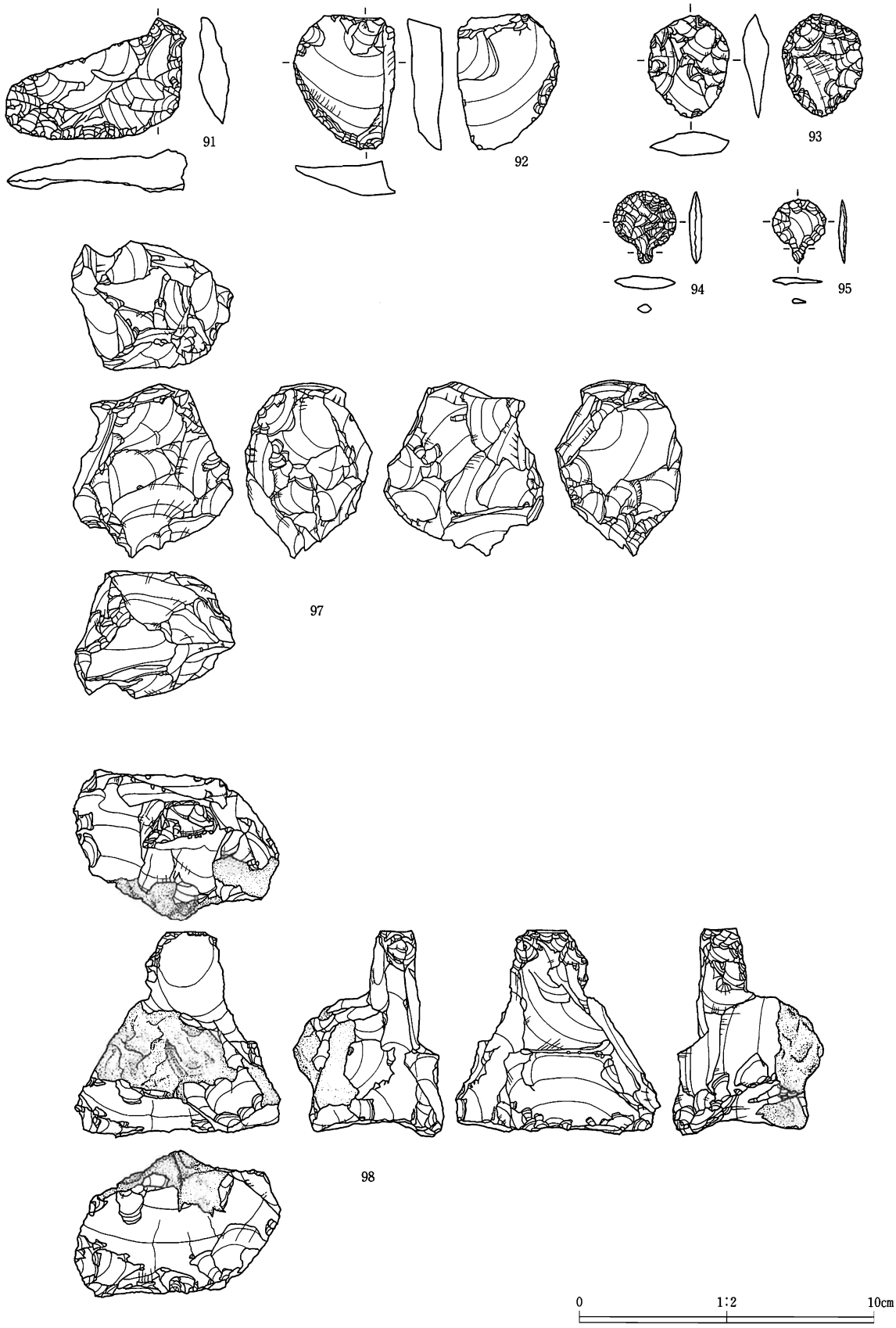
第66図　遺構外出土遺物（Ⅲａ層１）



第67図　遺構外出土遺物（Ⅲａ層２）

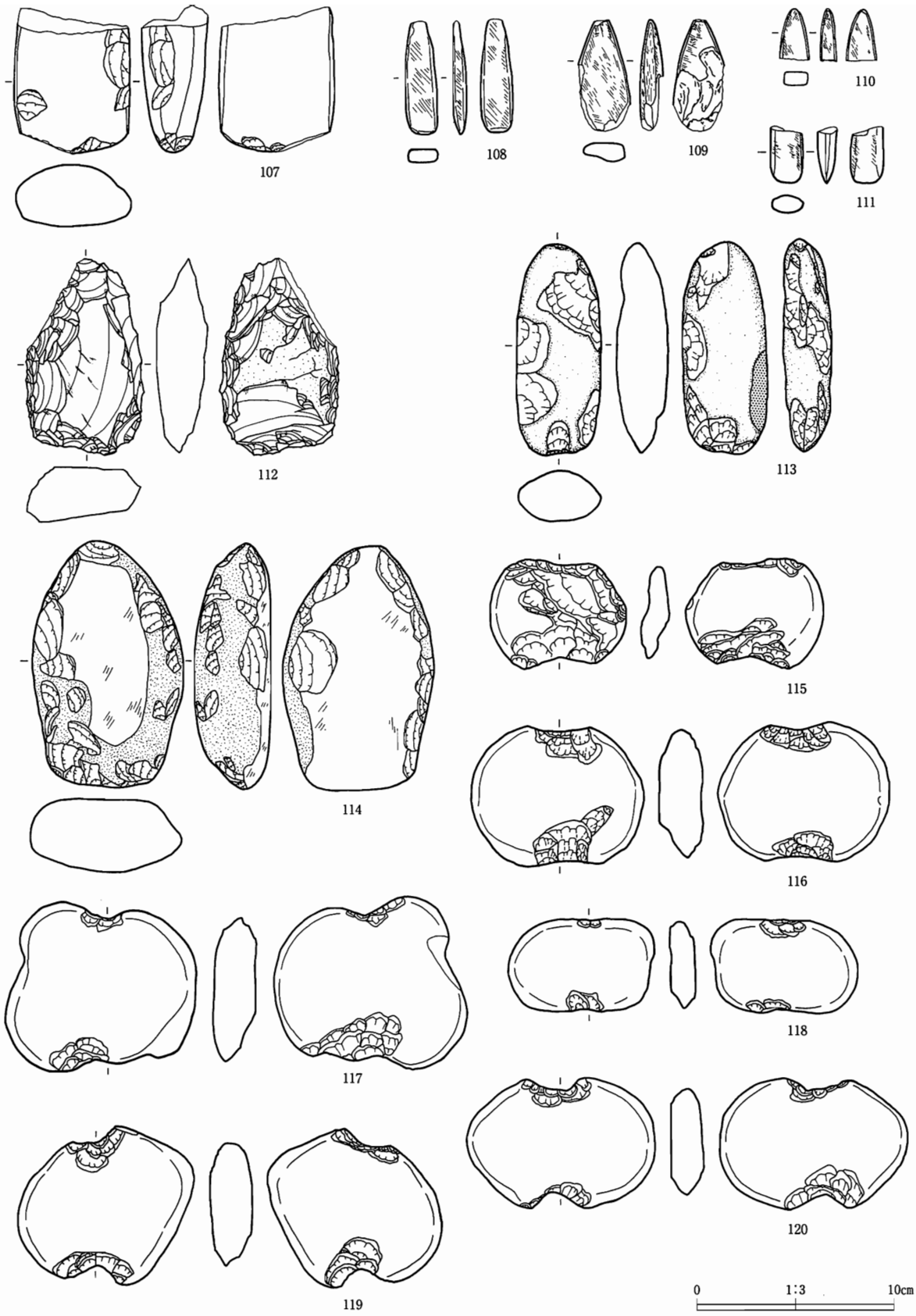


第68図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層１）

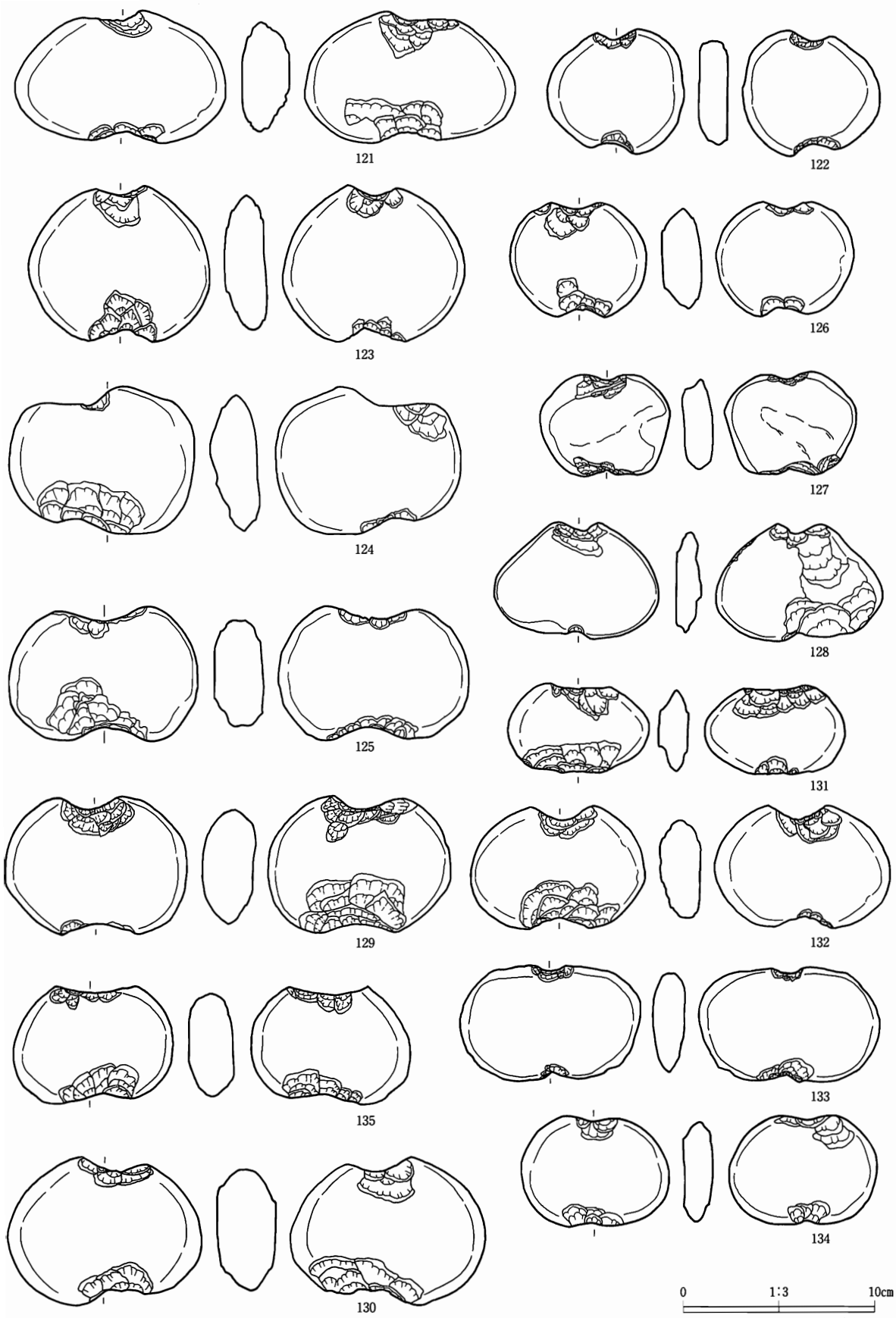


第69図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層２）

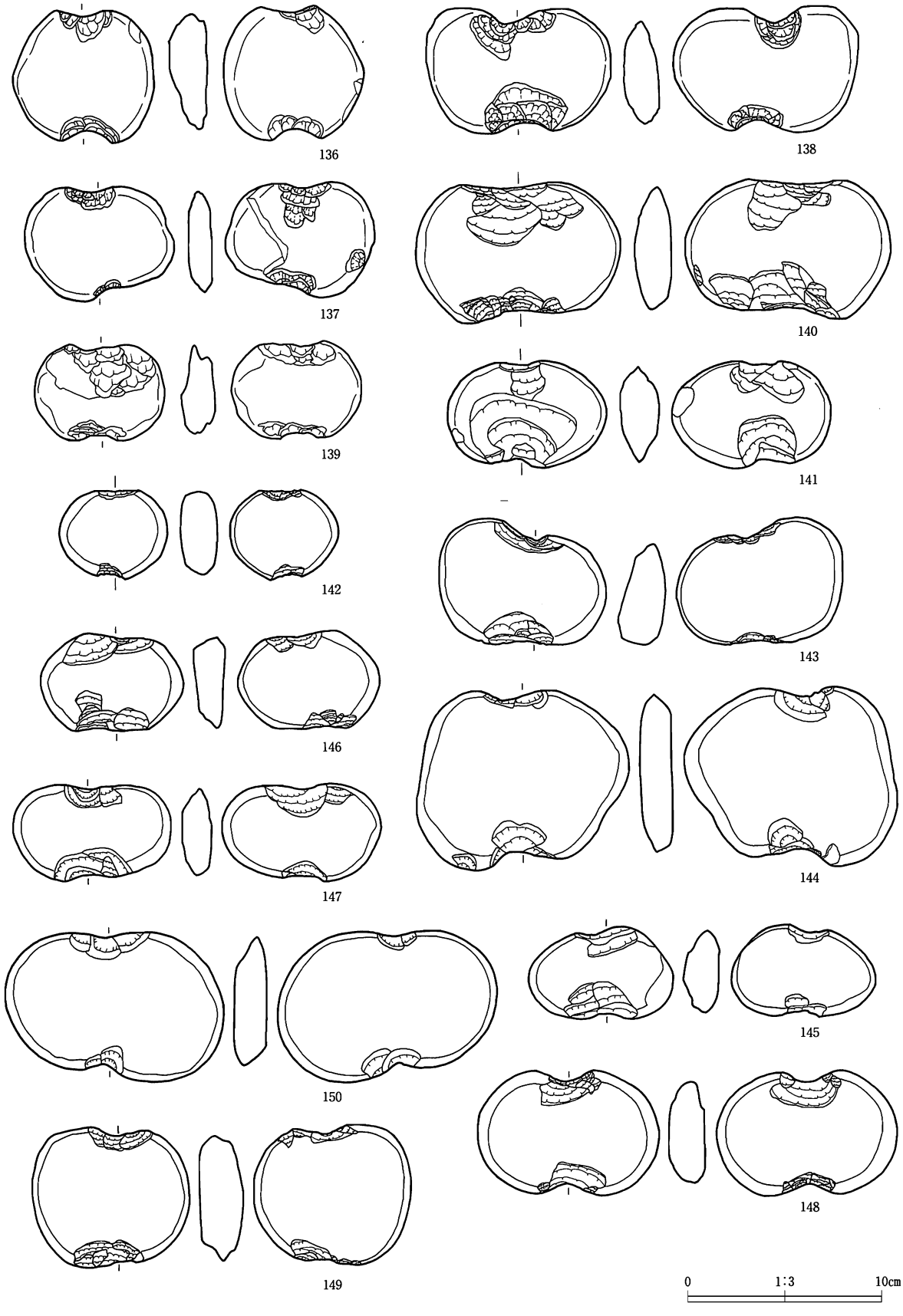
第70図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層３）



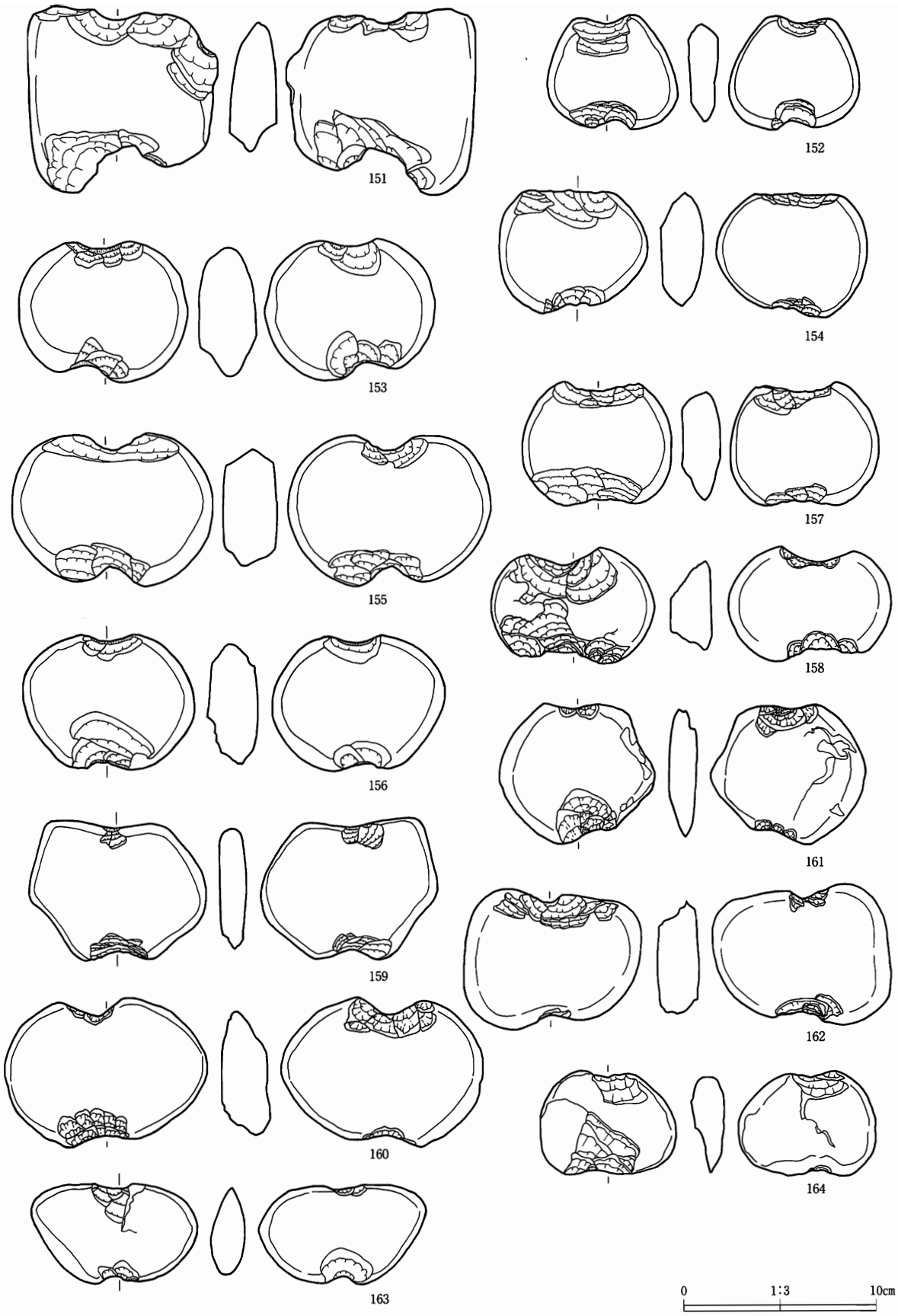
第71図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層４）



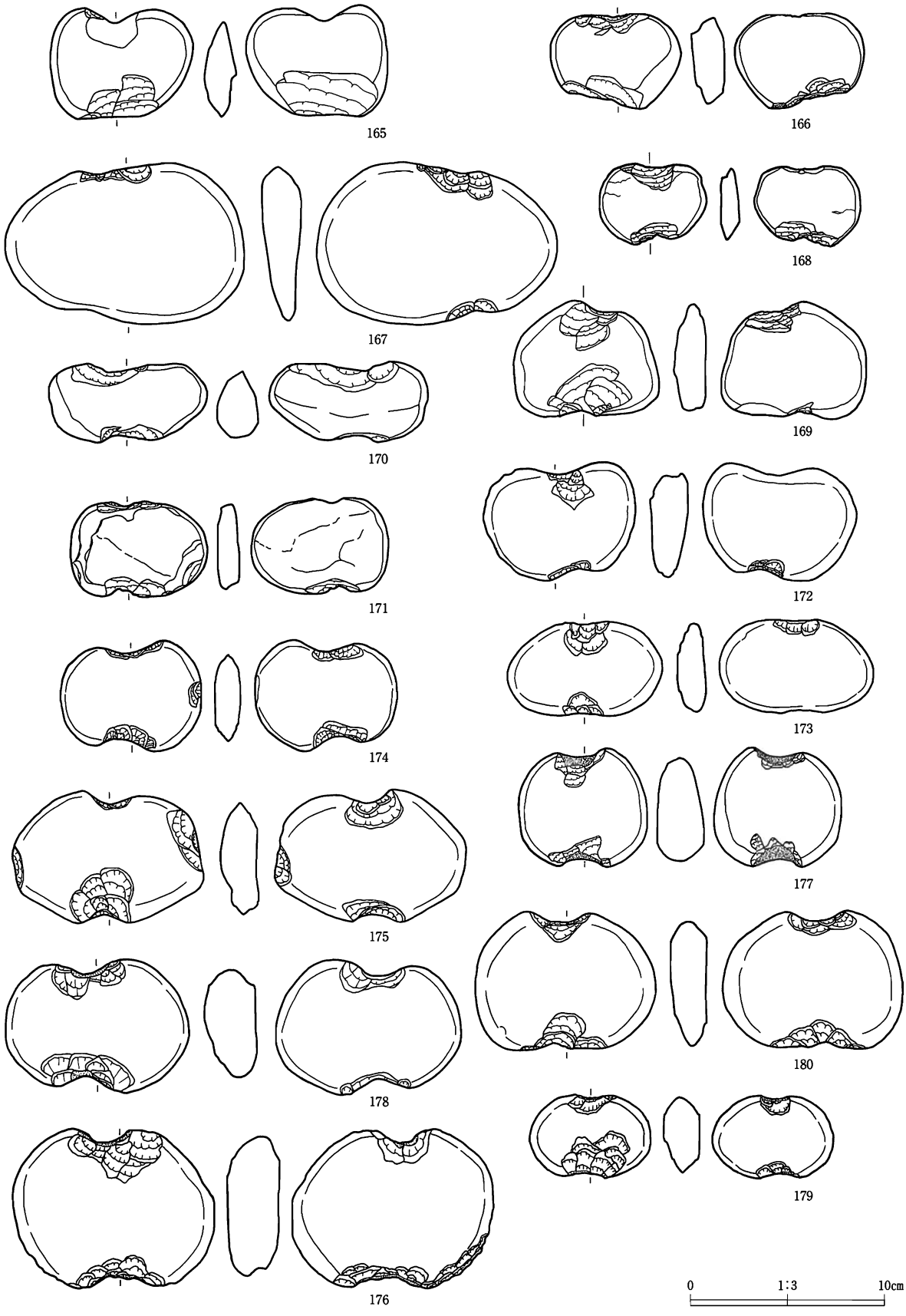
第72図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層５）



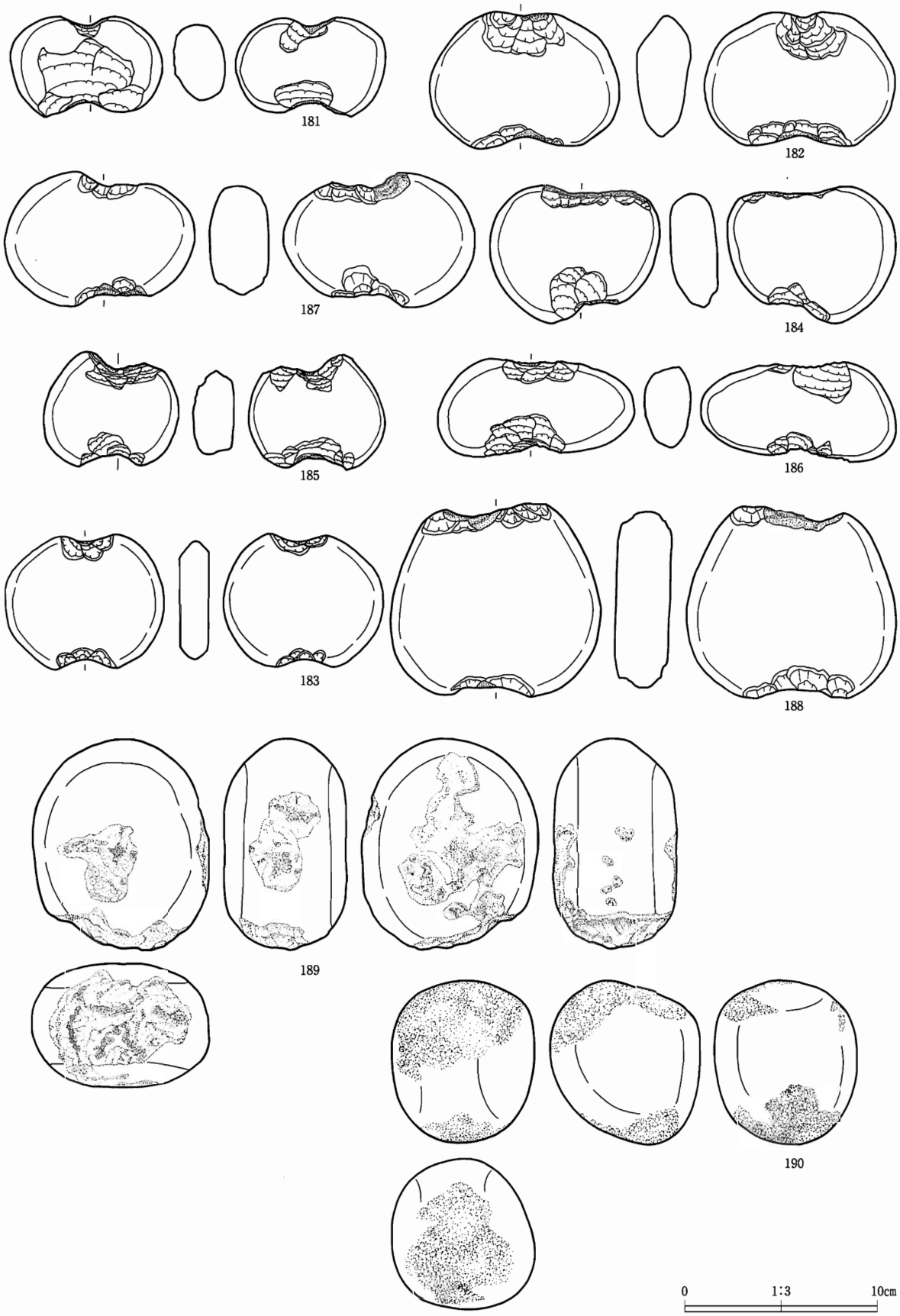
第73図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層６）



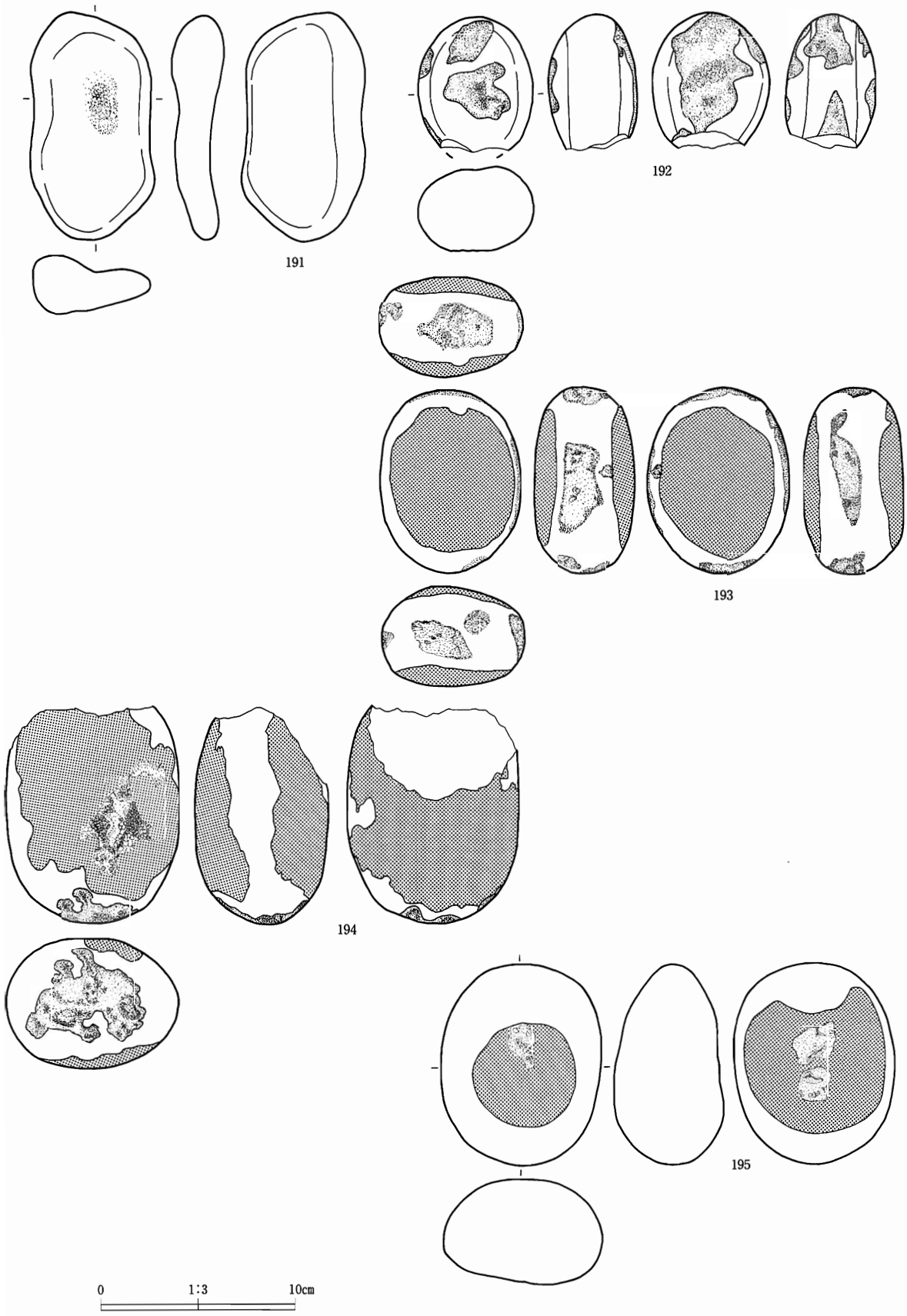
第74図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層７）



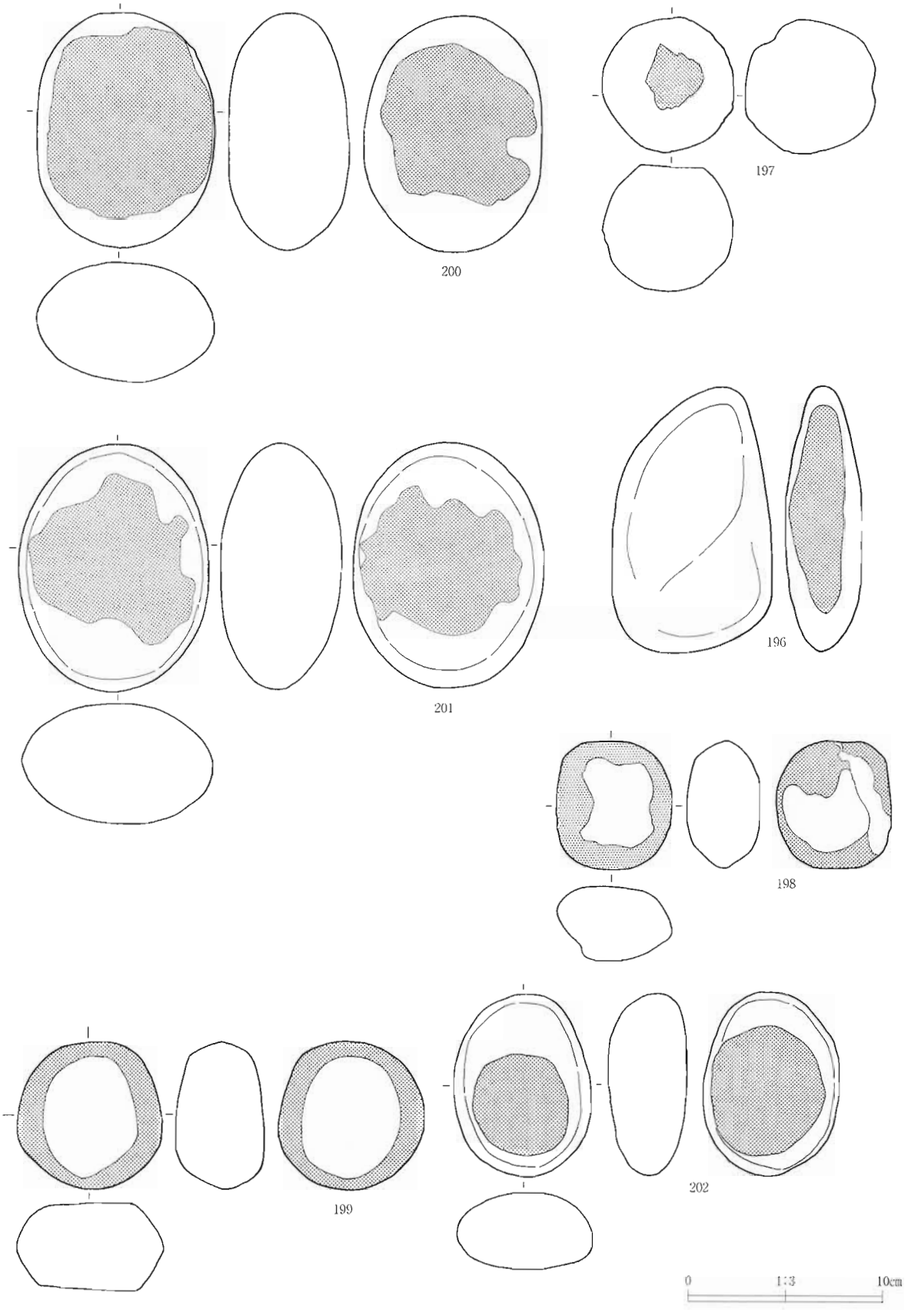
第75図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層８）



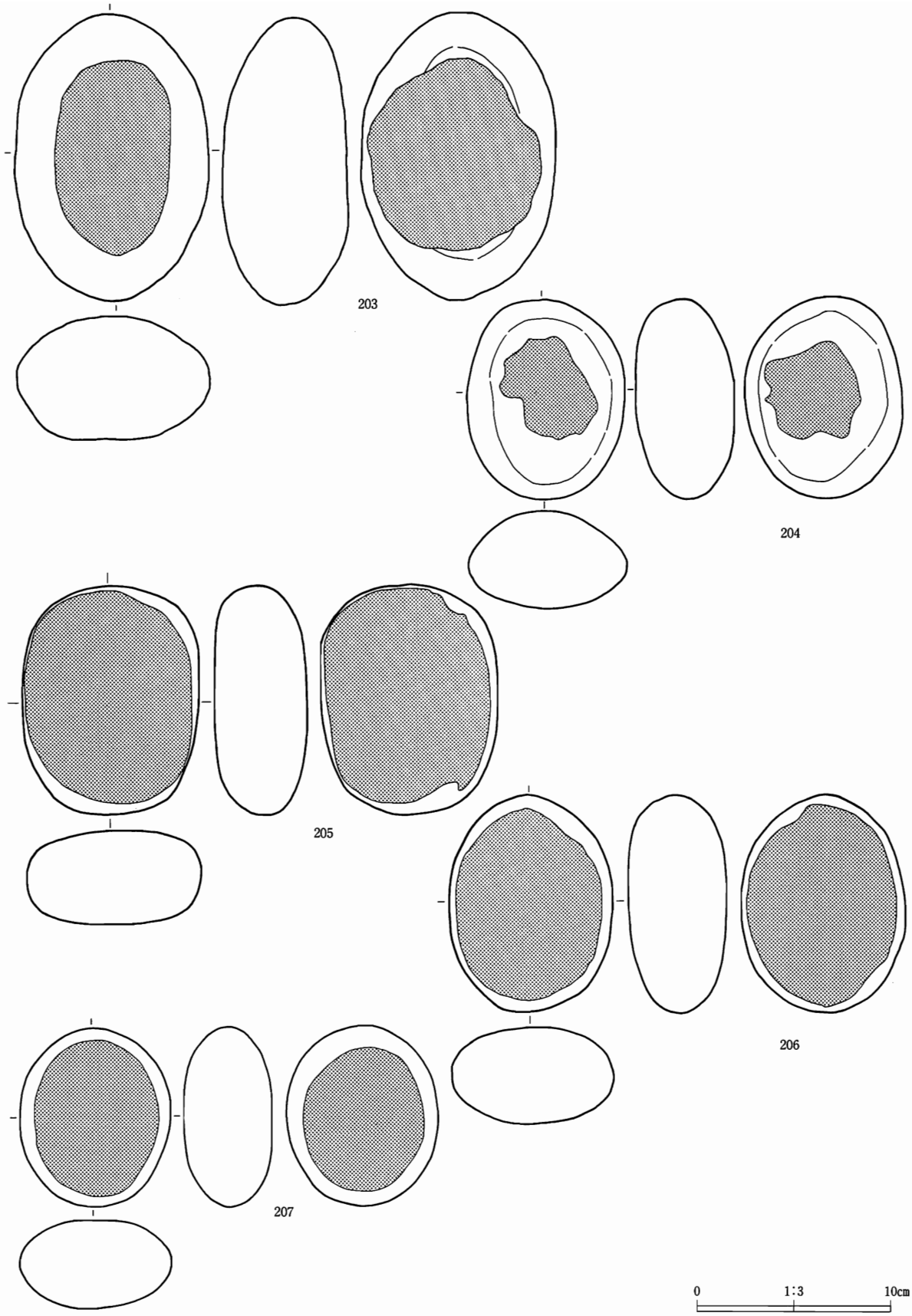
第76図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層９）



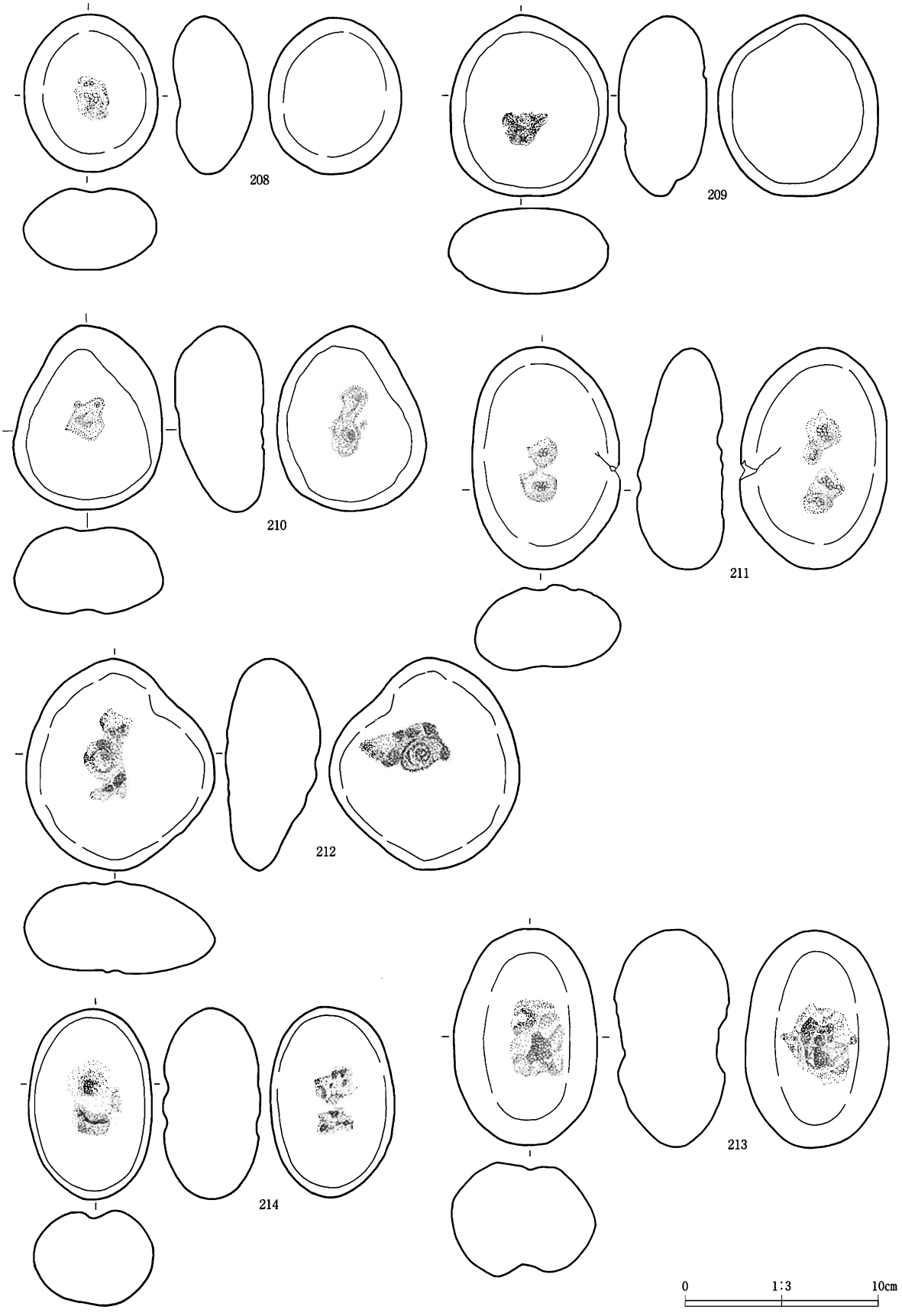
第77図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層10）



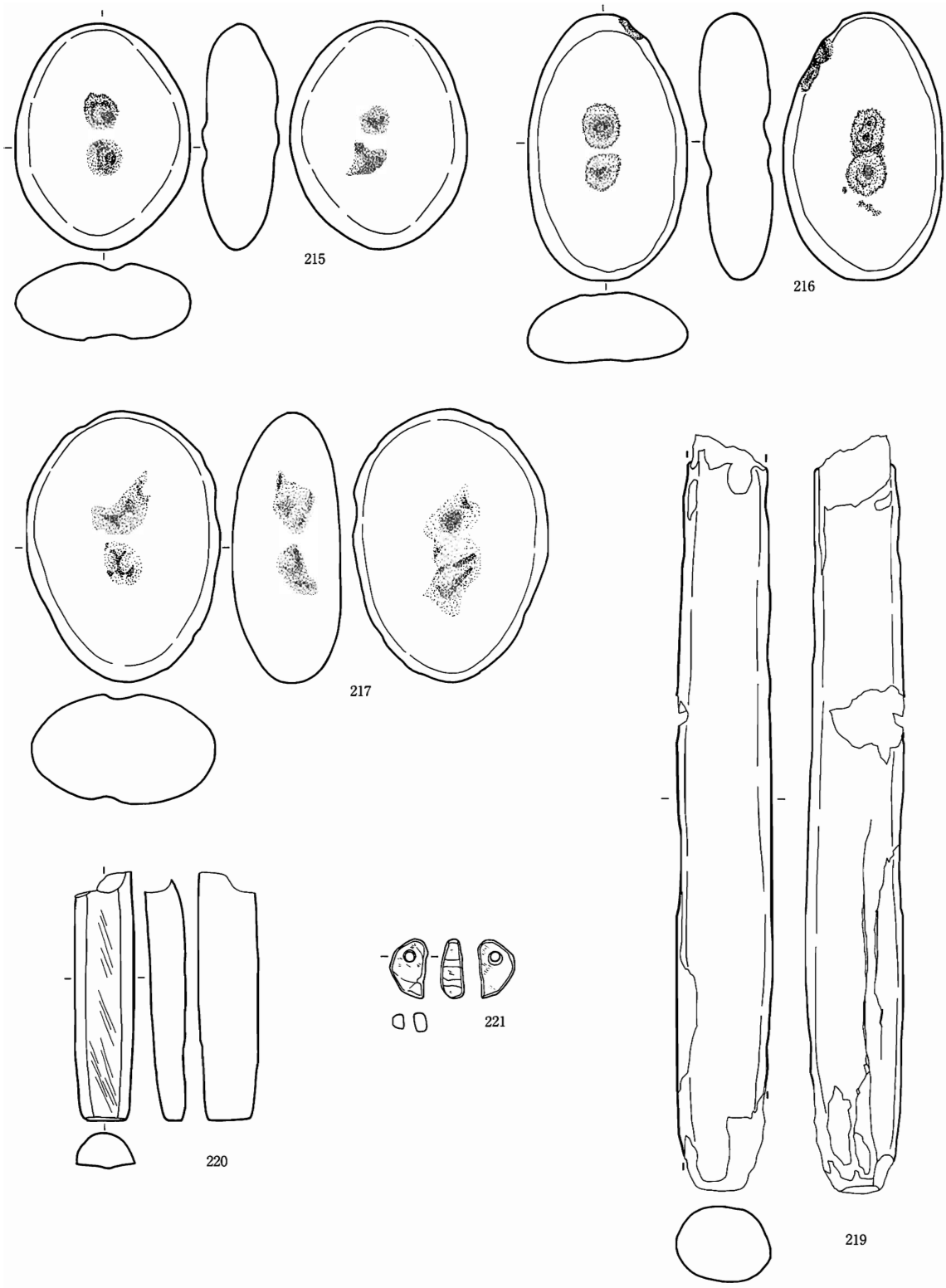
第78図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層11）



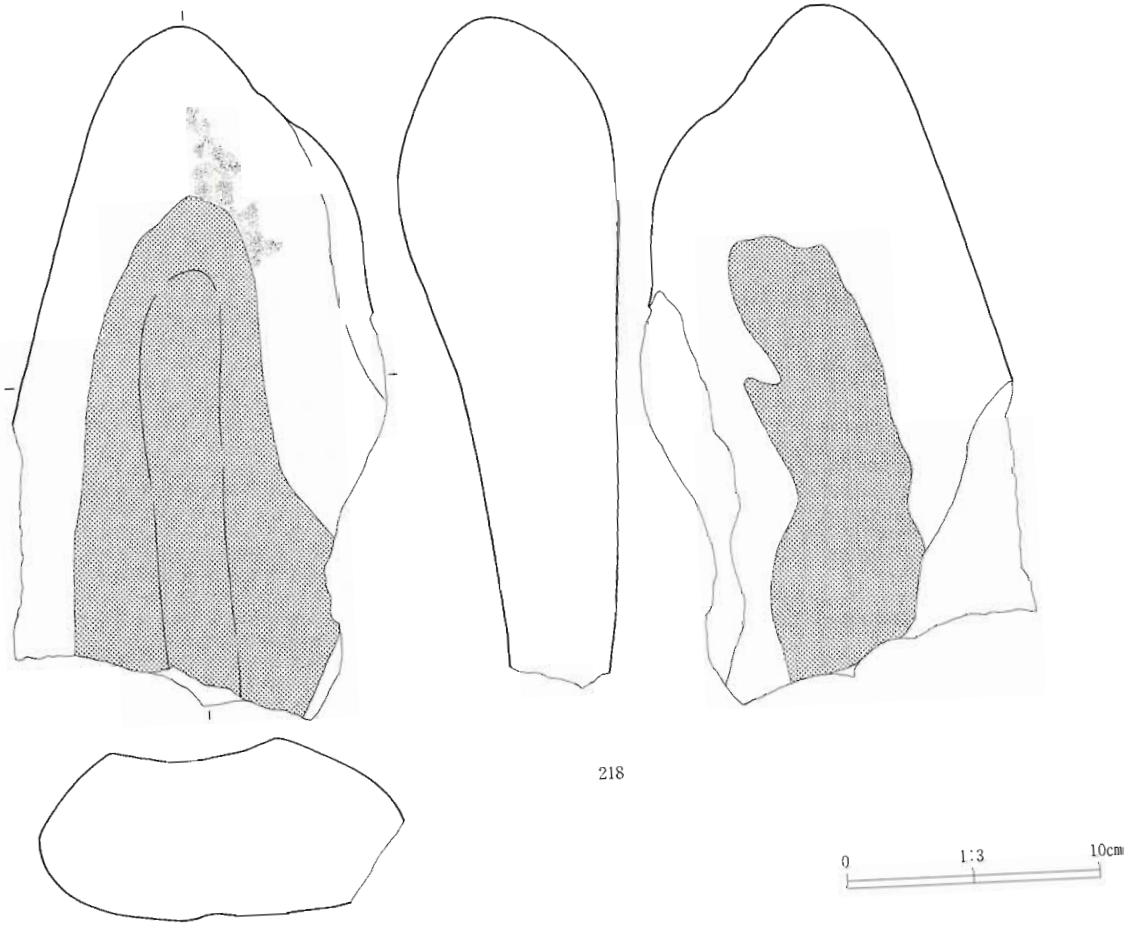
第79図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層12）



第80図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層13）



第81図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層14）



第82図　遺構外出土遺物（Ⅲｂ層15）

表２　土器・陶磁器観察表 (1)

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部位	口唇部・口縁部形態	文様特徴・外面調整・その他	地文	内面文様・調整等	底部形態	分類	備　　考
1	1号住埋土	注口土器	胴		木葉状入組文・羽状縄文(磨消縄文)・貼瘤(先鋭)・無文帯(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅱ群３類	海綿骨針含・若干摩滅
2	1号住埋土下位	注口土器？	胴～底		入組状文・貼瘤(横方向の刻目)・羽状縄文(0段多条)・無文帯(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ナデ	上げ底状？	Ⅱ群３類？	海綿骨針含
3	1号住埋土下位	壺	口～胴	平縁・やや肥厚	沈線・縄文（磨消縄文）・無文帯（ナデ）	撚糸文Ｒ	ナデ		Ⅱ群２類	海綿骨針含・若干摩滅
4	1号住埋土上～中位	壺or注口土器	口	平縁	平行沈線・羽状縄文（磨消縄文・０段多条）・無文帯（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
5	1号住埋土下位	注口土器	口～底	平縁・突起（四単位？）	入組状文(微隆線)・先鋭貼瘤(Ⅱ三単位・Ⅱb四単位?・Ⅰ三単位)・つまみ状の突起・無文(ミガキ)	無文	指ナデ	上げ底状	Ⅱ群５類	外面赤色顔料塗布
6	1号住埋土中位	壺or注口土器	頸～底		入組状文(微隆線)・又状貼瘤(Ⅱb四単位？・Ⅱ四単位？)・無文(ミガキ)	無文	ナデ	平坦	Ⅱ群５類	貼瘤(又状縦2単位・横2単位の四単位?)・海綿骨針含
7	1号住埋土下位	注口土器	胴～底		貼瘤・無文（ミガキ？）	無文	ナデ	上げ底状	Ⅱ群６類	海綿骨針含・摩滅著しい
8	1号住埋土下位	深鉢	胴～底		沈線・羽状縄文（磨消縄文）	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ	平坦	Ⅱ群２類	海綿骨針含・若干摩滅
9	1号住埋土下位	深鉢	胴～底		平行及び斜沈線・縄文（０段多条）	ＲＬ	ナデ	平坦	Ⅱ群８類	海綿骨針含
10	1号住埋土中位	深鉢	胴～底		入組状文（鍵状？）・羽状縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ？）	ＲＬ・ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅱ群２類	海綿骨針含・若干摩滅
11	1号住埋土上位	鉢	口～底	平縁・やや肥厚	刻目帯・斜沈線・無文帯（ミガキ）		ミガキ	上げ底状	Ⅱ群５類	海綿骨針含・若干摩滅
12	1号住埋土下位	小型土器	口～底	平縁	無文（ミガキ）		ナデ	上げ底状	Ⅱ群６類	海綿骨針含
13	1号住埋土下位	鉢	口～胴	平縁・肥厚	複数段の刻目帯・無文帯（ミガキ）	無文	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含（小）
14	1号住埋土	鉢	口～胴	平縁・肥厚	刻目帯・沈線・無文（ミガキ）		ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
15	1号住埋土	深鉢	口	平縁・肥厚	刻目帯・沈線・羽状縄文（磨消縄文）・無文帯（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
16	1号住埋土上位	深鉢	口	波状口縁・肥厚	複数段の刻目帯・無文帯（ミガキ）		ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
17	1号住埋土上～中位	深鉢	口	波状口縁・やや肥厚	沈線・縄文	ＲＬ	ミガキ？		Ⅱ群８類	海綿骨針含・摩滅著しい
19	1号住埋土中位・下位	深鉢	口～胴	平縁・肥厚	羽状縄文(０段多条？)	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	海綿骨針含・径1～5　の礫含
20	1号住埋土上～中位	深鉢	口～胴	平縁・肥厚	羽状縄文(０段多条)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
21	1号住埋土下位	深鉢	胴		櫛歯状沈線		ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
22	3号住土器埋設炉東	甕形土器	頸～胴		縄文	ＬＲ	ケズリ・ナデ		Ⅲ～Ⅳ群	海綿骨針含
23	3号住土器埋設炉西	甕形土器	頸～胴		縄文・頸部無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅲ～Ⅳ群	海綿骨針含
24	3号住土器埋設炉中央	甕形土器？	胴		縄文	ＲＬ	ナデ		Ⅲ～Ⅳ群	海綿骨針含
25	5号住居床直上	単孔土器	頸～底		入組状文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅱ群２類	海綿骨針含
26	5号住居床面	台付	底		無文（ミガキ）	無文	ケズリ		Ⅱ群８類	海綿骨針含・金雲母少量含
27	5号住居埋土	深鉢	口	平縁	刻目帯・沈線・無文（ミガキ）・縄文（充填？）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群４類	
28	5号住居埋土	深鉢	頸		縄文施文後沈線	ＬＲ？	ミガキ		Ⅱ群５類	海綿骨針含
29	5号住居埋土	深鉢	口	平縁	縄文	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	
30	5号住居埋土	深鉢	口	平縁	縄文・羽状縄文	無節（L）	ナデ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
31	5号住居埋土	深鉢	底		縄文・底部下端無文（ケズリ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
32	9号住居埋土	深鉢	口	平縁	縄文	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	海綿骨針含・石英粒少量含・すす付着
33	9号住居埋土下位	注口土器or壺？	底？		無文（光沢のあるミガキ）	無文			Ⅱ群４類	海綿骨針含・内面棒状の工具による調整
34	9号住居埋土下位	円盤状土製品			縄文	ＬＲ	ミガキ			海綿骨針含
35	11号住居床面直上	壺	口～底	平縁	鍵状入組文・平行沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ異方向	ナデ	平坦	Ⅱ群２類	海綿骨針含・完形品（100%）
36	11号住居床面直上	深鉢	口	平縁	縄文・無文（ミガキ）・頸部原体圧痕（ＲＬ）	ＲＬ	ナデ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
37	11号住居床面直上	深鉢or鉢	底		羽状縄文	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
38	1号住居状埋土	深鉢	頸～胴		沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ	平坦？網代痕	Ⅱ群１類	海綿骨針含
39	1号住居状埋土	単孔土器？	頸～胴		刻目帯・鍵状入組文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ異方向	ミガキ・ナデ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
40	1号住居状埋土	深鉢	口	平縁	刻目帯・沈線・縄文	０段多条	ミガキ		Ⅱ群１類	
41	1号住居状埋土	深鉢	口	波状・肥厚	刻目帯・沈線・無文（ミガキ）	無文	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含（多）
42	1号住居状埋土	浅鉢	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
43	1号住居状埋土	深鉢	頸		沈線・縄文（縄文施文後沈線）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群１類	海綿骨針含
44	1号住居状埋土	深鉢	底		縄文・沈線・無文（ミガキ）	ＬＲ縄文	ミガキ		Ⅱ群１類	海綿骨針含
45	1号住居状埋土	注口土器	注口部		沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）・注口根元部突起		ナデ		Ⅱ群２類	海綿骨針含（多）
46	1号住居状埋土	深鉢	口～胴	平縁	羽状縄文	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針・金雲母含・外面すす付着

表２　土器・陶磁器観察表 (2)

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部位	口唇部・口縁部形態	文様特徴・外面調整・その他	地文	内面文様・調整等	底部形態	分類	備　　考
47	１号住居状埋土	深鉢	口	平縁・肥厚	羽状縄文（異方向）	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針・石英粒少量含
48	１号住居状埋土中位	土偶	足部左		無文（ミガキ）					
49	１号住居状埋土	円盤状土製品			縄文	不明	ミガキ			海綿骨針含
50	１号住居状埋土	円盤状土製品			縄文	ＬＲ	ミガキ			海綿骨針含
51	１号住居状埋土床面	円盤状土製品			縄文	ＬＲ	ミガキ			海綿骨針含
52	１号住居状ベルト１層	土錘	半分		沈線状の溝・無文（ミガキ）					
53	ＩＤ５ｅ・Ⅲａ	深鉢	口	平縁	撚糸文・木目状撚糸文	撚糸文（Ｒ）	ナデ		Ⅰ群	海綿骨針含・繊維含
54	ＩＥ４ａ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群１類	海綿骨針含
55	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群１類	海綿骨針含・石英粒少量含
56	ⅡＤ４ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群１類	海綿骨針含
57	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ	深鉢	口～胴	波状口縁(六単位?)・やや肥厚	横位と縦位の沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群１類	海綿骨針含・粗雑な施文
58	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	浅鉢	口～底	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ？）	ＬＲ	ミガキ？		Ⅱ群１類	海綿骨針含・石英粒少量含・摩滅
59	Ⅲｂ	鉢	口	平縁	沈線・縄文・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群１類	海綿骨針含
60	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	深鉢	胴～底		沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅱ群１類	海綿骨針含
61	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	鉢	胴～底		沈線・縄文（磨消縄文）	ＬＲ	ミガキ	平底	Ⅱ群１類	海綿骨針含
62	ⅡＤ3aⅢｂ・ⅡＣ2eⅢｂ	深鉢	口～底	波状（四単位？）	複数段の刻目帯・入組状文・羽状縄文(磨消縄文)・無文帯(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ	平坦	Ⅱ群２類	金雲母含・すす付着
63	ⅡＤ3ａ・ｂベルトⅢｂ	深鉢or鉢	口～胴	平縁・やや肥厚	鍵状入組文・羽状縄文（磨消縄文）・無文（ナデ？）	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
64	ⅡＤ３ａ・ｂⅢｂ	深鉢	口～底	平縁・やや肥厚	鍵状入組文・羽状縄文（０段多条・充填磨消縄文）・無文(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ	平坦	Ⅱ群２類	海綿骨針含
65	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ	深鉢	口～胴	平縁・やや肥厚	鍵状入組文・縄文（磨消縄文）	ＲＬ	ナデ		Ⅱ群２類	海綿骨針含?
66	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	深鉢	頸～胴		刻目帯・鍵状入組文・縄文（磨消縄文・０段多条）・無文（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
67	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口～胴	平縁	刻目帯・鍵状入組文？・沈線・羽状縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
68	ⅡＤ２ｃ・Ⅲｂ	深鉢	口～頸	波状・肥厚	複数段の刻目帯・鍵状入組文?・羽状縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＲＬ異方向	ミガキ		Ⅱ群２類	海綿骨針含・内外面部分的にすす付着
69	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ	鉢	口	平縁・やや肥厚	刻目帯・入組状文・縄文（羽状縄文・０段多条？）・無文（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
70	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	鉢or浅鉢	口	平縁・肥厚	複数段の刻目帯・入組状文？・羽状縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
71	ⅡＤ２ｂ・３ｂ・Ⅲｂ	鉢	口	平縁・肥厚	複数段の刻目帯・入組状文・羽状縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群２類	海綿骨針含・摩滅している
72	ⅡＣ3eⅢｂ・ⅡＤ3aⅢｂ	深鉢	頸～胴		刻目帯・鍵状入組文・羽状縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ？）	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅱ群２類	すす付着・海綿骨針含
73	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	深鉢	胴～底		刻目帯・入組状文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ	平坦	Ⅱ群２類	海綿骨針含
74	ⅡＤ３・４ｃⅢｂ	深鉢	口	波状・肥厚	刻目帯・入組状文・羽状縄文(磨消縄文・０段多条)・無文(ミガキ)	ＲＬ異方向	ミガキ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
75	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ	深鉢	胴～底		鍵状入組文・羽状縄文（磨消縄文・０段多条？）・無文（ナデ？）	ＲＬ異方向	ナデ	平坦？	Ⅱ群２類	海綿骨針含
76	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	鉢	口～底	平縁・やや肥厚	鍵状入組文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ	平坦	Ⅱ群２類	海綿骨針含
77	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ	鉢	口	平縁・突起	刻目帯・沈線・突起・縄文（磨消縄文・０段多条）・無文（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群２類	海綿骨針含・石英粒少量含
78	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	壺	胴～底		鍵状入組文・羽状縄文（０段多条・磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ異方向	ナデ	平坦	Ⅱ群２類	海綿骨針含
79	ⅡＣ１ｂ・Ⅲｂ	壺or注口土器	口～肩	平縁	入組状文（鍵状？）・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ・ケズリ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
80	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	壺or注口	肩～底		鍵状入組文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
81	ⅡＤ３ｅ・Ⅲｂ	注口土器？	胴～底		縄文帯・羽状縄文(磨消縄文部分的に充填?)・無文(光沢があるミガキ)	ＲＬ	ナデ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
82	ⅡＤ2aⅢｂ・ⅡＤ3a・bベルトⅢｂ	壺or注口土器	口～肩		入組状文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ・ナデ		Ⅱ群２類	海綿骨針含
83	ＩＧ１ｂ・Ⅲｂ	深鉢	胴～底		入組状文・羽状縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	不鮮明	ナデ		Ⅱ群２類	石英粒含・砂粒含
84	ⅡＤ１ｂ	壺or鉢	胴～底		木葉状入組文・羽状縄文（０段多条・磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅱ群３類	海綿骨針含
85	ⅡＤ２ａ・Ⅲｂ	壺or注口土器	頸～胴		複数段の刻目・木葉状入組文・貼付瘤(横位刻目)・羽状縄文(0段多条・磨消縄文)・無文(ミガキ?)	ＲＬ・ＬＲ	指ナデ		Ⅱ群３類	海綿骨針含・摩滅している
86	ⅡＤ2ｃ・ⅡＤ3ｄ・Ⅲｂ	注口土器	口～胴	平縁・肥厚	刻目帯・木葉状入組文・貼付瘤(又状・注口部含め四単位?)・羽状縄文(磨消縄文)・無文(光沢のあるミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ・ナデ		Ⅱ群３類	海綿骨針含
87	ⅡＤ３ｄ・Ⅲｂ	壺or注口土器	口	平縁	木葉状入組文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ・ナデ		Ⅱ群３類	海綿骨針含
88	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	注口土器	口～胴	平縁・肥厚・貼付瘤(縦位の又状)	刻目帯・羽状縄文(磨消縄文)・貼付瘤(横位の又状・三単位?)・無文(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅱ群３類	海綿骨針含・口縁部貼付瘤四単位？
89	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	注口土器	頸～底		入組状文・貼付瘤（又状）・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ナデ		Ⅱ群３類	海綿骨針含
90	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状・肥厚	複数段の刻目帯・木葉状入組文・羽状縄文(充填？)・無文(ミガキ)	不明	ミガキ		Ⅱ群３類	海綿骨針含
91	ⅡＤ３ａ・ｂⅢｂ	浅鉢	口～底	平縁・肥厚	複数段の刻目帯・木葉状入組文・羽状縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ	上げ底状	Ⅱ群３類	海綿骨針含

表２　土器・陶磁器観察表 (3)

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部位	口唇部・口縁部形態	文様特徴・外面調整・その他	地文	内面文様・調整等	底部形態	分類	備　　考
92	ⅡＥ４ｄ・Ⅲｂ	ミニチュア土器	口～底	波状・肥厚	木葉状入り組み文・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ミガキ・ナデ	平坦	Ⅱ群３類	海綿骨針含
93	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	鉢	口～胴	平縁・口唇部刻目	複数段の刻目帯・縄文(磨消縄文)・補修孔(焼成前の可能性含)・無文(ミガキ)	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
94	ⅡＣ１ｃ・Ⅱ	浅鉢	口～胴	平縁	刻目帯・無文（ミガキ？）	無文	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
95	ⅡＥ４ｄ・Ⅲｂ	鉢	口	平縁	刻目帯・無文（ミガキ）	無文	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
96	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	深鉢	口～頸	波状・肥厚	刻目帯・沈線・羽状縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群４類	石英粒少量含
97	ⅡＥ２ｂ・Ⅲｂ	深鉢	口～頸	波状・肥厚	刻目帯・沈線・縄文（磨消縄文・０段多条）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含・石英粒含
98	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ	不明	底		刻目帯・無文（ミガキ）・台	無文	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含・石英粒少量含
99	ⅡＤ３・４ａ・ｂⅢｂ	壺or注口土器	口	平縁・やや肥厚	刻目帯・縄文（０段多条）	ＬＲ	ケズリ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
100	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	深鉢or鉢	口	平縁	刻目帯・沈線・縄文（磨消縄文・０段多条）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
101	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	台付	台		刻目帯・沈線・羽状縄文・無文（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅱ群４類	海綿骨針含・塗膜状の黒色付着物
102	ⅡD2aⅢb・ⅡD4eⅢb	深鉢	口～胴	平縁・やや肥厚	複数段の刻目帯・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ？）	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群４類	海綿骨針含・摩滅している
103	ⅡＤ３ｂⅢｂ	浅鉢	口	平縁・肥厚	複数段の刻目帯・羽状縄文（０段多条・磨消縄文）・無文(磨消縄文)	ＲＬ異方向	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含・内面二次加熱
104	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状・肥厚・突起	複数段の刻目帯・無文（ナデ）		ミガキ・刻目帯		Ⅱ群４類	海綿骨針含・石英粒少量含
105	ⅡＤ４Ｅ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状・肥厚・突起	複数段の刻目帯・貼付瘤（叉状・横位の刻目）・無文（ミガキ）		ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
106	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状・肥厚・突起	複数段の刻目帯・貼付瘤（叉状・横位の刻目）・無文（ミガキ）		ミガキ		Ⅱ群４類	石英粒含
107	ⅡＤ４Ｅ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状・肥厚・突起	複数段の刻目帯・沈線・縄文(磨消縄文・０段多条)・無文(ミガキ)	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
108	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	注口土器	口	平縁・口唇部原体回転後刺突	複数段の刻目帯(下方向及び斜め下方向からの刺突列)・沈線・縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＬＲ	ミガキ・ナデ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
109	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状・装飾突起・副突起・肥厚	複数段の刻目帯・大突起間(四単位?)に副突起(四単位?)共に横位刻目・無文(ミガキ?)	無文	ミガキ		Ⅱ群４類	海綿骨針含
110	ⅡＥ２ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口～頸	平縁・肥厚	複数段の刻目帯・斜沈線・無文（ミガキ）		ミガキ		Ⅱ群５類	海綿骨針含
111	ⅡＤ２ａ・Ⅲｂ	深鉢	口～胴	平縁・突起(6単位?)・肥厚	複数段の刻目帯・沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群５類	海綿骨針含？
112	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	深鉢	頸		斜沈線		ナデ		Ⅱ群５類	海綿骨針含
113	ⅡD4aⅢb・ⅡD1cⅢa	注口土器	口～底	平縁	刻目帯・沈線・無文（光沢のあるミガキ）	無文	ナデ・指ナデ	上げ底状	Ⅱ群６類	海綿骨針含
114	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	注口土器	頸～底		入組状文・縄文（磨消縄文？）・無文（ミガキ？）	不鮮明	ナデ	平坦	Ⅱ群６類	海綿骨針含
115	ⅡＤ４ｂ・Ⅲｂ	注口土器	注口部		刻目帯・沈線・無文(光沢のあるミガキ)・注口部先端沈線・根元部突起	無文	ナデ		Ⅱ群６類	海綿骨針含
116	ⅡＤ１ｃ・Ⅲｂ	注口土器？	胴～底		沈線・無文（光沢のあるミガキ）	無文	ナデ	上げ底状？	Ⅱ群６類	海綿骨針含
117	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	壺or注口土器	口	平縁	刻目帯・貼付瘤？（横位の刻目）・無文（光沢のあるミガキ）		指ナデ		Ⅱ群６類	海綿骨針含
118	ⅠＥ５ｃ・Ⅲｂ	壺or注口土器	頸		刻目帯・無文（光沢のあるミガキ）	無文	指ナデ		Ⅱ群６類	海綿骨針含
119	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ	注口or壺	口	平縁	刻目帯（刺突列状）・貼付隆帯・無文（光沢のあるミガキ）		ミガキ・ナデ		Ⅱ群６類	ミガキ（口縁部）・ナデ（肩）
120	ⅡＣ１ｅ・Ⅲｂ	壷or注口土器	口	平縁・突起	複数段による刻目帯・貼瘤（縦位刻目）・無文（ミガキ）	無文	指ナデ		Ⅱ群６類	海綿骨針含
121	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ	注口土器	口	突起	複数段による刻目帯・貼瘤（先鋭・四単位？）		指ナデ		Ⅱ群６類	海綿骨針含
122	ⅡＤ４ｅ・Ⅲｂ	香炉形or壺	口	平縁	刻目帯・無文（ナデ）・無文（光沢のあるミガキ）	無文	指ナデ		Ⅱ群６類	海綿骨針含
123	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	筒型土器	口～胴	平縁・突起(四単位)・やや肥厚	複数段の刻目・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群７類	海綿骨針含
124	ⅡＤ４ａ・Ⅲｂ	単孔土器？	頸～底		複数段の刻目・貼瘤(横位刻目・四単位?)・羽状縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＲＬ異方向	指ナデ	上げ底状	Ⅱ群７類	海綿骨針含
125	ⅠＤ５ｂ・Ⅲｂ	不明	口	平縁	沈線・刺突列・補修孔		ナデ		Ⅱ群８類	内外面すす付着
126	ⅡＥ１ａ・Ⅲｂ	鉢？	口	平縁・若干肥厚	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＲＬ	ナデ		Ⅱ群８類	石英粒含
127	ⅡＣⅡｅⅢｂ・ⅡＤ3aⅢｂ	浅鉢	口	平縁	入組状文？・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
128	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁・若干肥厚	沈線・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
129	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状（五単位）・肥厚	無文（ミガキ）	無文	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
130	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口	突起	無文（ミガキ？）		ミガキ？		Ⅱ群８類	海綿骨針含
131	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状・肥厚	無文（ミガキ）	無文	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針含・石英粒含
132	ⅠＦ２ｄ・Ⅲｂ	壺	頸		沈線・羽状縄文（充填？）・貼付瘤（横位の刻目）	ＲＬ・ＬＲ	指ナデ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
133	ⅡＥ２ｄ・Ⅲｂ	壺	胴～底		沈線・羽状縄文	不鮮明	ナデ		Ⅱ群８類	海綿骨針含・金雲母少量・摩滅著しい
134	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ	壷	口～底	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ナデ	平坦	Ⅱ群８類	海綿骨針含
135	ⅡD4a・4bベルトⅢｂ	壷or注口土器	口～肩	平縁	沈線・縄文	ＲＬ	ナデ・指ナデ		Ⅱ群８類	海綿骨針含
136	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	壺or注口	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針含

表２　土器・陶磁器観察表 (4)

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部位	口唇部・口縁部形態	文様特徴・外面調整・その他	地文	内面文様・調整等	底部形態	分類	備　　考
137	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	壺or注口	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（光沢のあるミガキ）	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群８類	赤色顔料塗布・石英粒少量含
138	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	壺or注口	口	平縁	沈線・羽状縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＲＬ異方向	ナデ		Ⅱ群８類	海綿骨針含(多)・石英粒少量含・径1～2　小礫含
139	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	壺	口	平縁	無文（ミガキ）	無文	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針含・赤色顔料塗布
140	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	壺	口	平縁	無文（ミガキ）	無文	ミガキ		Ⅱ群８類	内外面に塗膜状の黒色付着物（漆？）
141	ⅡＤ３ｃ・Ⅲｂ	鉢	口	平縁	沈線・縄文（充填？）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針・石英粒少量含
142	ⅡＥ１ｃ・３ｂⅢｂ	鉢	口	平縁	沈線・縄文（口縁部一部ケズリ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群８類	海綿骨針含・石英粒少量含・金雲母少量含
143	ⅡＥ２ａ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁・折り返し	縄文	無節Ｌ	ナデ		Ⅱ群９類	
144	ⅡＣ１ｅ・Ⅲｂ	深鉢	口～胴	平縁・折り返し	縄文・口縁部付近ＬＲ横回転、胴部ＬＲ縦回転	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
145	ⅡＤ３・４ａⅢｂ	深鉢	口～底	平縁	縄文・補修孔	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	ほぼ完形　海綿骨針含
146	ⅡＥ３ｂ・ｃⅢｂ	深鉢	口～底	平縁	縄文（胴部下端縄文施文後ナデ）	ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅱ群９類	海綿骨針含(多)・内面先端平坦な工具でナデ
147	ⅡＤ２・３ｂⅢｂ	深鉢	口～胴	平縁	縄文	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	
148	ⅡＤ3bⅢｂ・ⅡＣ1dⅢｂ	深鉢	口～胴	平縁	縄文	ＬＲ	ケズリ		Ⅱ群９類	外面も部分的にケズリの調整を施している・海綿骨針含
149	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	縄文・補修孔	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針・石英粒少量含
150	ⅡＣ１ｅ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	縄文（０段多条？）	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針・石英粒少量含
151	ＩＧ１ｂ・Ⅱ	深鉢	口～胴	平縁	縄文	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
152	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	縄文	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針・石英粒少量含
153	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁・肥厚	縄文	ＲＬ	ナデ		Ⅱ群９類	すす付着
154	ⅡＥ２ａ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	羽状縄文（０段多条）	ＲＬ・ＬＲ？	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針含・内面すす付着
155	グリッド不明・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	縄文	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
156	ＩＥ３ｃ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	縄文	ＬＲ	ナデ？		Ⅱ群９類	海綿骨針・粒状の礫含
157	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ	深鉢	口～胴	平縁・やや肥厚	羽状縄文	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
158	ⅡＥ２ａ・Ⅲｂ	深鉢	口	波状	縄文	ＲＬ	ミガキ		Ⅱ群９類	金雲母含
159	ＩＤ５ｂ・Ⅲ	小型土器	口～底	平縁	縄文（無節）・口縁部ナデ	無節Ｌ	ナデ	平坦	Ⅱ群９類	海綿骨針含
160	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	深鉢	胴～底		縄文	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群９類	底部に網代痕・穿孔有・海綿骨針含
161	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	深鉢	胴～底		縄文	ＲＬ	ナデ		Ⅱ群９類	海綿骨針含
162	ⅡＣ１ｄ・Ⅲｂ	深鉢	胴～底		羽状縄文	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群９類	摩滅・海綿骨針含
163	ＩＥ３ａ・Ⅲｂ	不明	底		縄文	ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅱ群９類	海綿骨針含・網代痕
164	ⅡＤ１ａ・Ⅲｂ	鉢	胴～底		縄文	ＬＲ	ミガキ		Ⅱ群９類	海綿骨針含・内面すす付着
165	ⅡＤ２ｃ・Ⅲｂ	深鉢	底		無文（ナデ）		ナデ	平坦	Ⅱ群９類	径１～２㎜の小礫含・網代痕
166	ⅡＤ３ｃ・Ⅲｂ	深鉢	底		櫛歯状文		ナデ		Ⅱ群９類	
167	ⅡＥ２・３ｃ・Ⅲｂ	鉢	口～底	平縁？	無文（ミガキ）・口縁部に塗膜状の黒色付着物（漆？）	無文	ナデ	平坦？	Ⅱ群９類	内面塗膜状の黒色付着物（漆？）
168	ⅡＥ１ｂ・Ⅲｂ	鉢	口～頸	平縁	無文（ナデ）・すす付着	無文	ナデ		Ⅱ群９類	内面すす付着・外面部分的に塗膜状の黒色付着物(漆?)
169	ⅡＥ２・３ｃ・Ⅲｂ	鉢	口～底	平縁？	無文（ミガキ）	無文	ナデ	平坦？	Ⅱ群９類	海綿骨針含
170	ⅡＤ４ｂ・ｃ・Ⅲｂ	鉢	口～底	平縁	無文（胴部上半は部分的にケズリ、下半はナデ）		ナデ	平坦	Ⅱ群９類	海綿骨針含・胎土粗
171	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ	壺？	胴～底		無文（ナデ）	無文	ナデ	平坦	Ⅱ群９類	海綿骨針含
172	ＩＤ５ｂ・Ⅲ	鉢（壺形）	口～底	小波状	無文（ナデ）	無文	ナデ	平坦？	Ⅱ群９類	海綿骨針含
173	ＩＤ５ｂ・Ⅲ	鉢	口～底		無文（ナデ）	無文	ナデ	丸底	Ⅱ群９類	弥生中期～後期の可能性あり
174	ＩＤ５ａ・Ⅲ	台付	底		無文（ナデ）		ナデ	台	Ⅱ群９類	海綿骨針含
175	ⅡＤ１ｂ・Ⅲｂ	台付き鉢	胴～底		沈線・羽状縄文	ＲＬ・ＬＲ	ミガキ？	台	Ⅱ群９類	
176	ⅡＥ２ｄ・Ⅲｂ	注口土器			沈線・無文（ミガキ）				Ⅱ群	接合面にアスファルト付着
177	ⅡＥ４ｄ・Ⅲｂ	注口土器			沈線・無文（ミガキ）・根元部突起				Ⅱ群	接合面にアスファルトorタール
178	調査区西端落ち込み	深鉢	口～胴	平縁　突起(縦位の切込み)	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅱ群10類	海綿骨針含
179	ⅡＤ２ａ・Ⅲｂ	注口土器	口～底	平縁・貼付瘤(又状四単位?)	刻目(縦位沈線状)・貼瘤(ボタン状・Ⅱ文様帯四単位?・Ⅱｂ三単位)・沈線による幾何学文様・縄文	ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅱ群10類	北海道系？・海綿骨針含
180	沢跡から西側	鉢形土器	口～頸	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅲ群１類	
181	ⅡＤ１ａ・Ⅲｂ上面	壺or注口土器	口	突起	沈線・無文（ミガキ？）		ミガキ？		Ⅲ群１類	海綿骨針含・摩滅している

表２　土器・陶磁器観察表　(5)

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部位	口唇部・口縁部形態	文様特徴・外面調整・その他	地文	内面文様・調整等	底部形態	分類	備　　考
182	ＩＤ４ｂ・Ⅲｂ	皿	口～底	突起	無文（ケズリ後ミガキ？）	無文	ケズリ後ミガキ?	平坦	Ⅲ群１類	海綿骨針含
183	西側火山灰中	鉢形土器	口	突起	沈線・縄文・磨消縄文	ＲＬ	ミガキ		Ⅲ群１類	
184	ⅡＥ３ａ・Ⅲｂ	鉢形土器	口	突起	三叉状入組文・縄文	不明	ミガキ		Ⅲ群１類	
185	ⅡＥ４ｂ・Ⅲｂ	鉢形土器	口～頸	平縁	沈線		ミガキ		Ⅲ群１類	海綿骨針含
186	ⅡD1bⅢb・ⅡD2bⅢb	台付鉢形土器	口～底	突起	沈線・縄文・磨消縄文	ＬＲ	ナデ	台	Ⅲ群２類	海綿骨針含
187	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ	鉢形土器	口～胴	突起	沈線・刺突列・縄文（磨消縄文）	ＬＲ	ミガキ		Ⅲ群２類	海綿骨針含
188	ＩＤ４ｄ・Ⅲａ下	皿形土器	口～底	突起	沈線・沈線・縄文・磨消縄文	ＬＲ	ミガキ	平底	Ⅲ群２類	金雲母含
189	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ	注口or鉢形土器	口	小波状・内面一条の沈線	沈線・刻目・突起	ＬＲ	ナデ		Ⅲ群２類	内面すす付着
190	ＩＥ４ａ・Ⅲａ	鉢形土器	口～胴	突起・刻目・内面一条の沈線	沈線・刻目・縄文	ＬＲ	ミガキ		Ⅲ群２類	
191	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ	台付	台		沈線・縄文	無節（L）	ナデ	台	Ⅲ群２類	海綿骨針含
192	ＩＣ５ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口	突起（切り込み）	変形工字文・縄文	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群１類	
193	ⅡＣ１ｃ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	突起（切り込み）	平行沈線・縄文（縄文施文後沈線）・無文（ミガキ）	ＲＬ・ＬＲ	ナデ		Ⅳ群１類	海綿骨針含
194	ⅡＣ１ｃ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	突起（切り込み）	平行沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群１類	摩滅・海綿骨針含
195	ⅡＤ１ｂ・Ⅲｂ	鉢形土器	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群１類	
196	ＩＥ５ｂ・Ⅲａ	甕形土器	頸～胴		変形工字文	ＬＲ？	ミガキ		Ⅳ群１類	海綿骨針含
197	ⅡＤ１ａ・Ⅲａ	高坏	口～胴	突起	平行沈線文・変形工字文・無文（ミガキ）	無文	ミガキ		Ⅳ群１類	部分的に内外面に二次加熱を受けている
198	ＩＥ５ａ・Ⅲａ	高坏	口～底		連弧文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ	台	Ⅳ群１類	海綿骨針含(ごく微量)・径1～2㎜の礫含・胎土比較的粗
199	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	鉢形土器	口～底	突起（切り込み）	平行沈線文・波状沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	かるいミガキ		Ⅳ群１類	径1～3㎜程度の小礫含・赤色顔料が塗布
200	ＩＥ３・４ｂⅢａ	甕形土器？	口	平縁	平行沈線文・波状沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群１類	
201	ⅡＣ１ｃ・Ⅲａ	鉢形土器？	口	平縁・内面二条の沈線	平行沈線文・波状沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅳ群１類	径１～４㎜の小礫含
202	ⅡＤ１ｂ・Ⅲａ	鉢形土器？	口	平縁	波状沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅳ群１類	
203	ＩＥ５ａ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	平行沈線文・連弧文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群１類	赤色顔料が塗布
204	ＩＤ５ｂ・Ⅲａ	甕形土器	肩		平行沈線文・波状沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群１類	径１㎜以下の石英粒少量含
205	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器？	肩		平行沈線文・波状沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群１類	海綿骨針含
206	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器？	胴～底		波状(山形状)沈線文・平行沈線文・縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＲＬ	ナデ	平坦	Ⅳ群１類	径１㎜の小礫含・底面ナデ調整
207	ⅡD1・2ｂベルトⅢｂ	鉢形土器	口～底	平縁	平行沈線文・連弧文・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）・貫通孔	ＬＲ	ナデ	やや丸み	Ⅳ群１類	海綿骨針含（多）・口縁部すす付着
208	ⅡD1c・Ⅲｂ・ＩD5b・Ⅲ	壺	口		波状沈線文・平行沈線文・縄文（磨消縄文）	ＬＲ？	ミガキ		Ⅳ群１類	海綿骨針含（少）
209	ⅡＤ１ｃ・Ⅲａ	鉢形土器	胴～底		連弧文・山形状沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ	やや丸み	Ⅳ群１類	赤色顔料塗布
210	ⅡＤ１ｃ・Ⅲａ	甕or鉢形土器	胴～底		山形状沈線文・平行沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ	平坦？	Ⅳ群１類	海綿骨針含・外面赤色顔料塗布
211	ⅡＥ１ａ・Ⅲａ	甕or鉢形土器	口	平縁	平行沈線文・山形状沈線文		ナデ		Ⅳ群１類	
212	ⅡＥ４ｅ・Ⅲａ	甕形土器？	口	口唇部刻目	平行沈線文・山形状沈線文		ナデ		Ⅳ群１類	
213	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器？	胴		沈線・縄文（磨消縄文）	ＲＬ？	ミガキ		Ⅳ群１類	
214	ＩＥ４ａ・Ⅲａ	甕形土器？	口	平縁・内面横位一条沈線	沈線・刺突・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅳ群１類	
215	ⅡＤ１ｄ・Ⅲａ	甕or鉢形土器	胴		沈線・刺突・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群１類	
216	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	鉢形土器	口～胴	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅳ群１類	
217	ⅡＤ２ｅ・Ⅲａ	高坏	口	突起（切り込み）	沈線・無文（ミガキ）		ミガキ		Ⅳ群１類	
218	ⅡD2a3aベルトⅢｂ	鉢？	底		平行沈線・無文（ナデ）	無文	ナデ	平坦	Ⅳ群１類	海綿骨針含・石英粒含
219	ⅡＤ１ａ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	沈線・刺突・縄文	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群１類	海綿骨針含
220	ＩＥ４ａ・Ⅲａ	長頸甕形土器	口～胴	突起（切り込み）・刻目	結節沈線文or列点文・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）・すす付着	ＲＬ	ミガキ		Ⅳ群２類	雲母粒？含・内面すす付着
221	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	長頸甕形土器	口～頸		平行沈線文・縦位沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群２類	外面すす付着・金雲母少量含
222	ＩＥ５ａ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁・刺突列(左方向の刺突)	結節沈線文or列点文・無文（ナデ）		ナデ		Ⅳ群２類	
223	ＩＥ５ａ・Ⅲａ	甕形土器	頸～底		結節沈線文or列点文(棒状の工具で左方向から施文)・縄文(磨消縄文)	ＲＬ	ナデ	平坦	Ⅳ群２類	内外面にすす付着・器形は山王Ⅲ層式に類する
224	ＩＤ５ｂ・Ⅲａ	甕形土器？	頸？		沈線・結節沈線文or刺突・縄文	無節Ｌ	ミガキ		Ⅳ群２類	
225	ⅡＤ１ｂ・Ⅲａ	台付鉢形土器	口～胴	突起(切り込み間に粘土粒貼付)	平行沈線文・変形工字文・充填刺突・粘土粒貼付・鋸歯文・縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＲＬ	ミガキ		Ⅳ群３類	内面口縁部すす付着・海綿骨針含(ごく微量)
226	ⅡＤ１ｅ・Ⅲａ・ｂ	甕形土器	口～胴	平縁（ＲＬの原体回転）	平行沈線文・二条の列点文・縄文	ＲＬ	ミガキ		Ⅳ群３類	雲母粒含(少量)・内外面口縁部すす付着

表２　土器・陶磁器観察表（6）

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部位	口唇部・口縁部形態	文様特徴・外面調整・その他	地文	内面文様・調整等	底部形態	分類	備考
227	ⅡＤ１ｅ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	小波状(押圧による)・内面沈線	平行沈線・鋸歯文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ミガキ(光沢ある)		Ⅳ群３類	口縁部内面すす付着・胎土橙色を呈す
228	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器	頸～胴		鋸歯文・平行沈線文・縄文	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群３類	内外面にすす付着
229	ＩＥ４ａ・Ⅲａ	壺形土器	頸～胴		鋸歯文上下に四条の平行沈線・鋸歯文(隆帯による貼付と沈線による構成それぞれ三単位)・無文(ナデ)	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群３類	内外面に部分的にすす付着
230	ⅡＤ１ｅ・Ⅲｂ	甕形土器	口～胴	平縁・刻目	平行沈線・変形工字文・刺突・鋸歯状文・縄文(磨消縄文・縄文施文後ナデ)・無文(ナデ)	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群４類	外面口縁部～頸部にすす付着・内面全面にすす付着
231	ＩＤ３ｅ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁・突起（切り込み）	平行沈線・ボタン状貼付文・充填刺突・縄文(磨消縄文)・無文(ナデ)	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群４類	口縁部内外面にすす付着・海綿骨針含？
232	ＩＤ５ｂ・Ⅲａ	蓋形土器	口～底	平縁	渦状沈線文・山形状沈線文・刺突列・縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)	ＬＲ	ミガキ	平坦	Ⅳ群５類	石英粒含・赤色顔料塗布・内外面すす付着
233	ⅡＤ５ｅ・Ⅲａ	蓋形土器	口～底		沈線・縄文	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群５類	胎土に径１～３㎜程度の礫含
234	ⅡＤ３？・Ⅲｂ	蓋形土器	口～底		沈線・縄文・貫通孔（２個１対）・無文（ミガキ）	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群５類	
235	ＩＥ３ｃ・Ⅲａ	脚部	脚部		波状(山形状)沈線文・縦位の沈線(刻目?)・縄文(磨消縄文)・無文(ミガキ)・貫通孔	ＬＲ	ナデ	脚部	Ⅳ群５類	
236	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	脚部	脚部		平行沈線・縄文（磨消縄文）	ＬＲor無節Ｌ	ミガキ		Ⅳ群５類	径１～３㎜の小礫含
237	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口～底	平縁	平行沈線文・縄文(磨消縄文・横位)・施文後縄文地にナデ・無文(ナデ)	ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅳ群６類	
238	ⅡＤ１ｅ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁	平行沈線文・縄文（磨消縄文・斜位）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１㎜の小礫含
239	ＩＤ５ｄ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	平縁？	平行沈線・縄文（磨消縄文）・無文（かるいナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	内面すす付着
240	ＩＥ３ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	平縁・口唇部にLR縄文回転	平行沈線文・無文（ナデ）		ナデ		Ⅳ群６類	
241	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	平縁	沈線・無文（ミガキ）		ナデ		Ⅳ群６類	海綿骨針含
242	ⅡＤ２ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁・突起（切り込み）	平行沈線・無文（かるいミガキ）		ナデ		Ⅳ群６類	海綿骨針含・内面すす付着
243	ⅡＥ３ａ・Ⅲｂ	深鉢	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅳ群６類	海綿骨針・石英粒少量含
244	ＩＤ５ｅ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	突起（切り込み）	平行沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	雲母粒？含・内外面に若干のすす付着
245	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	平行沈線文・無文（ナデ）		ナデ		Ⅳ群６類	
246	ＩＥ５ａ・Ⅲａ	壺形土器	口	平縁	平行沈線・無文（ミガキ）		ミガキ		Ⅳ群６類	雲母粒？ごく少量含
247	ⅡＤ１ｅ・Ⅲａ	壺形土器	口	小波状・口唇部にLR縄文	平行沈線文・縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	海綿骨針含（微量）
248	Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁	縄文(横位)施文後部分的にケズリ・口縁部ナデ・部分的にすす付着	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１～２㎜の小礫含・内面に部分的にすす付着
249	Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	雲母粒？ごく少量含・径1～2㎜の小礫含
250	ⅡＤ１ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１～３㎜の小礫含
251	ＩＥ４ａ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	無文（ナデ）		ナデ		Ⅳ群６類	径１～３㎜の小礫含・外面すす付着
252	ⅡＤ１ｂ・Ⅲｂ	甕形土器	口～底	平縁	縄文（縄文施文後ナデ）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	海綿骨針含（微量）
253	Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁	縄文・無文（ナデ）・すす付着	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	
254	ＩＤ３ｄ・Ⅲｂ	甕形土器	口～底	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ	平底	Ⅳ群６類	海綿骨針含（少量）
255	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）・口縁部分的にすす付着	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径0.5～２㎜の小礫含・口縁に部分的に付着
256	ⅡＤ１ｂ・Ⅲｂ	甕形土器	口～胴	平縁	縄文（縄文施文後無文部ナデ）・無文（ナデ）	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群６類	
257	ＩＤ４ｂ・Ⅲｂ	甕形土器	頸～胴		縄文（縄文施文後ナデ）	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群６類	
258	ⅡＤ１ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	雲母粒？少量含・径１～２㎜の小礫含
259	グリッド不明・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁	縄文（縄文施文後無文部ナデ）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１～３㎜程度の小礫含
260	ＩＤ５ｃ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	雲母粒？少量含・径１㎜程度の小礫含
261	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１～２㎜の小礫含
262	Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	
263	ＩＤ５ｅ・Ⅲａ	甕形土器	頸～肩		縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１～２㎜の小礫含
264	ⅡＥ２ｃ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ミガキ		Ⅳ群６類	雲母粒？少量含・径１～２㎜の小礫含
265	ＩＤ５ｂ・Ⅲ	深鉢or甕形土器	口～底	平縁	縄文（無節）・口縁部ナデ調整	無節（Ｌ）	ナデ	平坦	Ⅳ群６類	口縁部内面・胴部外側に部分的にすす付着・海綿骨針含?
266	ＩＥ３ａ・Ⅲａ	甕形土器	口～胴	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ミガキ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	
267	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁？	縄文	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１～３㎜の小礫含
268	Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＲＬ	ミガキ		Ⅳ群６類	径１～２㎜の小礫含
269	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	鉢形土器	口	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	
270	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	甕形土器	口	平縁	縄文（磨消縄文・縄文重複）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	
271	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	鉢？	口	平縁	沈線・縄文（磨消縄文）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	外面すす付着

表２　土器・陶磁器観察表 (7)

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部位	口唇部・口縁部形態	文様特徴・外面調整・その他	地文	内面文様・調整等	底部形態	分類	備　　考
272	ＩＥ５ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群６類	雲母粒？少量含・径１～２㎜の小礫含
273	ＩＥ３ａ・Ⅲａ	甕形土器	口		縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	内外面すす付着
274	ＩＥ５ａ・Ⅲａ	甕形土器	口		縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	雲母粒少量含・内外面すす付着
275	グリッド不明・Ⅲａ	甕形土器	口	小波状・指頭圧痕	縄文（縄文施文後ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１㎜程度の小礫含
276	ⅡＤ１ｄ・Ⅲａ	甕形土器	口	小波状・指頭圧痕	縄文（縄文施文後ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１～４㎜の小礫含
277	ＩＤ５ｅ・Ⅲａ	甕形土器	口	小波状・指頭圧痕	縄文（縄文施文後ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径１～２㎜の小礫含
278	ⅡＥ１ａ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	小波状・指頭圧痕	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	ＬＲ？	ナデ		Ⅳ群６類	雲母粒?少量含・内外面に若干のすす付着
279	ⅡＤ１ｅ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	小波状・指頭圧痕	縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）	不明	ナデ		Ⅳ群６類	雲母粒？少量含・外面若干すす付着
280	ＩＤ５ｂ・Ⅲ	甕形土器	胴～底		縄文（縄文施文後無文部ナデ）	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	内面胴部すす付着
281	ＩＤ４ａ・Ⅲａ	甕形土器	頸～胴		縄文・すす付着	ＬＲ	ナデ		Ⅳ群６類	径1～3㎜の小礫含・雲母粒?少量含・内面すす付着
282	ⅡＤ１ｂ・Ⅲａ	甕形土器？	胴～底		縄文（縄文施文後ナデ）	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群６類	海綿骨針含
283	ⅡＥ４ａ・Ⅲａ	甕形土器？	胴～底		縄文（縄文施文後ナデ）	ＬＲ	ナデ	平坦	Ⅳ群６類	径１㎜以下の小礫含
284	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	深鉢？	胴～底		縄文・全体的にミガキ・部分的にケズリ	ＬＲ？	ケズリ		Ⅳ群６類	底部に網代痕　海綿骨針含
285	ＩＥ３ａ・４ａ・ｂⅢａ	甕形土器	底		縄文（縄文施文後ナデ）	ＲＬ	ナデ		Ⅳ群６類	海綿骨針含（多）
286	ＩＤ５ｂ・Ⅲ	甕or深鉢	胴～底		縄文・胴部部分的にケズリ	ＬＲ	ケズリ		Ⅳ群６類	
287	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器？	底		縄文（縄文施文後ナデ）	ＬＲ	ナデ	平底	Ⅳ群６類	石英粒少量含
288	０Ｉ５ｅ・Ⅲａ	甕形土器	頸		撚糸文・綾繰文（端部結束による綾繰り文？）・無文（ナデ）	撚糸文（Ｒ）	ナデ		Ⅳ群６類	海綿骨針含（微量）・外面すす付着
289	ＩＤ４ｅ・Ⅲａ	甕形土器	胴		縄文・すす付着	撚糸文（Ｒ）	ナデ		Ⅳ群６類	径1～5㎜の小礫含・雲母粒?少量含・内面すす付着
290	ＩＤ４ｅ・Ⅲａ	甕形土器？	底		縄文	撚糸文（Ｒ）	ナデ	平底	Ⅳ群６類	径1～2㎜の小礫含・Ⅴ群の可能性もある
291	ＩＤ３ｅ・Ⅲａ	高坏？	台		縄文	ＬＲ	ナデ	台	Ⅳ群６類	径１～２㎜の小礫含
292	グリッド不明・Ⅲａ	台	台		縄文・無文（ミガキ）	ＬＲ？	ナデ	台	Ⅳ群６類	石英粒少量含・海綿骨針含
293	ⅡＤ2b・Ⅲb・ⅡＤ1b・Ⅲb	甕形土器	口～底	平縁	無文（ナデ調整が施される）・頸部付近すす付着	無文	ナデ	平坦	Ⅳ群６類	径1㎜程度の礫含・内面頸部除きすす付着
294	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	甕形土器	口～底	平縁	無文（口縁部ナデ・胴部縦方向のケズリ）	無文	ナデ	平坦	Ⅳ群６類	径１～２㎜程度の小礫含
295	ⅡＥ４ｂ・Ⅲａ	鉢形土器？	頸～底		無文（かるいミガキ）・すす付着	無文	ナデ	平坦	Ⅳ群６類	径1～4㎜程度の小礫含・胎土淡黄色・Ⅴ群か?
296	ＩＥ４ｂ・Ⅲｂ	鉢？	口？		無文（ナデ）				Ⅳ群６類	石英含
297	ⅡＤ1・２ａベルトⅢｂ	深鉢？　口	口	平縁	無文（ナデ）		ナデ		Ⅳ群６類	海綿骨針含
298	ＩＥ５ｄ・ｅ・Ⅲａ	甕形土器	口～頸	平縁・原体回転・突起(原体圧痕)	退化交互刺突文・連弧文間に菱形文・菱形文内に縦方向の鋸歯状文が施される・縄文	撚糸文Ｒ？	ナデ		Ⅴ群	原体端部を結束した綾繰文?・撚糸文or附加条
299	ＩＥ４・５ｅ・Ⅲａ	甕形土器	頸～底		退化交互刺突文・連弧文間に菱形文・菱形文内に縦方向の鋸歯状文が施される・縄文(綾繰文蹙垂)	撚糸文Ｒ？	ナデ	平底	Ⅴ群	原体端部を結束した綾繰文?・撚糸文or附加条
300	ＩＤ５ｅ・Ⅲａ	甕形土器	口	平縁	退化交互刺突文・平行沈線文・刺突文		ナデ		Ⅴ群	径１㎜以下の礫含　金雲母微量含
301	ＩＥ５ｅ・Ⅲａ	甕形土器	頸		交互刺突文・沈線・縄文（磨消縄文）・無文（ナデ）		ナデ		Ⅴ群	
302	ＩＤ５ｅ・Ⅲａ	甕形土器？	胴		連弧文・平行沈線文・刺突列・縄文（磨消縄文）	ＲＬ	ケズリ		Ⅴ群	海綿骨針含（微量）・径１～２㎜の礫含
303	ⅡＤ５ｅ・Ⅲａ	壺形土器	口～胴	平縁・ＲＬorＲの原体回転	退化交互刺突文(口縁部一周せず途切れる)・沈線・縄文(頸部と平行及び斜走するRL原体圧痕)	LRの原体圧痕・RL	ナデ		Ⅴ群	RLの撚糸文or附加条(特殊撚糸文)場所によって重複
304	ＩＥ４ｂ・Ⅲａ	壺形土器	頸		平行沈線文・鋸歯状沈線文・縄文（撚糸or綾繰り）	ＲＬ	ナデ		Ⅴ群	ＲＬの撚糸文or附加条（特殊撚糸文）
305	ＩＥ４ａ・Ⅲａ	甕or壺形土器	胴		鋸歯状の沈線文・縄文（撚糸文）	Ｌ撚り糸文？	ナデ		Ⅴ群	径１～２㎜の石英・少礫含
306	ＩＤ５ｅ・Ⅲａ	甕形土器	底		縄文	撚糸文(Ｒ)？	ナデ	平底	Ⅴ群	
377	グリッド不明・Ⅲａ上面	台付	台		外面はナデ・内面はミガキ		ミガキ			海綿骨針含
378	ⅡＤ3a・To−aブロック	土師器	口～底	平縁	外面（口）ヨコナデ・（胴～底）ケズリ、内面ミガキ		ミガキ		土師器	海綿骨針含
379	ⅡＤ３ｂ・Ⅲａ	磁器皿	底		青白磁・見込み「ねこかき」				中世	産地中国・青白磁・12世紀
380	ＩＤ４ｂ・Ⅲｂ	磁器	不明		青磁		青磁		中世	産地中国・青磁・14～15世紀
381	ⅡＤグリッド火山灰	陶器皿	口～底		長石釉				近世	瀬戸・美濃産・16C末～17Ｃ初

表３　土偶観察表

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部　　位	文様特徴等	時　　期	備　　考
47	1号住居状遺構埋土上位	土偶	足部左	無文（ミガキ）	縄文後期中葉～後葉	ミガキによる調整
307	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	土偶	顔（頸部から下欠損）	表、貼付による成形・裏、沈線による縄文（ＲＬ）と無文部（ミガキ）の区画	縄文後期中葉	
308	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ	土偶	頸～足付け根（顔部・腕部・足部・腹部・胸部欠損）	沈線による縄文（ＬＲ？）と無文部（ミガキ）の区画・鋸歯状の沈線	縄文後期中葉	径１～５㎜の礫多く含
309	ⅡＤ３ｃ・Ⅲｂ	土偶	頭部～尻部？（顔部・腕部・足部欠損）	無文（ミガキ）	縄文後期後葉	
310	ⅡＥ１ａ・Ⅲｂ	土偶		竹管刺突・沈線・無文（ナデ）	縄文後期中葉	
311	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	土偶	腕部左・肩部左	竹管刺突・無文（ナデ）	縄文後期中葉	
312	ⅡＤ４ｂ・Ⅲｂ	土偶	腕部右・肩部右	竹管刺突・無文（ナデ）	縄文後期中葉	
313	ⅡＤ３ａ・ｂⅢｂ	土偶	足部右	沈線・無文（ミガキ及びナデによる調整）	縄文後期中葉～後葉	
314	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ	土偶	足部右	沈線による縄文（ＬＲ？）と無文部（ミガキ）の区画・無文（ミガキ）	縄文後期中葉	
315	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ	土偶	足部右	沈線・縄文（ＬＲ？）・無文（ナデ）	縄文後期中葉	
316	ⅠＥ４ａ・Ⅲｂ	土偶	足部右	無文（ナデ）	縄文後期中葉～後葉	
317	ⅠＤ５ｅ・Ⅲａ	土偶	足部右	充填刺突・沈線・無文（ナデ）	弥生前期～中期	

表４　スタンプ形等の土製品

掲載番号	出土地点・層位	器種名	部位	備　　考
52	１号住居状ベルト１層	土錘	半分	沈線状の溝・無文（ミガキ）
318	ⅡＣ３ｅ・Ⅲａ	スタンプ形	完形	沈線・無文（ナデ）
319	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ	スタンプ形	完形	らんせん状の沈線・孔・無文（ナデ）
320	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	スタンプ形	半分？	沈線・無文（ナデ）
321	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ	土錘	完形	沈線・無文（ナデ）
322	ⅡＣ１ｃ・Ⅲａ	不明	完形？	無文（ナデ）
323	ⅠＤ５ｅ・Ⅲａ	不明	完形？	無文（ナデ）・孔
324	ⅠＤ５ｄ・Ⅲａ	勾玉	完形	時期不明
325	№８　Ⅲａ	耳飾り	完形	
326	ⅠＥ５ｂ・Ⅲａ	不明	半分？	孔・無文（ナデ）・時期不明

表５　円盤状土製品 (1)

掲載番号	出土地点･層位	器種名	部位	文様特徴	備　　考
327	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠
328	ⅡＤ４ｅ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠・すす付着
329	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠
330	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠
331	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＲＬ縄文	側縁打欠・すす付着・口縁部
332	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠
333	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＲＬ縄文	側縁打欠
334	ⅡＤ３ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＲＬ縄文	側縁打欠
335	ⅡＥ２ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠・すす付着
336	ⅡＥ２ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠
337	ⅡＤ３ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠
338	ⅠＤ５ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠
339	ⅡＤ４ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＲＬ縄文	側縁打欠
340	ⅡＤ４ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＲＬ縄文？	側縁打欠
341	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＲＬ縄文？	側縁打欠
342	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	縄文	側縁打欠
343	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	縄文	側縁打欠
344	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ	円盤状土製品	半分	ＬＲ縄文	側縁打欠
345	ⅡＥ２ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・ＬＲ縄文？	側縁打欠
346	ⅡＥ４ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文・無文（ミガキ）	側縁打欠
347	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・ＲＬ（０段多条）・無文（ミガキ）	側縁打欠
348	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・ＲＬ（０段多条）	側縁打欠
349	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・ＬＲ縄文・無文（ミガキ）	側縁打欠
350	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・ＬＲ縄文	側縁打欠
351	ⅡＤ２ａ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・ＲＬ縄文	側縁打欠
352	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線	側縁打欠
353	ⅡＤ２ａ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・ＲＬ（０段多条）	側縁打欠
354	ⅡＣ１ｅ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・縄文・無文（ミガキ）	側縁打欠
355	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	無文（ミガキ）	側縁打欠
356	ⅡＤ１ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・ＲＬ（０段多条）	側縁打欠
357	ⅡＥ４ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・羽状縄文（異方向）・無文（ミガキ）	側縁打欠
358	ⅡＥ２ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	無文（ミガキ）	側縁打欠・口縁部
359	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	無文（ミガキ）	側縁打欠
360	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	無文（ミガキ）	側縁打欠
361	ⅡＣ１ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	無文（ナデ）	側縁打欠
362	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	無文（ナデ）	側縁打欠

表５　円盤状土製品 (2)

掲載番号	出土地点･層位	器種名	部位	文様特徴	備　　考
363	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・無文（ミガキ）	側縁打欠
364	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＲＬ縄文？・０段多条？	側縁打欠及磨
365	ⅡＤ３ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＲＬ縄文	側縁磨
366	ⅡＣ１ｅ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	縄文	側縁磨
367	ⅡＥ２ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁打欠及磨
368	ⅡＥ２ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	縄文	側縁打欠及磨
369	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文？	側縁磨
370	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁磨・塗膜状の黒色付着物（？）
371	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁磨・塗膜状の黒色付着物（？）
372	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線・羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）	側縁磨
373	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	ＬＲ縄文	側縁磨
374	ⅡＥ４ｄ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	沈線	側縁磨
375	ⅠＥ２ｅ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	無文（ミガキ）	側縁磨
376	ⅠＥ２ｃ・Ⅲｂ	円盤状土製品	完形	無文（ミガキ）	側縁磨

表６　石器・石製品観察表 (1)

番号	出土地点･層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(ｇ)	特徴・備考	石材	産地	分類
1	１号住居埋土中位	石匙	5.35	3.25	9.50	13.34		頁岩		
2	１号住居埋土中位	掻・削器	3.40	3.70	0.90	7.39	平刃形	頁岩		
3	１号住居埋土下位	掻・削器	2.55	2.30	0.80	2.92		頁岩		
4	１号住居埋土下位	掻・削器	5.40	4.25	1.20	35.57	弧刃形	頁岩		
5	１号住居床面	石錘	6.10	7.00	1.75	108.12		安山岩	奥羽山脈	
6	１号住居埋土下位	石錘	6.90	8.00	1.55	130.47		安山岩	奥羽山脈	
7	１号住居埋土下位	石錘	6.10	7.50	1.95	128.94	ほぼ片面　敲打	安山岩	奥羽山脈	
8	１号住居埋土上～中位	石錘＋凹石	6.60	10.50	2.65	263.19	凹石２→石錘	安山岩	奥羽山脈	
9	１号住居埋土中位	石錘	8.25	9.15	2.20	250.14		安山岩	奥羽山脈	
10	１号住居埋土上位	敲石＋凹石	12.50	6.75	4.05	425.70	両端部　凹みは片面　磨りは一側面	安山岩	奥羽山脈	
11	１号住居埋土下位	凹石	10.00	6.80	3.25	304.48		安山岩	奥羽山脈	

表6　石器・石製品観察表 (2)

番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴・備考	石材	産地	分類
12	1号住居埋土下位	敲石＋磨石	10.80	9.20	6.00	783.21	一端部　凹みは片面　磨き両面	安山岩	奥羽山脈	
13	1号住居埋土下位	磨製石斧	7.70	4.70	2.80	159.61		ひん岩	北上山地	
14	5号住居埋土	石匙	－	2.10	0.70	3.10		頁岩	奥羽山脈	
15	5号住居埋土	石錐	3.10	1.60	0.50	1.20		頁岩		
16	5号住居埋土	石錐	3.30	1.00	0.70	2.10		頁岩		
17	5号住居埋土下位	打製石斧	－	6.70	3.40	282.30	未製品か	はんれい岩	北上山地	
18	5号住居埋土	石錘	5.20	7.50	1.50	100.70		安山岩	奥羽山脈	
19	5号住居埋土	石錘	6.30	7.40	2.10	137.03		頁岩		
20	5号住居埋土	石錘	6.45	8.10	2.15	167.17		安山岩	奥羽山脈	
21	1号住居状遺構埋土	磨製石斧	9.00	4.30	2.50	178.26		はんれい岩	北上山地	
22	1号住居状遺構床面	石錘	4.50	7.10	2.05	88.54		安山岩	奥羽山脈	
23	1号住居状遺構埋土	石錘	7.20	9.80	2.74	240.37		石英安山岩	奥羽山脈	
24	1号住居状遺構埋土	石錘	7.90	11.70	2.55	227.47		安山岩	奥羽山脈	
25	1号住居状遺構埋土	石錘	9.90	8.10	2.60	315.56		石英安山岩	奥羽山脈	
26	1号住居状遺構埋土	磨石	9.70	8.30	5.90	696.56		安山岩	奥羽山脈	
27	1号住居状遺構埋土	磨石＋敲石	11.00	10.20	5.70	974.84		安山岩	奥羽山脈	
28	1号住居状遺構埋土	凹石	15.50	6.40	3.50	522.08		安山岩	奥羽山脈	
29	ⅠD3e・Ⅲa	石鏃	(3.1)	1.15	0.40	1.50	無茎	頁岩	奥羽山脈	1
30	ⅡE4b・Ⅲa	石鏃	2.30	1.50	0.40	0.90	有茎	赤色頁岩	奥羽山脈	2a
31	ⅠD5e・Ⅲa	石鏃	3.50	1.80	0.30	1.80	有茎	頁岩		2a
32	ⅠE4a・Ⅲa	石鏃	2.10	0.95	0.47	0.40	有茎	頁岩		2b
33	ⅠE3b・Ⅲa	石鏃	2.50	1.10	0.30	0.45	有茎	頁岩		2b
34	ⅠD5d・Ⅲa	石鏃	3.30	1.75	0.80	2.51	有茎	頁岩		2b
35	ⅠE4a・Ⅲa	石鏃	2.50	1.30	0.37	0.91	有茎・基部にアスファルト？付着	めのう？		2b
36	ⅡD2e・Ⅲa	石鏃	1.60	0.95	0.30	0.23	有茎	めのう	奥羽山脈	2b
37	ⅠD3e・Ⅲa	石鏃	2.10	1.10	0.32	0.47	有茎	頁岩		2b
38	ⅡD2e・Ⅲa	石鏃	1.70	1.30	0.30	0.64	有茎	頁岩	奥羽山脈	2b
39	2号住石囲炉付近床面下5cm	石鏃	2.90	1.00	0.35	0.20	アメリカ式	珪質頁岩		3
40	ⅡD1e・Ⅲa	石錐	3.40	0.80	0.58	0.96		赤色頁岩	奥羽山脈	
41	2号住石囲炉付近床面	石篦	3.90	1.30	0.80	4.03		頁岩		
42	ⅠD5c・Ⅲa層	磨製石斧	11.30	5.60	2.30	257.74		頁岩	北上山地	1
43	Ⅲa	磨製石斧	9.40	4.50	3.40	204.75		はんれい岩	北上山地	1
44	ⅠE4a・Ⅲa	打製石斧	7.80	4.40	1.70	58.42		めのう	奥羽山脈	2
45	ⅡC2e・Ⅲa	石錘	4.40	8.10	2.50	201.80		安山岩	奥羽山脈	
46	Ⅲa	石錘？	11.00	10.60	3.20	563.23		石英安山岩	奥羽山脈	

表6　石器・石製品観察表 (3)

番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴・備考	石材	産地	分類
47	Ⅲa	石錘or敲石?	10.70	5.10	3.50	279.90		安山岩	奥羽山脈	
48	ⅠE4b・Ⅲa	石錘or敲石?	7.80	6.60	3.85	301.28		安山岩	奥羽山脈	
49	ⅠD3d・Ⅲb	磨石	9.30	7.00	4.80	482.09		閃緑岩	北上山地	
50	Ⅲa	磨石	10.50	8.90	7.80	1131.54		閃緑岩	北上山地	
51	ⅠE4a・Ⅲa	凹石	4.60	3.95	2.80	79.52		安山岩	奥羽山脈	
52	ⅠE4a・Ⅲa	凹石	10.80	7.70	3.50	431.40		安山岩	奥羽山脈	
53	ⅡD2e・Ⅲa	凹石	11.10	5.95	3.09	267.46		安山岩	奥羽山脈	
54	Ⅲa	凹石	9.60	8.50	4.80	523.22		安山岩	奥羽山脈	
55	Ⅲa	凹石	12.75	6.90	4.90	541.78		安山岩	奥羽山脈	
56	ⅠD5d・Ⅲa	石錘?+敲石	10.10	8.30	3.10	377.79	敲打痕	安山岩	奥羽山脈	
57	ⅠE3b・Ⅲa	石製品?	4.30	3.30	0.90	19.74	側縁に溝を有する・擦痕が認められる	砂岩		
58	ⅠE4b・Ⅲa	石製品	0.70	0.70	0.30	0.88		?		
59	ⅡD2b・Ⅲb中層	石鏃	2.40	1.60	0.50	1.06	無茎	珪質頁岩		1
60	ⅡD2b・Ⅲb下層	石鏃	2.10	1.60	0.40	0.16	有茎	珪質頁岩		2a
61	ⅡE3d・Ⅲb	石鏃	2.20	1.55	0.35	0.85	有茎	頁岩		2a
62	ⅡE3b・Ⅲb	石鏃	2.30	1.65	0.60	1.23	有茎	頁岩	奥羽山脈	2a
63	ⅡE3a・Ⅲb	石鏃	2.00	1.40	0.40	0.65	有茎	へき玉	奥羽山脈	2a
64	ⅡE3d・Ⅲb	石鏃	2.30	0.40	1.30	1.55	有茎	頁岩		2a
65	ⅡC2e・Ⅲb上層	石鏃	2.85	1.30	0.35	0.18	有茎	頁岩		2a
66	ⅡE2c・Ⅲb	石鏃	(1.8)	1.30	0.40	0.26	有茎	めのう	奥羽山脈	2b
67	ⅠE4a・Ⅲa	石鏃	1.70	1.50	0.40	0.72	有茎	珪質頁岩		2b
68	ⅡD1e・Ⅲb	石鏃	2.70	1.50	0.40	0.94	有茎	頁岩	奥羽山脈	2b
69	ⅡD2a・Ⅲb上層	石鏃	2.65	1.40	0.45	0.41	有茎	頁岩		2b
70	ⅡD5e・Ⅲb	石鏃	(2.0)	0.40	1.20	0.66	有茎	頁岩	奥羽山脈	2b
71	ⅡC1b・1cベルトⅢa・b層	石鏃	(2.8)	1.60	0.55	1.90	有茎	頁岩		2b
72	ⅡC2e・Ⅲb上層	石鏃	3.15	1.60	0.55	1.56	有茎	頁岩		2b
73	ⅡD1b・Ⅲb上層	石鏃	3.50	1.40	0.50	1.17	有茎	頁岩		2b
74	ⅡD1b・Ⅲb上層	石鏃	(2.7)	1.45	0.55	1.02	有茎	頁岩		2b
75	ⅠD4c・Ⅲb下層	石鏃	(2.0)	1.10	0.30	0.38	有茎	頁岩		2b
76	ⅠD4c・Ⅲb下層	石鏃	−	1.10	0.30	0.33	有茎	頁岩		2b
77	ⅡD3c・Ⅲb	石鏃	2.15	1.40	0.30	1.04	有茎	頁岩	奥羽山脈	2b
78	ⅡD3c・Ⅲb	石鏃	3.80	2.80	0.60	4.65	基部破損	頁岩	奥羽山脈	3
79	ⅡD3a・Ⅲb中層	石鏃	3.60	2.00	0.90	4.11	尖刃形・未製品？	頁岩		3
80	ⅡE5?・Ⅲb	石錐	3.50	2.00	0.60	2.08		頁岩	奥羽山脈	
81	ⅡE3a・Ⅲb	石錐	3.20	1.20	0.50	1.39		珪質頁岩	奥羽山脈	

表6　石器・石製品観察表 (4)

番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴・備考	石材	産地	分類
82	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	石錐	4.40	1.30	0.50	1.72		頁岩	奥羽山脈	
83	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	石錐	3.70	0.80	0.50	1.25		めのう	奥羽山脈	
84	ⅡＤ４ａ・Ⅲｂ下層	石錐	3.60	1.10	0.80	3.31		頁岩		
85	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	石錐	5.30	1.15	0.75	4.80		頁岩	奥羽山脈	
86	不明	石錐	2.90	0.55	0.50	0.60		珪質頁岩		
87	ⅡＥ１ａ・Ⅲｂ	石匙	7.80	3.90	1.30	36.70		頁岩	奥羽山脈	
88	ⅡＤ３ｃ・Ⅲｂ	石匙	8.10	4.30	1.45	24.73		頁岩	奥羽山脈	
89	沢跡西側・Ⅲｂ	石匙	4.60	6.65	0.80	16.88		頁岩	奥羽山脈	
90	ＩＣ５ｄ・Ⅲ層	石匙	3.60	6.50	0.75	10.09	横型	頁岩		
91	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	石匙	4.00	6.05	1.00	18.97		頁岩	奥羽山脈	
92	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	掻・削器	4.40	3.40	1.10	17.90		頁岩	奥羽山脈	
93	ⅡＤ２ａ・Ⅲｂ上層	掻・削器	3.40	2.70	0.90	6.47	両面調整	頁岩	奥羽山脈	
94	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	異形石器	2.40	2.10	0.40	1.69		黒曜石		
95	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	異形石器	2.15	1.80	0.25	0.95		頁岩	奥羽山脈	
96	ⅡＣ１ｅ・Ⅲｂ	石核	5.80	5.40	4.30	113.76		頁岩	奥羽山脈	
97	ⅡＤ４ａ・Ⅲｂ下層	石核	5.00	4.30	3.30	53.86		頁岩	奥羽山脈	
98	ＩＤ５ｂ・柱穴状ピット群検出面	石核	6.90	6.90	5.10	145.62		頁岩	奥羽山脈	
99	ＩＤ５ｅ・Ⅲｂ	磨製石斧	－	4.90	2.90	262.42		頁岩	北上山地	1
100	ⅡＥ２ｄ・Ⅲｂ	磨製石斧	－	3.00	1.80	22.62		頁岩	北上山地	1
101	ⅡＣ１ｂ・Ⅲ層	磨製石斧	－	2.30	1.10	48.06		超塩基性岩?	当地域に存在しない	1
102	ⅡＤ４・ａｂ・ベルトⅢｂ層	磨製石斧	－	3.20	1.30	48.61		超塩基性岩?	当地域に存在しない	1
103	ⅡＥ１ｄ・Ⅲｂ	磨製石斧	－	4.10	2.30	100.28		はんれい岩	北上山地	1
104	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	磨製石斧	－	4.65	2.60	116.04		はんれい岩	北上山地	1
105	ＩＣ５ｂ・Ⅲ層	磨製石斧	－	4.60	2.40	164.93		ひん岩	北上山地	1
106	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	磨製石斧	－	3.65	1.65	51.82		ひん岩	北上山地	1
107	ⅡＥ３ｂ・Ⅲｂ	磨製石斧	－	5.80	3.40	218.74		ひん岩	北上山地	1
108	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ下層	磨製石斧	5.80	1.60	0.70	8.37	小形	頁岩	北上山地	1
109	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	磨製石斧	5.60	2.50	1.00	20.12		頁岩	北上山地	1
110	ⅡＤ２ｅ・Ⅲｂ	磨製石斧	－	1.45	0.80	5.63		はんれい岩	北上山地	1
111	ⅡＥ３ａ・Ⅲｂ	磨製石斧	－	1.60	0.95	6.80		はんれい岩	北上山地	1
112	ⅡＥ４ｂ・Ⅲｂ	打製石斧	6.60	4.00	1.73	52.73		頁岩	北上山地	2
113	ⅡＣ１ｅ・Ⅲｂ上層	打製石斧	10.60	4.30	2.50	184.47		ホルンフェルス	北上山地	2
114	ＩＥ４ｂ・Ⅲｂ	石斧	12.40	7.60	3.85	562.56	未製品？	はんれい岩	北上山地	3
115	ⅡＤ１ｃ・Ⅲａ層	石錘	5.60	7.00	1.50	64.54		頁岩	北上山地	１ａ
116	ＩＣ５ｂ・Ⅲ層	石錘	6.50	8.70	2.00	201.24		安山岩	奥羽山脈	１ａ

表6　石器・石製品観察表 (5)

番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴・備考	石材	産地	分類
117	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ中層	石錘	8.80	9.70	1.90	275.41		安山岩	奥羽山脈	１ａ
118	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ中層	石錘	4.40	7.10	1.20	81.49		ひん岩	北上山地	１ａ
119	ⅡＤ４ｂ・ｃ・ベルトⅢｂ下層	石錘	6.20	8.30	2.10	193.76		安山岩	奥羽山脈	１ａ
120	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ下層	石錘	6.75	9.60	1.70	164.74		安山岩	奥羽山脈	１ａ
121	ⅡＣ１ｅ・Ⅲａ層	石錘	5.60	11.00	2.50	265.06		安山岩	奥羽山脈	１ａ
122	ⅡＤ２ｂ・Ⅲｂ中層	石錘	5.30	7.00	1.50	61.72		安山岩	奥羽山脈	１ａ
123	ⅡＣ１ｄ・Ⅲｂ中層	石錘	7.00	9.40	2.10	222.64		安山岩	奥羽山脈	１ａ
124	２号住石囲炉付近床面	石錘	9.70	7.60	2.60	249.98		安山岩	奥羽山脈	１ｂ
125	ⅡＤ３ｂ・ｃ・ベルトⅢａ層	石錘	6.90	9.90	2.60	178.37		安山岩	奥羽山脈	１ａ
126	ⅡＤ１・ｂ・ｃ・ベルト１層	石錘	5.20	7.00	2.00	117.83		安山岩	奥羽山脈	１ａ
127	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	石錘	5.30	6.80	1.60	88.17		頁岩	北上山地	１ａ
128	ⅡＤ３・４ｂベルトⅢ層	石錘	6.10	8.60	1.30	86.57		石英安山岩	奥羽山脈	１ａ
129	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ下層	石錘	6.00	9.40	2.60	291.34		安山岩	奥羽山脈	１ａ
130	２号住石囲炉付近床面下５cm	石錘	6.40	10.10	2.10	331.58		安山岩	奥羽山脈	１ａ
131	ⅡＤ４ｂ・Ⅲｂ中層	石錘	4.20	7.30	1.50	79.62		安山岩	奥羽山脈	１ａ
132	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ層	石錘	5.10	9.00	2.00	169.20		安山岩	奥羽山脈	１ａ
133	ⅠＤ５ｂ・Ⅲ層	石錘	5.40	9.40	1.60	171.15		閃緑岩	北上山地	１ａ
134	ⅡＤ２ａ・Ⅲｂ上層	石錘	5.80	7.70	1.70	91.81		安山岩	奥羽山脈	１ａ
135	ⅡＣ１ｅ・Ⅲｂ下層	石錘	5.40	8.30	2.30	185.88		安山岩	奥羽山脈	１ａ
136	ⅠＣ５ｃ・Ⅲ層	石錘	6.80	7.20	2.00	121.83		安山岩	奥羽山脈	１ａ
137	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ層下層	石錘	5.10	7.60	1.10	97.02		砂岩	北上山地	１ａ
138	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ層	石錘	5.20	9.50	1.70	162.55		安山岩	奥羽山脈	１ａ
139	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ層下層	石錘	5.00	6.60	1.70	72.71		頁岩	北上山地	１ａ
140	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	石錘	7.00	10.50	1.96	229.90		安山岩	奥羽山脈	１ａ
141	ⅠＥ５ｂ・Ⅲｂ	石錘	5.40	8.20	2.00	117.90		安山岩	奥羽山脈	１ａ
142	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	石錘	4.50	5.50	2.00	72.60		安山岩	奥羽山脈	１ａ
143	ⅡＥ３ａ・Ⅲｂ	石錘	6.40	8.60	2.40	182.72		頁岩	北上山地	１ａ
144	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	石錘	9.15	10.95	2.00	300.99		安山岩	奥羽山脈	１ａ
145	ⅡＤ３ｃ・Ⅲｂ	石錘	4.60	7.40	1.80	87.87		頁岩	北上山地	１ａ
146	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	石錘	5.00	7.30	1.70	94.94		安山岩	奥羽山脈	１ａ
147	ⅡＥ２ｃ・Ⅲｂ	石錘	5.00	8.15	1.65	100.86		頁岩	北上山地	１ａ
148	ⅡＥ１ｂ・Ⅲｂ	石錘	6.40	9.35	2.17	174.06		砂岩	北上山地	１ａ
149	ⅠＤ４ｅ・Ⅲｂ	石錘	7.30	8.10	2.40	214.34		安山岩	奥羽山脈	１ａ
150	ⅡＥ３ｂ・Ⅲｂ	石錘	7.70	11.20	1.90	257.89		安山岩	奥羽山脈	１ａ
151	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	石錘	9.60	9.90	2.50	312.29		安山岩	奥羽山脈	１ａ

表6　石器・石製品観察表 (6)

番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴・備考	石材	産地	分類
152	ⅡＥ３ｂ・Ⅲｂ	石錘	5.90	6.80	1.60	97.31		安山岩	奥羽山脈	１ａ
153	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	石錘	7.20	8.80	3.15	279.80		安山岩	奥羽山脈	１ａ
154	ⅡＥ３ａ・Ⅲｂ	石錘	6.35	7.70	2.20	157.12		安山岩	奥羽山脈	１ａ
155	ⅡＤ３ｄ・Ⅲｂ	石錘	7.80	10.40	2.77	349.28		安山岩	奥羽山脈	１ａ
156	ⅡＥ１ｂ・Ⅲｂ	石錘	6.90	8.90	2.65	254.12		安山岩	奥羽山脈	１ａ
157	ⅡＥ２ａ・Ⅲｂ	石錘	6.40	7.80	2.00	159.91		安山岩	奥羽山脈	１ａ
158	ⅡＤ３ｂ・ｃ・ベルトⅢａ層	石錘	4.60	8.50	2.20	144.07		安山岩	奥羽山脈	１ａ
159	ⅡＥ３ｂ・Ⅲｂ	石錘	7.20	9.10	1.30	157.01		砂岩	北上山地	１ａ
160	２号住石囲炉付近床面下５cm	石錘	6.50	10.40	2.40	302.65		安山岩	奥羽山脈	１ｂ
161	２号住石囲炉付近床面下５cm	石錘	6.80	8.00	1.40	125.38		安山岩	奥羽山脈	１ｂ
162	ⅡＣ２ｅ・Ⅲｂ層	石錘	6.00	9.10	2.10	245.44		安山岩	奥羽山脈	１ｂ
163	ⅡＥ２ｄ・Ⅲｂ	石錘	5.15	8.60	1.90	118.76		安山岩	奥羽山脈	１ｂ
164	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ層	石錘	7.00	5.50	1.70	75.30		頁岩	北上山地	１ｂ
165	ⅡＤ３ｄ・Ⅲｂ	石錘	5.70	7.30	1.75	97.00		安山岩	奥羽山脈	１ｃ
166	ⅠＥ４ｅ・Ⅲｂ	石錘	4.80	6.70	1.80	79.49		頁岩	北上山地	１ｃ
167	ⅡＤ３ａ・Ⅲｂ層上層	石錘	7.80	12.30	1.90	299.60		安山岩	奥羽山脈	１ｃ
168	ⅠＥ５ｂ・Ⅲｂ	石錘	4.10	5.60	1.03	35.68		頁岩	北上山地	１ｃ
169	ⅡＥ２ｂ・Ⅲｂ	石錘	5.90	7.50	1.75	118.45		安山岩	奥羽山脈	１ｃ
170	ⅡＥ２ｂ・Ⅲｂ	石錘	3.50	8.10	2.00	92.71		安山岩	奥羽山脈	１ｃ
171	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	石錘	4.80	7.05	1.20	66.38		頁岩	北上山地	１ｃ
172	ⅡＤ４ｂ・ｃ・ベルトⅢｂ上層	石錘	4.20	7.80	1.90	137.25		安山岩	奥羽山脈	１ｃ
173	２号住石囲炉付近床面	石錘	4.60	8.00	1.40	76.28		安山岩	奥羽山脈	１ｃ
174	ⅡＤ１・２ａベルトⅢｂ層	石錘	4.60	7.20	1.40	96.09		閃緑岩	北上山地	１ｄ
175	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ上層	石錘	5.60	9.60	1.90	204.13		安山岩	奥羽山脈	１ｄ
176	ⅡＤ３ｂ・Ⅲｂ中層	石錘	8.30	10.50	2.70	358.05		安山岩	奥羽山脈	２
177	ⅡＤ４ｃ・Ⅲｂ	石錘	6.10	6.60	2.50	136.15		石英安山岩	奥羽山脈	２
178	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ下層	石錘	5.60	9.40	2.70	216.85	敲打	安山岩	奥羽山脈	２ａ
179	ⅡＣ３ｅ・Ⅲｂ下層	石錘	4.30	6.20	1.80	72.28		安山岩	奥羽山脈	２
180	ⅡＤ３ｂ・ｃ・ベルトⅢｂ層	石錘	6.40	9.30	1.80	204.88		安山岩	奥羽山脈	２
181	ⅡＥ４ｄ・Ⅲｂ	石錘	5.10	7.80	2.90	139.46		安山岩	奥羽山脈	２
182	２号住石囲炉付近床面下５cm	石錘	6.80	9.80	2.75	279.38		安山岩	奥羽山脈	２
183	ⅡＤ１ｃ・Ⅲａ層	石錘	6.10	8.20	1.40	152.93		安山岩	奥羽山脈	２
184	ⅡＥ１ｃ・Ⅲｂ	石錘	7.00	8.80	2.32	206.48		安山岩	奥羽山脈	２
185	ⅡＥ３ｄ・Ⅲｂ	石錘	5.90	7.00	2.10	132.91		はんれい岩	北上山地	２
186	ⅡＥ３ｃ・Ⅲｂ	石錘	5.10	10.10	2.50	171.54		安山岩	奥羽山脈	２

表6　石器・石製品観察表 (7)

番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴・備考	石材	産地	分類
187	ⅡD3b・c・ベルトⅢb層	石錘	6.80	9.90	3.00	273.29		安山岩	奥羽山脈	2
188	ⅡC3e・Ⅲb下層	石錘	10.80	10.00	2.90	468.67		安山岩	奥羽山脈	2
189	ⅡD3b・Ⅲb中層	敲石	10.60	9.40	6.50	1028.09		安山岩	奥羽山脈	2
190	ⅡE3b・Ⅲb	敲石	8.40	7.30	7.70	772.54		はんれい岩	北上山地	
191	ⅡD3b・Ⅲb中層	敲石	11.10	5.90	2.00	296.15		安山岩	奥羽山脈	
192	ⅡD1b・Ⅲb上層	敲石	(8.0)	6.00	4.00	252.11		安山岩	奥羽山脈	
193	ⅡE2d・Ⅲb	敲石＋磨石	9.30	7.20	5.20	501.99		砂岩	北上山地	
194	ⅡD3a・Ⅲb層	敲石＋磨石	11.10	8.80	6.80	875.26		安山岩	奥羽山脈	
195	ⅡD3a・Ⅲb下層	敲石＋磨石	10.30	8.20	5.50	730.08		安山岩	奥羽山脈	
196	ⅠD5a・Ⅲ層	磨石	13.10	8.10	3.95	608.79		安山岩	奥羽山脈	
197	ⅡE2c・Ⅲb	磨石	6.85	6.75	6.40	410.94		半花崗岩	北上山地	
198	ⅡC1e・Ⅲb上層	磨石	6.60	6.00	3.80	247.77		頁岩	北上山地	
199	ⅡD3e・Ⅲb	磨石	7.60	7.40	5.10	495.31		はんれい岩	北上山地	
200	ⅡE3c・Ⅲb	磨石	12.00	9.10	6.12	1103.16		ひん岩	北上山地	
201	ⅡE1c・Ⅲb	磨石	12.65	9.65	6.00	432.72		砂岩	北上山地	
202	ⅠD4c・Ⅲb層	磨石	9.40	7.00	4.00	404.34		安山岩	奥羽山脈	
203	ⅡD1c・Ⅲb層	磨石	14.30	10.00	6.40	1336.68		安山岩	奥羽山脈	
204	ⅡE2a・Ⅲb	磨石	10.25	8.05	4.95	613.63		砂岩	北上山地	
205	ⅡE3b・Ⅲb	磨石	11.70	9.00	4.80	880.63		安山岩	奥羽山脈	
206	ⅡD4c・Ⅲb	磨石	11.20	8.40	5.10	708.79		花崗岩	北上山地	
207	ⅡD1a・Ⅲb中層	磨石	9.30	7.80	4.60	479.99		花崗岩	北上山地	
208	2号住石囲炉付近床面	凹石	7.90	7.00	3.90	302.74		安山岩	奥羽山脈	
209	ⅡE2a・Ⅲb	凹石	9.35	8.20	4.50	480.89		安山岩	奥羽山脈	
210	ⅡE4b・Ⅲb	凹石	9.50	7.65	4.60	421.21		安山岩	奥羽山脈	
211	ⅡD3b・Ⅲb中層	凹石	11.30	7.40	4.00	489.62		安山岩	奥羽山脈	
212	ⅡD2e・Ⅲb	凹石	10.90	9.70	5.00	533.78		安山岩	奥羽山脈	
213	ⅡD1b・Ⅲb上層	凹石	11.20	7.40	5.90	504.52		安山岩	奥羽山脈	
214	ⅡD3c・Ⅲb	凹石	9.90	6.40	5.00	472.27		安山岩	奥羽山脈	
215	ⅡE2d・Ⅲb	凹石	10.70	8.35	3.35	465.26		安山岩	奥羽山脈	
216	ⅡD1a・Ⅲb	凹石	12.55	7.60	3.40	477.91		安山岩	奥羽山脈	
217	ⅠE4e・Ⅲb	凹石	12.90	9.20	5.10	819.96		安山岩	奥羽山脈	
218	ⅡE3d・Ⅲb	石皿	27.70	15.10	8.70	3521.02		安山岩	奥羽山脈	
219	ⅡD3b・c・ベルトⅢb層	石棒	－	7.40	3.50	903.71		頁岩	北上山地	
220	ⅡC2e・Ⅲb上層	石棒	－	2.90	1.80	77.30		頁岩	北上山地	
221	ⅡE1d・Ⅲb	勾玉	1.80	1.20	0.70	2.51		翡翠	新潟県糸魚川	

Ⅵ. まとめと考察

項目ごとに説明を加え、まとめ及び考察としたい。

1. 遺構

(1)竪穴住居跡

本遺跡において6棟の竪穴住居跡を検出した。これらの時代時期は、縄文時代後期中葉～後葉のものが4棟、晩期もしくは弥生時代中期のものが2棟である。

岩手県北部における縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡が検出された遺跡としては、川口Ⅱ・大日向Ⅱ・馬場野Ⅱ・上水沢Ⅱ遺跡が上げられる。

規模

縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡の開口部又は柱穴の配置から最大長（長軸）の寸法は、1号が約6.3m、5号が約6.3m、9号が約5.8m、11号が約7.5mである。これらの竪穴住居跡は、柱穴の配置から2～3時期の拡張があったものと思われる。1号は3時期が考えられ、1回目の規模は約5.1m、2回目約5.9mである。5号は2時期考えられ、1回目約5.1mである。9号も2時期考えられ、1回目約5.0mである。11号については7.5mと、前記した3棟の竪穴住居跡より大規模なものである。拡張の可能性も考えられたが、壁柱穴の検出が困難で、他にも柱穴が存在した可能性が考えられるが、検出することは出来なかった。

2・3号については、調査時に炉跡を確認した時点で住居跡として認識したものである。2号については、炉周辺に直径15～50cmの礫が三十数個確認された。竪穴住居跡と考えると、住居廃絶後埋土と共に流れ込んだか、もしくは住居廃絶時に廃棄されたものと考えることができる。この考えから推測すると8～10mの大型の住居を想定するが、炉下位で検出した2号柱穴状ピット群と称したＰＰ20～26を炉に伴う壁柱穴と想定すると、約5mのものと想定ができる。しかし、両者の規模の想定については、今となっては推測の域を越えることは出来ない。

3号については、壁溝と想定される溝が検出されたことからおおよその規模は想定できる（第Ⅳ章参照）。

壁

6棟の住居は、平面プランによって検出されたものでなく、試掘溝設定時に炉・壁を確認してから、壁柱穴を頼りに、精査を行った。1・5号については、明確に壁を確認することが出来る部分もあったが、1・5・9・11号については、壁柱穴を確認して任意に壁を立ち上げた。このことから、正確な壁の傾き・壁高の数値を示すことは出来ないが、比較的明瞭に壁を確認した1・5号の西・南側の壁から考えると、傾きはやや外傾して立ち上がる。壁高は50～60cmと思われる。

棚状の段を有す施設

5号竪穴住居跡の北西側に棚状の段を有する特徴がある。この段は、盛土等で構築されたものでなく、素掘りによるものである。段の面には、柱穴が存在することから、棚としての機能は言及することは出来なかった。どのような機能を持つものか、判断することは出来なかった。なお、段の面に炭化物が確認されている。

床

6棟の床面はほぼ平坦で固く締まるのが特徴である。貼り床等の痕跡は確認されなかった。

柱穴・壁柱穴・壁溝

2・3号を除いた、4棟の縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡は、すべて壁柱穴を持つ。壁柱穴以外の

主柱穴を明確に把握出来るものは、１号のみである。五角形もしくは六角形の主柱穴を想定したが、それぞれのどの拡張時にどの主柱穴が伴うか判断することは出来なかった（第83図参照）。なお、柱穴痕跡は認められなかった。

壁柱穴については、その配置によって第83図においてスクリーントーンで示した。それぞれの拡張時の規模が想定出来る。柱痕跡についても１号を除いて確認されなかった。柱痕跡の幅から推測すると、壁柱穴に用いられた柱材の太さは、10～15cmのものを使用していたと推測される。

壁溝は１・３号で確認された。１号は幅が20～47cmで壁溝内に壁柱穴を持つ。３号は、幅が10～20cmである。

炉の形態

炉の形態は、縄文時代後期中葉～後葉に属する住居（１・５・９・11号）は、すべて地床炉である。平面形はアメーバー状もしくは楕円形を呈する。地床炉の他に伴う遺構・遺物はない。焼成は11号を除いては良好である。なお、５号の炉上面に小動物の骨が検出された。

２号は石囲炉で円形気味に２列の石を配列し、北東方向に開口する。石囲炉内の焼土は、前記した１・５・９号と比較して良好ではない。

３号は土器埋設炉と思われる（石囲炉の可能性も考えられる）。東西軸に３個体の土器を設置している。東側は、口縁部が破損している壺を設置し、中央部は甕頸部の小破片を設置し、西側は個体３分の１で構成され口縁部から胴部下半部の甕を設置している。焼土の焼成は良好である。土器埋設時の掘り方痕跡は確認出来なかった。

出入り口施設

出入り口施設が確認出来たものは、１・５号である。二つの楕円形の柱穴状の土坑である。出入り口ピット間は、１号が約1.1m、５号が約1.4mを測る。方向は１号が南東方向、５号が北東方向である。２棟共に地形が傾斜する方向に出入り口部を持つ傾向がある。

時代時期

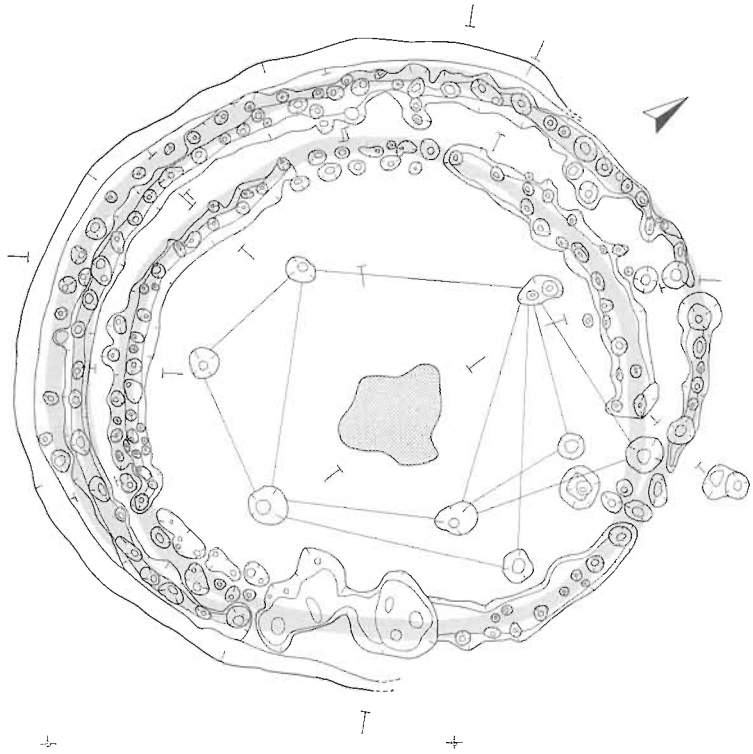
時期については、１・５・９・11号竪穴住居跡、１号住居状遺構は、形態・出土遺物から縄文時代後期中葉～後葉のものと考えられる。これらの前後関係は、重複資料を得られなかった。出土遺物について着目すると、鍵状入組状文・平行沈線文を弧線・Ｓ字状に区切る十腰内Ⅲ式期に相当する遺構として、５・11号竪穴住居跡・１号住居状遺構、木葉状入組文・欅掛状の入組状文・微隆起線文の十腰内Ⅳ式に相当する遺構として１号竪穴住居跡があげられる。９号竪穴住居跡については、出土遺物が少量のため、時期を限定することは出来なかった。

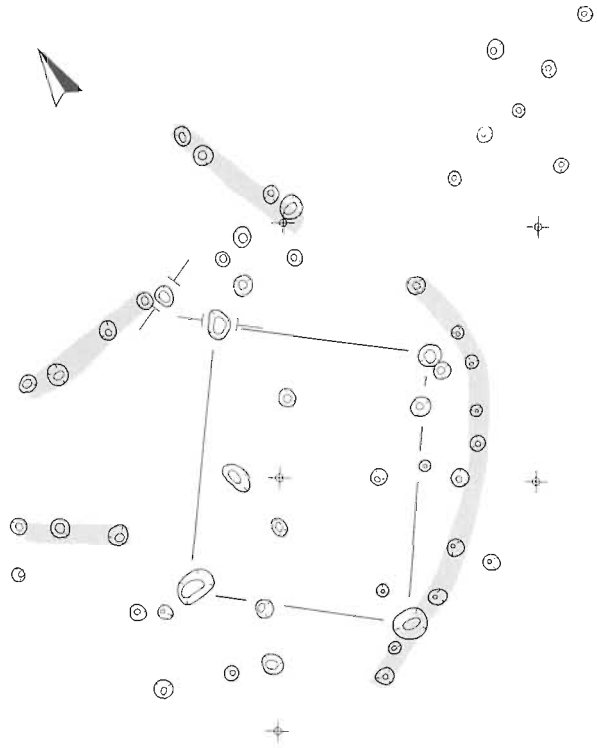
このことから、下記表の時期が推測される。

遺　構　名	編　年	時　期
５・11号竪穴住居跡・１号住居状遺構	十腰内Ⅲ式期	縄文時代後期中葉
１号竪穴住居跡	十腰内Ⅳ式期	縄文時代後期後葉
９号竪穴住居跡	十腰内Ⅲ～Ⅳ式期	縄文時代後期中葉～後葉

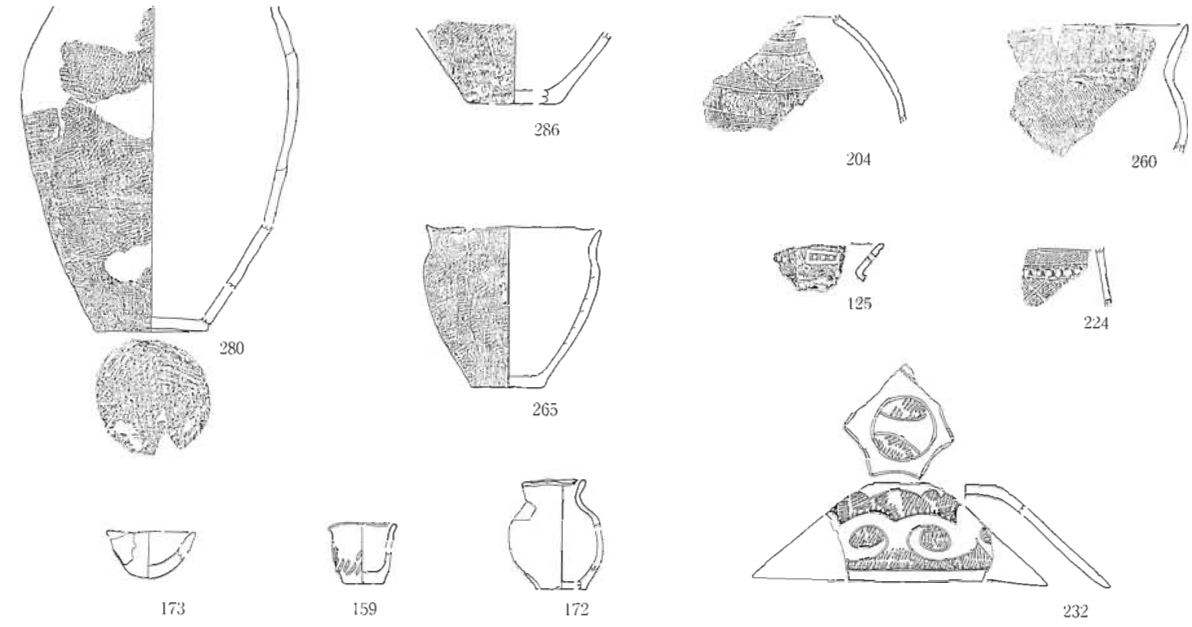
２号竪穴住居跡に関しては前述してあるが、遺構に伴うものとして、遺物の取り上げ時に認識が出来なかったため、時期について言及出来ないでいた。そこで、２号竪穴住居跡のグリット及び近接するグリッド（ＩＤ５ｂ～ｃ、ⅡＤ１ａ～ｃグリッド）、の遺物を第84図において示した。土器についての印象としては、Ⅱ群・Ⅲ群の土器が見られるが、Ⅳ群土器が多数を占める。粗製深鉢形土器は、すべてⅣ群土器である。

また、石器については、Ⅲｂ層で多数みられる石錘などの礫及び数点の剥片石器が認められた。Ⅴ章の石





第83図　１号竪穴住居跡拡張推定図・１号柱穴状ピット柱穴想定図



ⅠD5b･cグリッド

ⅡD1a～cグリッド　S=1:6

第84図　ⅠD5b・c、ⅡD1a～cグリッド

器の項で述べているが、Ⅲａ層とⅢｂ層の相違を判別することは出来なかった。その中で、遺物番号39はいわゆるアメリカ式石鏃で、弥生時代にみられるものである。

これらの遺物から、弥生時代中期前半の遺構という印象を持つ。前述してるが、炉の形態は石囲炉で、縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡の形態と異なることから、第84図の土器群及び遺跡全体の土器群を考えると、縄文時代晩期前葉～弥生時代後期の枠内には入る可能性は考えられる。調査時の認識の甘さから、今となっては推測の域を越えることは出来ないが、第84図に示した遺物から、弥生時代中期の遺構の可能性が示唆される。

３号竪穴住居跡についても、２号同様の遺物の取り上げを行ったため、詳細を明らかにすることは出来なかった。２号同様に周辺の遺物を図に示すことを考えたが、遺物の出土数が少ないため試みなかった。

遺跡全体の出土した土器群の様相と埋設土器の印象から、縄文時代晩期前葉～弥生時代中期の遺構であろう。

(2)掘立柱建物跡及び柱穴状ピット群

１号掘立柱建物跡は４本柱で構成される。時代時期は、Ⅲｂ層で検出が可能であったかもしれないが、遺構のプランが明瞭に把握可能な十和田中掫浮石面で検出した。５・11号が近接することから、縄文時代後期中葉～後葉の遺構と考えられる。

周辺には柱穴状ピット群が存在し､1号掘立柱建物跡に伴ってゲート状の出入り口を窺わせるピットの配置（ＰＰ39・ＰＰ50～53・ＰＰ45～48・ＰＰ２・４・６・ＰＰ３・５・７・９）と１号掘立柱建物跡を円形に囲うような配置（ＰＰ25・26・30・35・36・41・42・43・38・34）が認められる（第83図参照)。これらの配置は１号掘立柱建物跡と１号柱穴状ピット群の存在がセット関係にある様相を呈する。1号掘立柱建物跡・１号柱穴状ピット群の配置については野外調査時に完璧に把握したわけではなく、すべてのピットの断面観察を行い新旧もしくは類似するものと判断出来れば良かったが、調査期間終了間近であったため、室内整理において写真・実測図から判断したものである。このことから、１号掘立柱建物跡と柱穴状ピット群の関係を明確に判断することは出来なかった。今後の発掘調査で事例が増え、性格・時代等が明らかになればと考える。

２号掘立柱建物跡は桁行６間・梁行１間の１間６間で構成される。配置から２・３号竪穴住居跡を截るものと推測される。また、埋土の雰囲気がⅡ層と似通っていることから、２号掘立柱建物跡は縄文時代以降のものと推測する。詳細な時代時期は、資料に欠き不明であるが、前述した１号掘立柱建物跡と１号柱穴状ピット群と同様な周辺の柱穴状ピット群との関係は配置・埋土等から想定するには至らなかった。

(3)土坑

今回の調査で、20基検出した。出土遺物がないため、詳細な時代区分をすることは出来なかった。しかし、この20基の土坑は検出面については区分される。Ⅲａ層で検出されたものは、１～５・10～13号、Ⅲｂ層で検出されたものは、７～９・15～18号、Ⅳ層で検出されたものは、６・14・19・20号である。

Ⅲａ層については、出土遺物から弥生時代の遺構の可能性が考えられる。Ⅲｂ層については、縄文時代後期中葉～後葉の遺構の可能性が考えられる。Ⅳ層については、縄文時代後期中葉～後葉以前の遺構の可能性が考えられる。これは検出面にのみ着目しての考え方で、それぞれの層で、検出された遺構の形状・埋土等、同類の形態を示すものではなかった。性格についても、判断する資料に欠き不明と言わざる得ない。また、検出面については、あくまでも筆者が把握できた面であることから、筆者が検出した面より上の面から、構築された可能性も考えられる。

このことから、可能性として（新）１～５・10～13号→７～９・15～18号→６・14・19・20号（古）という時間差があると言えるが、あくまでも推測である。ただ､6号については、埋土上部に十和田中掫浮石を確認していることと、検出面から、縄文時代後期中葉～後葉以前の遺構の可能性が高いと言えるだろう。

(4)畝間状遺構

今回の調査で、土砂の氾濫によって、埋没し放棄したと推測される、畝間状遺構（畠跡）を検出した。時代時期を判断する材料（火山灰・遺物）に欠き、詳細は不明である。Ⅱ層で検出していることから、弥生時代以降のものと考えられる。

本遺跡周辺では、大向Ⅱ遺跡・大向上平遺跡で、十和田ａ降下火山灰の被覆により、畠跡と復旧の痕跡が確認されている。これらの遺跡と比較及び検証を行えればと考えたが、資料に欠き多角的な考察を行うことは、出来なかった。

丸山（旧姓中村）が作成した「岩手県で検出された畠関連遺構一覧」によると（能登　健・中村　直美・菊池　貴広2000)、16遺跡が上げられる。近年当センターで調査した遺跡を追加すると、川崎村の溝状遺構とした川崎の柵擬定地、十和田ａ降下火山灰が被覆する二戸市の米沢遺跡、平泉町の本町Ⅱ遺跡、河川の氾濫による砂が被覆する北上市の黒岩宿遺跡と本遺跡も含めると、20遺跡で検出されている。

火山灰・河川氾濫による砂の堆積によって検出されたものがほとんどで、時代時期については、十和田ａ降下火山灰が介在している遺跡では年代を推定できるが、他の状況では、遺物も出土することが非常に少ないため、時代時期の把握は困難な様相を呈している。

また、大半の畠跡の調査は、畝頂部を把握することはできないでいる（検出時に削平もしくは、もともと削られたか、崩落したか)。本遺跡においても同様で、重機による表土除去及び検出時に畝頂部を削平してしまったが、調査区境界面で、畝頂部を把握する土層断面図を得ることが出来た（第23図及び写真図版2参照)。畝の高さ、作付け間隔を把握することは出来たが、作付け痕跡、農耕具の痕跡を把握するためには、自戒の言葉になるが、畝頂部の形状を把握出来る調査が必要であると考える。事例が少ないことから、更に良好な資料が増え、その上で畠跡を通して、当時の人々の生産活動が明らかになればと考える。

なお、本遺構のプラントオパール分析・花粉分析は諸般の事情により、行えなかったため、何を栽培したものか言及出来なかった。お詫びを含めお断りしておきたい。

(5)火山灰について

当遺跡の遺物が出土する区域において、にぶい黄橙色・浅黄橙色の火山灰が認められた。一見色調から十和田ａ降下火山灰と似ているが（十和田ａ降下火山灰と言われている火山灰より色調が濁った感じを受ける)、ⅡＤグリッドにおいては、明らかにブロック状に堆積した十和田ａ降下火山灰の下位に位置する。

また、このにぶい黄橙色・浅黄橙色の火山灰は、粒状・ブロック状又は二次堆積（雨水等による）の2枚の層で構成されている場所もあった。発掘調査において、Ⅲａ層（弥生中期～後期の遺物が出土）と称した層と上位に位置し、火山灰層とⅢａ層の間には他の堆積物が存在しないことから、Ⅲａ層が形成された後、この火山灰が堆積するまで、大幅な時間差がなかったものと考えられる。

これらのことから、にぶい黄橙色・浅黄橙色の火山灰は９世紀前半に降下したと言われる十和田ａ降下火山灰と同種の火山灰と筆者は考えられなかった。更に、町田・新井（火山灰アトラス著者）両氏に、当遺跡に来跡していただき、この火山灰を実見していただいたところ「十和田ａ・ｂとは異なる十和田起源のローカルな火山灰ではないか」という見解を示された。

しかし、火山灰分析の結果では、十和田ａ降下火山灰と類似するという結果があることから、今後の発掘

調査で同類の火山灰の資料が増え、遺構と遺物の関係もしくは層の前後関係から、降下の時代時期が明確になればと思う。なお、ＩＤグリッド南側とⅡＤグリッド東側では、この火山灰は一見水成堆積の様相を呈してるが、本来水成堆積した場合水平なラミナ状を呈するが、水平なラミナが傾いた不自然な堆積の様相を呈する場所もあった。16世紀末～17世紀初めに製作された瀬戸・美濃産陶器片が出土していることから、前記したグリッドにおいては、江戸時代に人為的に整地された可能性が考えられる。

2. 遺物

⑴縄文土器

本遺跡の出土した土器（遺構内外含）の中で、Ⅱ群土器と分類した縄文時代後期の出土量が大半を占める。このⅡ群土器について若干述べたいと思う。土器の文様については、主に下記の文様が施される。

①平行沈線文を弧線状及びＳ字状に区切るもの（第Ⅱ群1類・第85図）。

②鍵状の入組状文が施されるもの（第Ⅱ群2類・第85図）。

③木葉状の入組状文が施されるもの（第Ⅱ群3類・第86図）。

④襷掛状の入組状文が施されるもの（第86図）。

⑤斜沈線が施されるもの（第Ⅱ群5類・第86図）。

⑥微隆起線文が施されるもの（第86図）。

これらの文様の中で、十腰内Ⅳ式期のメルクマークとなる④～⑥の文様が少ない傾向がある。

口縁部の突起については、筒形土器の123や深鉢の105～107や鉢の111に認められる。大突起と副突起をもつ107・109が認められる。

「二帯の刻目帯の間にできた三角形の部分が突起として十腰内Ⅳ式（古段階）に成立するらしい」（金子1994）という見解があることから、105～107は、十腰内Ⅳ式期古段階のものと考えられる。

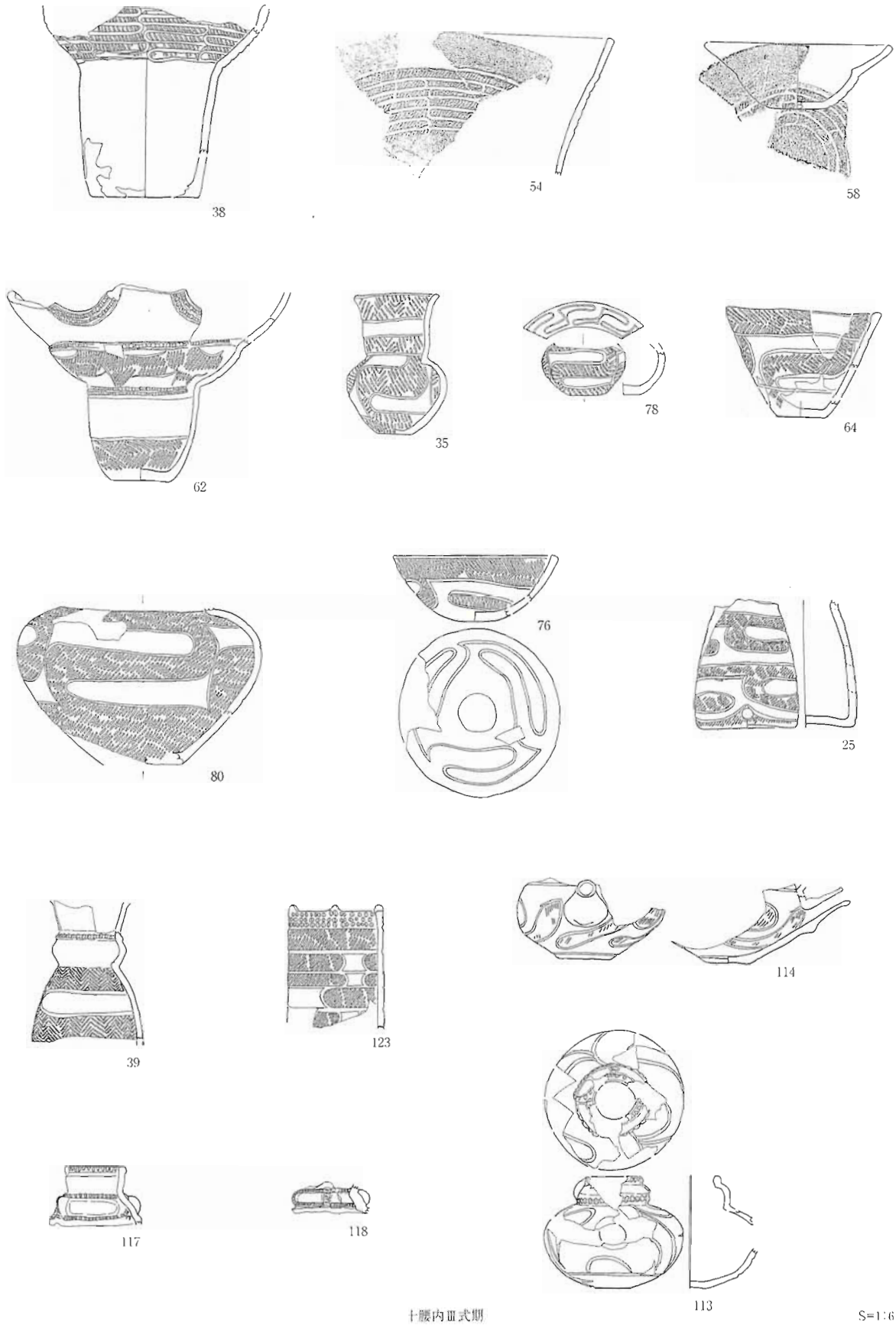
瘤状突起ついては、注口土器・壺形土器に多く、深鉢に若干認められる。鉢には認められなかった。瘤状突起は、木葉状の入組状文・襷掛状？の入組状文の文様が施されるものに認められ、鍵状の入組状文には認められなかった。

瘤状の突起は、何段もの刻目を持つもの（85）、先鋭のもの（１・86）、二叉状⑹がある。この瘤状の突起については、十腰内Ⅲ式の古段階の注口土器の胴部に出現し、やや大ぶりの何段のもの刻目を持ち、この刻目は十腰内Ⅲ式期に多く、十腰内Ⅳ式期にも一部残る。ただし十腰内Ⅳ式期（古段階）からは真中に一つ刻目を施し二叉状にするのが一般的であるという見解がある（金子1994）。このことから、瘤状突起だけに着目すると、十腰内Ⅲ式期とⅣ式期に相当する。

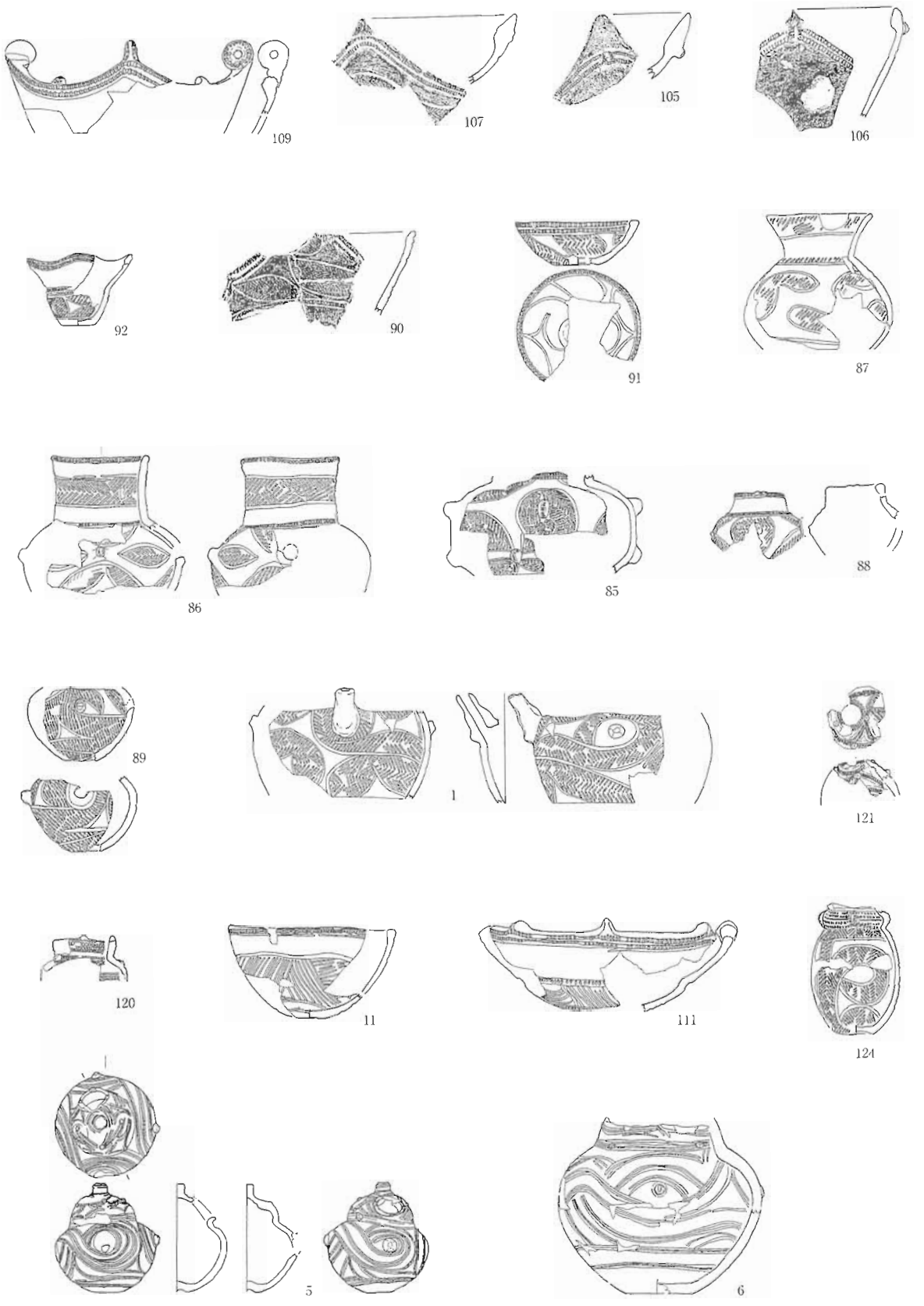
以上述べたことから、十腰内Ⅲ式期にみられる①・②の文様と十腰内Ⅳ式に認められる③～⑥の文様が認められ、十腰内Ⅳ式期新段階にみられる弧線連結文が認められないことから、Ⅱ群１～９類と区分した土器群は十腰内Ⅲ式期～十腰内Ⅳ式期古段階のものと考えられる。

更にこのことから、Ⅲｂ層の形成された時期と縄文時代後期竪穴住居跡群の時期も上述した時期に該期するもとになる。

なお、土器の組成比率については、不掲載の遺物の中に破片資料が多いことから、破片資料から組成比率を算出した場合器種を明瞭に把握できるか、また、同一個体かどうかを判別することに膨大な時間と正確な比率を算出できるか疑問があり、本遺跡においては試みなかった。

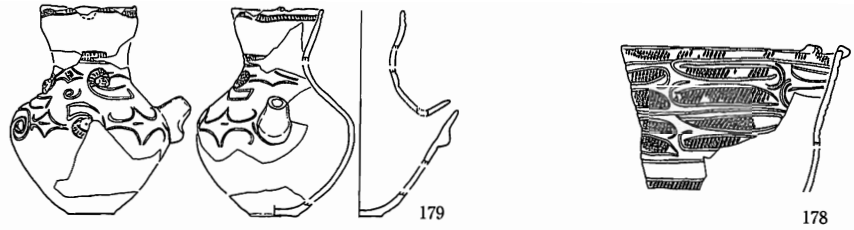


第85図　縄文時代後期土器集成図 1



十腰内Ⅳ式期　　S=1:6

第86図　縄文時代後期土器集成図 2



縄文時代後期末葉　　S=1:6

第87図　縄文時代後期土器集成図３

⑵弥生土器

①Ⅳ群１～３類土器の分類について

Ⅳ群１類・２類・３類と区分については、Ⅳ群１類は、文様及び原体等が本県及び東北南部（山王Ⅲ層式・湯舟沢遺跡Ⅰ・Ⅱ類）の影響または類似する部分があることから群として分離した。原体は前述してあるが、ＬＲ縄文が多数を占め、節はⅣ群２類及びⅣ群３類と比較して細かい。Ⅳ群２類は下北半島を中心に分布すると言われている二枚橋式と呼ばれる土器群と器形・文様・原体が類似することから群として分類した。また、Ⅳ群３類は津軽平野を中心に分布すると言われている田舎館式と呼ばれる土器群と器形・文様・原体が類似することから群として分離した。このⅣ群２及び３類はⅣ群１類と比較して、節が大きく、ほとんどがＲＬ縄文が施される。須藤　隆氏は「馬淵川流域・津軽地方など、北部ではＲＬ縄文が盛んに施され、明瞭な地域色が存在する」(須藤1998)。と述べることから、原体のみに着目するとⅣ群１類は東北地方南部の地域色がある土器群で、Ⅳ群２及び３類は東北地方北部の地域色がある土器群と言えよう。

②Ⅳ群１類土器について

前記した山王Ⅲ層に認められる変形工字文・連弧文・波状文・山形状文に着目し区分した。上記以外の文様及び小破片で文様が把握出来ないものは原体(ＬＲ縄文施文)・胎土の雰囲気からⅣ群１類として区分した。

Ⅳ群１類と酷似する土器がまとまって出土した資料を見いだすことは出来なかったが、湯舟沢遺跡（滝沢村）のⅡ類土器・足沢遺跡（二戸市）が上げられる。小田野哲憲氏による編年Ⅱ期（小田野1987）に相当する土器群であることは確実であろう。

③Ⅳ群２類土器について

二枚橋式土器と比較するとＲＬ縄文が縦走すること、平行沈線文を施し、口縁部に刻目を持つ部分は近似するが（222の刻目については異質である)、二枚橋式土器のメルクマークとなる結節沈線文については、浅石遺跡Ⅳ群２類土器には粘土粒がないもの（223)、や縦位沈線で区切るもの（221)、粘土粒が小さく明瞭でないもの（220)、いわゆる結節沈線文と言うより列点文という表現を用いた方が無難と言えるものである。また、器形は二枚橋式土器に見られる長形甕形土器と呼ばれる器形と比べると、二枚橋式土器は口縁部が直線的に立ち上がるものに対して、浅石遺跡Ⅳ群２類の土器は、やや外傾するもの（223）や胴部中央部付近に最大径を持ち口縁部が外反するものなど異なる部分が見受けられる。これらの相違点は東北地方北部における弥生時代中期の編年において二枚橋式→宇鉄Ⅱ式→井沢式→田舎館式という変遷のうち、浅石遺跡Ⅳ群２類は二枚橋式期と併行せず、時期差（浅石Ⅳ群２類が新しい）があるものととらえることが可能であり、二枚橋式を模倣したものと言えるのではないだろうか。

④Ⅳ群３類土器について

田舎館式土器（垂柳遺跡出土土器）と比較すると口縁部原体が縦走すること、鋸歯文・列点文が施されることが上げられるが、浅石遺跡Ⅳ群３類土器の鋸歯文は田舎館式土器より沈線幅が太い（225・227・228）。列点文は田舎館式土器は半月状を呈するのに対し、浅石遺跡Ⅳ群３類土器は幅が広い（226）。田舎館式土器より浅石遺跡Ⅳ群３類の原体の節が大きい。田舎館式土器の口縁部より227の口縁部の外反はゆるいものである。胎土は浅石遺跡Ⅳ群３類が良好である（垂柳遺跡出土の土器は摩滅が著しい）。器厚は田舎館式土器より浅石遺跡Ⅳ群３類の土器が厚い。229の文様は田舎館式の壺に見られる。田舎館式の壺と器形が異なり、隆帯が太く、沈線及び隆帯がだらしない（退化？）。

これらのことから、浅石遺跡Ⅳ群３類土器は、模倣されたもので田舎館式期と併行しないものととらえることも可能である。

⑤Ⅳ群４類土器について

比較する資料を見いだすことが出来なかった（230・231）。230は文様に退化した変形工字文が施されることから、弥生時代中期の土器と考えられる。231は弥生時代中期とは異なる時代（弥生時代後期？）の可能性も考えられる。

⑥Ⅳ群１～４類土器について

Ⅳ群１類とⅣ群２～４類を比較すると、前者はほとんどの土器にＬＲ縄文が施され、節が細かい。後者はＲＬ縄文が施され、節が大きいという違いが認められた。東北地方南部にＬＲ縄文が多く、東北地方北部にＲＬ縄文が多い傾向から、Ⅳ群１類は東北地方南部で、Ⅳ群２～４類は東北北部の影響が窺える資料と言える。原体の違いからそれぞれの地域から搬出された可能性も考えられるが、上述した通り、文様が類似する部分は認められるが、相違点もあることから、それぞれの地域の影響を受けている在地の土器の可能性が考えられる。

Ⅲａ層と付した同一層からⅣ群・Ⅴ群がまとまって出土していることから、層位的な前後関係を示す資料とはならなかった。なお、この原体の違いは、時期差による可能性も含まれているであろう。

Ⅳ群２類及びⅣ群３類について、模倣されたものと考えて、二枚橋式期及び田舎館式期と併行しない可能性を上述したが、地域的な特徴も考慮に入れるべきであろう。須藤　隆氏は「馬淵川流域の大渕、火行塚、風張１遺跡では、山王Ⅲ層式と類似した土器とともに、東北地方北部に分布する弥生時代２期の二枚橋式土器と類似した特徴をもつ土器が出土している。これらの２つの土器型式は、馬淵川・新井田川流域で分布圏を接し、この地域で特異な地域色を生みだしている。」と述べている（須藤　隆1998）。このことから特異な地域色の土器群が出土することを考えると、詳細な時期差（二枚橋式期・井沢式期・田舎館式期との併行及び前後関係）についての言及は、この地域（馬淵川・新井田川流域）の資料増加を待つしかないだろう。

なお、第88～91図で、馬淵川流域の遺跡群の中で、本群と類似する土器及び該期する遺跡の資料を掲載した。遺物掲載に使用した遺跡は、岩手県二戸市足沢遺跡・大渕遺跡・火行塚遺跡、青森県八戸市風張(1)遺跡Ⅱ・弥次郎窪遺跡Ⅱである。若干の比較をしたいと思う。

足沢遺跡のＦｉｇ18－４は、本遺跡のⅣ群１類土器の鉢形土器と文様・器形が類似する。Ｆｉｇ19－１・２は、Ⅳ群３類の226と類似する。Ｆｉｇ54－１は、縄文地に鋸歯文が施され、田舎館式期の土器と類似するが、器形・口縁部が無文帯になる部分は、本遺跡227及び田舎館式期の土器群と異なると思われる。

大渕・火行塚遺跡の２・５・７は、山形状文・波状文によって、縄文地と無文部を区画する手法がⅣ群１類と類似する。また、火行塚遺跡の１は、本遺跡のⅣ群３類225と口唇部の刻目、口縁部の突起及び縄文が縦

走する施文方法が類似する。火行塚遺跡の１は、225と同様に東北北部の影響を受けている土器であろう。火行塚遺跡の２の蓋の文様は、本遺跡のⅣ群1類の198・199・207・209・232の星形状の文様と同類である。二戸地域の特徴と思われる。

青森県八戸市弥次郎窪遺跡Ⅱの７号住居の１、９号住居の１と青森県八戸市風張(1)遺跡Ⅱの37号住居の１の頸部～肩部に施される沈線文は、宇鉄Ⅱにみられるモチーフで、本遺跡及び二戸市足沢・大渕・火行塚では、この文様は、みられなかった。これら２遺跡３つの住居には、それぞれ、山王Ⅲ層式期と類似する土器がみられる（青森県八戸市弥次郎窪遺跡Ⅱの７号住居の２、９号住居の２、青森県八戸市風張(1)遺跡Ⅱの37号住居16、17）。八戸市風張(1)遺跡Ⅱの37号住居10は、本遺跡のⅣ群２類土器及び二枚橋式期の土器と類似し、17は、本遺跡Ⅳ群１類土器と類似する。これらのことから、八戸市にも本遺跡・山王Ⅲ層式期・東北北部の土器の３地域が影響し合うことがわかる。

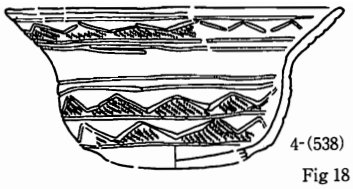
⑦Ⅳ群６類土器について

器形については、口縁部から底部まで残存している遺物を観察すると器形は様々であるが、概ね胴部上半部に最大径を持つものが多い。254の様な口縁部・底部付近を除くとほぼ直線的に立ち上がるもの。237の様な胴部中央付近で最大径を持つものもある。口縁部のみに着目するとあくまでも主観であるが、強く外反するもの・外反するもの・ゆるく外反するものの３つに大別できる。

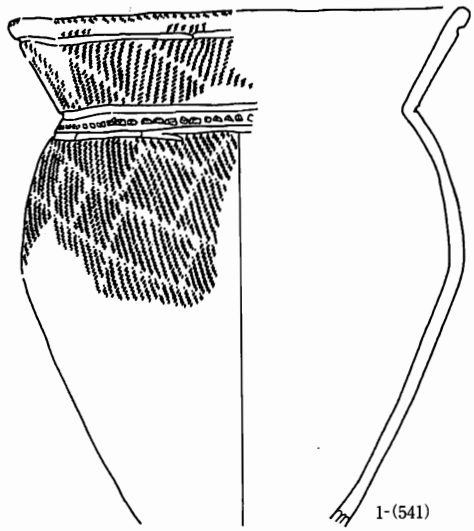
原体については、ＬＲ縄文が圧倒的多く、ＲＬ縄文・無節も見られる。前述しているⅣ群２類・Ⅳ群３類とした東北地方北部の土器（二枚橋・宇鉄Ⅱ・井沢・田舎館）と文様が類似する土器のほとんどがＲＬ縄文が施され、Ⅳ群１類とした東北地方南部の土器（山王Ⅲ層・湯舟沢）にＬＲ縄文が施されることを考えると、東北南部の影響を受ける土器が大半と考えられるであろう。

なお、同一層から晩期の土器も出土している。このことから、粗製土器については、弥生時代中期の土器のものと考えられるが、中には縄文時代晩期（大洞Ｂ及びＣ２式）の粗製土器をⅣ群６類土器として掲載・記載した可能性がある。

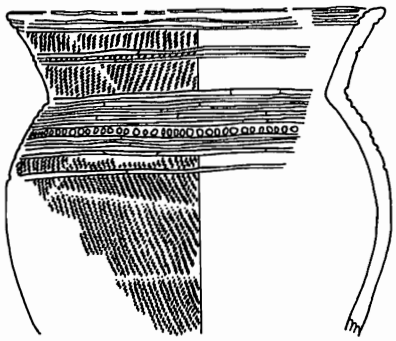
最後に近年（1999～2001年に発刊された報告書）の当センター調査における、弥生時代中期～後期の遺物が出土した遺跡は、諏訪前（二戸市）・上野（一戸市）・大芦Ⅰ（久慈市）・オミ坂（盛岡市）・西長岡長谷田（紫波町）・高松寺（花巻市）・篠館跡（遠野市）・中和田（住田町）・萱中Ⅲ（大船渡市）が上げられる。出土例が少ないと言われている該期資料は、本県の発掘調査の増加に伴って、資料は増えつつあるが、出土した遺物は、少量及び小破片がほとんどで、個体として文様全体を把握する資料はごくわずかである。　また、遺構と伴って出土したものはほとんどない。この現状と比較すると本遺跡の出土遺物は貴重な成果資料と言える。しかし、層位的前後関係・遺構との共伴関係を明確に提示する資料とはなり得なかった。今後の発掘調査で、前後関係が知り得る資料が増えることを期待する。



4-(538)
Fig 18



1-(541)
Fig 19



2-(542)
Fig 19

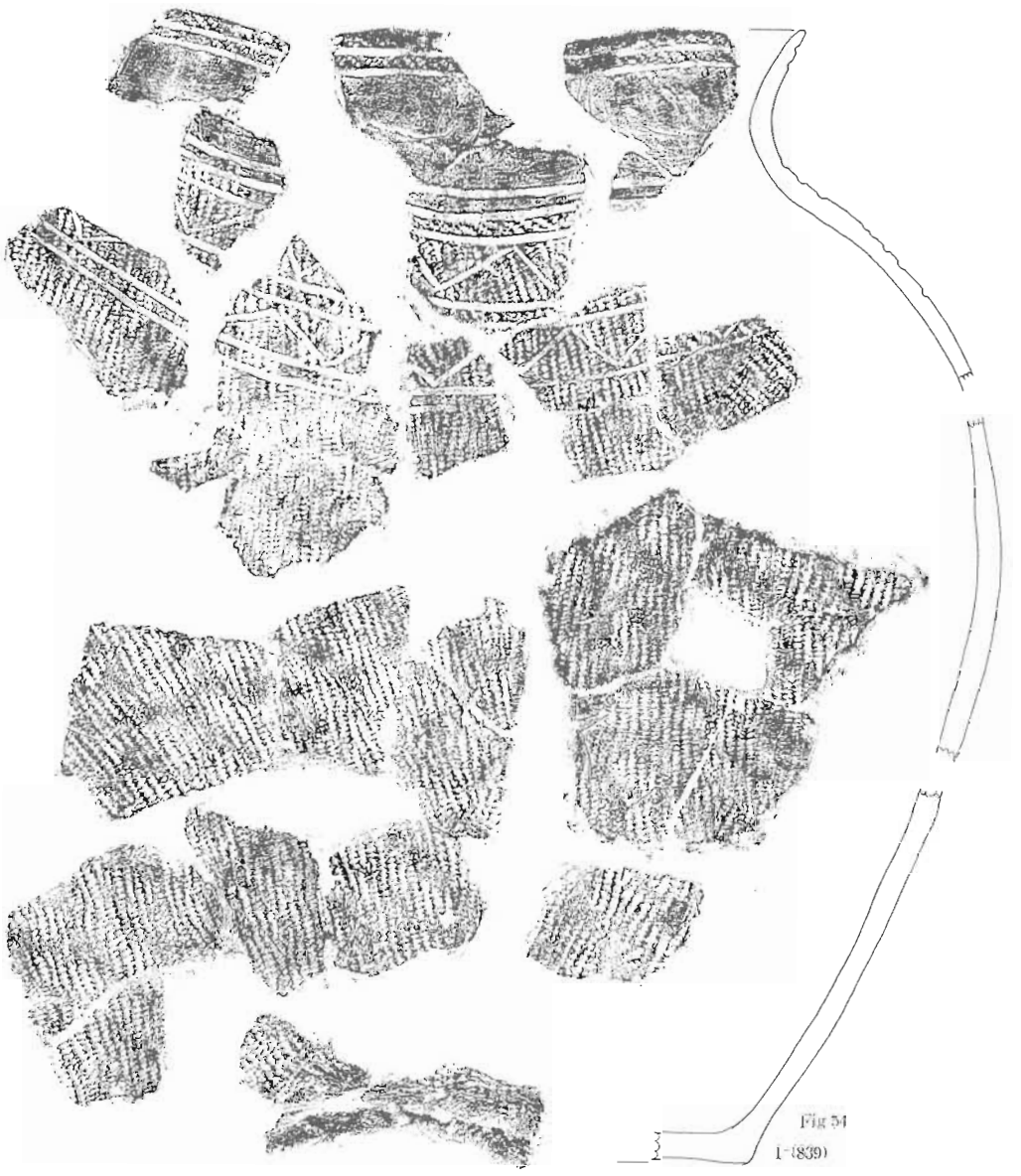
32-(838)
Fig 53

岩手県二戸市足沢遺跡

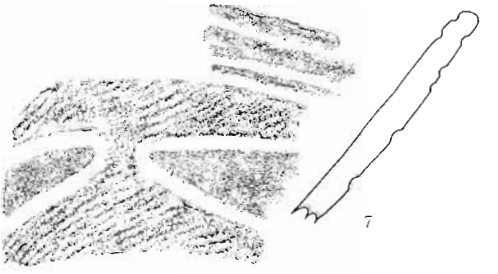
2

岩手県二戸市大渕遺跡

第88図　足沢・大渕遺跡出土土器

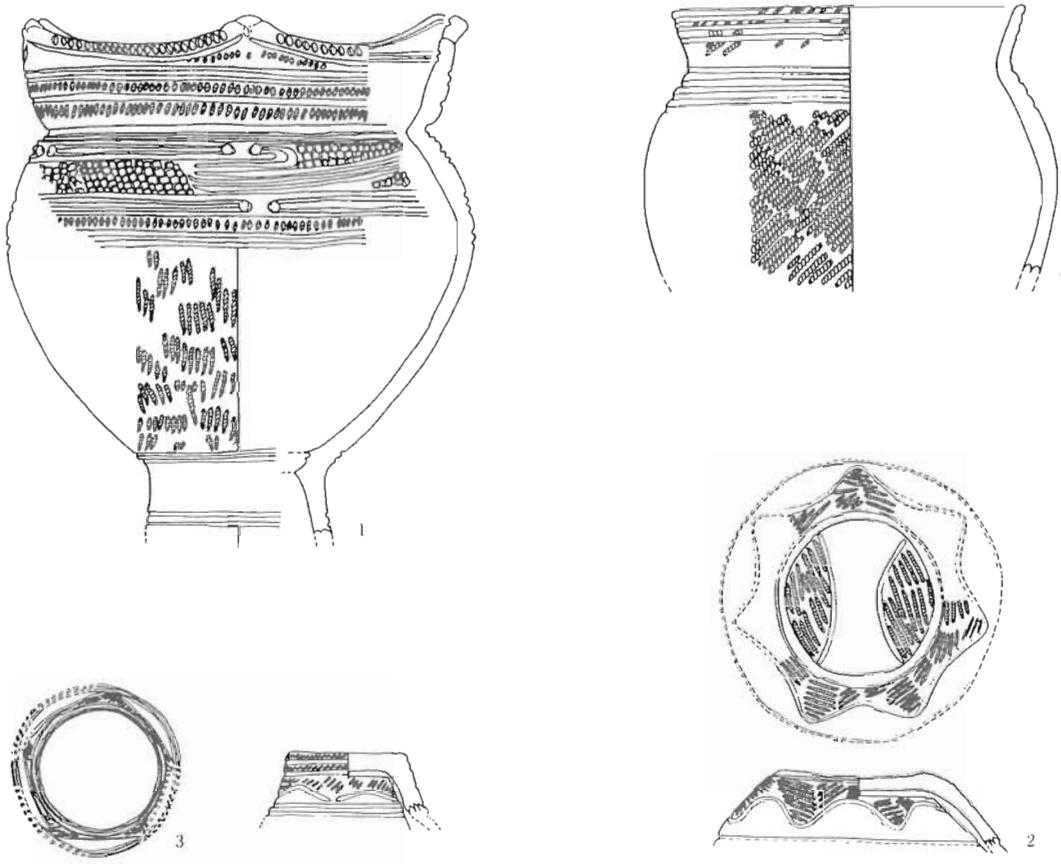


岩手県二戸市足沢遺跡

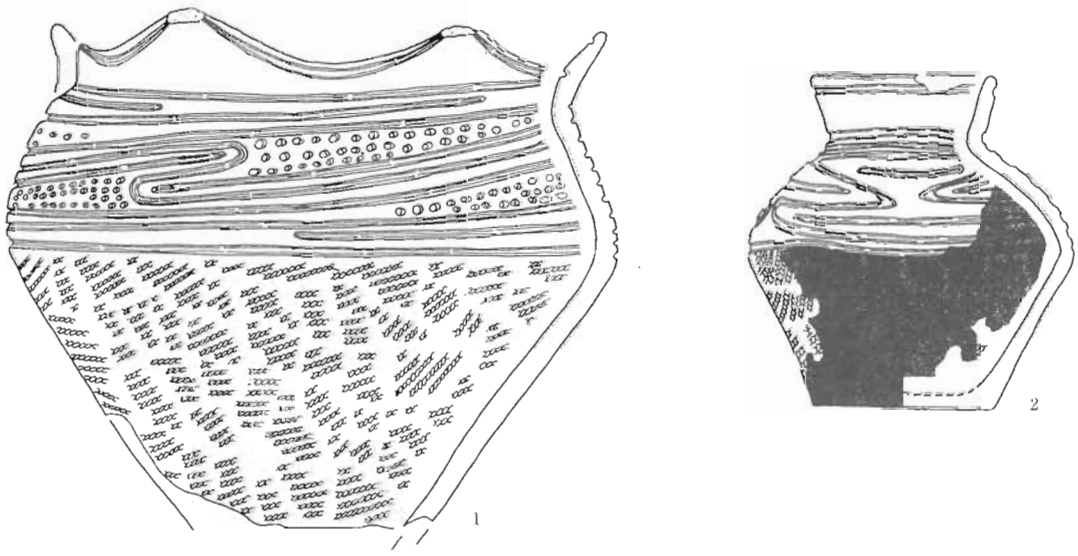


岩手県二戸市火行塚遺跡

第89図　足沢・火行塚遺跡出土土器

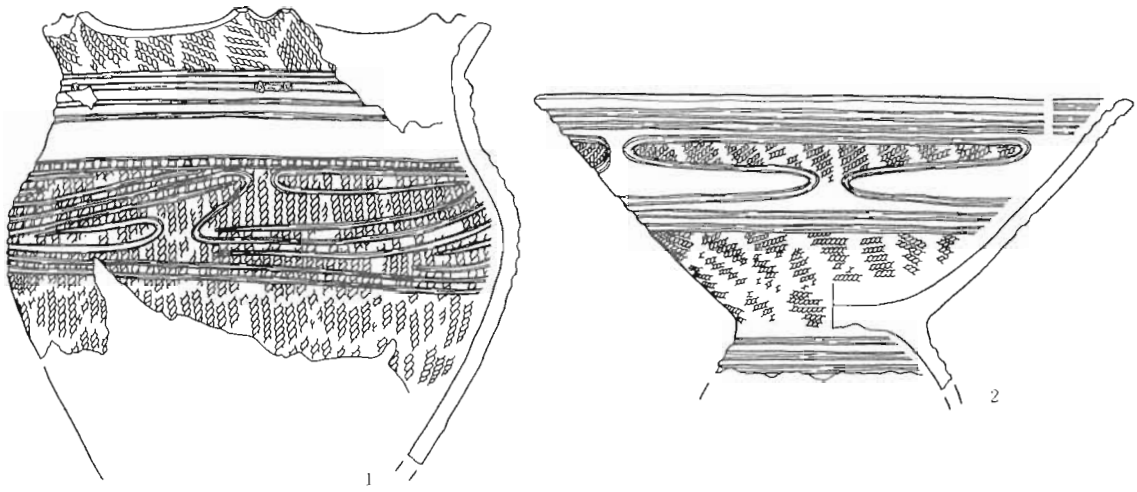


岩手県二戸市火行塚遺跡

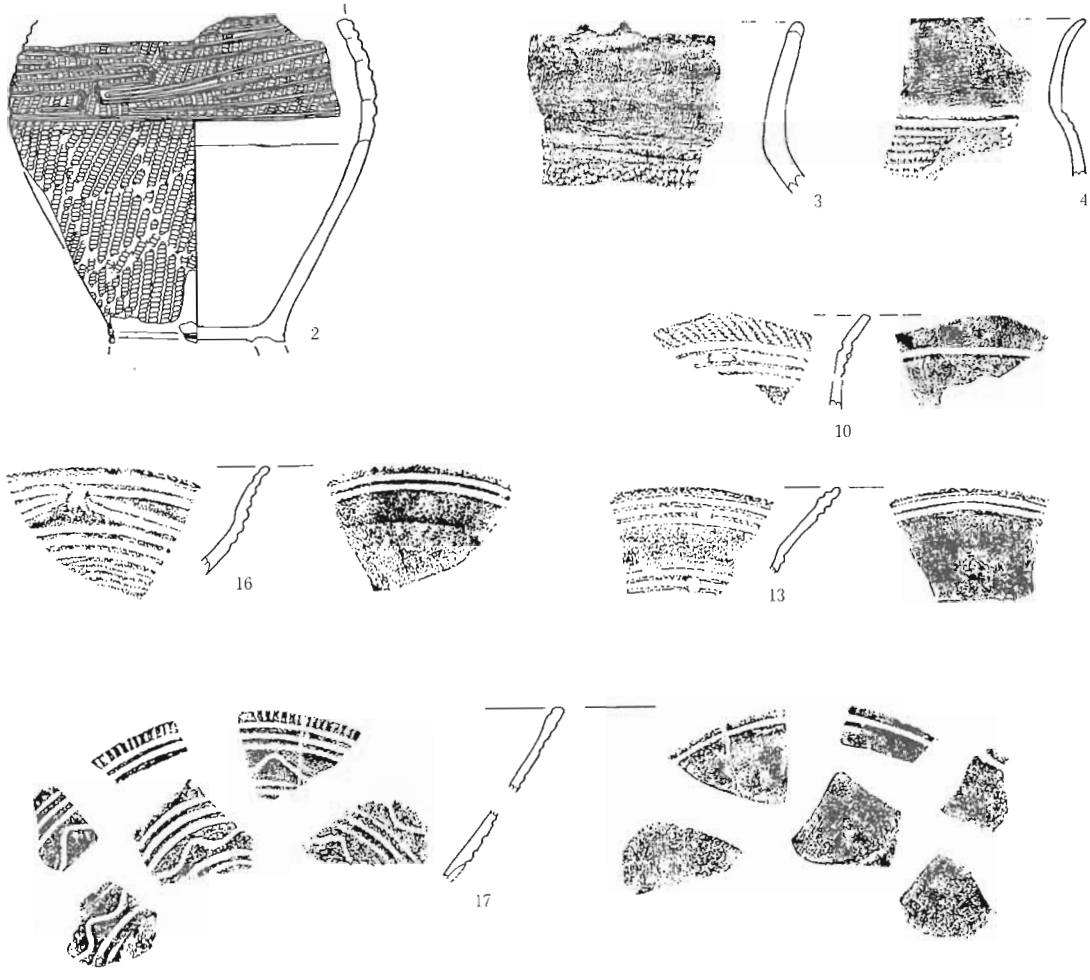


青森県八戸市弥次郎窪遺跡7号住居出土遺物

第90図　火行塚・弥次郎窪遺跡Ⅱ出土土器

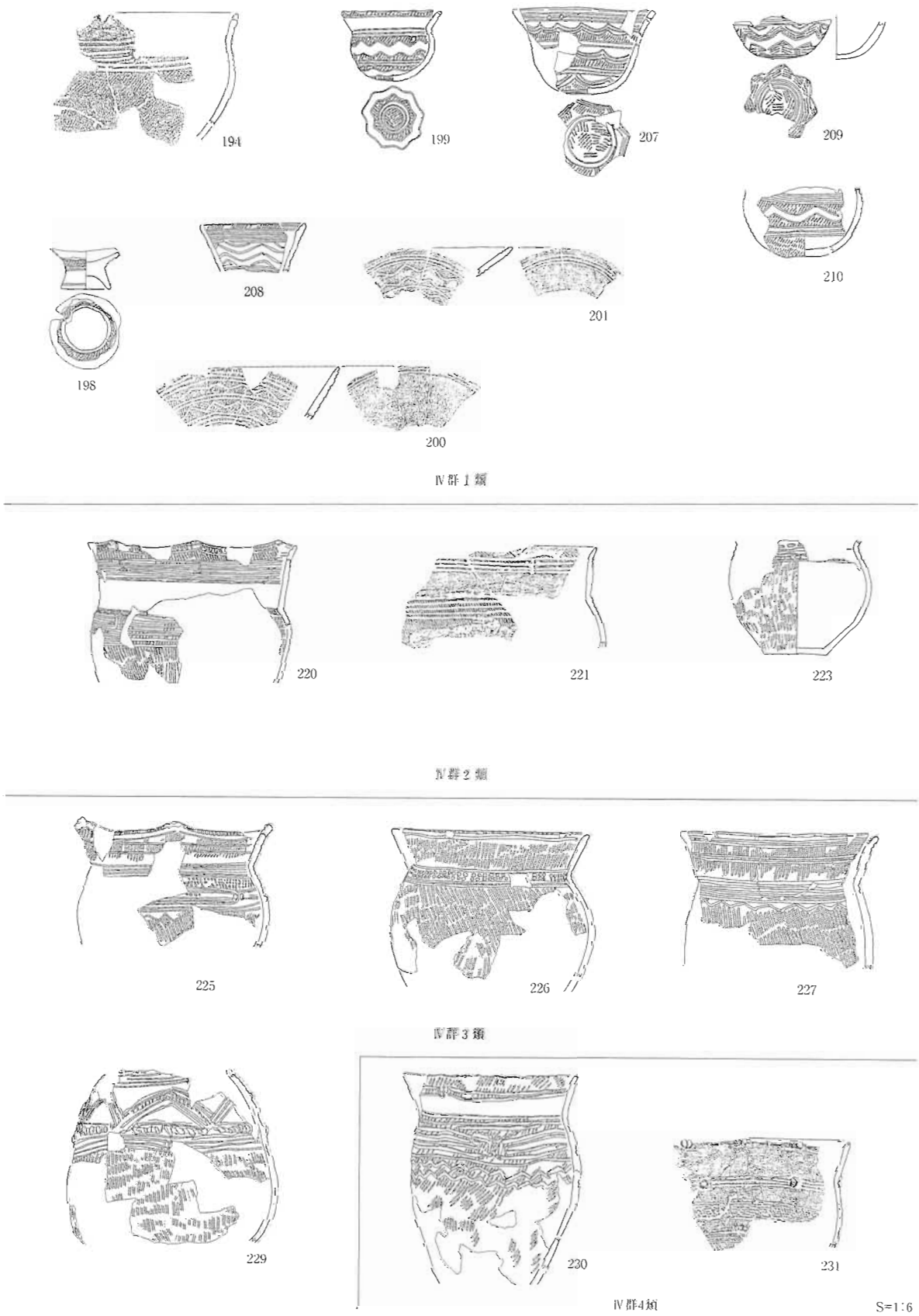


青森県八戸市弥次郎窪遺跡Ⅱ　9号住居出土遺物

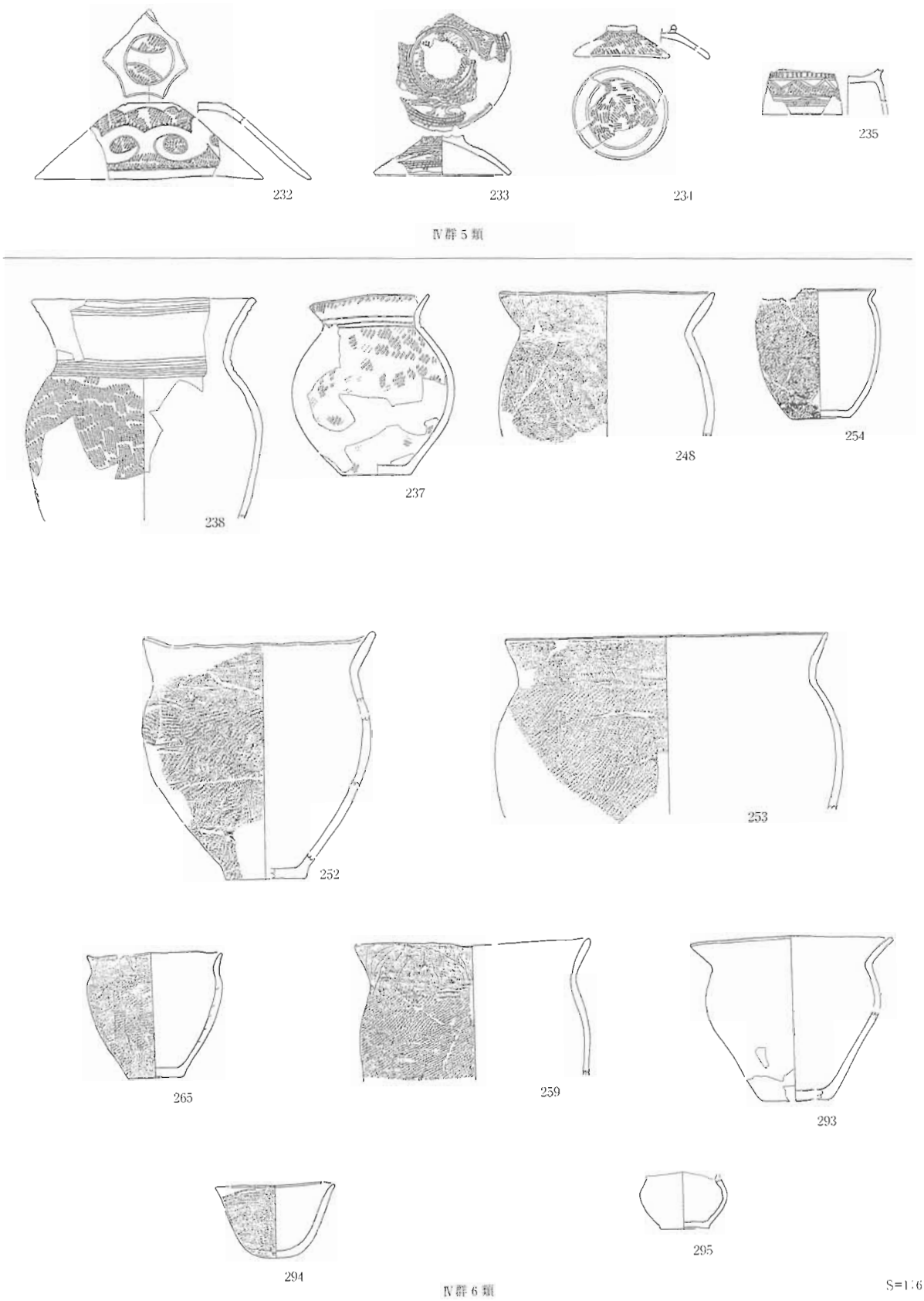


青森県八戸市風張(1)遺跡・37号住居出土遺物

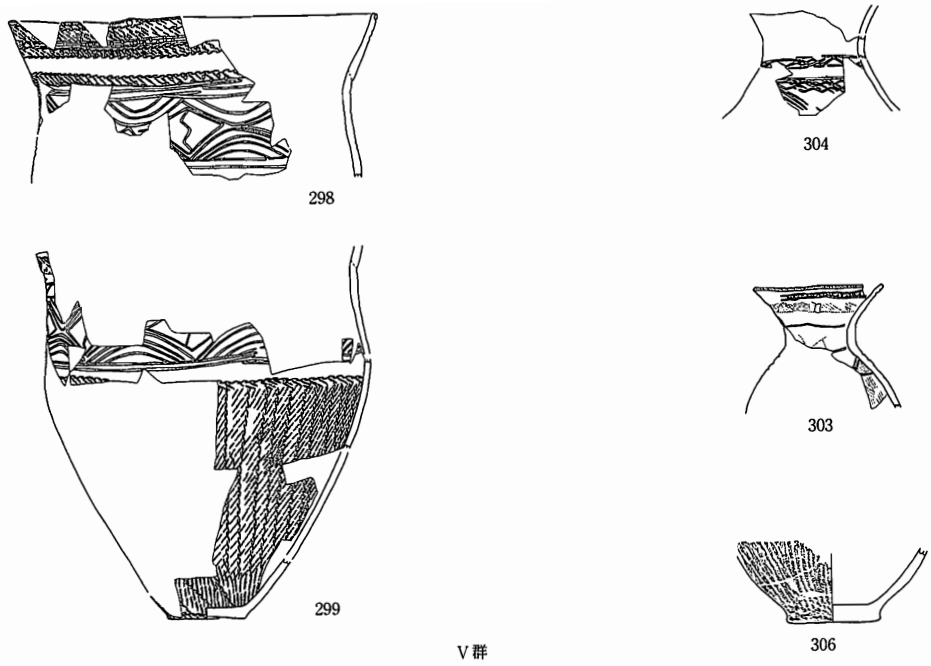
第91図　弥次郎窪遺跡Ⅱ・風張(1)遺跡Ⅱ出土土器



第92図　弥生土器集成図1



第93図　弥生土器集成図2



第94図　弥生土器集成図 3

(3)土製品について

土偶・スタンプ形土製品・垂飾り・耳飾り・勾玉・円盤状土製品が出土した。土偶については、竹管刺突・鋸歯状の沈線文・ひざこぞうを成形するもの、肩のはった「いかり」のポーズなど、縄文時代後期中葉～後葉の土偶の特徴を持つものが多数であった。307は、背中部でうずくまる姿勢のものと推測される。

(4)赤色顔料について

Ⅱ群土器の中で、赤色顔料が塗布される器種は、壺・注口土器に認められた。深鉢・鉢には認められなかった。また、Ⅳ群土器の中では、Ⅳ群1類土器の第92・93図の199・207・209・210・232の文様を持つものに赤色顔料が塗布される特徴がある。

(5)海綿骨針について

本遺跡から出土した土器・土製品の胎土に海綿骨針が含まれる。海綿骨針は、縄文時代後期・晩期の土器・土製品に顕著に認められ、弥生時代中期～後期の土器にはほとんど認められない（Ⅳ群１類土器の一部認められ、Ⅳ群２～４類土器には認められなかった)。この海綿骨針は、当遺跡から南西へ２kmに位置する大向Ⅱ遺跡の奈良・平安時代の土器にも顕著に認められた。内面黒色処理された土師器の坏や縄文時代後期・晩期の黒く磨かれた土器の器面は、肉眼による観察で容易に確認できた。

本遺跡において、縄文時代後期・晩期の遺物には、顕著に認められ、弥生時代の遺物には認められないことから、遺物の搬出・搬入が推測される（例えば海綿骨針が含まれるものは当地域のもので、含まれないものは他の地域から搬入されたというように)。しかし、あくまでも肉眼による観察であることから、見逃している可能性は否定出来ない。また、上述してあるが、内面黒色処理された坏・黒く磨かれた器面が肉眼観察で容易に認識できることから、一次焼成の状況や使用する粘土の違いによって、肉眼観察が困難で海綿骨針の有無を確認できなかったことも否定できないが、縄文時代と弥生時代に土器成形時に使用する粘土の質に違いがあるものと言える。

(6)黒色の付着物について

Ⅲｂ層から出土した縄文時代後期中葉～後葉の遺物に黒色の付着物がみられた。アスファルトと思われる付着物は、主に注口土器の注口部、石鏃の基部、円盤状土製品及び台付の外面、土偶の接合部等にみられる。

このアスファルトと思われる黒色付着物とは、様相が異なる塗膜状のものもみられた。これは、アスファルトと思われる付着物と比較して光沢がある。140の壺口縁部、167・168の無文の鉢形の土器内面･外面に認められる。特にも167は内面ほぼ全面に認められ、塗膜状付着物の容器を想定させる。塗膜状の付着物は、分析・鑑定を行わなかったため性格は不明であるが、漆？を想定させるものと推測する。

(7)石器について

遺構内外合わせて大コンテナで約９箱分の石器類が出土した。登録した遺物の内訳（不掲載含）は、石鏃54点、石匙８点、石錐17点、掻・削器類29点、異形石器２点、石篦１点、石核16点、打製石斧４点、磨製石斧17点、石錘185点、敲石14点、磨石31点、凹石29点、台石３点、石皿１点である。この登録したものを第95図においてグラフを用いて示した。石錘については、登録しないものが小コンテナ2.5箱分あることから、300点は越えるものと思われ、グラフ表示も他の石器と比較して、圧倒的に多い数字が算出される。

次に器種について、述べたい。**石鏃**については、Ⅲａ層及びⅢｂ層共に出土した。Ⅲａ層及びⅢｂ層それぞれの形状等の差異を判別することは出来なかった。Ⅲａ層・Ⅲｂ層共に有茎鏃が多い傾向がある。**石錐**は円形状のツマミを有すものとツマミを有さないものの２種が出土した。Ⅲｂ層からの出土が主であった。**石匙**は、縦型と横型の両方が出土した。Ⅲｂ層のみの出土である。

石錘は、Ⅲａ層から出土したものは、片側の端部に剥離調整を持つ傾向がある。Ⅲｂ層から出土した石錘については、前項で調整方法によって１類ａ～ｃ・２類に分類した。１類ｂとした両端部に、片面ずつ表裏対称に調整の施されているものは、第96図のような製作工程が想定される。この方法は、１類ｂのみでなく、両端部の両面を剥離する１類ａの中にも、両面を剥離していると思われるが、どちらか一方の片面を中心に剥離調整が施されるものも含まれているものと思われる。

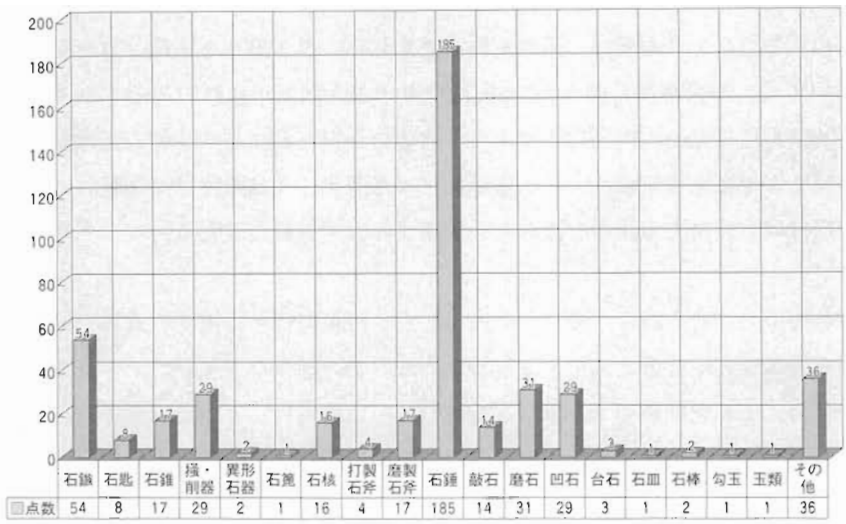
１類ｃについては、未製品ではなく素材の形状を利用したものと考えられる。、また、抉入が深いものや浅いもの、遺物番号８のように凹みがみられるものもあることから、それぞれに用途の違いも考えられるのではないだろうか。

石錘の用途として、漁網用の錘または、編み物用の錘という見解がある。本遺跡の立地条件（安比川右岸の段丘上に立地）から考えると、漁網用の錘が想定できる。また、大量に出土したことを考えると、大規模な用具（装置）に伴う遺物と考えられる。なお、出土状況については、まとまって出土したものでなく、各地点で散在して出土する状況であった。

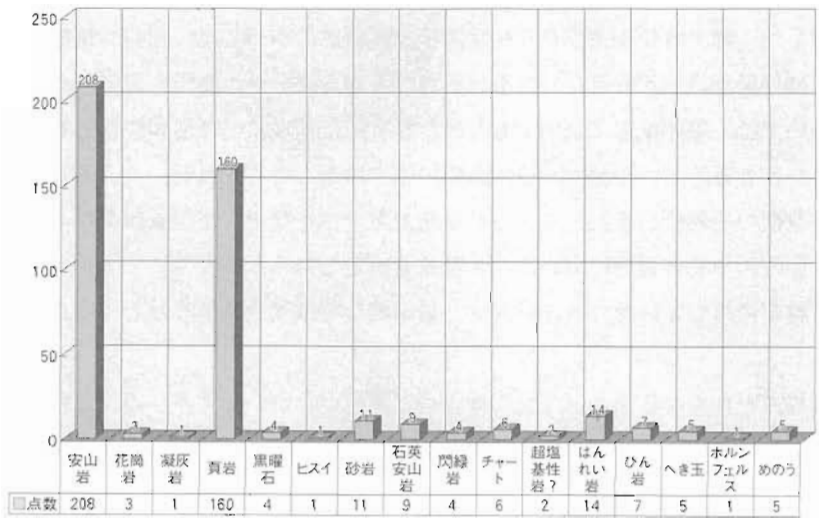
敲石・凹石・磨石についても、Ⅲａ層及びⅢｂ層から共に出土しているが、形状等の差異を判別することは、出来なかった。

本遺跡石器及び石製品に用いられた、石質を第95図においてグラフによって示した（登録分のみ）。石錘・凹石・磨石等、礫石器に用いられた、安山岩が多数を占める。石鏃・石匙・石錐等の剥片石器に頁岩が多く用いられたことから、頁岩の量も安山岩に次いで多数を占める。他の器種と石質の関係は、石核が16点出土している。本遺跡で５点のみ確認したへき玉が、５点中４点が石核に用いられていた。しかし、道具として使用されたと思われるものは打製石斧の１点のみであった。黒曜石は、４点出土している。透明感のあるもので、産地分析を行わなかったため、産地を特定出来なかったが、交易を窺わせる資料である。

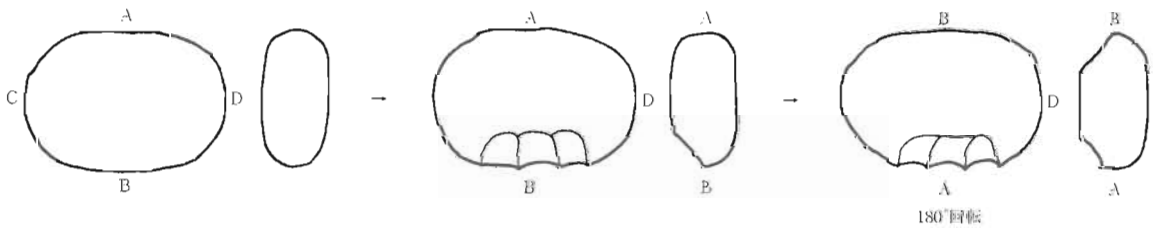
石器・石製品器種別グラフ



石質別グラフ



第95図　石器・石製品器種別グラフ、石質別グラフ



第96図　石錘製作想定図

(8)石製品について

石製品と思われる遺物は、Ⅲａ層及びⅢｂ層合わせて、5点出土した。そのうち、Ⅲａ層から、57(垂れ飾り？)・58(玉類) が出土した。アクセサリー系の遺物と思われる。Ⅲｂ層から石棒２点とヒスイ製の勾玉が出土した。勾玉については、本遺跡から西へ約1.5㎞に位置する大向上平遺跡（当センター調査2000）において、縄文時代後期初頭の埋設土器の内部にアマオブネ貝製の小玉と共にヒスイ製の大珠が出土している。この事例から時期差はあるが糸魚川産のヒスイが当地域に持たされる交易の流通路を見いだす資料が追加されたことと、当時の当地域の経済力が強かったことを追証する成果資料と言える。

(9)青白磁片について

遺構外の出土遺物の中で、青白磁片（Ⅲ)1点が出土した。12世紀代の中国産の遺物である。平泉町内の発掘調査や太宰府の発掘調査の中で希に出土する遺物である。この稀少な遺物が出土することは、平成12～13年の二戸市教育委員会による発掘調査で、諏訪前遺跡（13～15世紀代）と駒焼場遺跡（11～13世紀）の遺構・遺物が当遺物と該期することから、陶磁器の流通及び中世初期の二戸地域の社会様相と流通を知る上で貴重な成果資料と言える。

3. おわりに

２年間にわたる調査で、縄文時代後期中葉～後葉の集落跡及び縄文時代後期中葉～後葉と弥生時代中期の遺物包含層を確認した。縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡については、周辺の遺跡群（馬場野Ⅱ・長倉Ⅰ・風張遺跡等）の住居形態と比較及び検討を行えればと考えていた。また、出土例が少ない弥生時代中期～後期の遺物については、東北地方に類例をもとめ、総合的に地域における類似性と相違性を見いだし、比較及び検証を行えればと考えていたが、本遺跡のみの報告になってしまった。

弥生時代中期～後期の遺物は、前記しているが東北地方全体を見ても出土例が少なく、貴重な成果資料と言える。特にも弥生時代中期の遺物についは、１型式を設定し得るものと言っても言い過ぎではないと考えている。この報告書を活用していただき、時代的・地域的な特徴及び見解を示していただければ、幸いである。

最後に、この報告書を作成するあたって、ご助言・ご指導いただいた方々、並び、野外及び室内作業員の協力で、無事報告書を作成することができ、安堵と感謝の気持ちで一杯である。本当に心から感謝申し上げる。

(参考・引用文献)

滝沢村教育委員会　(昭和61年)　湯舟沢遺跡 滝沢村文化財調査報告書第２集
須藤　隆　(1998)『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』
須藤　隆　(1970)「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』
伊藤信雄・須藤　隆　(1982)『瀬野遺跡』東北考古学会
小田野哲憲　(1987)「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』5
斉藤邦雄　(1993)「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学会』
金子昭彦　(1994)「十腰内Ⅲ式とⅣ式の境界－東北地方北部における縄文時代」『岩手考古学会』
八木勝枝　(2001)「新潟県における後期中葉土偶の変遷」『新潟考古学談話会会報』第23号
岡田康博　(1986)「十腰内第Ⅲ群・第Ⅳ群・第Ⅴ群土器の再検討」『弘前大学考古学研究』第3号
㈶岩手県埋蔵文化財センター(1981)『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書　大渕遺跡・火行塚』　文化財調査報告書第23集
㈶岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター(1986)『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　文化財調査報告書　第99集
㈶岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター(1999)『細田遺跡発掘調査報告書』　文化財調査報告書　第283集
㈶岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター(2000)『大向上平遺跡発掘調査報告書』　文化財調査報告書　第335集
㈶岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター(2000)『長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　文化財調査報告書　第336集
㈶岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター(2002)『大向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　文化財調査報告書　第387集
青森県郷土館　(昭和54年)『宇鉄Ⅱ発掘調査報告書』　調査報告書第6集
青森県教育委員会　『風張(1)遺跡Ⅱ』　文化財調査報告書42集
青森県教育委員会・垂柳遺跡発掘調査会　(昭和60年)『垂柳遺跡』文化財調査報告書　第88集
青森県教育委員会　(1997)『垂柳遺跡・五輪野遺跡』　文化財調査報告書　第219集
青森県教育委員会　(1998)『弥次郎窪遺跡Ⅱ』　文化財調査報告書　第238集
奈良国立文化財研究所　『足沢遺跡資料』　山内清男考古資料10　奈良国立文化財研究所史料　第50冊
㈶群馬埋蔵文化財調査事業団　(2000)『三ツ木皿沼遺跡』　文化財調査事業団調査報告書第261集
能登　健・中村直美・菊池貴広　(2000)「十和田ａ火山灰による災害と復旧－いわゆる畝間状遺構の再考－」『紀要ＸＩＸ』

遺跡出土火山灰の分析鑑定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

二戸市に所在する浅石遺跡は、岩手県北部を流れる馬淵川の支流である安比川の右岸に位置する。今回の発掘調査では、弥生時代中期の包含層が確認され、その上位に灰褐色を呈する細粒の火山灰層が認められている。

今回の分析調査では、この火山灰層を構成する砕屑物の特徴を捉え、また砕屑物中に火山ガラスが含まれる場合は、その屈折率を測定することにより、火山灰の特定を試みる。

1．試料

発掘調査で確認された土層断面は、上位よりⅠ層からⅥ層まで分層されている。このうち、Ⅵ層は弥生時代中期の包含層とされている暗褐色土層、Ⅲ～Ⅴ層が灰褐色の火山灰層、Ⅱ層およびⅠ層は褐～暗褐色土層である。試料は、火山灰層最下部のⅤ層より採取された１点である。

2．分析方法

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は、古澤（1995）のＭＡＩＯＴを使用した温度変化法を用いた。

3．結果

砕屑物は、中量の軽石と多量の火山ガラスにより構成され、鉱物粒や岩石片などはほとんど含まれていない。軽石は、粒径0.7～7.0mm、白色～灰白色を呈し、非常に細かなスポンジ状の発泡をしている。火山ガラスは、中砂～細砂径、無色透明で塊状の軽石型が多く、少量の繊維束状の軽石型とバブル型が含まれる。

火山ガラスの屈折率は、1.501～1.510（モードは1.501～1.505）である（図１）。

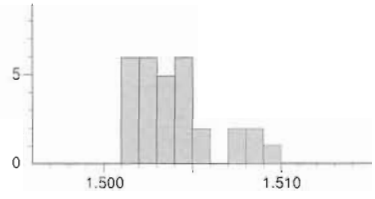


図１火山ガラスの屈折率
横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す

4．考察

岩手県北部地域の完新世土壌層中には、各地で十和田カルデラ起源のテフラ（火山灰）が確認されている（例えば、町田ほか（1984）、Ａｒａｉ　ｅｔ　ａｌ．（1986）、町田・新井（1992）など）。そのうち、弥生時代

以降では、十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）および十和田ｂテフラ（Ｔｏ－ｂ）が知られている。両テフラの岩石学的記載は、上記各文献と町田ほか（1981）に詳細に述べられている。また、これらの噴出年代については、Ｔｏ－ｂは約2000年前（町田・新井，1992)、Ｔｏ－ａはＡ．Ｄ．915年（町田・新井，1992；早川・小山，1998）とされている。

これらの記載と比較すると、今回の試料は、層位からみてＴｏ－ｂに対比される可能性があるが、砕屑物の特徴（軽石や火山ガラスの色、発泡度、形態）はＴｏ－ａに類似する。一方、火山ガラスの屈折率は、Ａｒａｉ ｅｔ　ａｌ．(1986）および町田・新井（1992）によると、今回の試料はどちらのテフラよりもレンジが高く、完全には一致しない。ただし、町田ほか（1981）に記載されたＴｏ－ａの屈折率とは、ほぼ一致する。

以上のことから、今回の試料が採取された火山灰層は、Ｔｏ－ｂよりはＴｏ－ａである可能性の方が高いと考えられる。しかし、遺物包含層との層位関係および屈折率の低い火山ガラスが含まれていないことなどを考慮すると、現時点ではＴｏ－ａと断定することはできない。いまのところ、Ⅰ層からⅥ層までの土層の堆積状況については、ほとんど情報を得ていないため、例えばⅥ層とⅤ層との間の不整合の有無やⅤ層中の土地利用状況・堆積構造、Ⅴ層からⅢ層にかけてのテフラの分布状況などは全く考慮せずに、分析結果のみによる報告に留まっている。今後これに関する情報を得て、Ｔｏ－ａやＴｏ－ｂとの対比を確実なものとしたい。

なお、Ｔｏ－ａでもＴｏ－ｂでもない別の十和田起源のテフラである可能性については、現時点で得られる文献資料において、そのようなテフラの記載が認められないため、ここで議論することはできない。今後、遺跡周辺地域における完新世土壌層中のテフラ層の情報蓄積を待って、今回の試料も再評価することとしたい。

参考文献

Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyauchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K.（1986）Cataalog for late quaternary marker-tephras in Japan Ⅱ－Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido－. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, p. 223-250.

古澤　明　(1995)　火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, p. 123-133.

早川由紀夫・小山真人　(1998)　日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－. 火山，43，p. 403-407.

町田　洋・新井房夫　(1992)　火山灰アトラス．276p.，東京大学出版会.

町田　洋・新井房夫・森脇　広　(1981)　日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p. 562-569.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦　(1984)　テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p. 865-928.

図版１　火山灰試料中の軽石・火山ガラス

１．軽石　　4 mm

２．火山ガラス　　0.5mm

写真図版

1号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡

写真図版１　縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡

1号竪穴住居跡　壁柱穴断面

畝間状遺構　断面

写真図版２　遺構

火山灰堆積状況（火山灰下位に位置する黒土はⅢａ層）

弥生土器（中期）出土状況

写真図版３　火山灰堆積状況・弥生土器出土状況

弥生土器出土状況

縄文時代後期土器集合写真

写真図版 4　弥生土器出土状況・縄文時代後期土器集合写真

弥生土器集合写真

ヒスイ製勾玉・玉類

写真図版５　弥生土器集合写真・ヒスイ製勾玉・玉類

写真図版 6　調査風景

写真図版７　空中写真

写真図版 8　空中写真

調査前風景（西から）

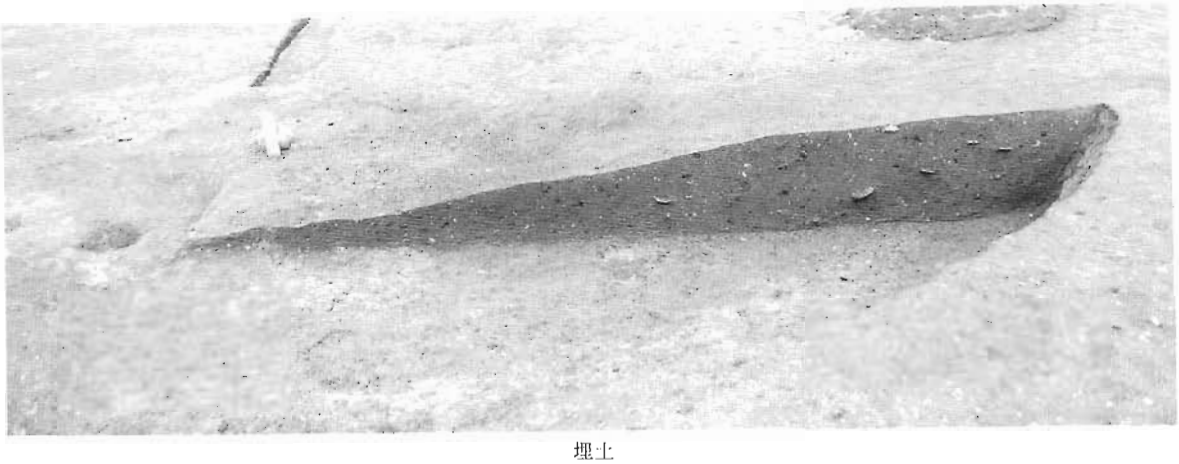
調査前風景（東から）

写真図版 9　調査前風景

1号竪穴住居跡（2回目拡張壁柱穴）全景

1号竪穴住居跡（1～3回目拡張壁柱穴）全景

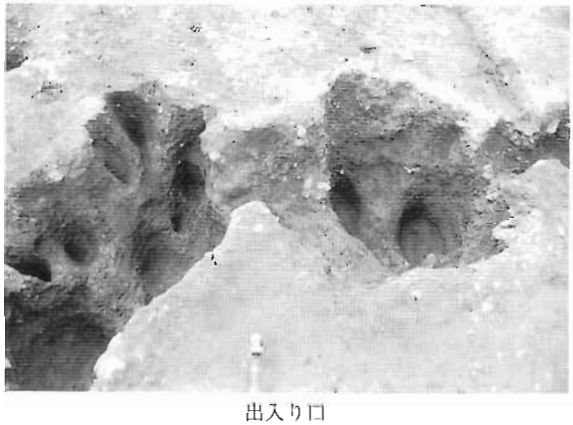
写真図版10　1号竪穴住居跡(1)



埋土

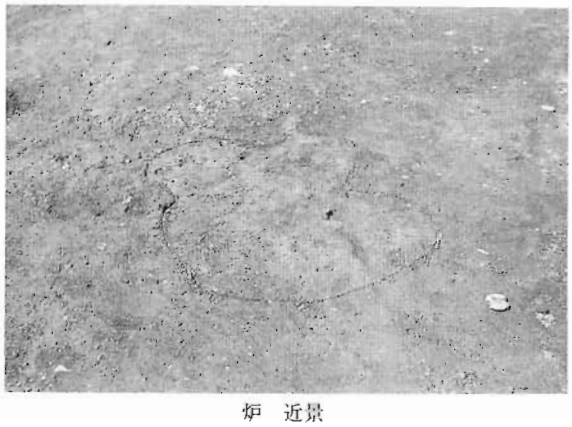
壁柱穴

壁柱穴

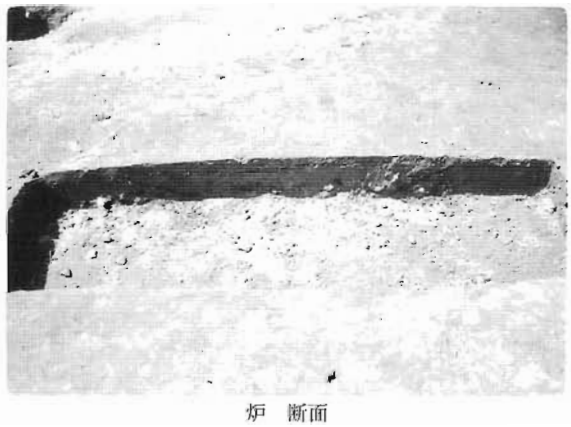


出入り口

遺物出土状況



炉　近景



炉　断面

写真図版11　1号竪穴住居跡(2)

2号竪穴住居跡　全景

2号竪穴住居跡　周辺のベルト断面

炉　近景

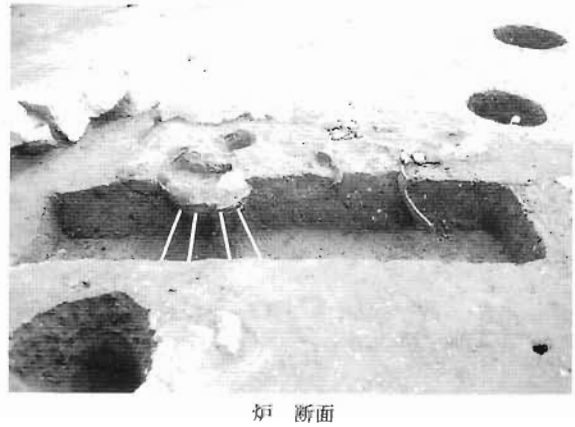
炉　断面

写真図版12　2号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡　全景

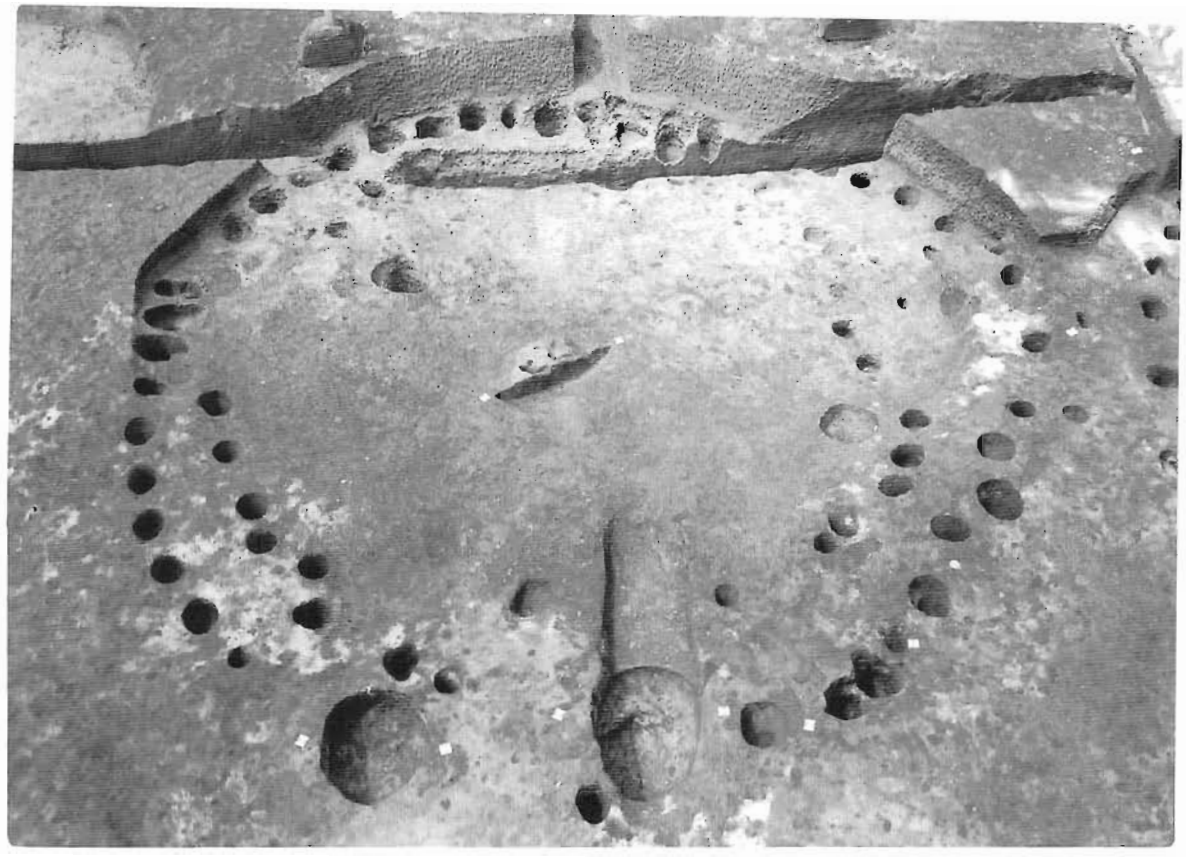
埋土

炉　近景



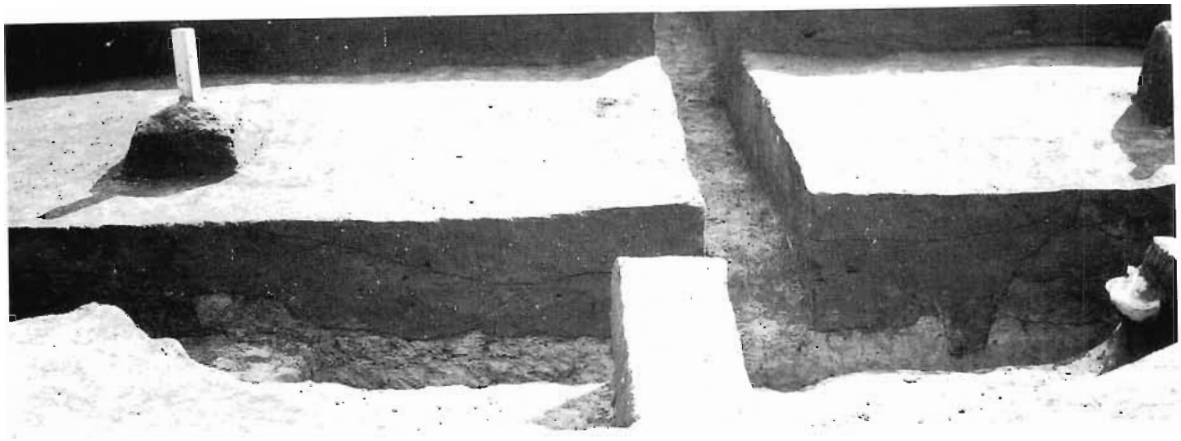
炉　断面

写真図版13　3号竪穴住居跡



5号竪穴住居跡　全景

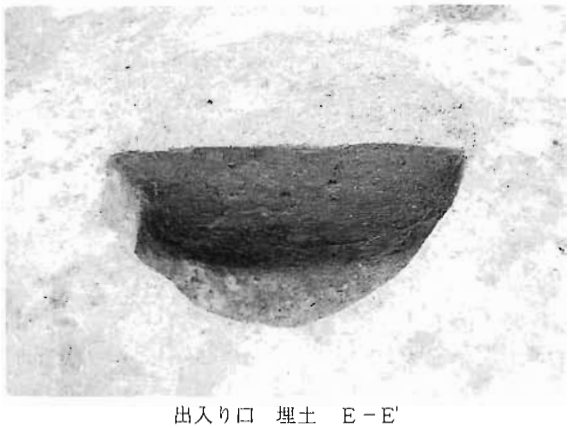
写真図版14　5号竪穴住居跡(1)



埋土

炉　近景

炉　断面



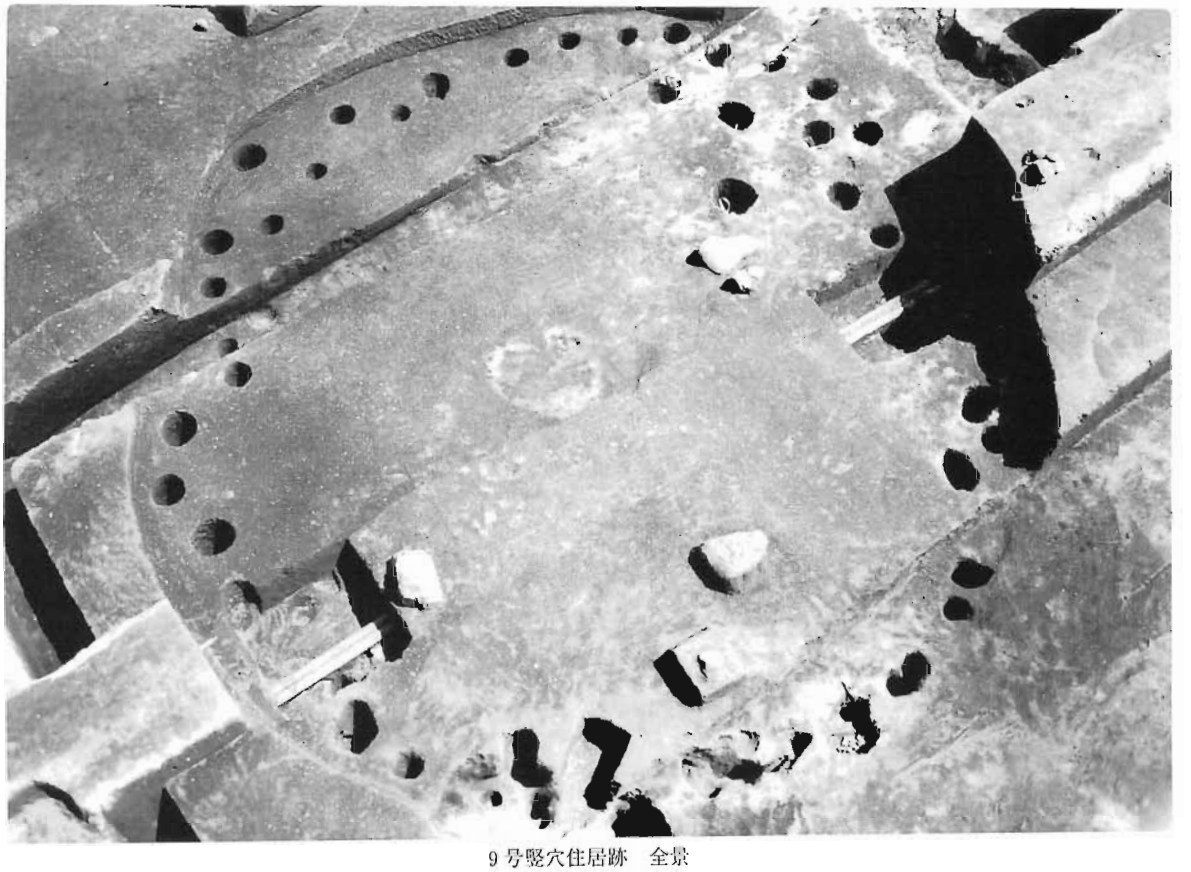
出入り口　埋土　E－E'

テラス状の段の断面

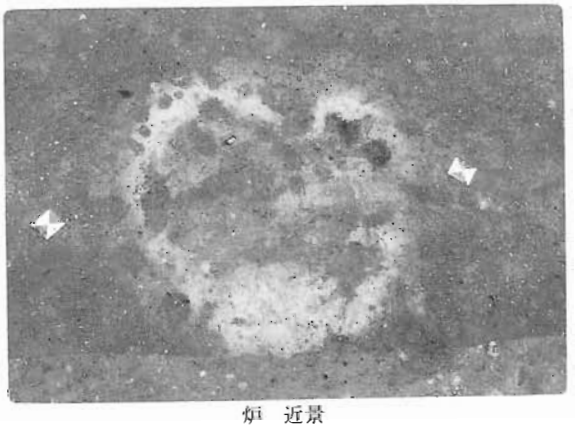
遺物出土状況

出入り口

写真図版15　5号竪穴住居跡(2)



9号竪穴住居跡　全景

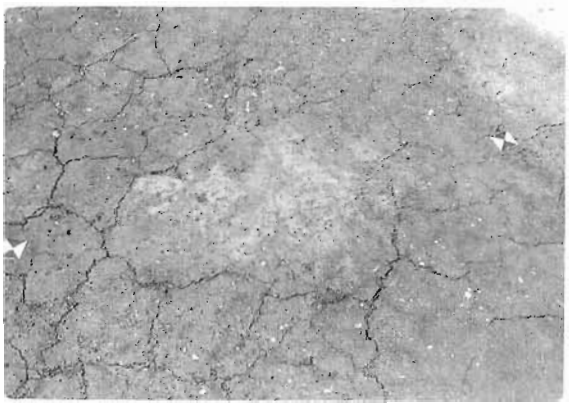


炉　近景

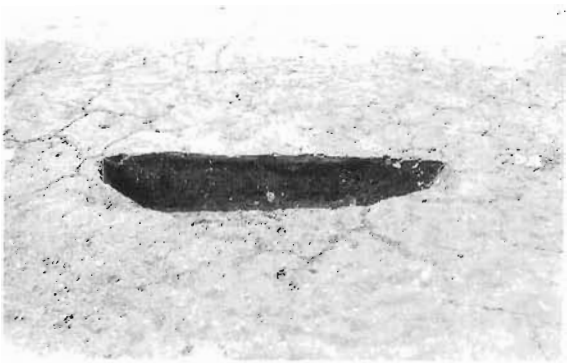
炉　断面

写真図版16　9号竪穴住居跡

11号竪穴住居跡　全景



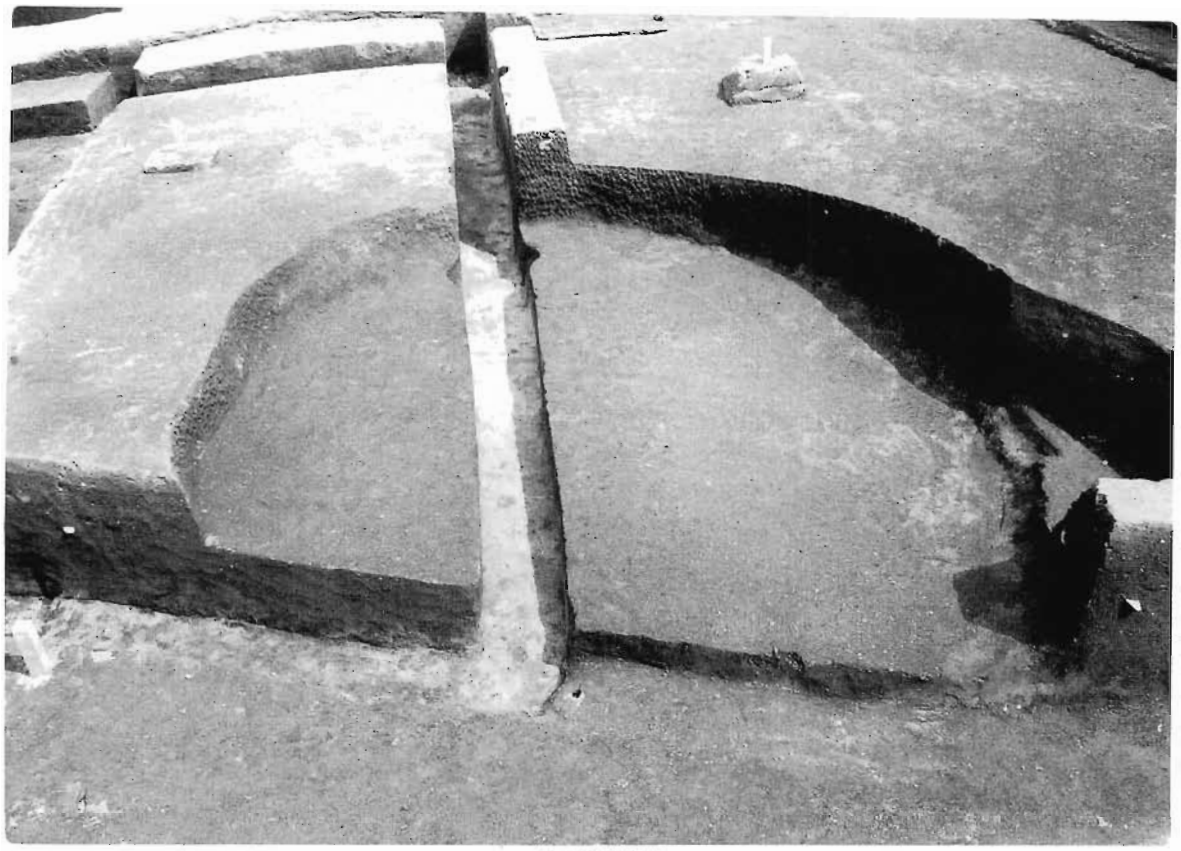
炉　近景



炉　断面

遺物出土状況

写真図版17　11号竪穴住居跡



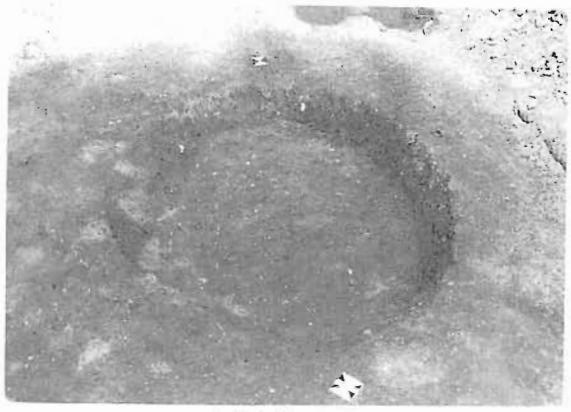
1号住居状遺構

写真図版18　1号住居状遺構

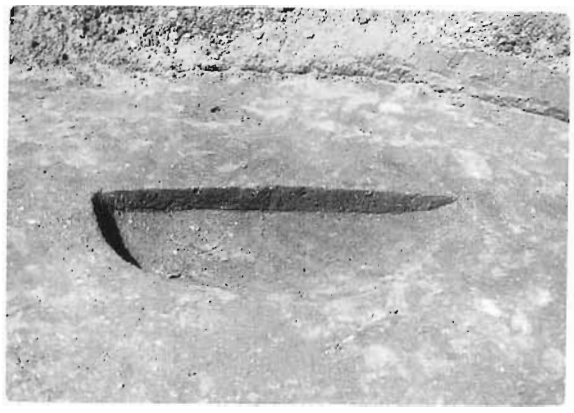
1号柱穴状ピット群（1号掘立柱建物跡）

2号掘立柱建物跡

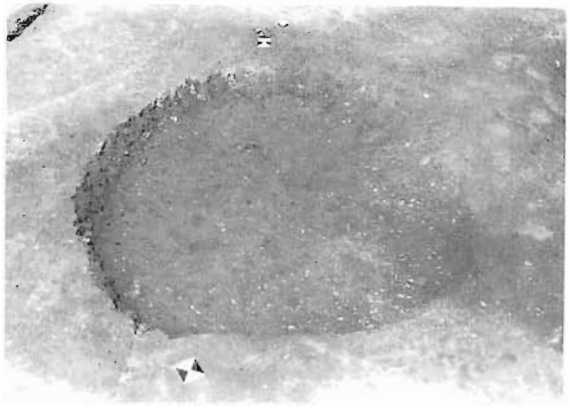
写真図版19　1・2号掘立柱建物跡



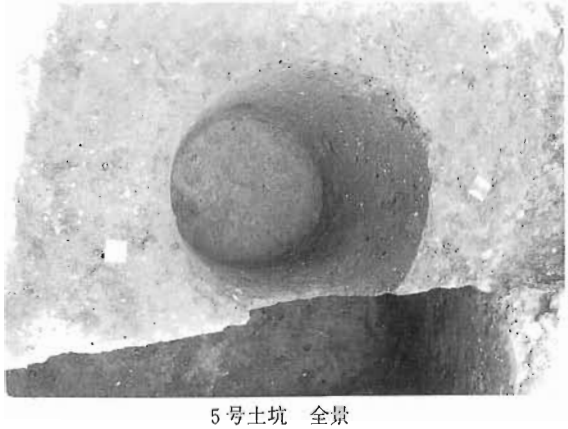
1号土坑　全景



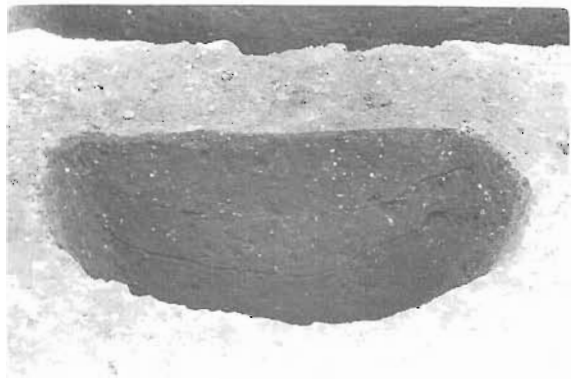
1号土坑　埋土



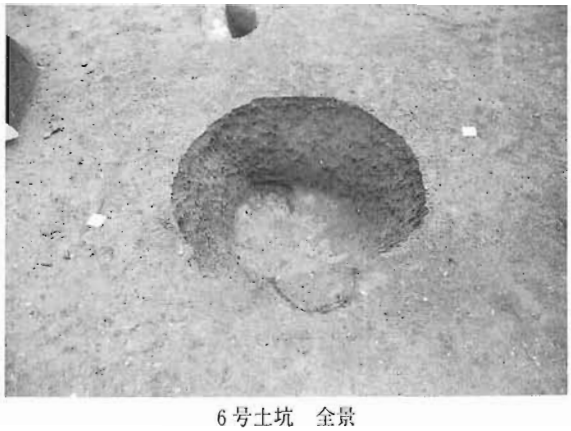
2号土坑　全景



5号土坑　全景



5号土坑　埋土



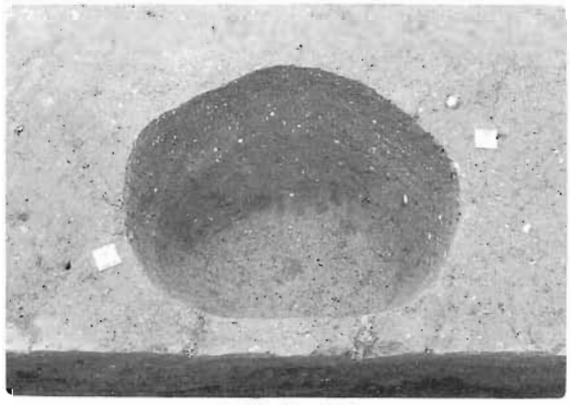
6号土坑　全景

6号土坑　埋土

写真図版20　土坑(1)

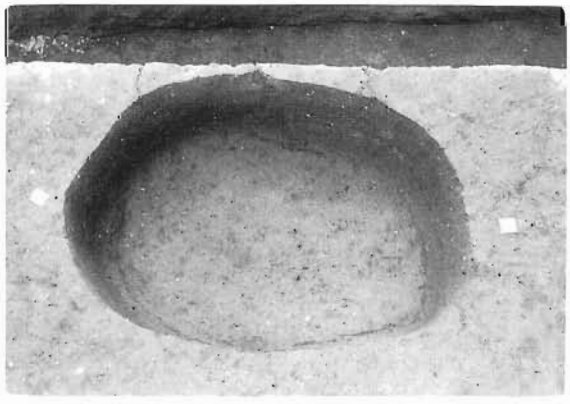
7号土坑　全景

7号土坑　埋土

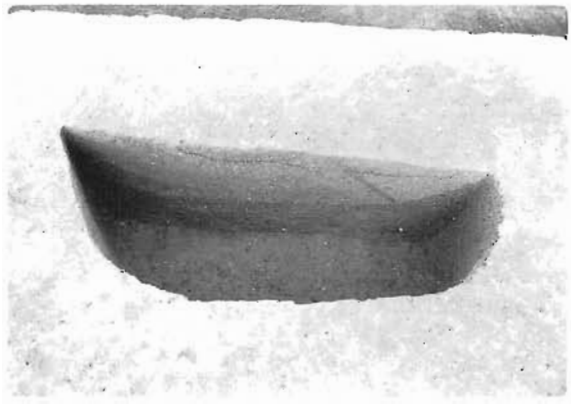


8号土坑　全景

8号土坑　埋土

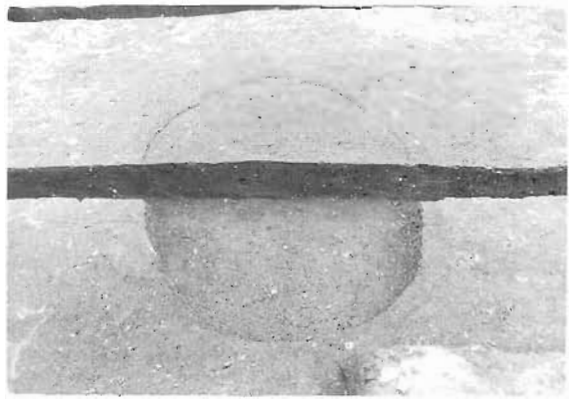


9号土坑　全景



9号土坑　埋土

10号土坑　全景



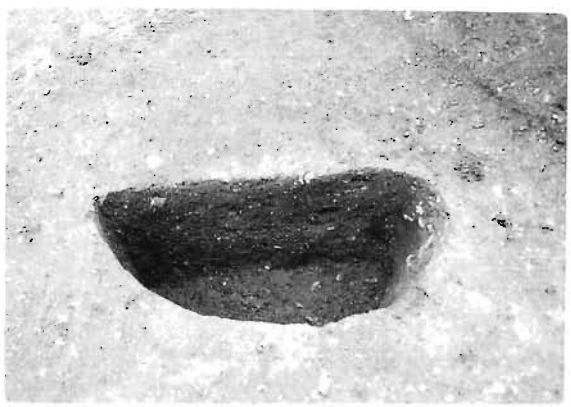
10号土坑　埋土

写真図版21　土坑(2)

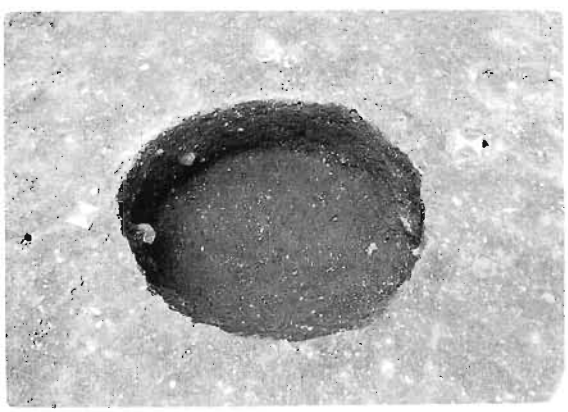
11号土坑　全景

11号土坑　埋土

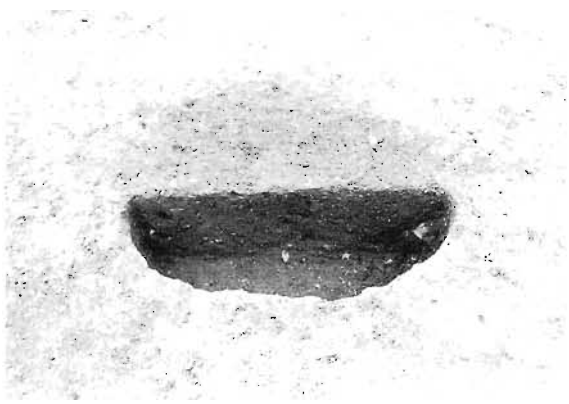
12号土坑　全景



12号土坑　埋土

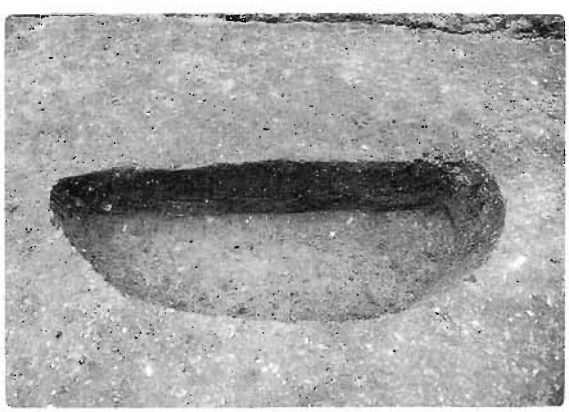


13号土坑　全景



13号土坑　埋土

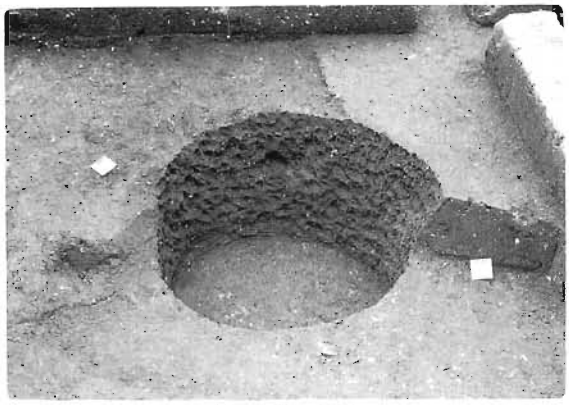
15号土坑　全景



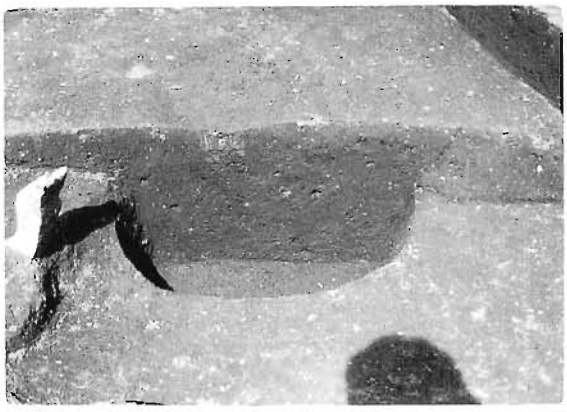
15号土坑　埋土

写真図版22　土坑(3)

17号土坑　全景

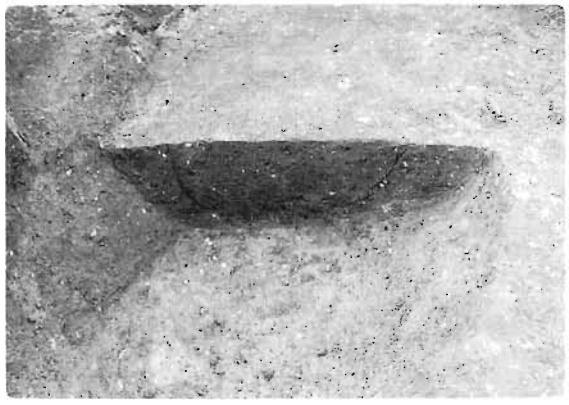


18号土坑　全景



18号土坑　埋土

19号土坑　全景



19号土坑　埋土

20号土坑　全景

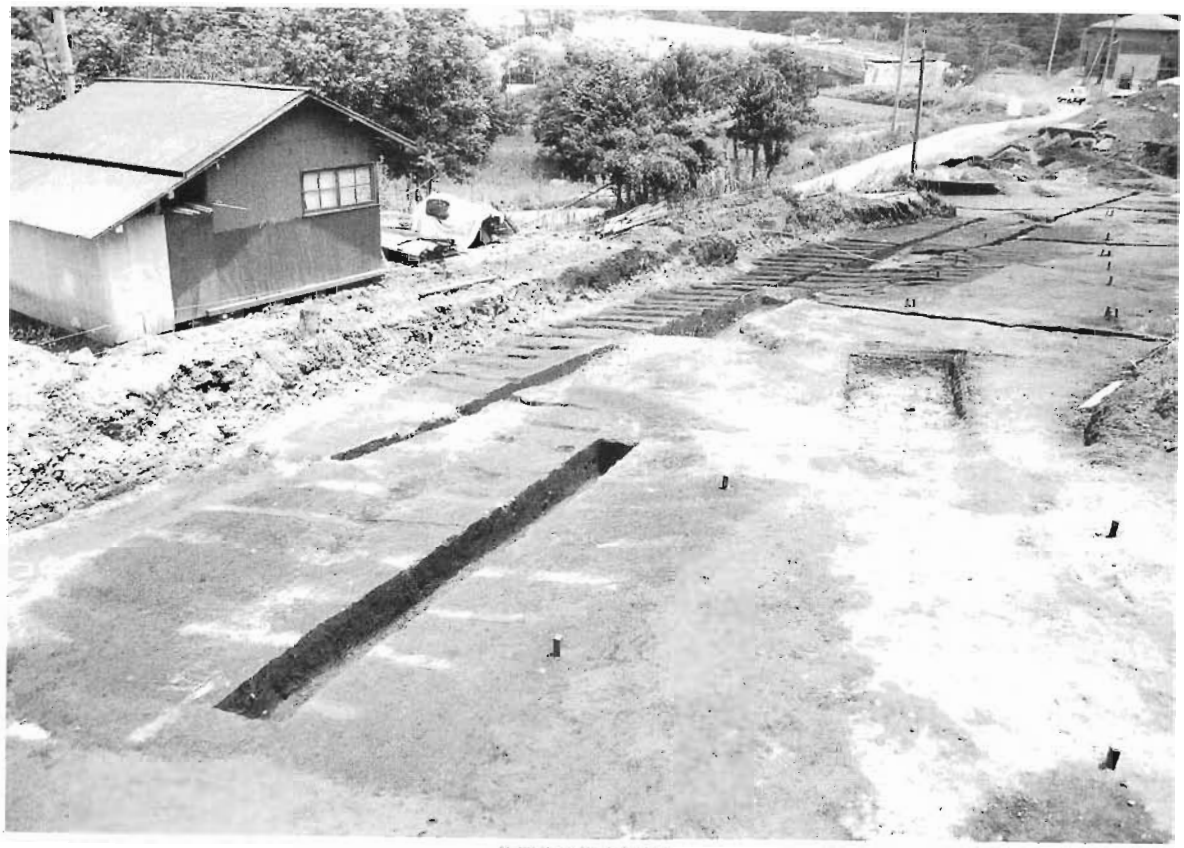
20号土坑　埋土

写真図版23　土坑(4)

2号柱穴状ピット群

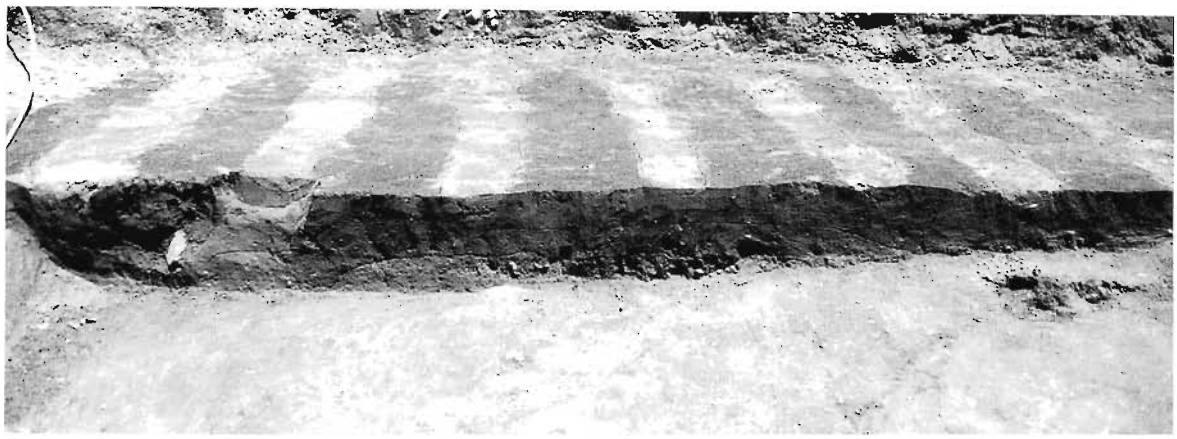
写真図版24　2号柱穴状ピット群

畝間状遺構検出状況



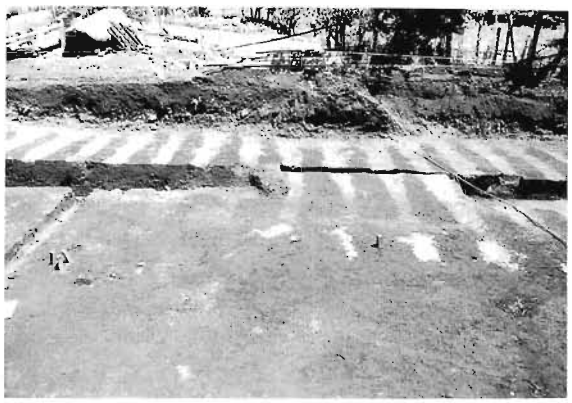
畝間状遺構完掘状況

写真図版25　畝間状遺構(1)

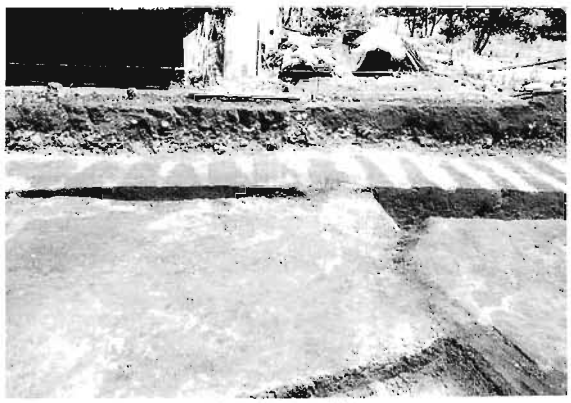


断面

断面



検出状況　近景



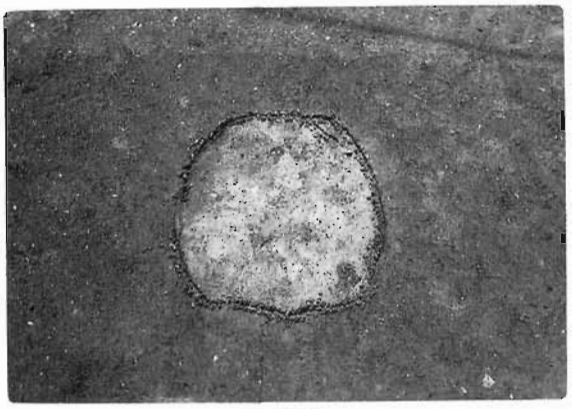
検出状況　近景

完掘　近景

完掘　近景

完掘　近景

写真図版26　畝間状遺構(2)

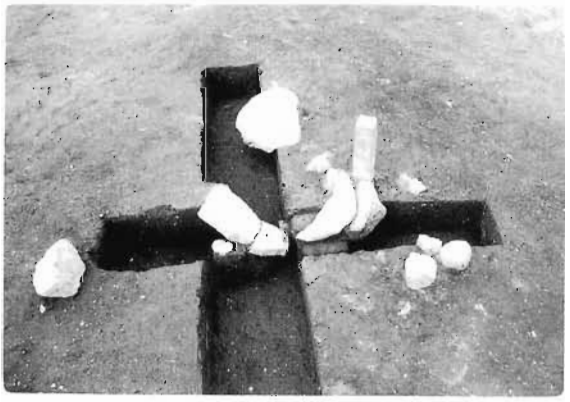


焼土遺構

焼土遺構　断面

炭化材と焼土　近景

溝　埋土



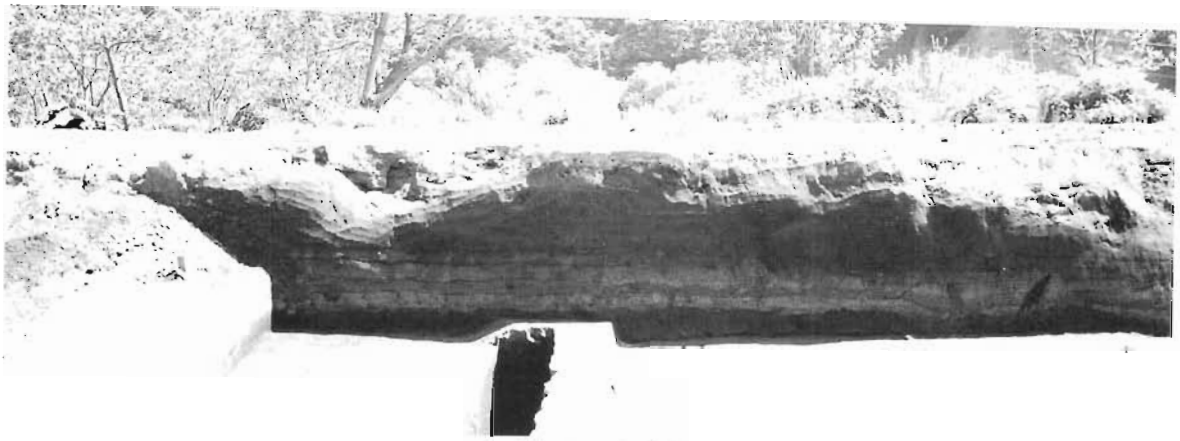
B－B'　断面

A－A'　断面

包含層　断面

包含層　断面

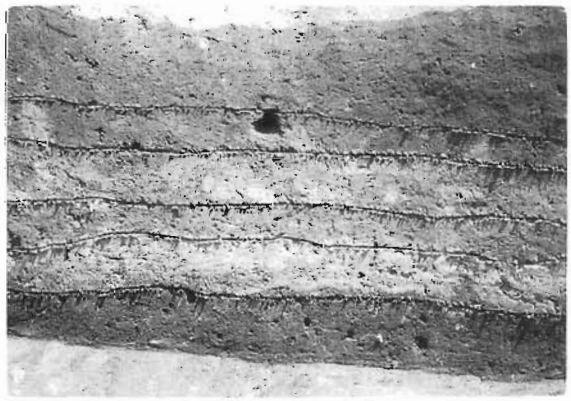
写真図版27　その他の遺構・遺物包含層断面



包含層　E－E'　断面

包含層　断面

包含層　D－D'断面

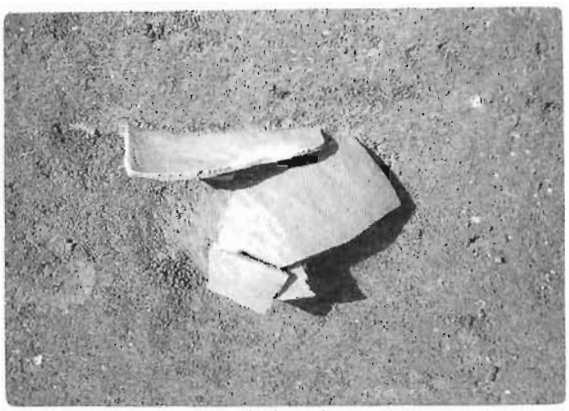


包含層　E－E'断面　近景

包含層　断面

写真図版28　遺物包含層断面

縄文土器



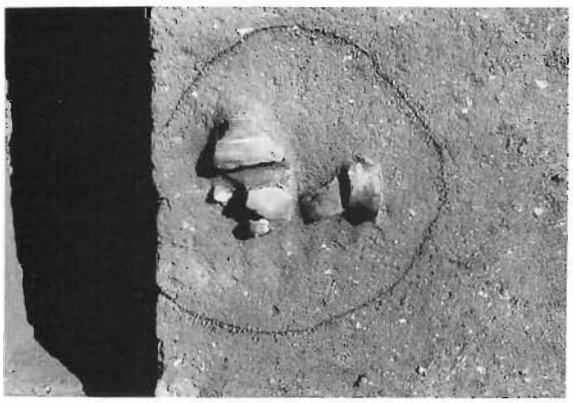
縄文土器

弥生土器

弥生土器

弥生土器

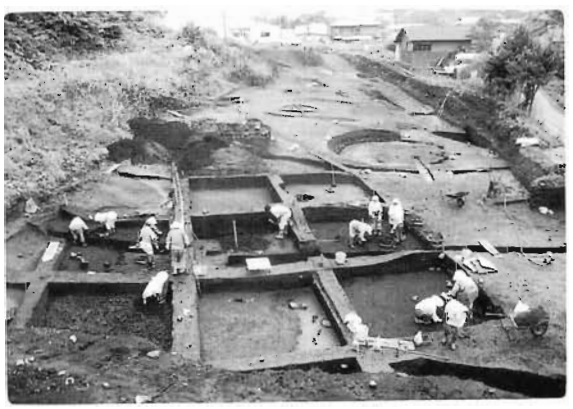
弥生土器

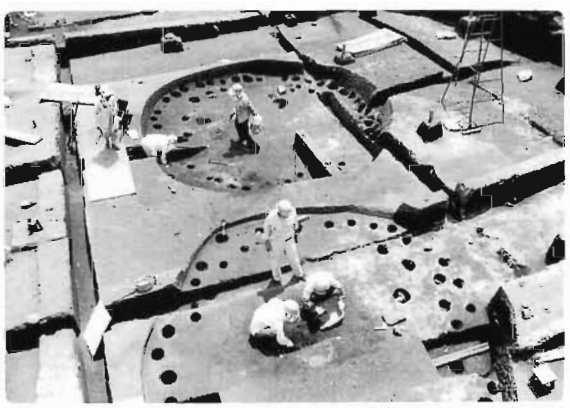


弥生土器

弥生土器

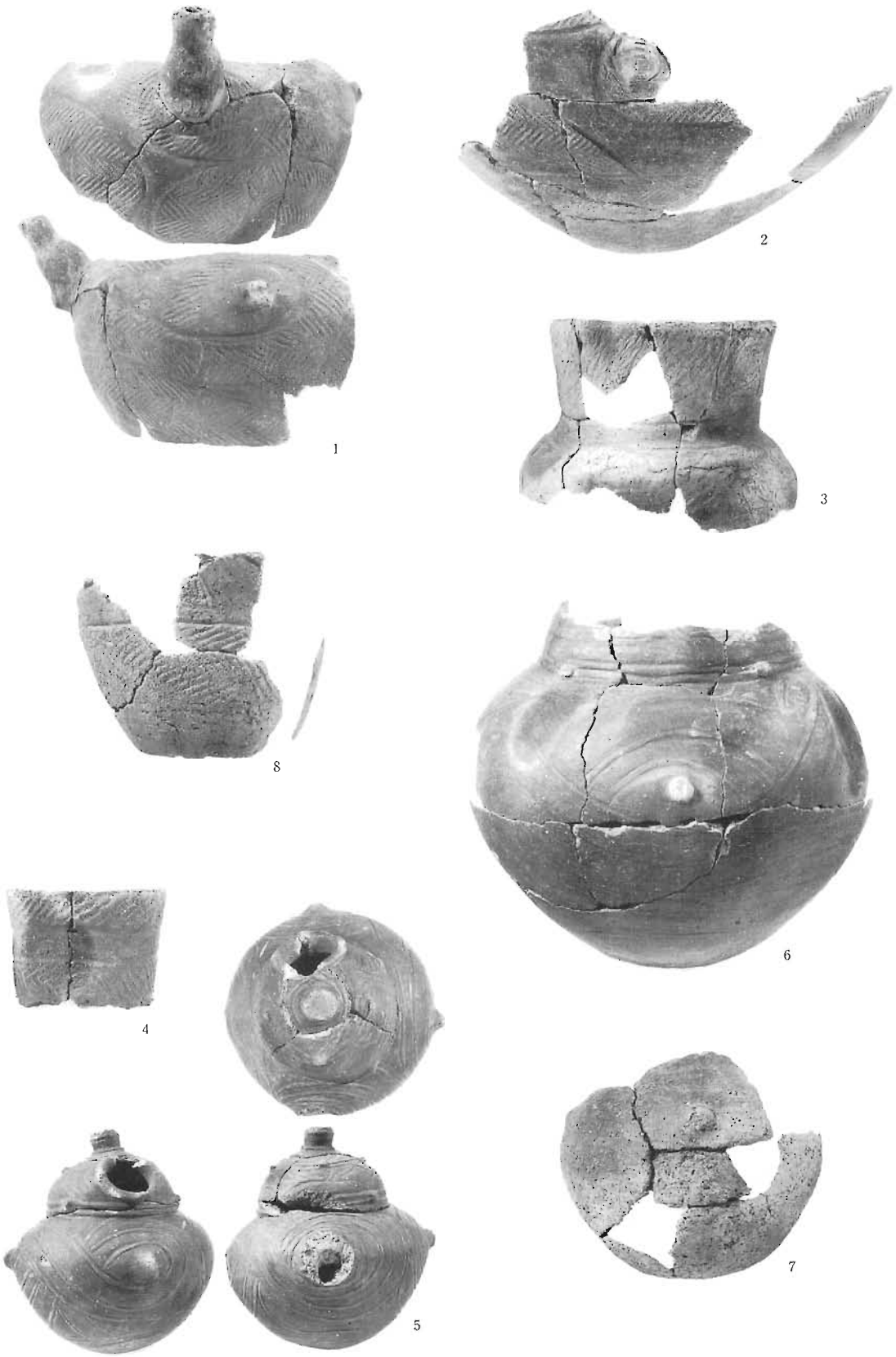
写真図版29　遺物出土状況



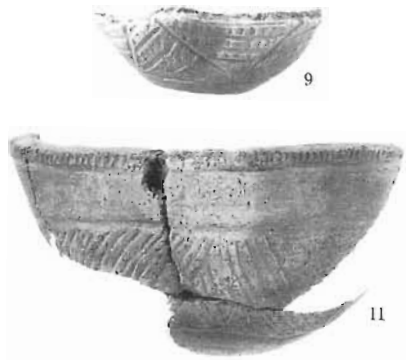


写真図版30　作業風景

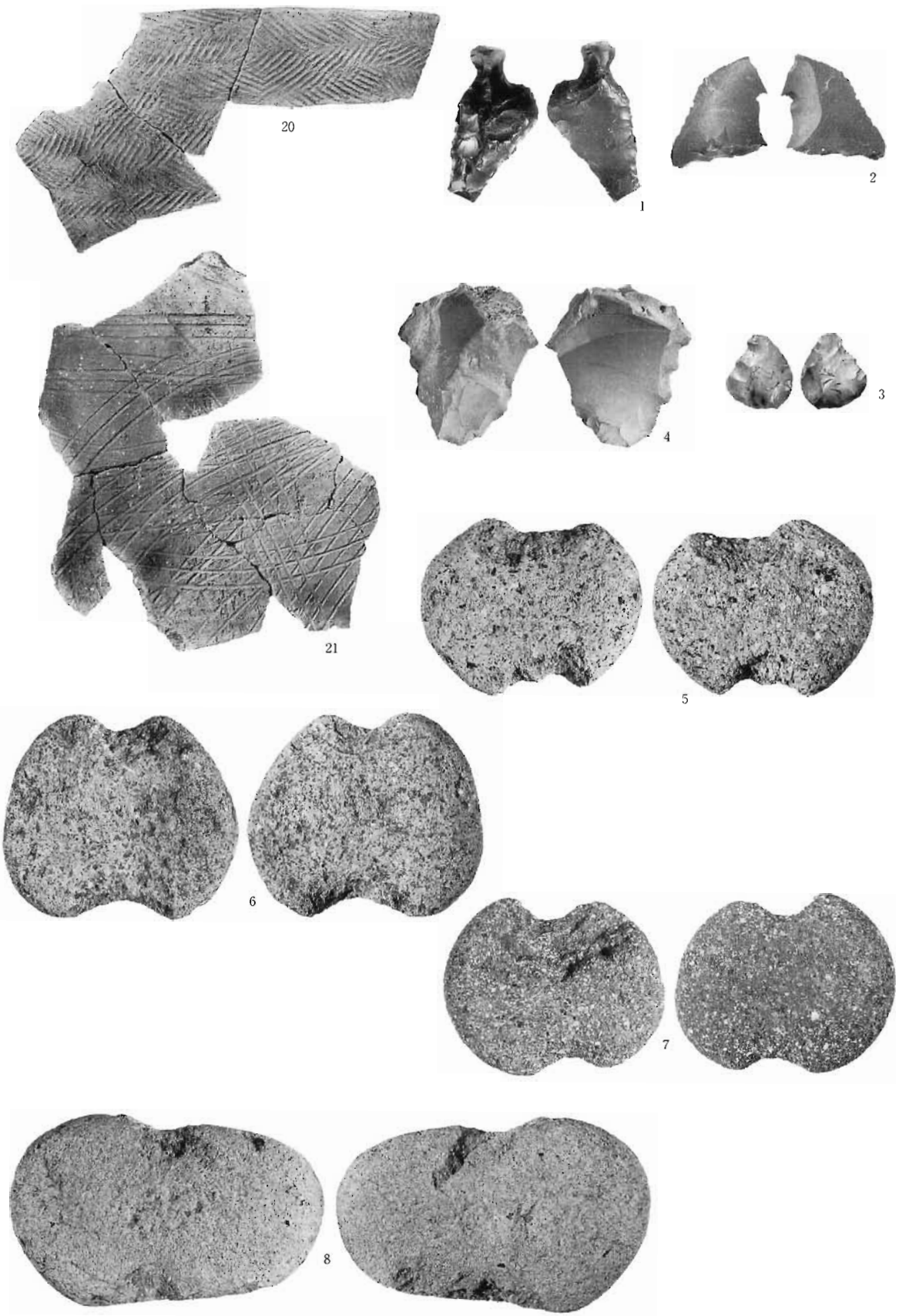
写真図版31　現地説明会



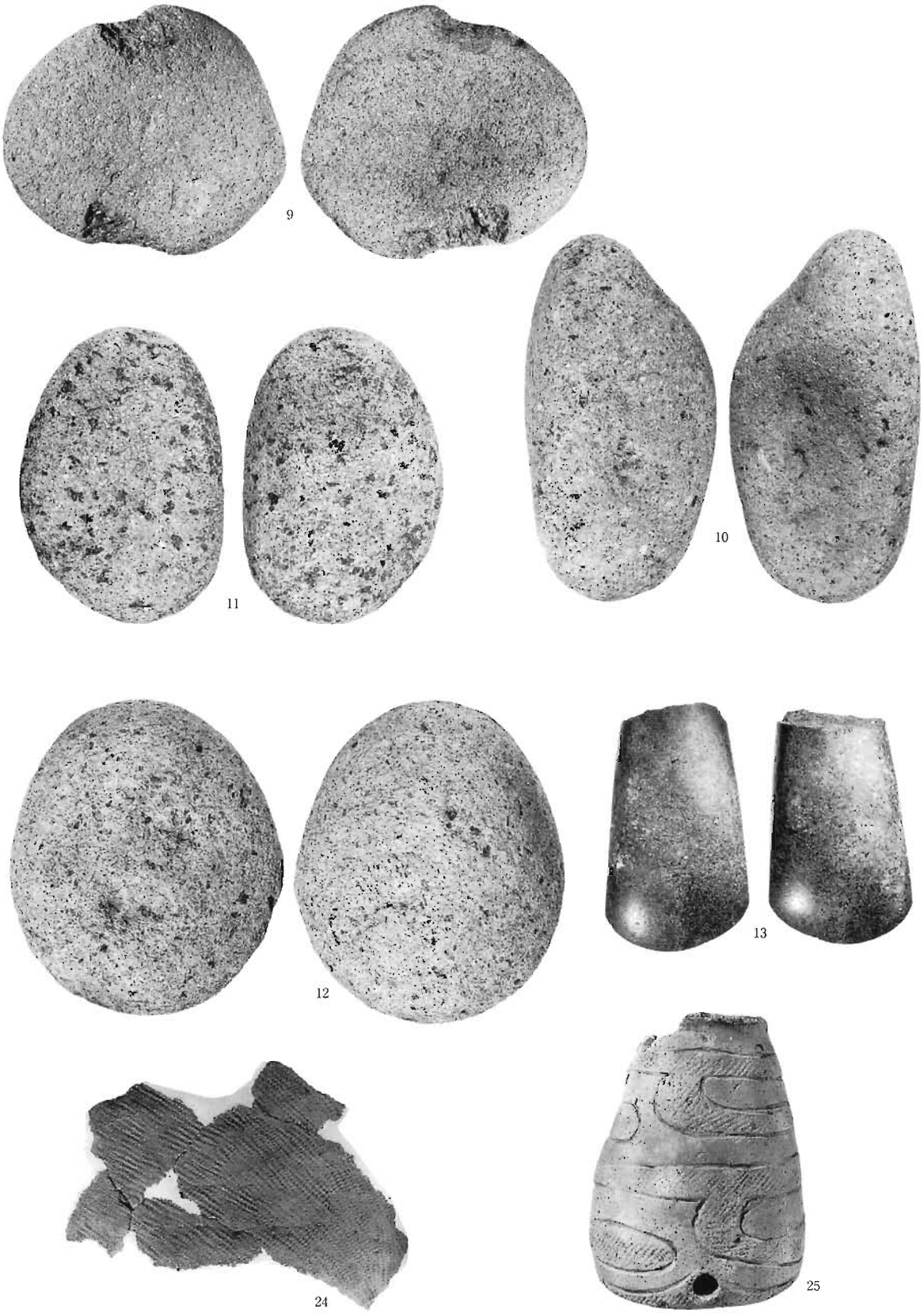
写真図版32　遺構内出土遺物(1)



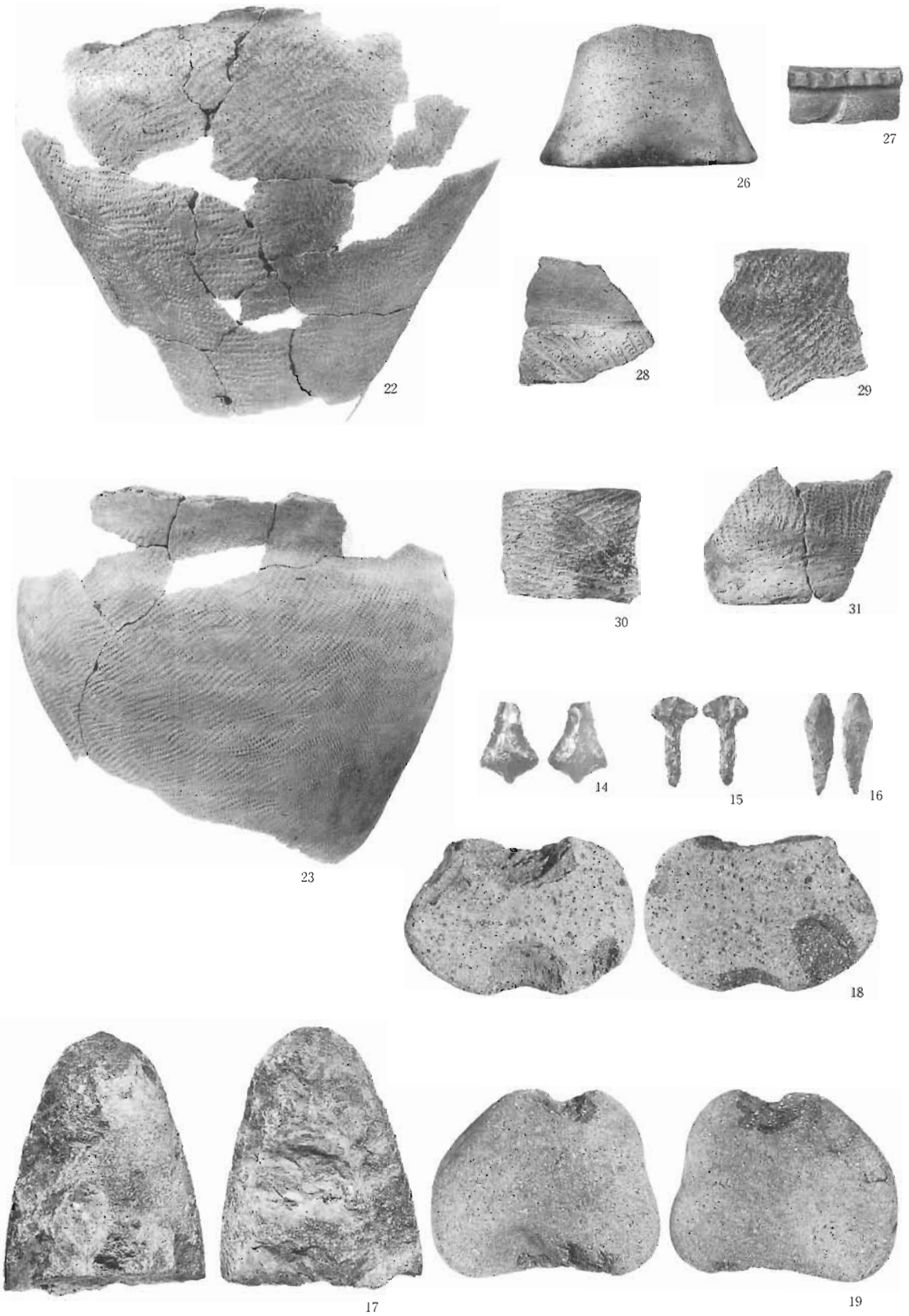
写真図版33　遺構内出土遺物(2)



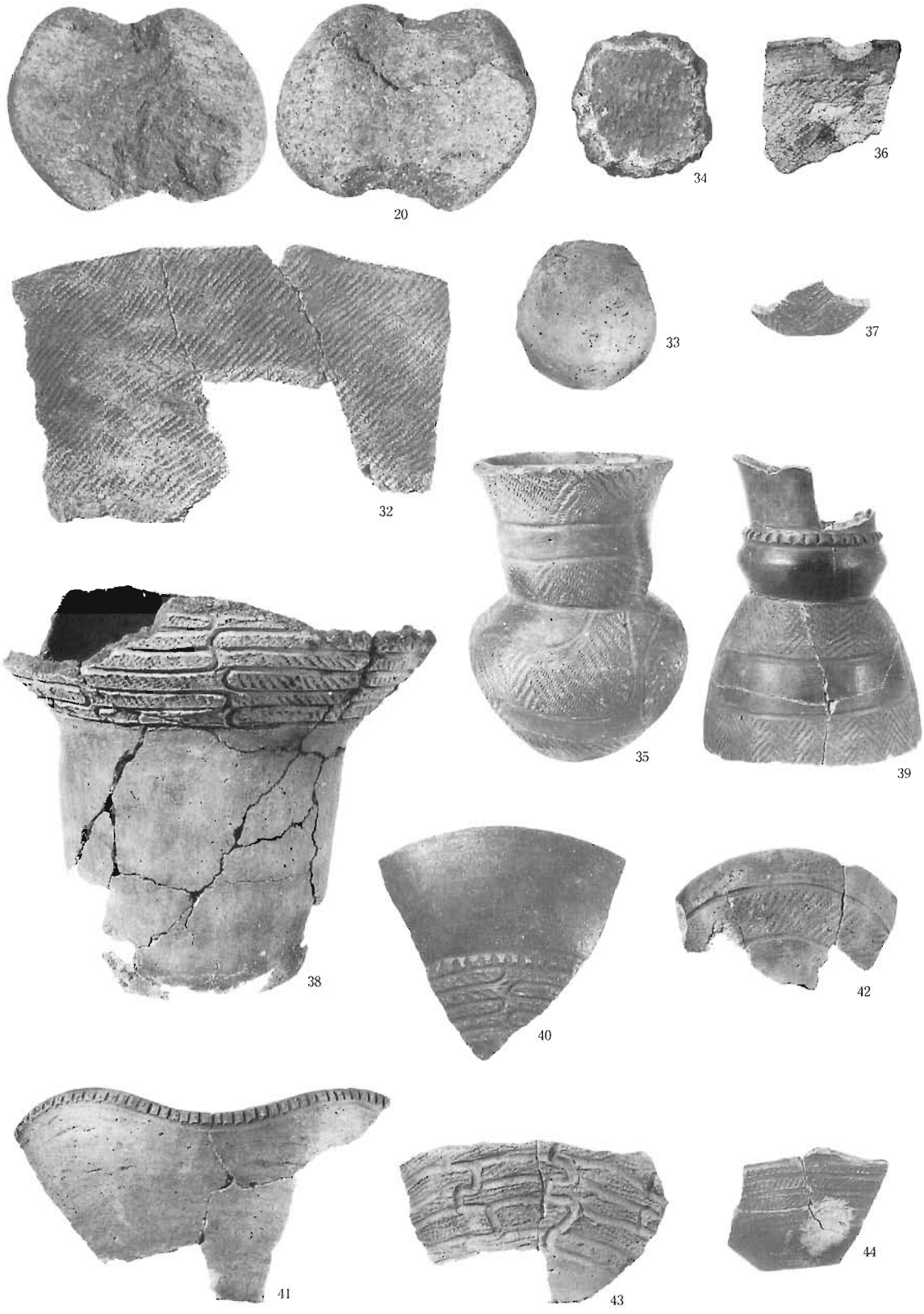
写真図版34　遺構内出土遺物(3)



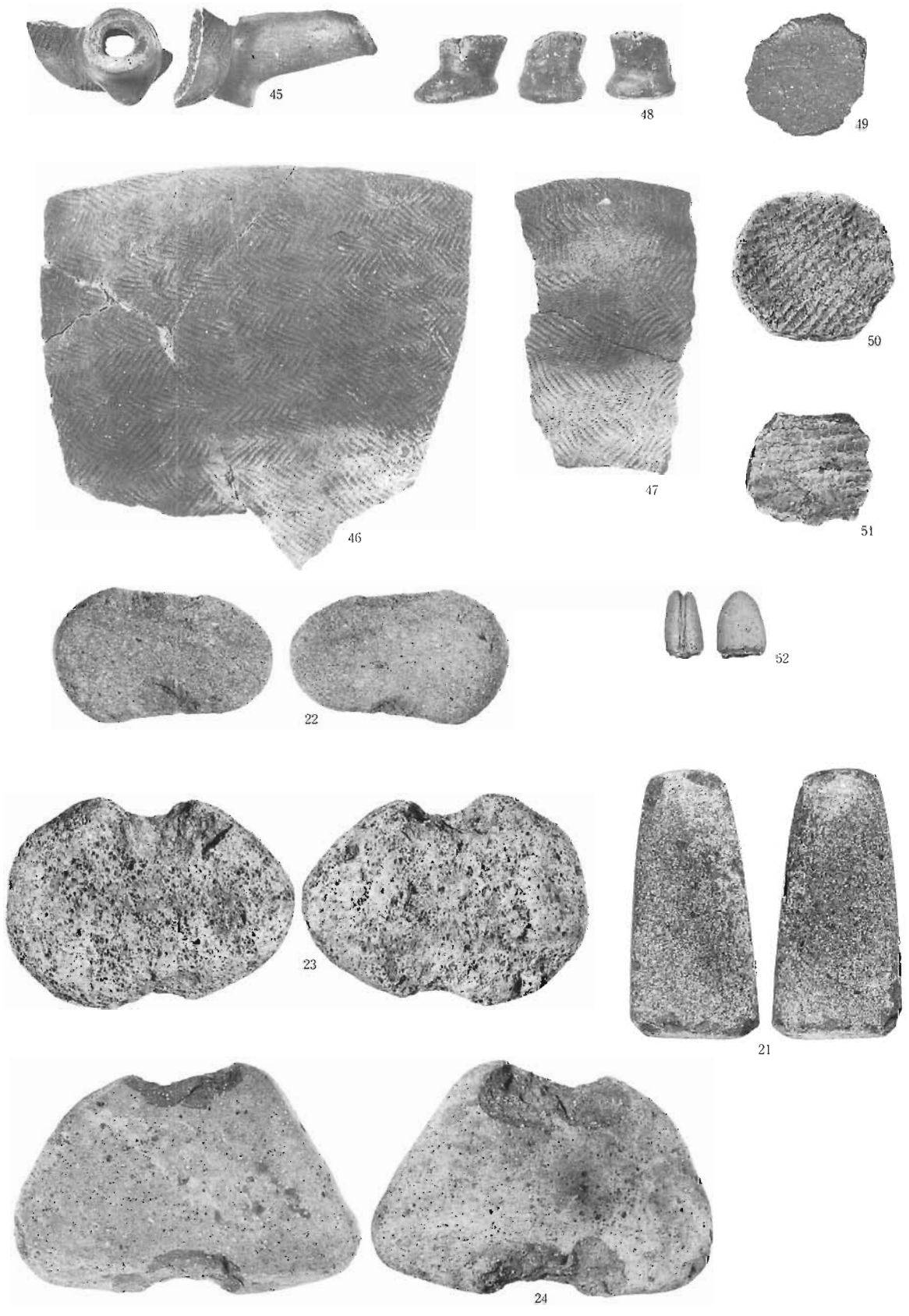
写真図版35　遺構内出土遺物(4)



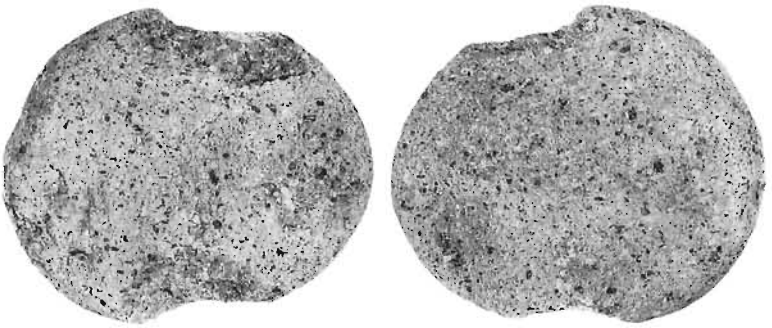
写真図版36　遺構内出土遺物(5)

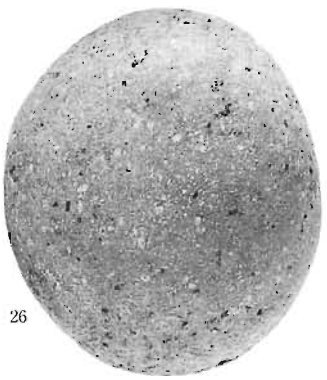


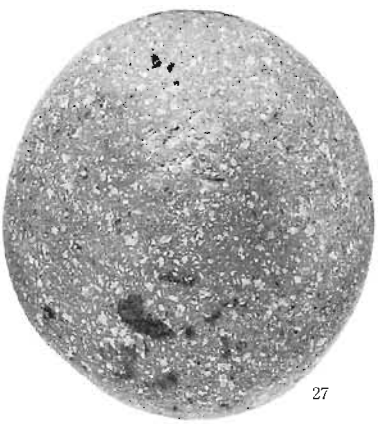
写真図版37　遺構内出土遺物(6)

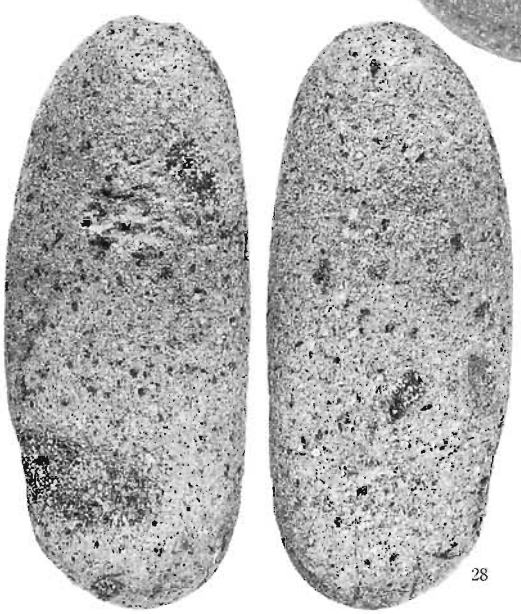


写真図版38　遺構内出土遺物(7)









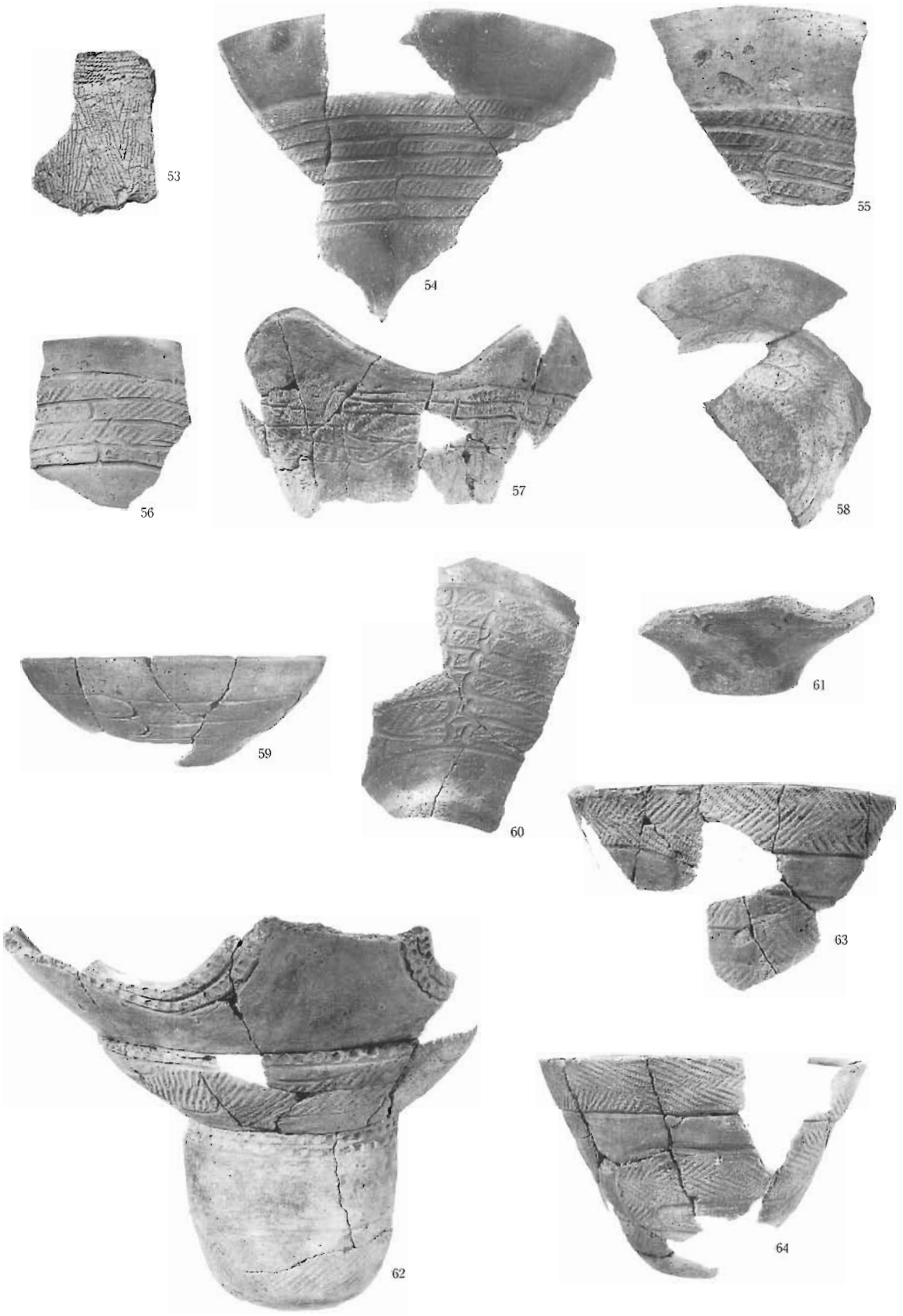
25

26

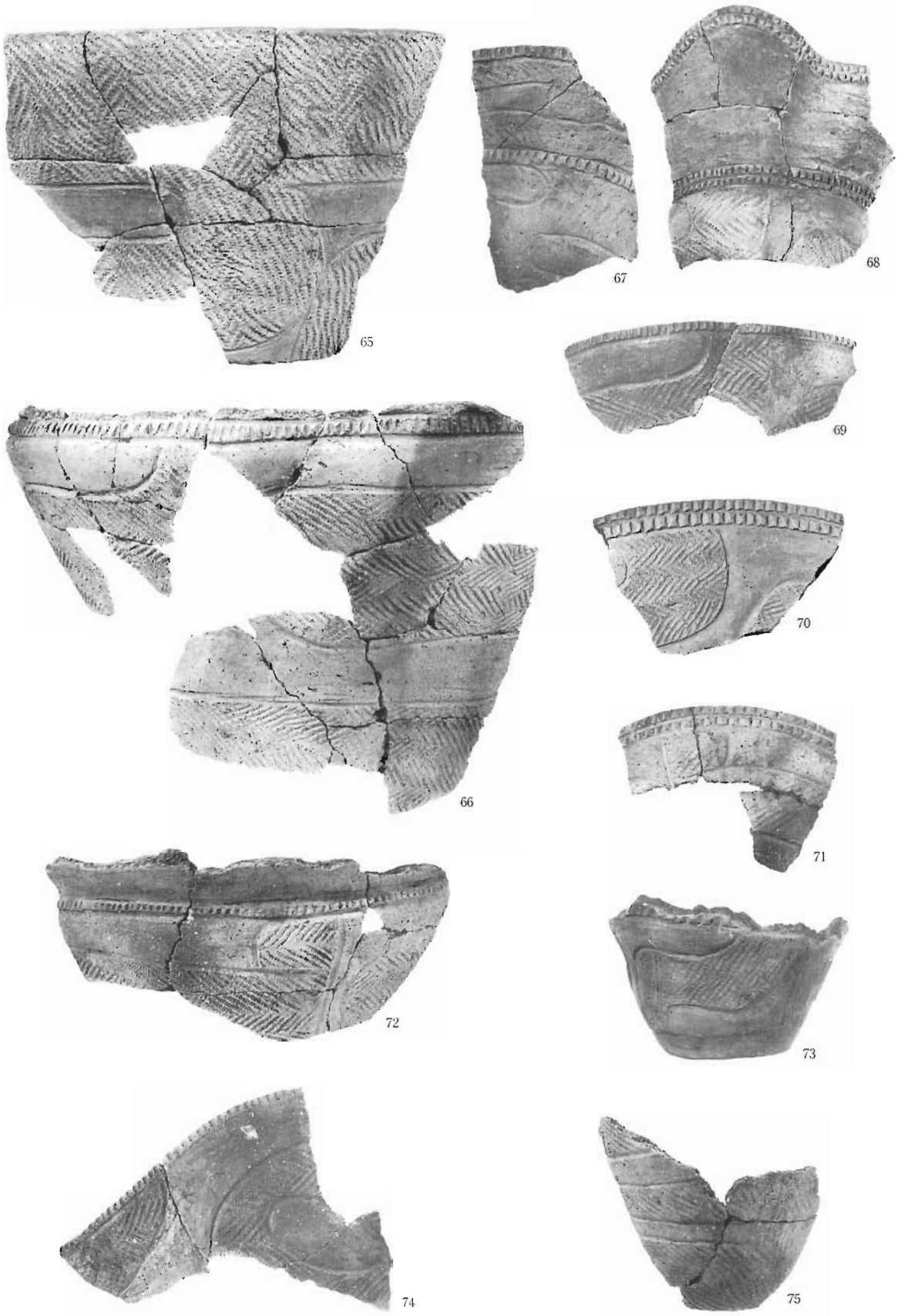
27

28

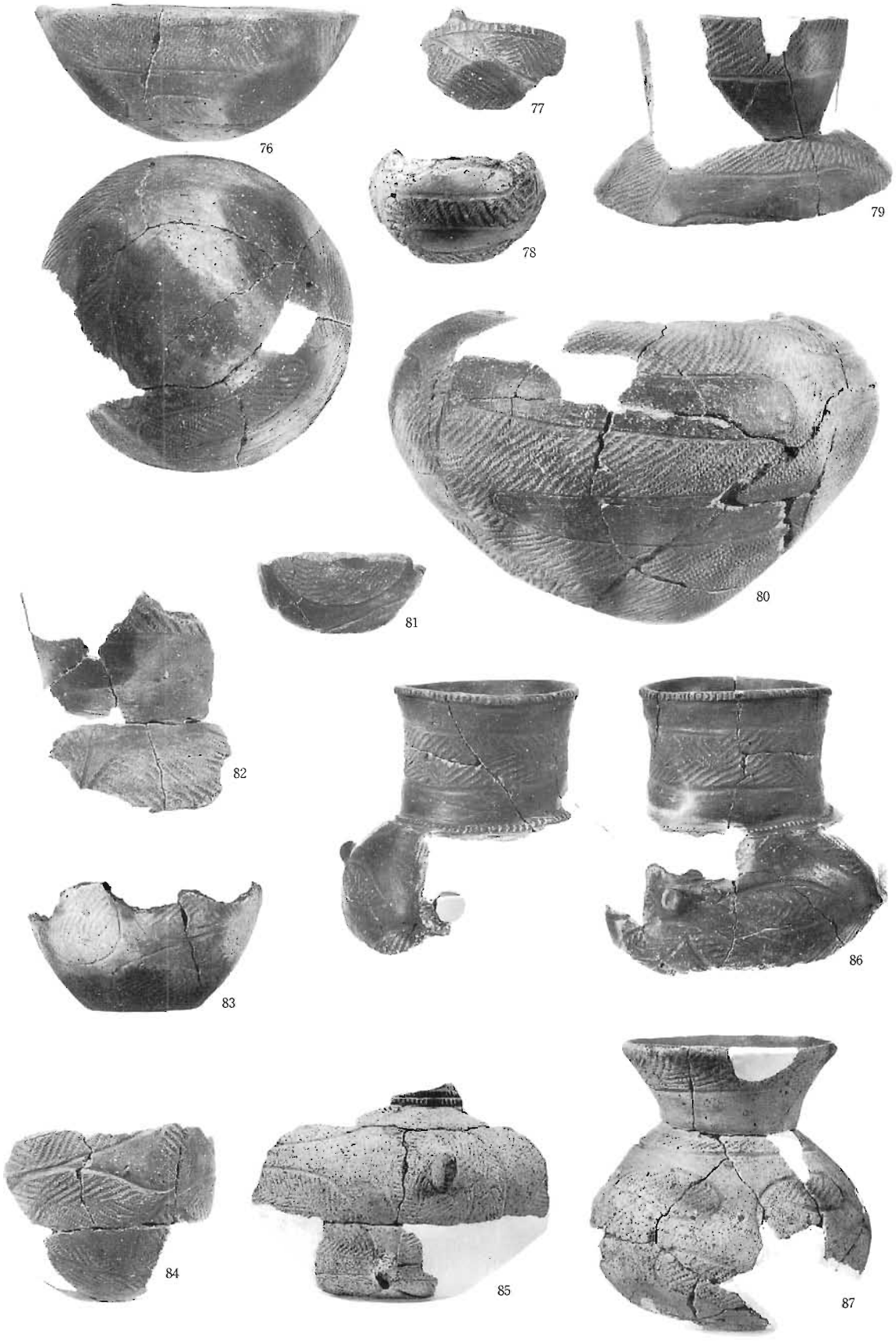
写真図版39　遺構内出土遺物(8)



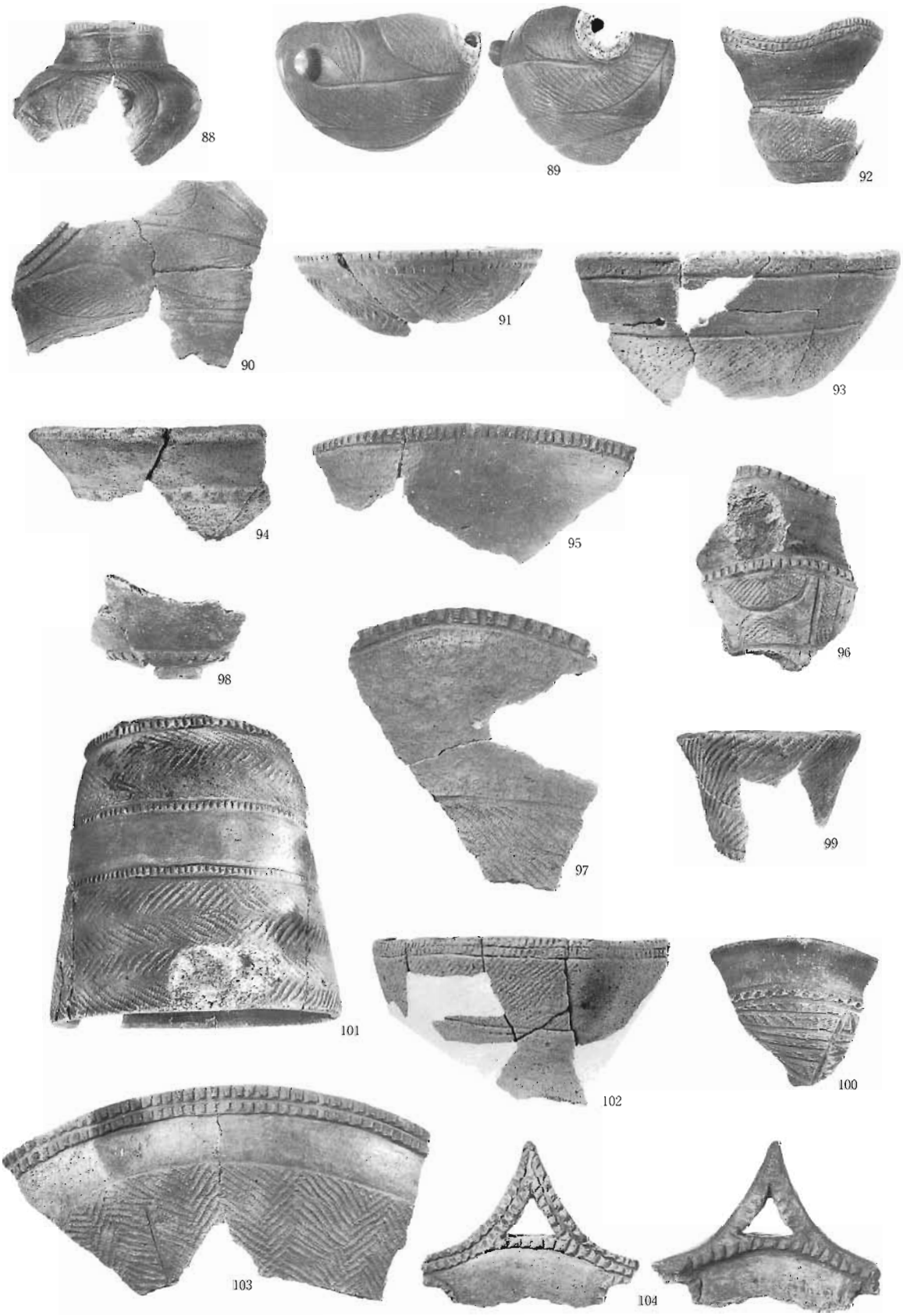
写真図版40　遺構外出土遺物(1)



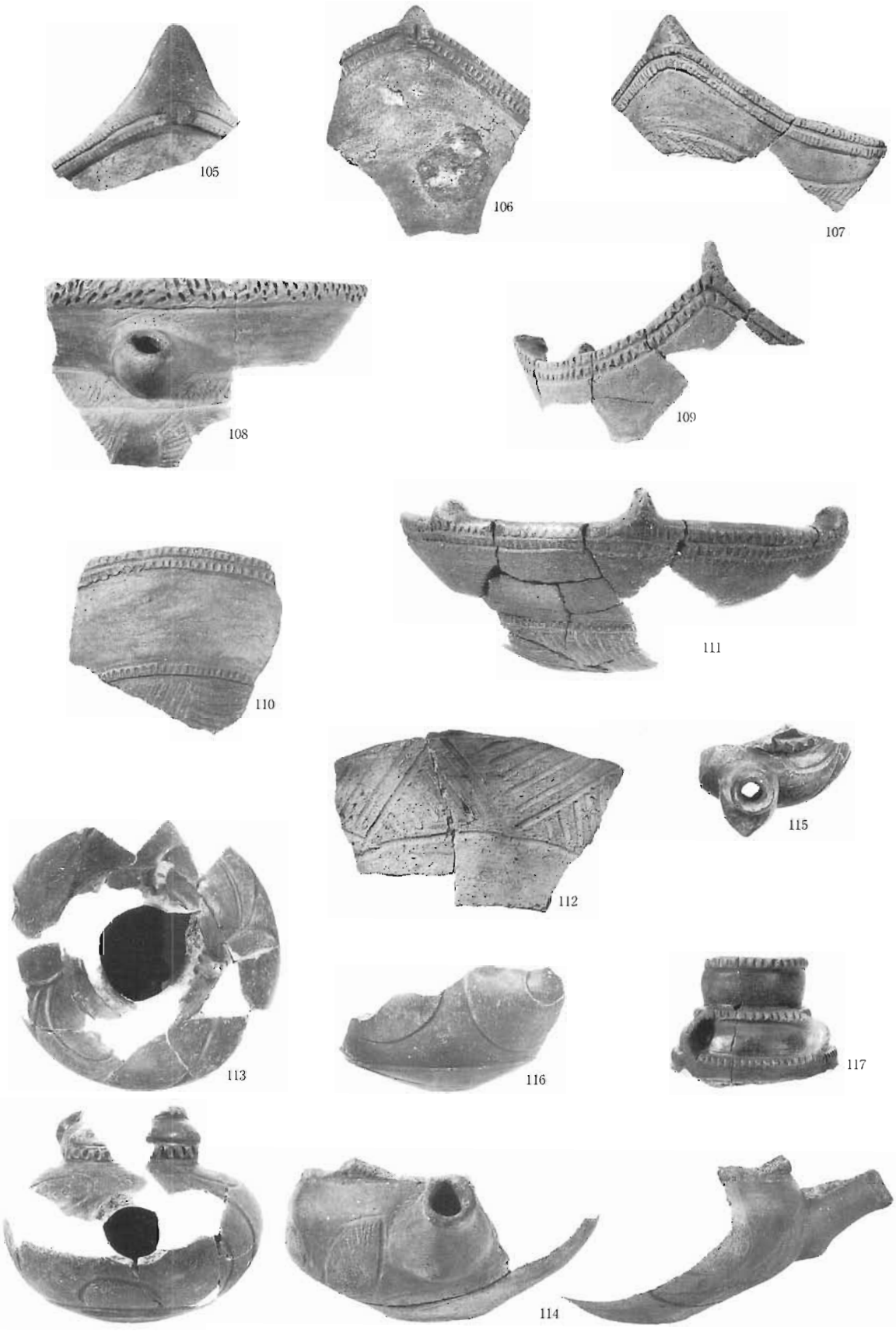
写真図版41　遺構外出土遺物(2)



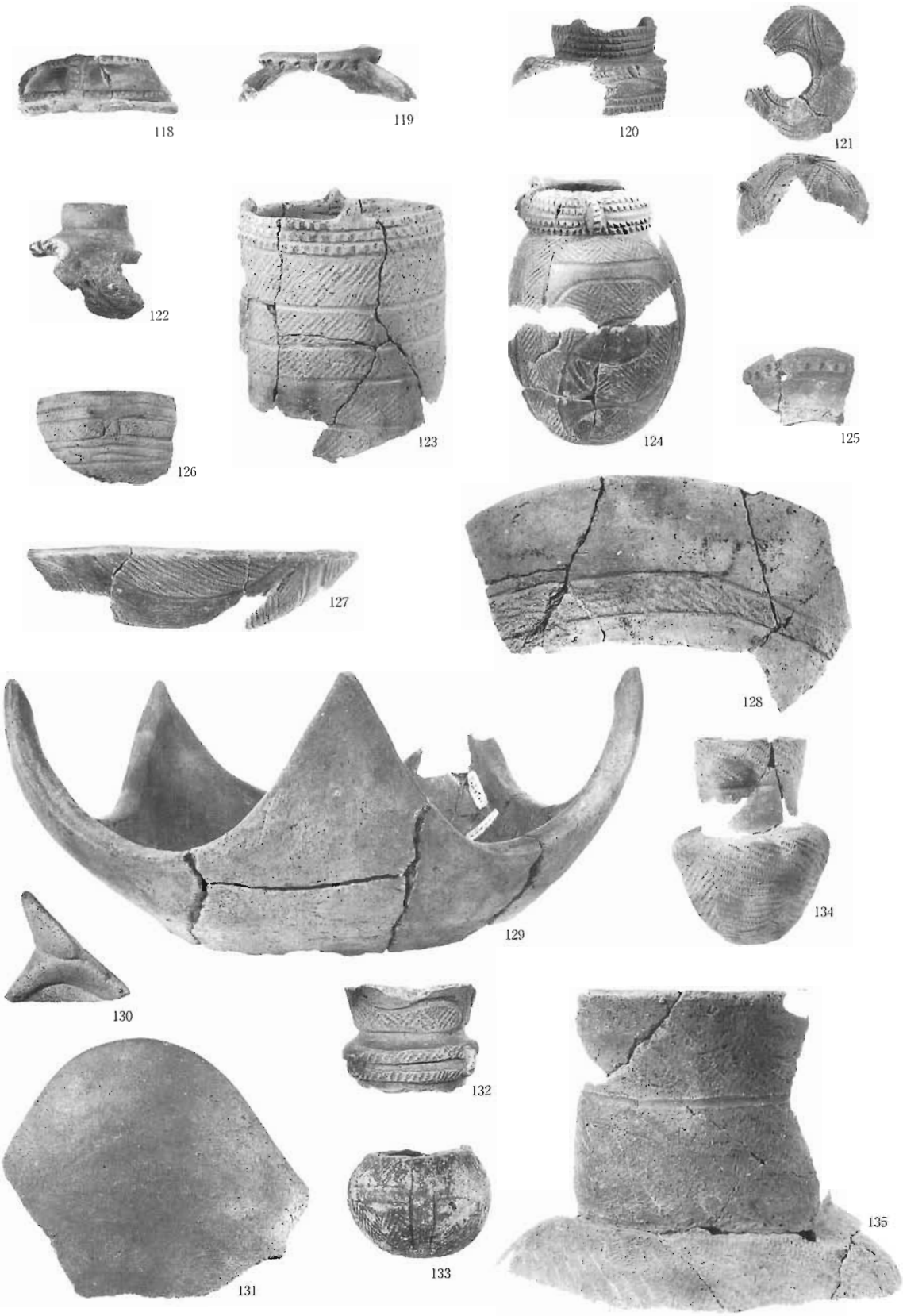
写真図版42　遺構外出土遺物(3)



写真図版43　遺構外出土遺物(4)



写真図版44　遺構外出土遺物(5)



写真図版45　遺構外出土遺物(6)

136

137

138

139

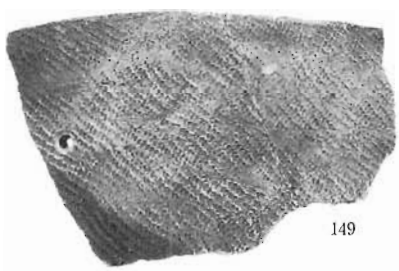
140

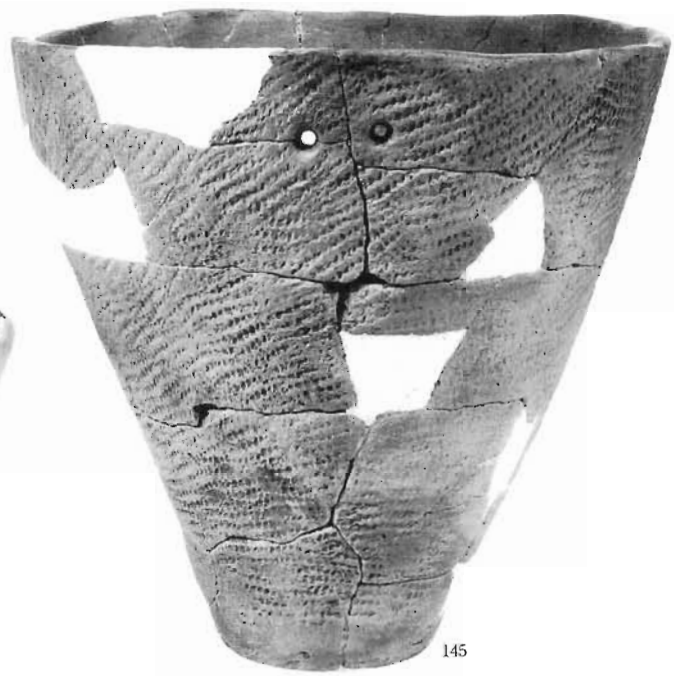
141

142

143

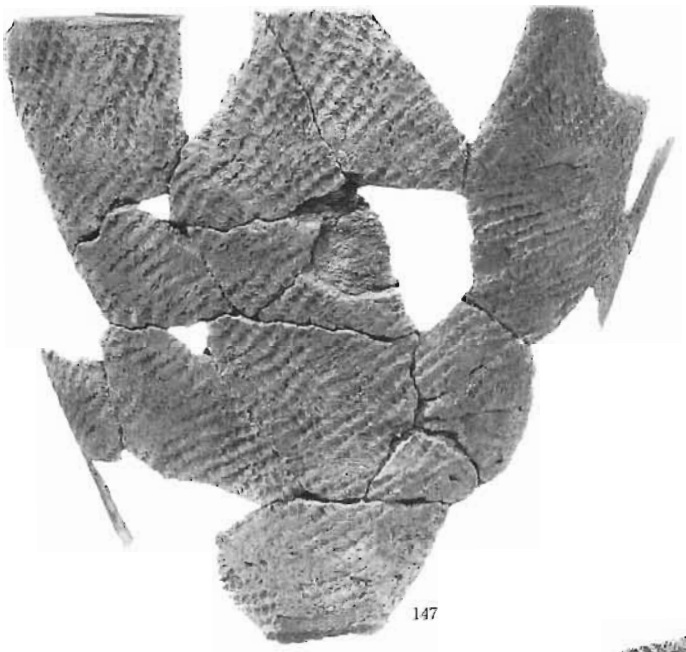
144


149


145

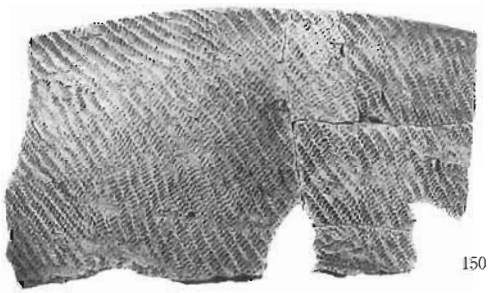
146

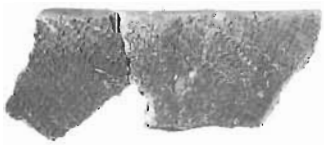
写真図版46　遺構外出土遺物(7)


147

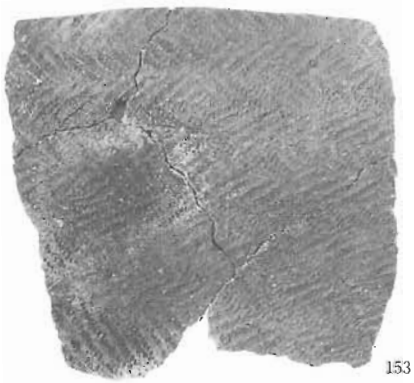
151

148


150

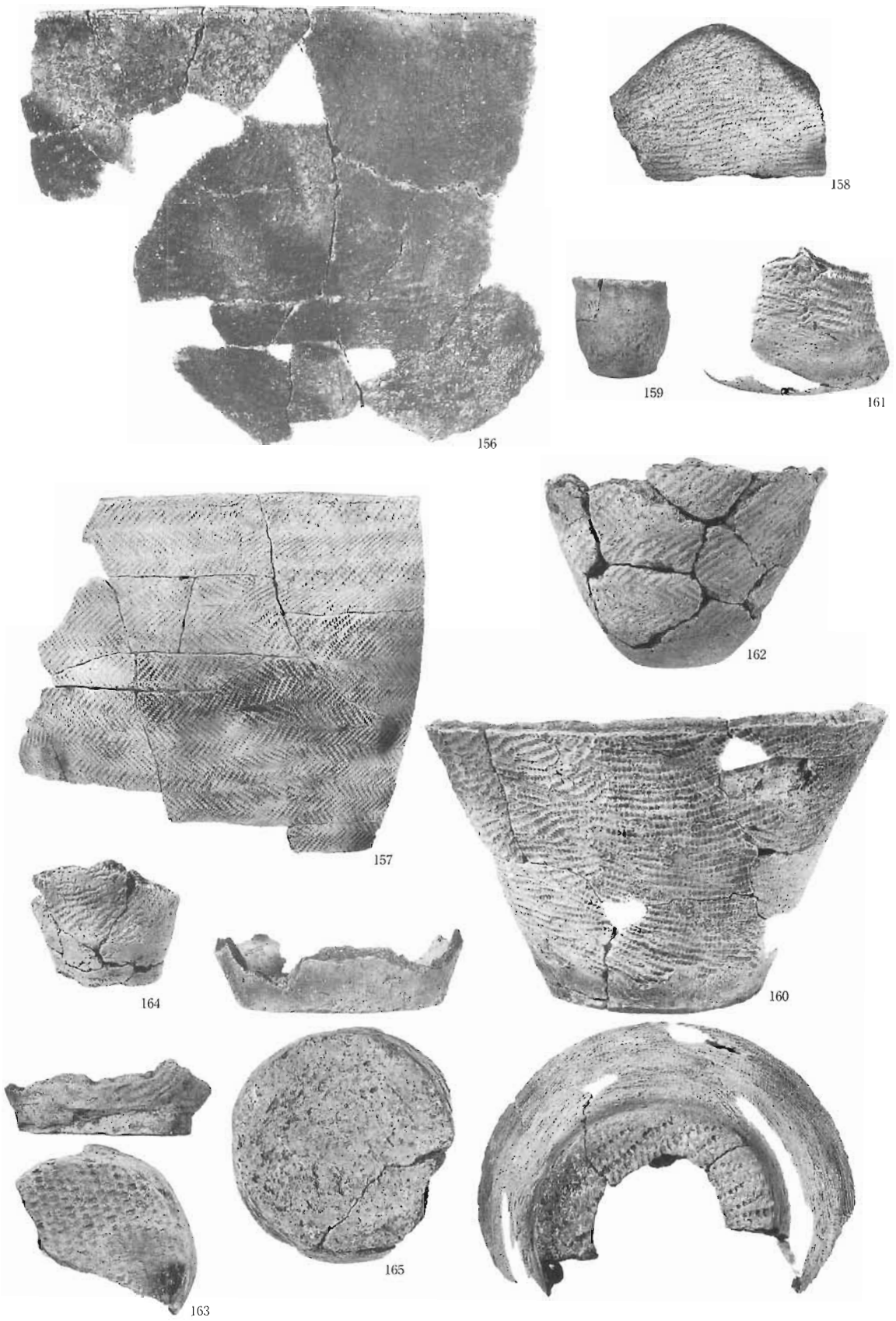

152

154

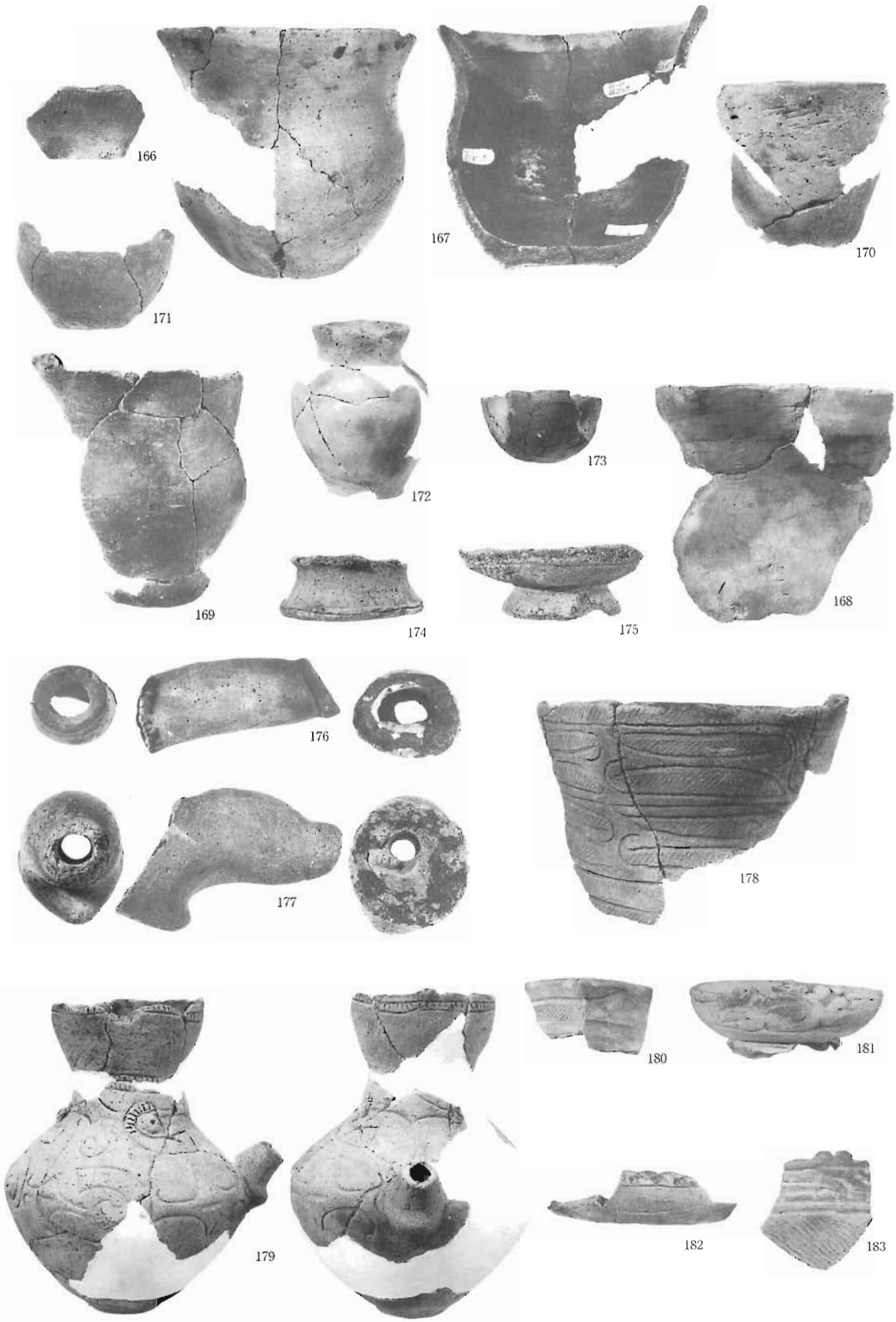

153

155

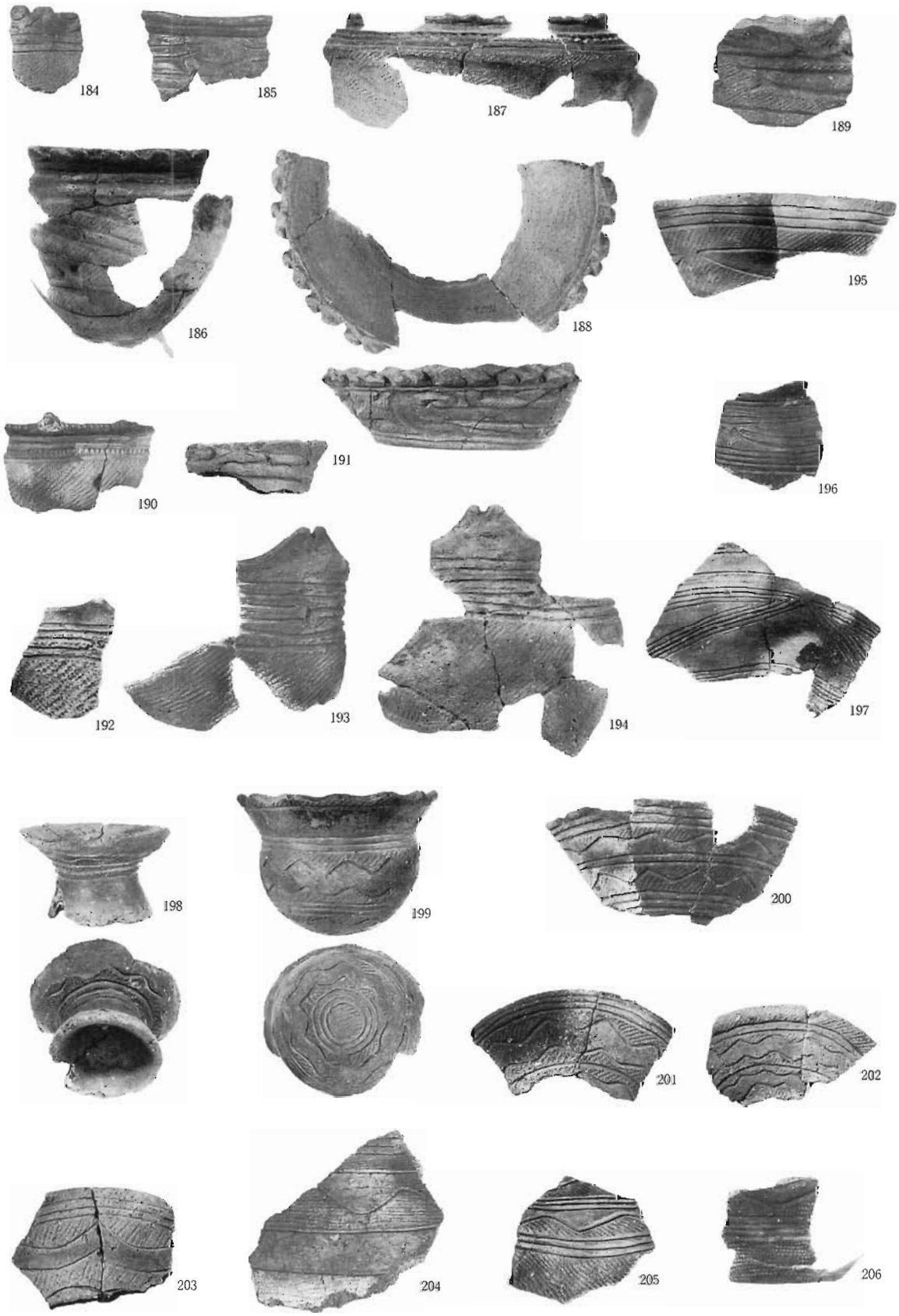
写真図版47　遺構外出土遺物(8)



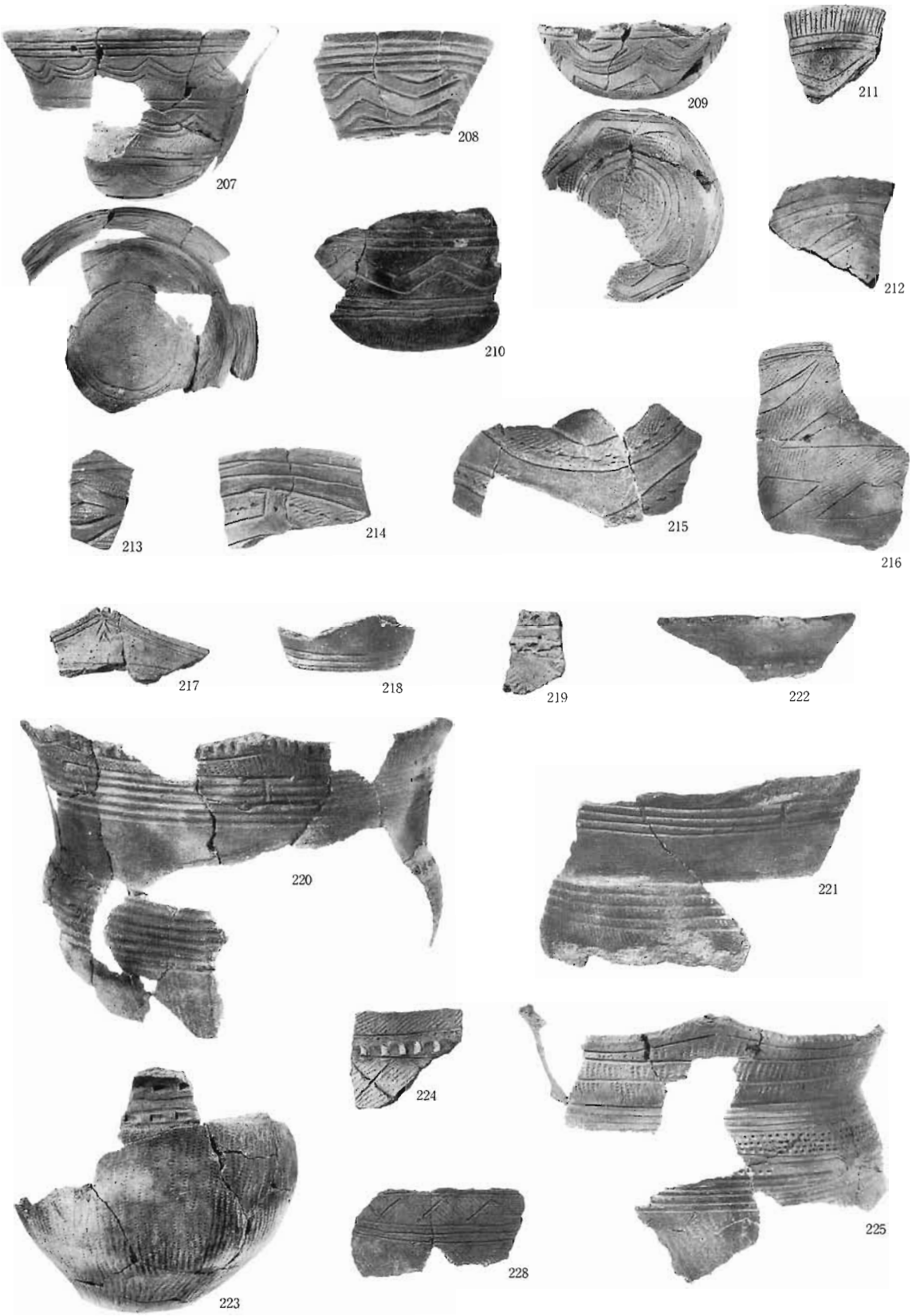
写真図版48　遺構外出土遺物(9)



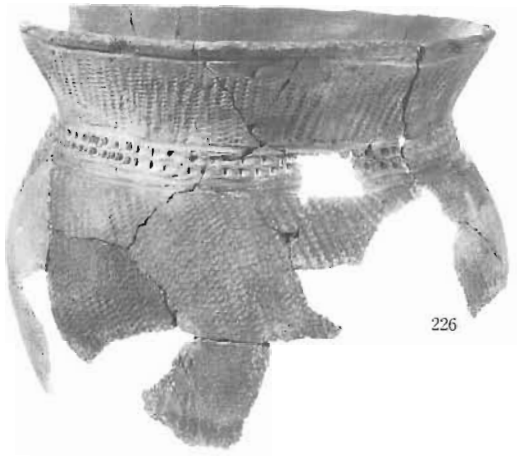
写真図版49　遺構外出土遺物(10)

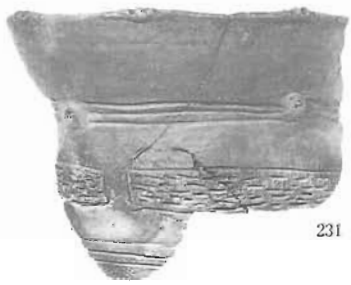


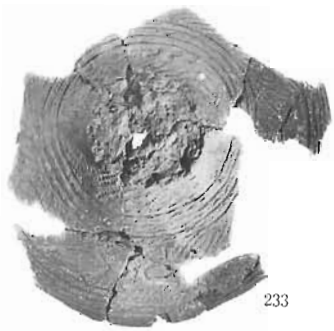
写真図版50　遺構外出土遺物(11)



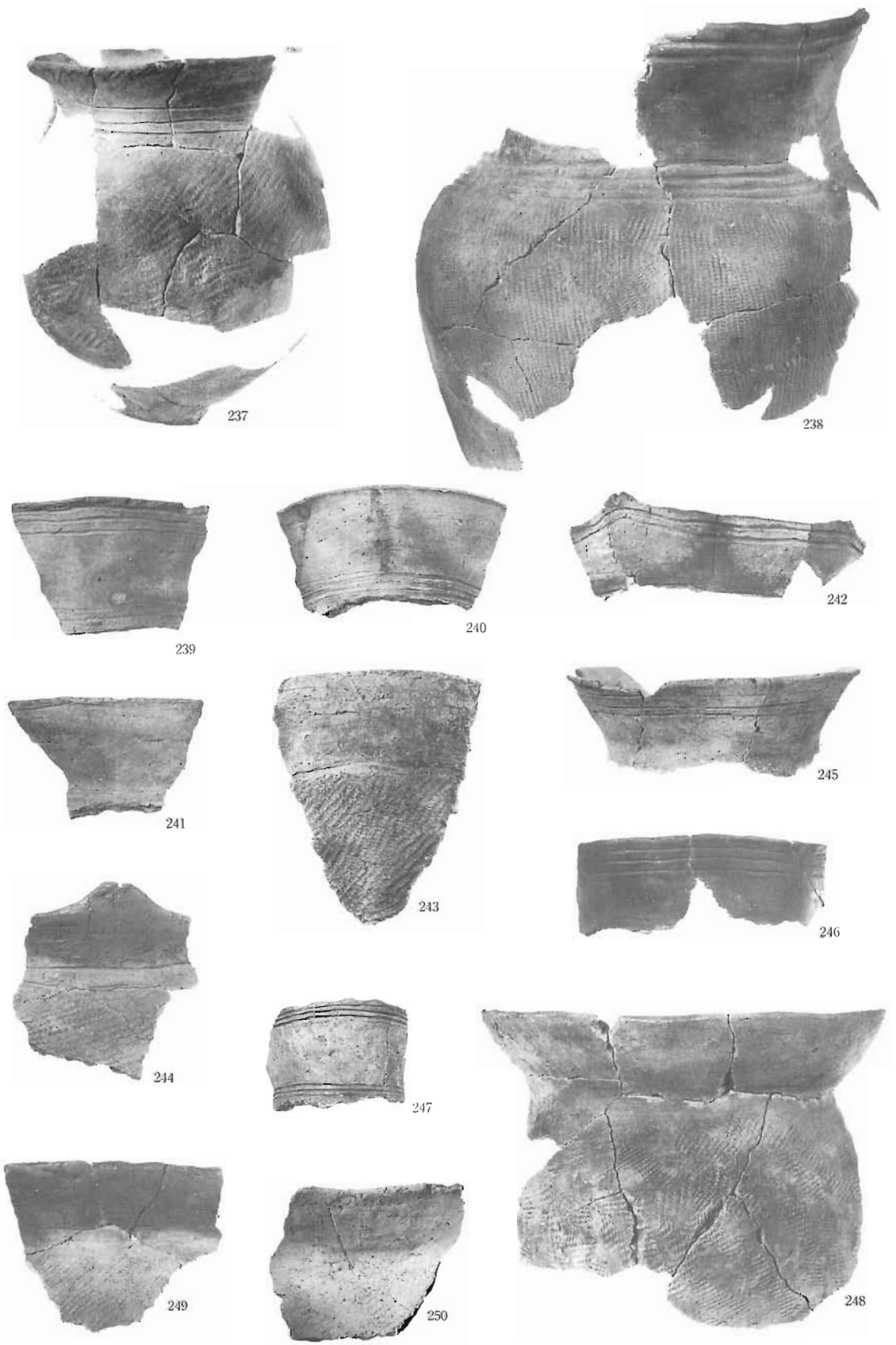
写真図版51　遺構外出土遺物(12)



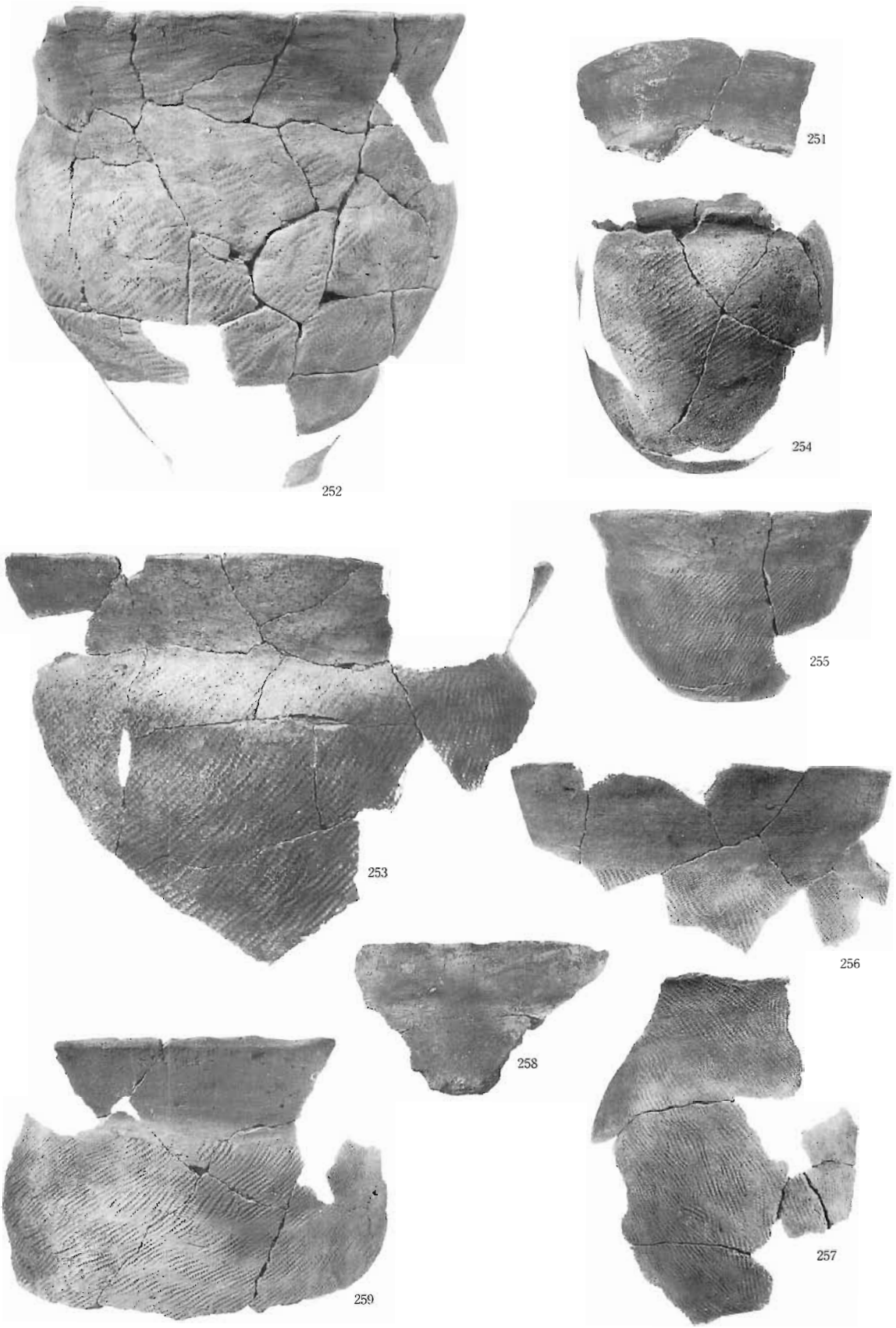




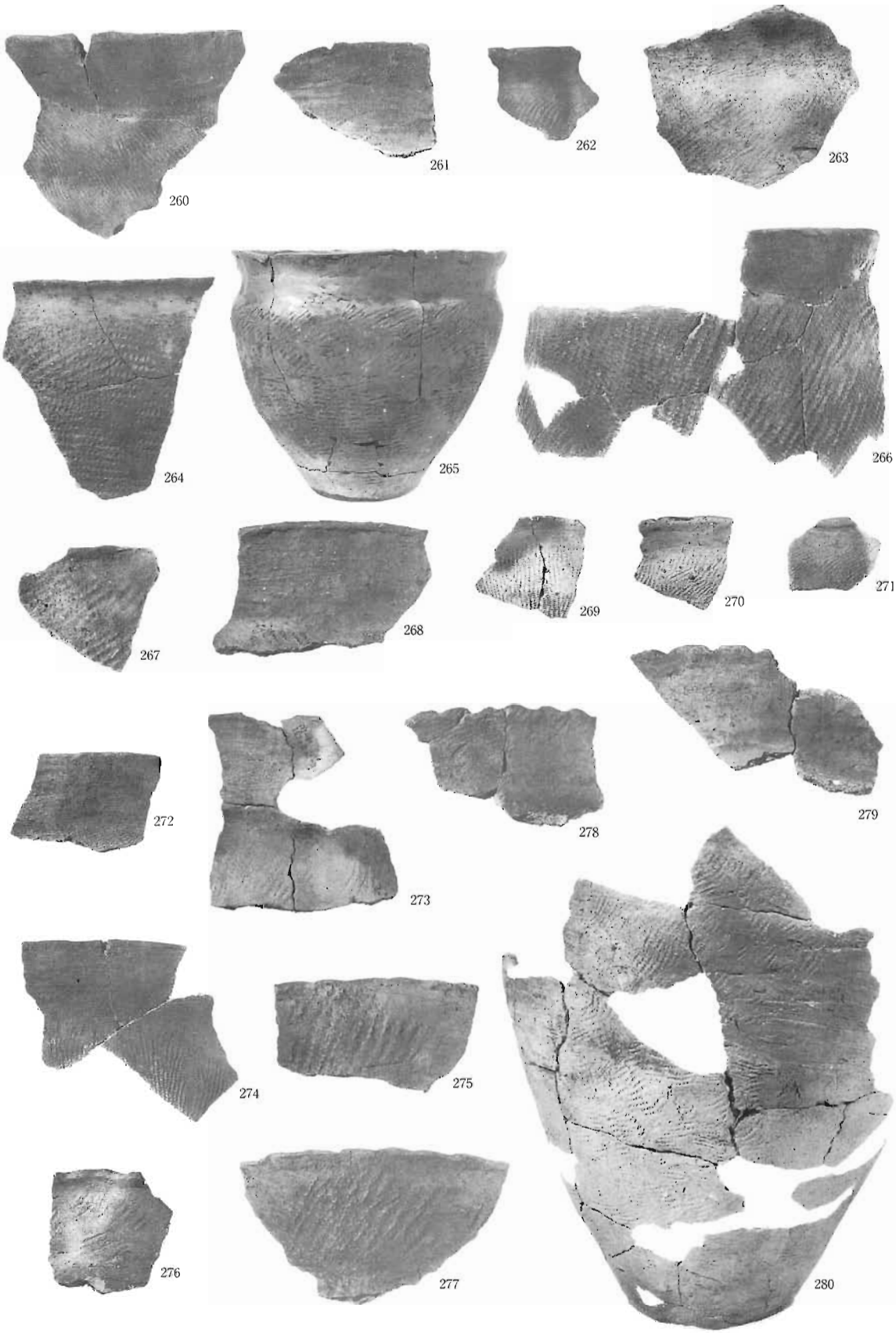
写真図版52　遺構外出土遺物(13)



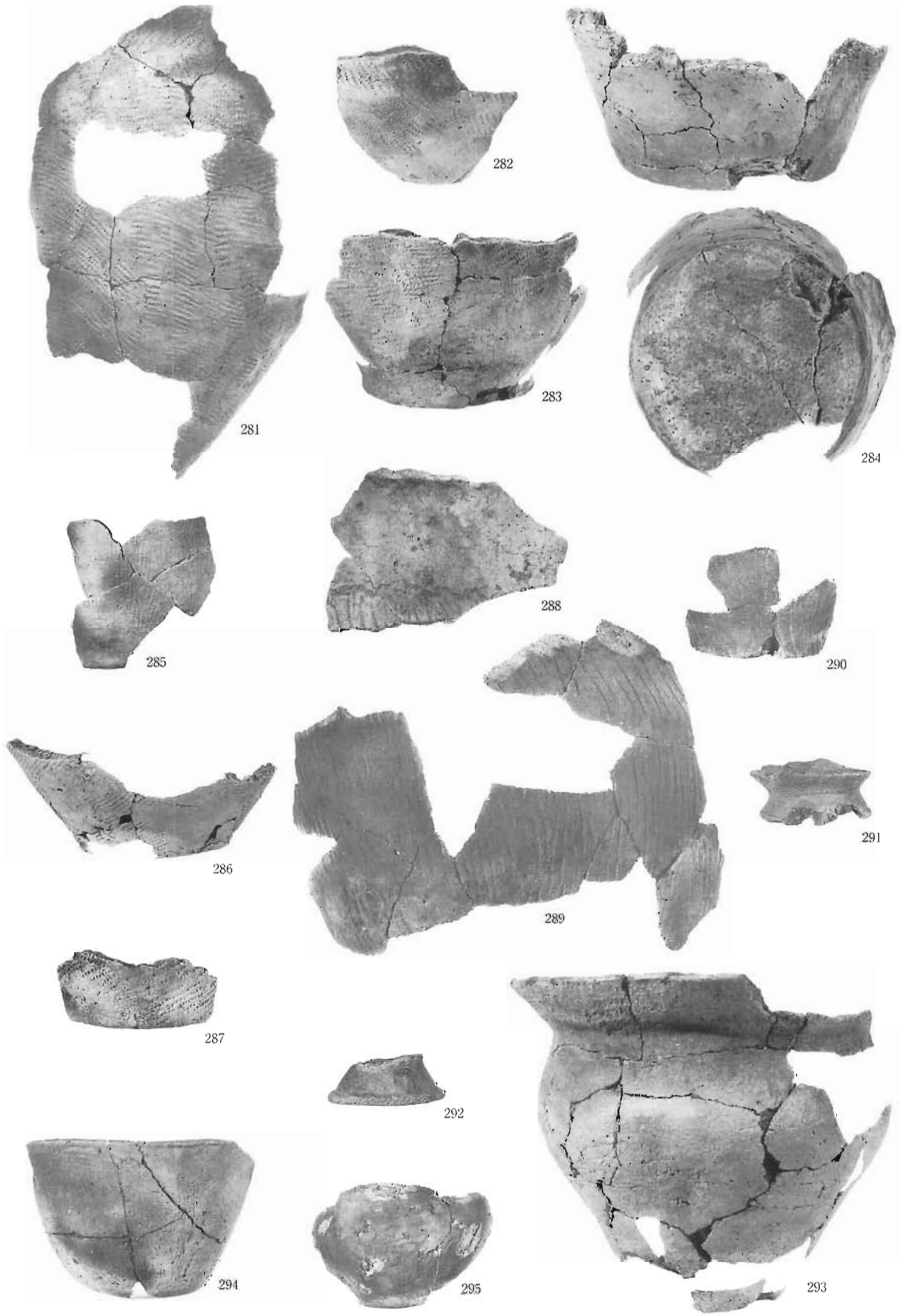
写真図版53　遺構外出土遺物(14)



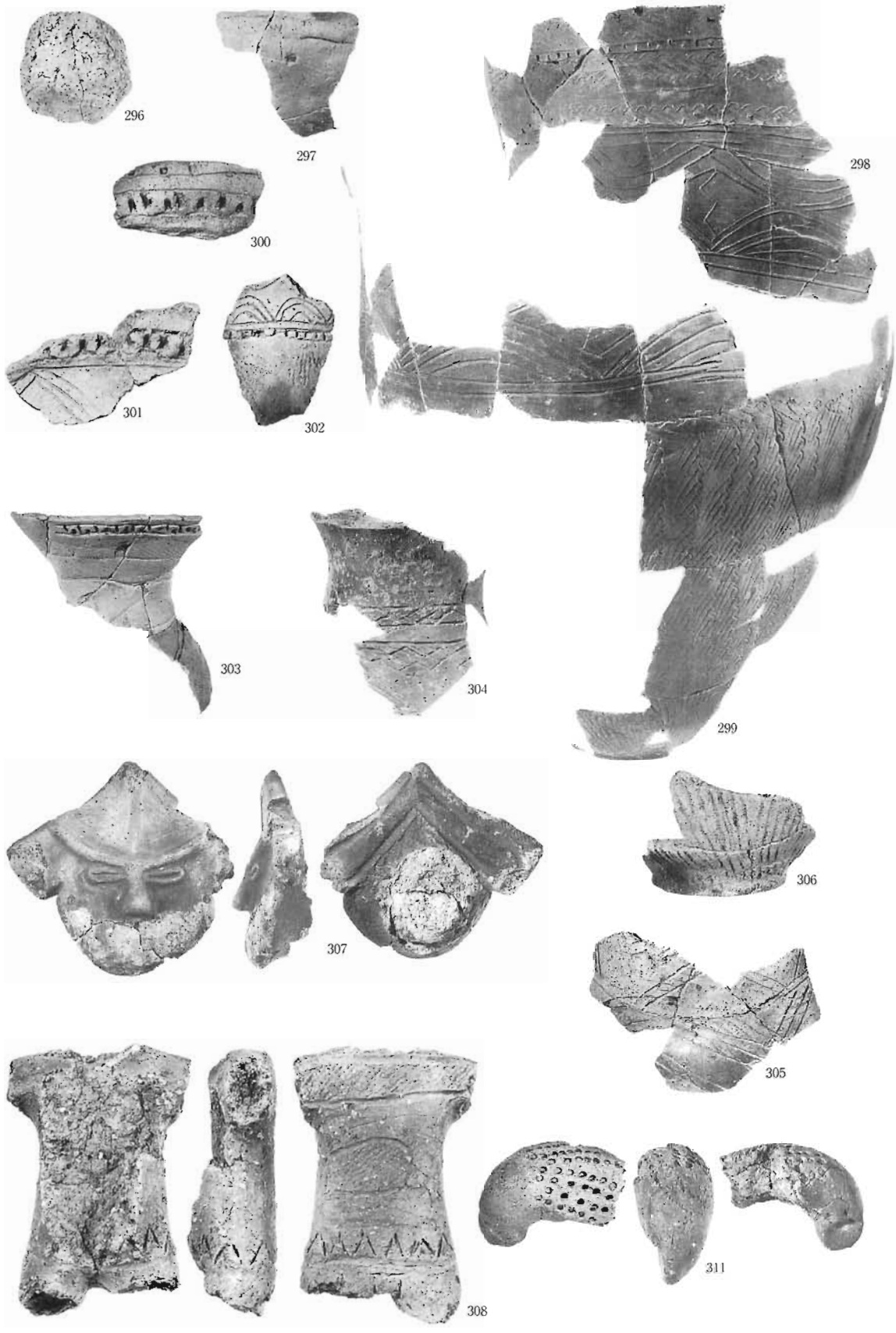
写真図版54　遺構外出土遺物(15)



写真図版55　遺構外出土遺物(16)

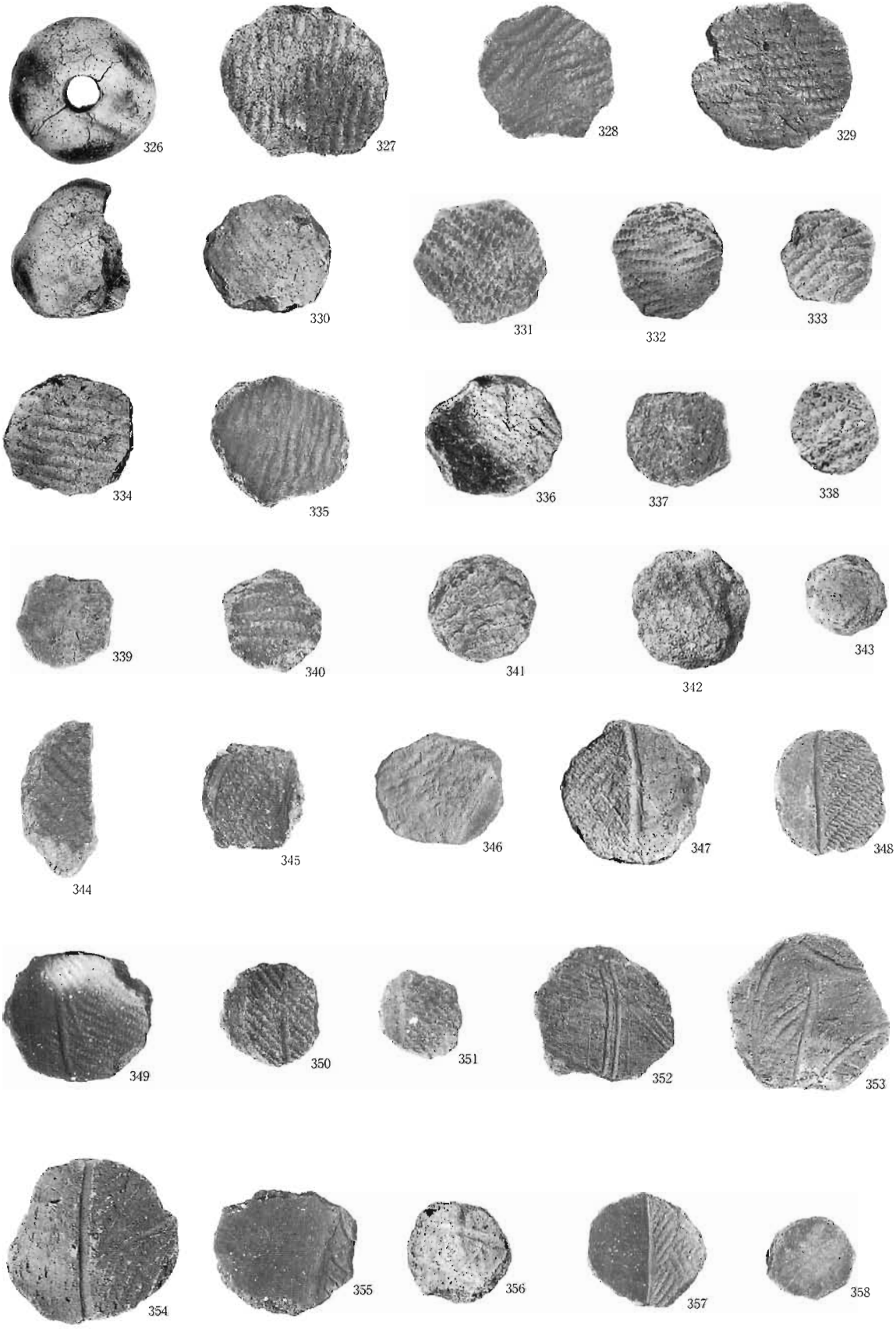


写真図版56　遺構外出土遺物(17)

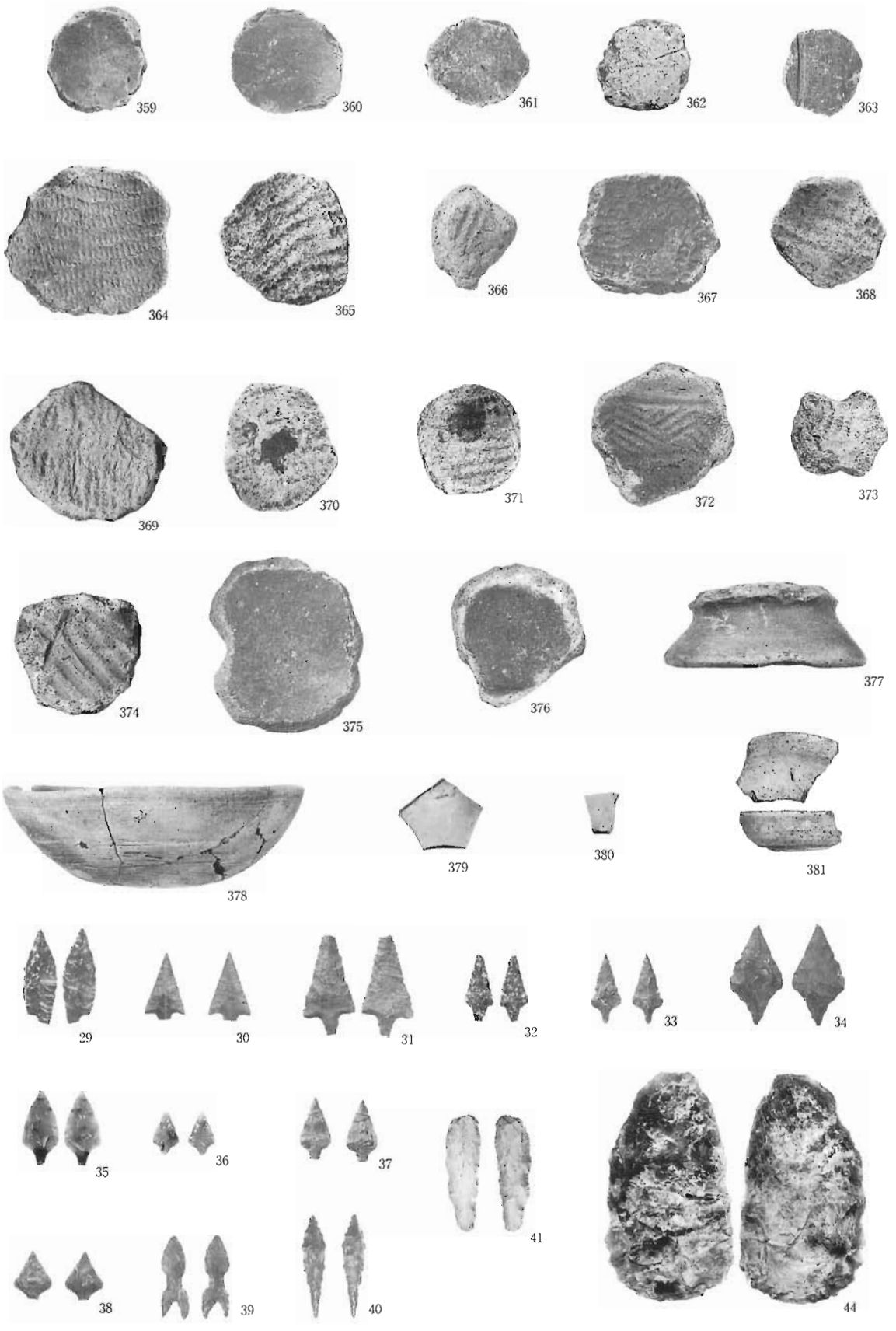


写真図版57　遺構外出土遺物(18)

写真図版58　遺構外出土遺物(19)



写真図版59　遺構外出土遺物(20)



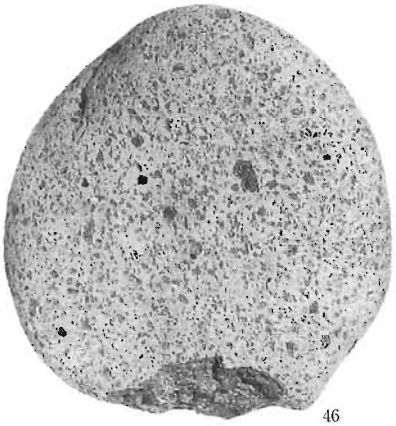
写真図版60　遺構外出土遺物(21)

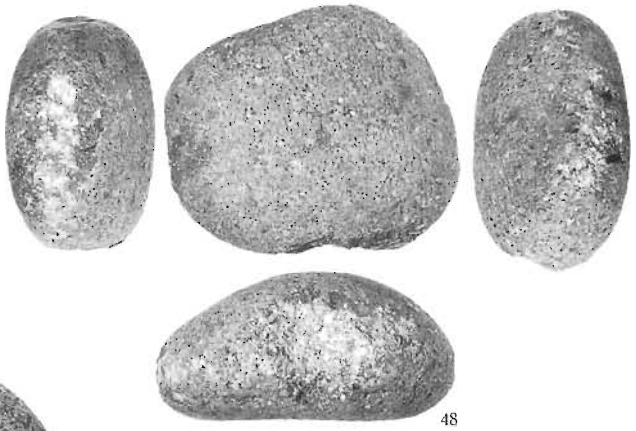
42

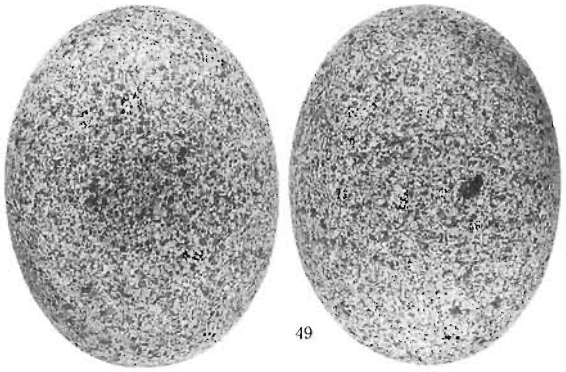
45

43

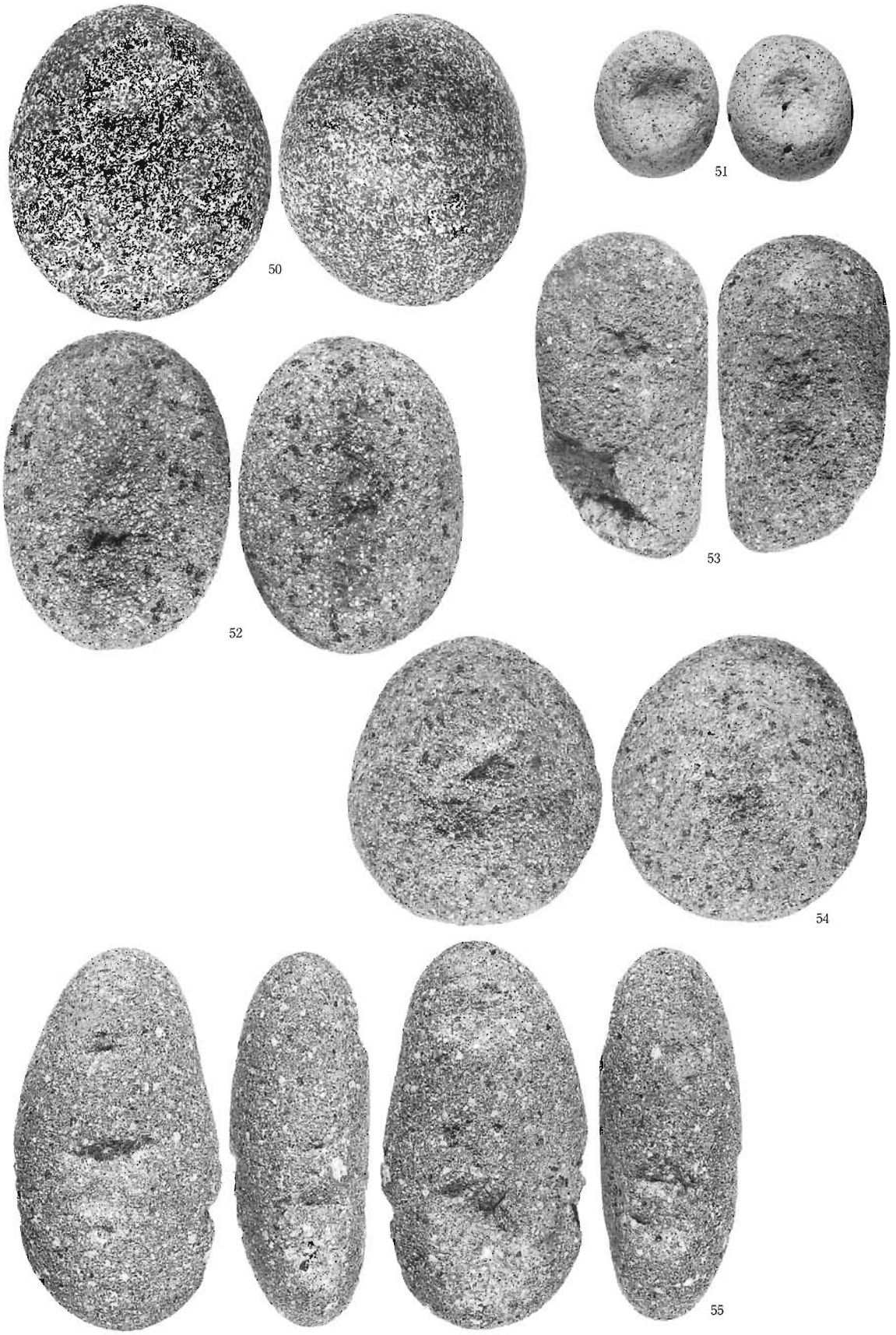
47


46

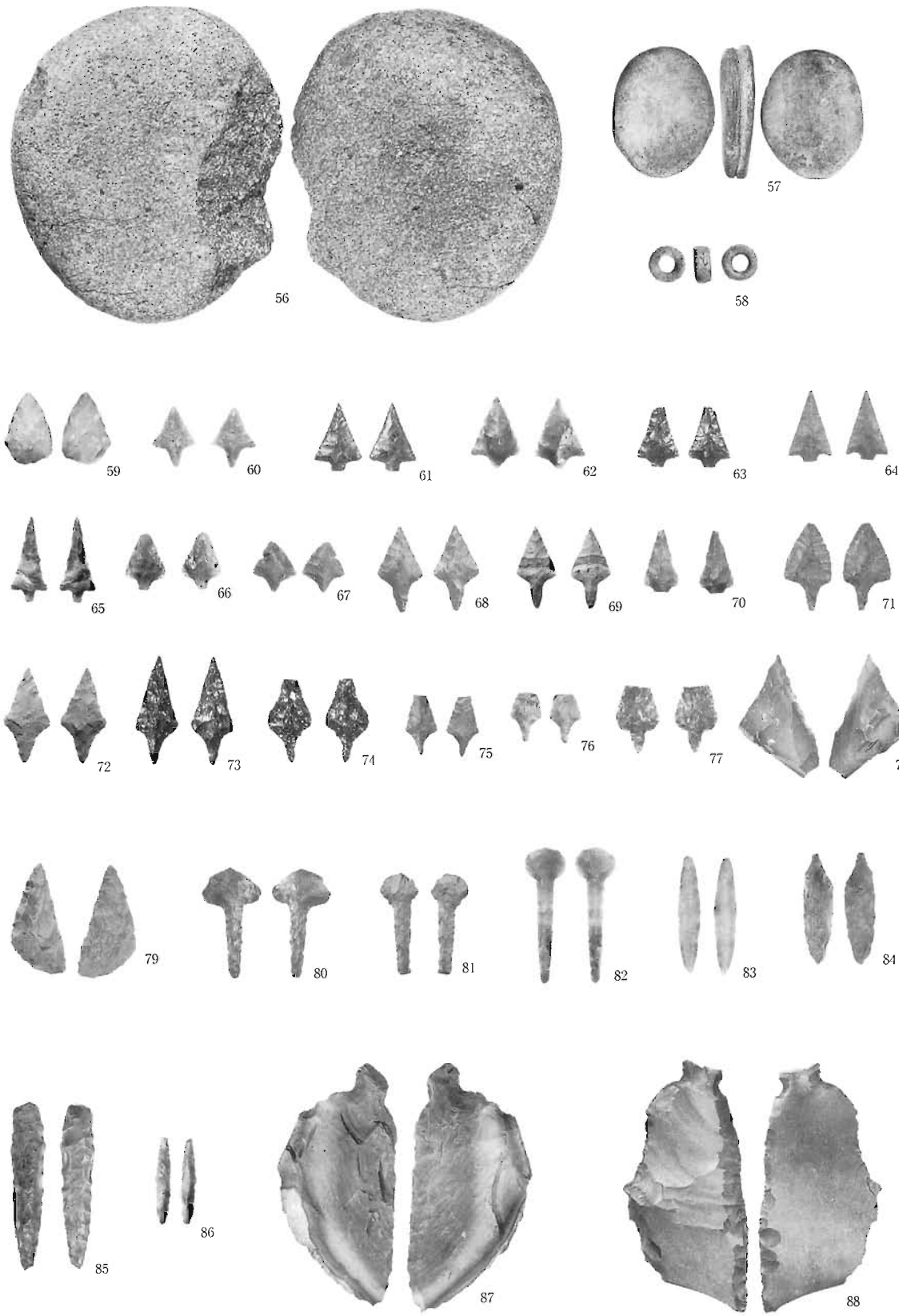

48


49

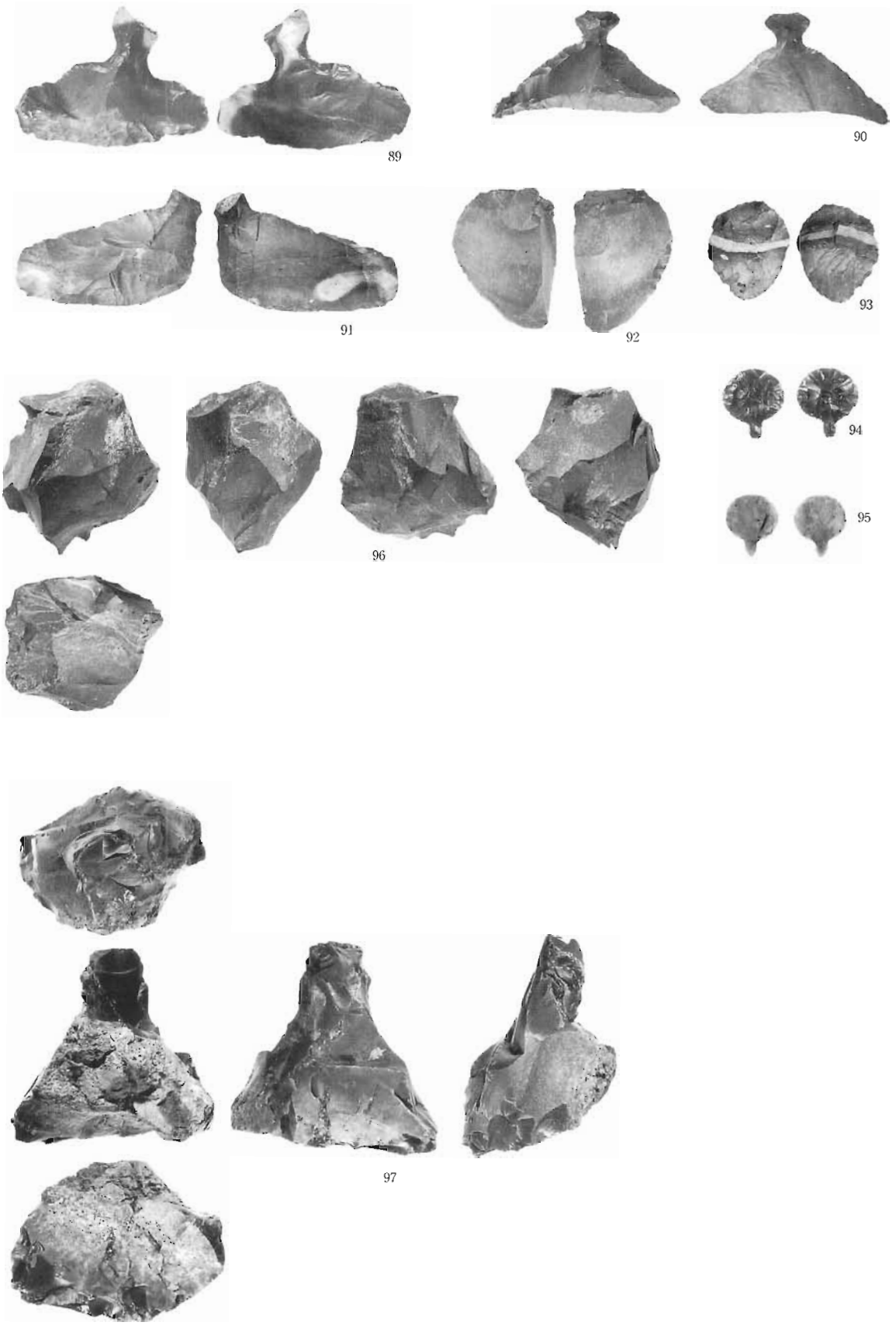
写真図版61　遺構外出土遺物(22)



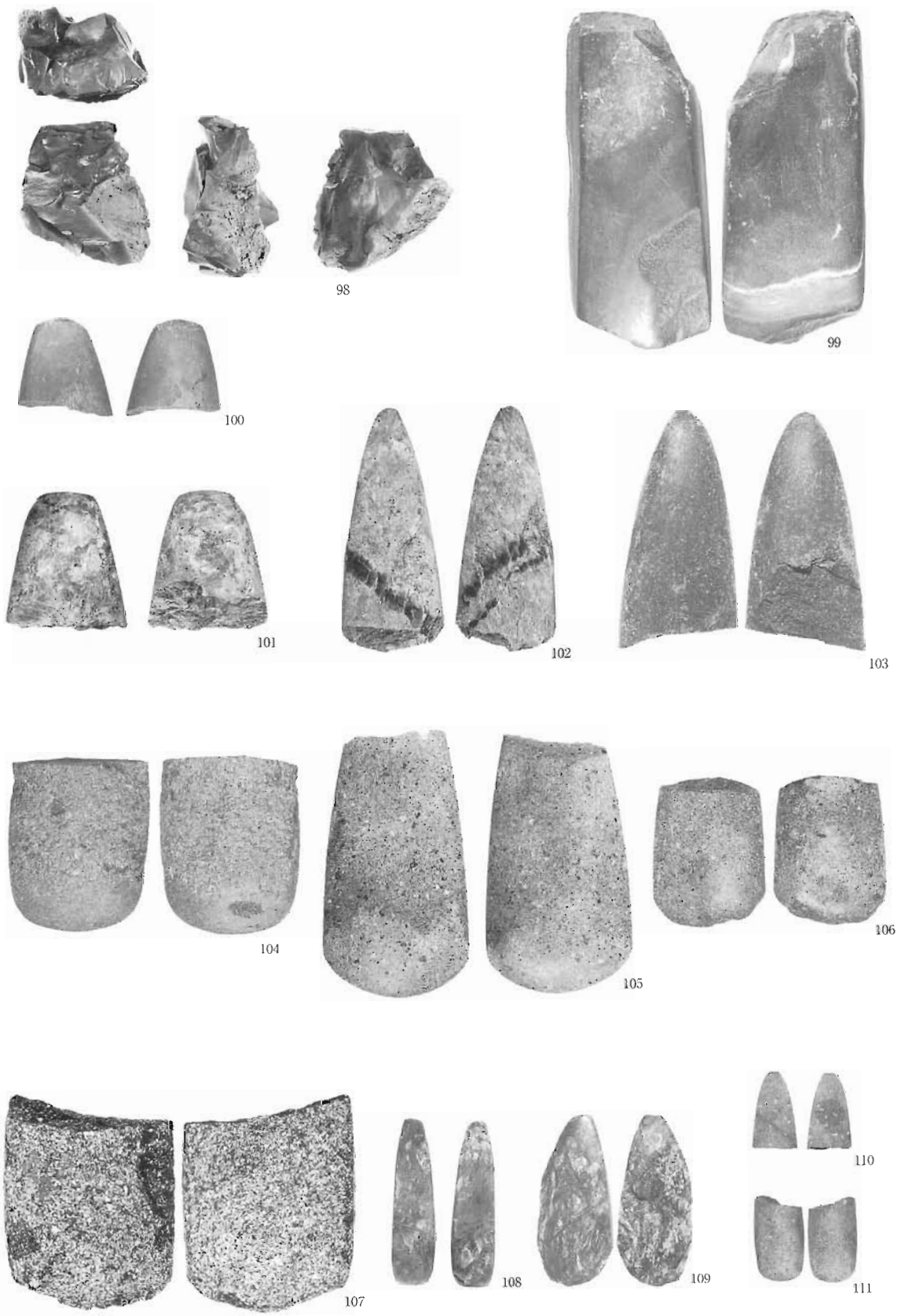
写真図版62　遺構外出土遺物(23)



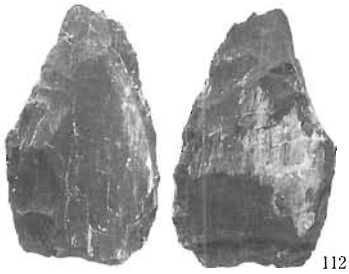
写真図版63　遺構外出土遺物(24)

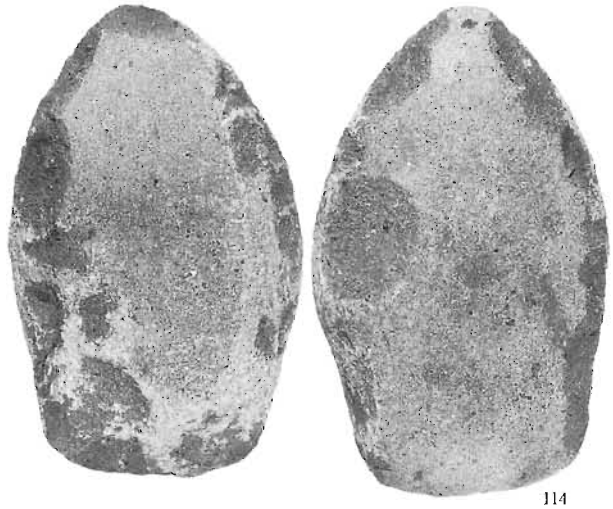


写真図版64　遺構外出土遺物(25)

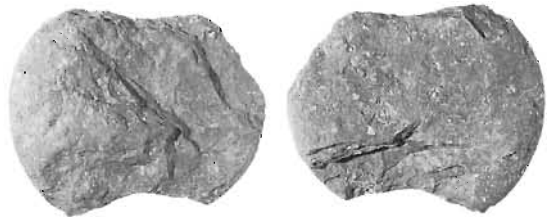


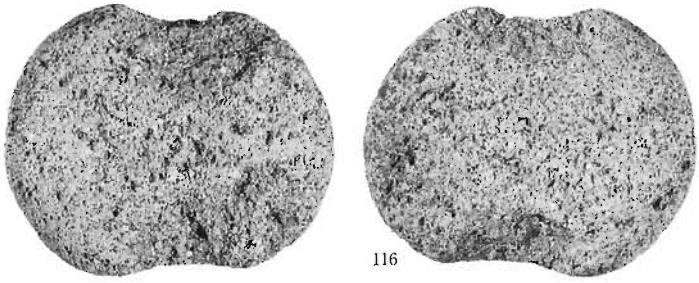
写真図版65　遺構外出土遺物(26)

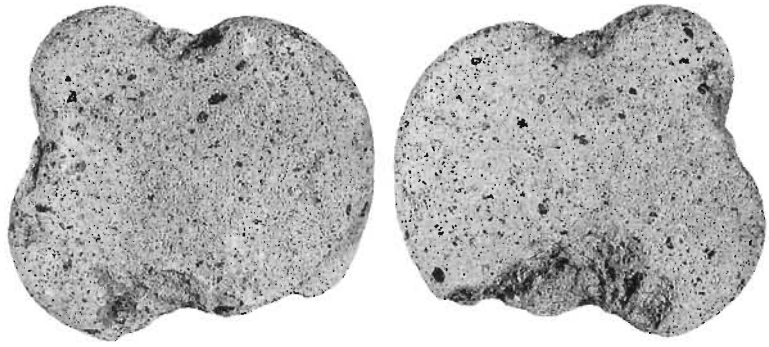

112

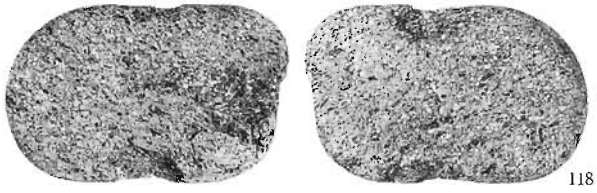

114

113

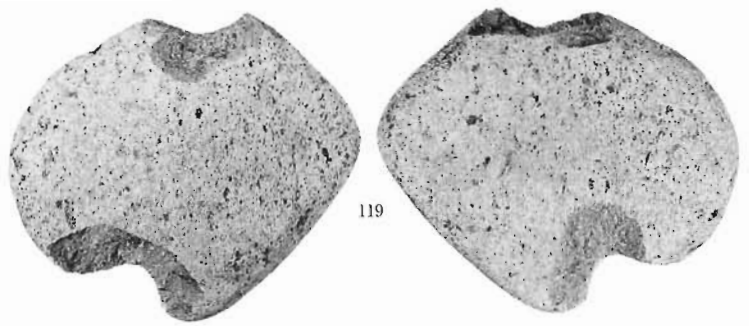

115

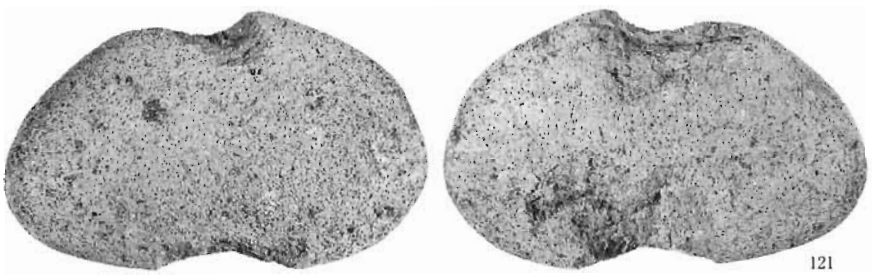

116

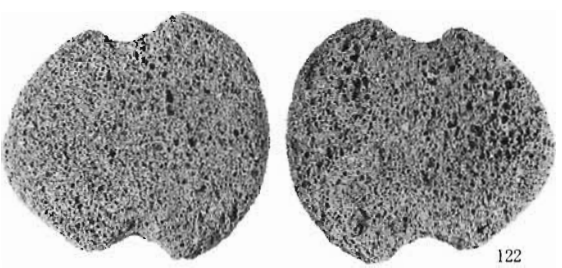

117

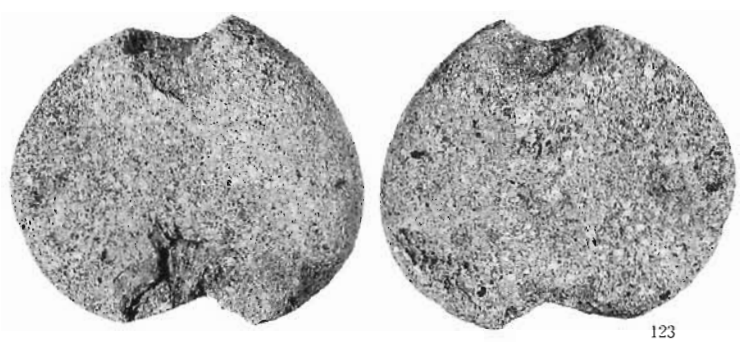

118

写真図版66　遺構外出土遺物(27)

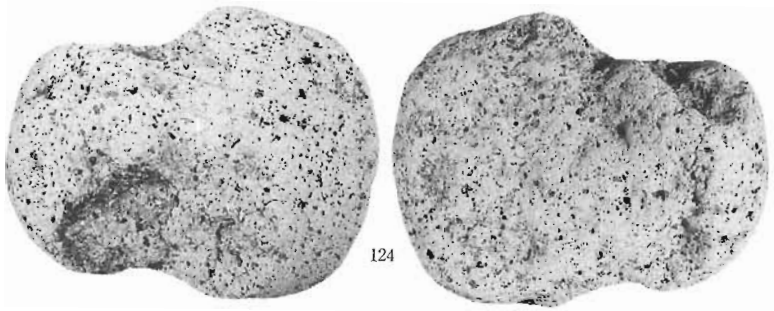


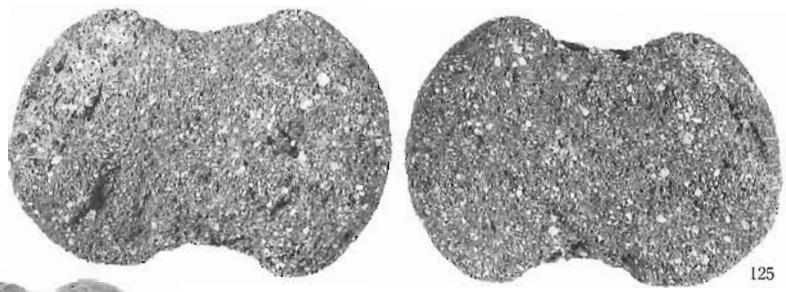


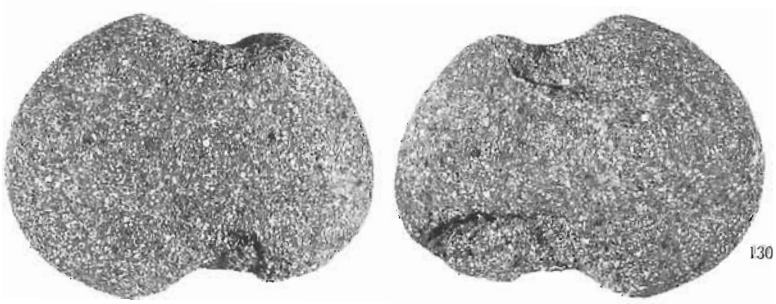




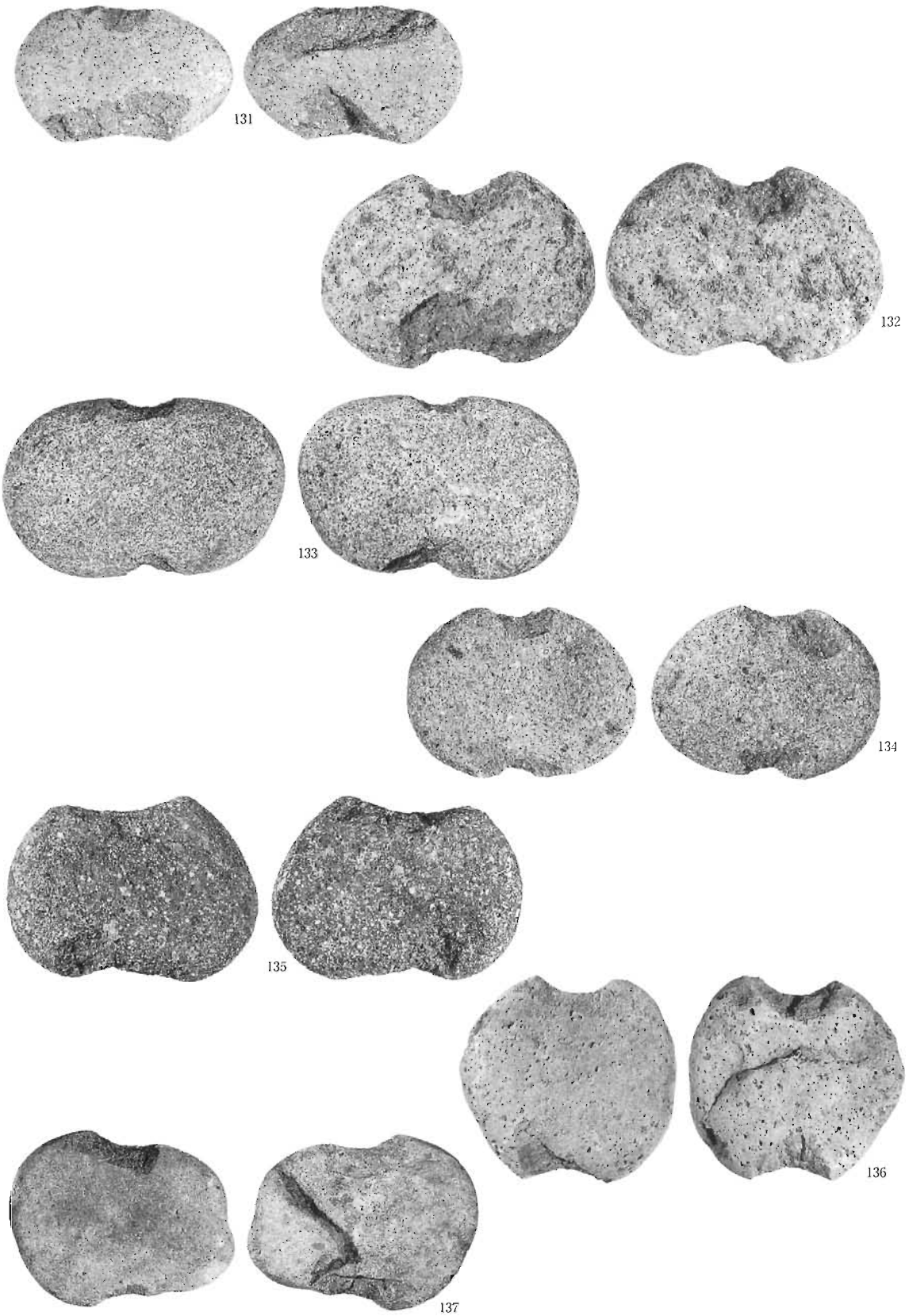
写真図版67　遺構外出土遺物(28)



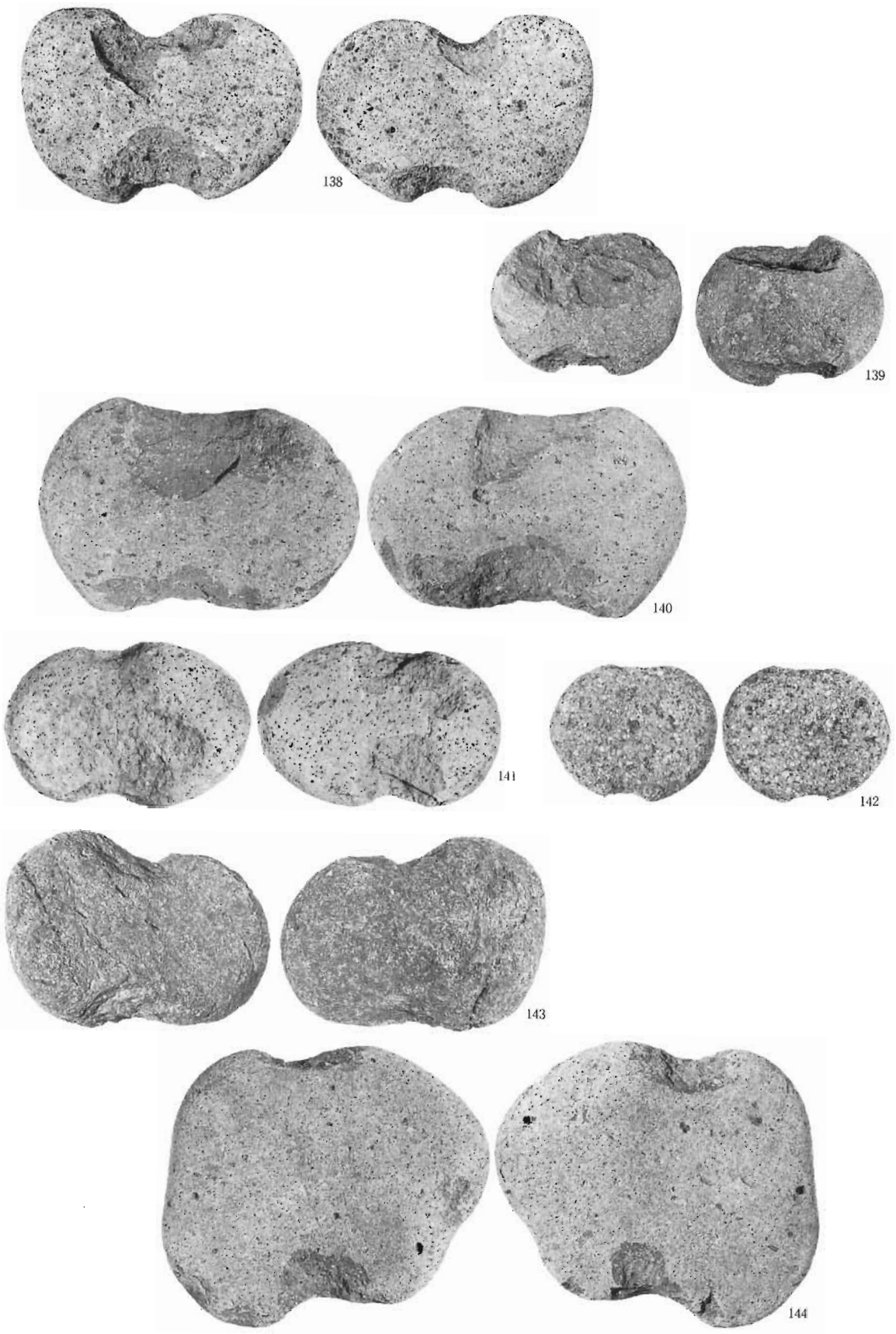




写真図版68　遺構外出土遺物(29)

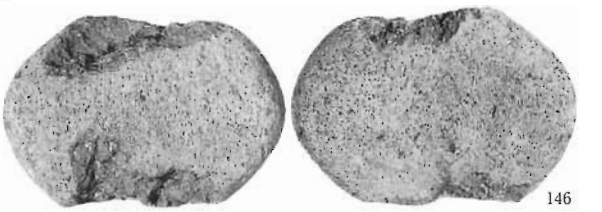


写真図版69　遺構外出土遺物(30)

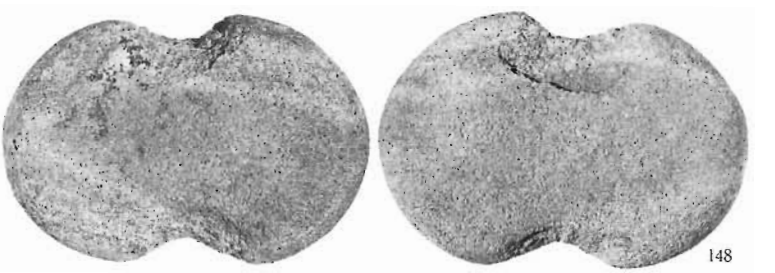


写真図版70　遺構外出土遺物(31)

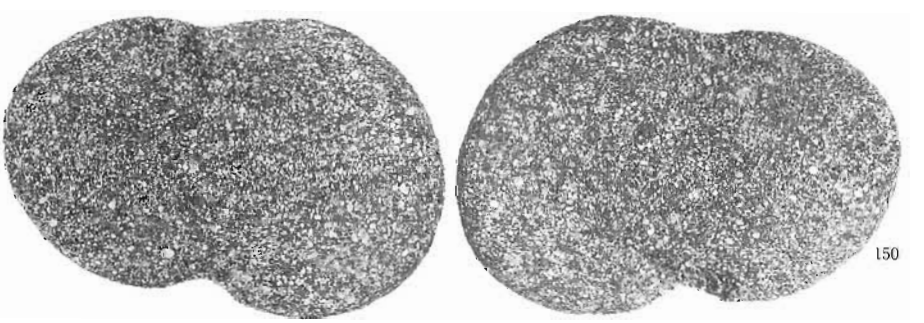
145


146

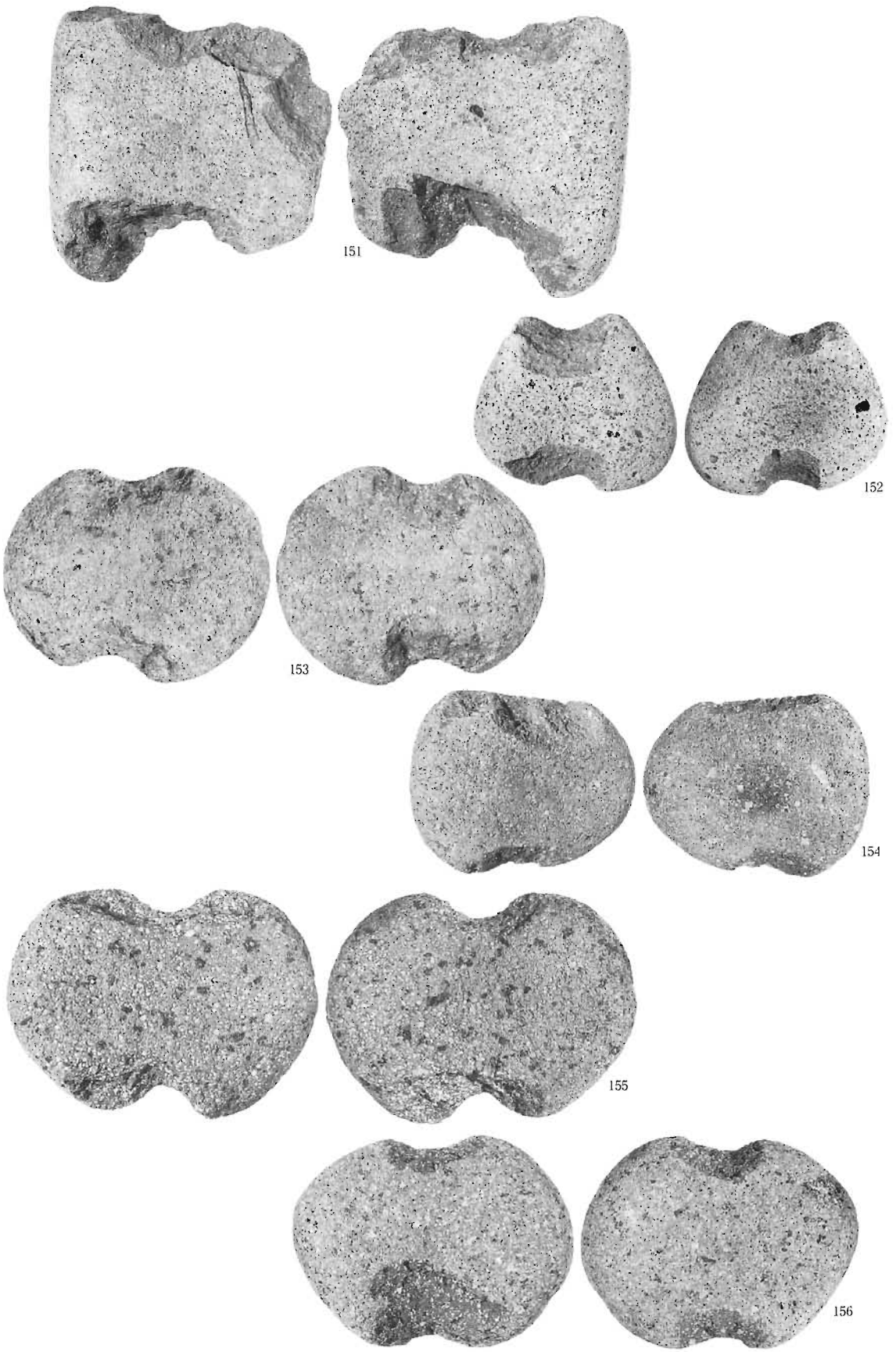
147


148

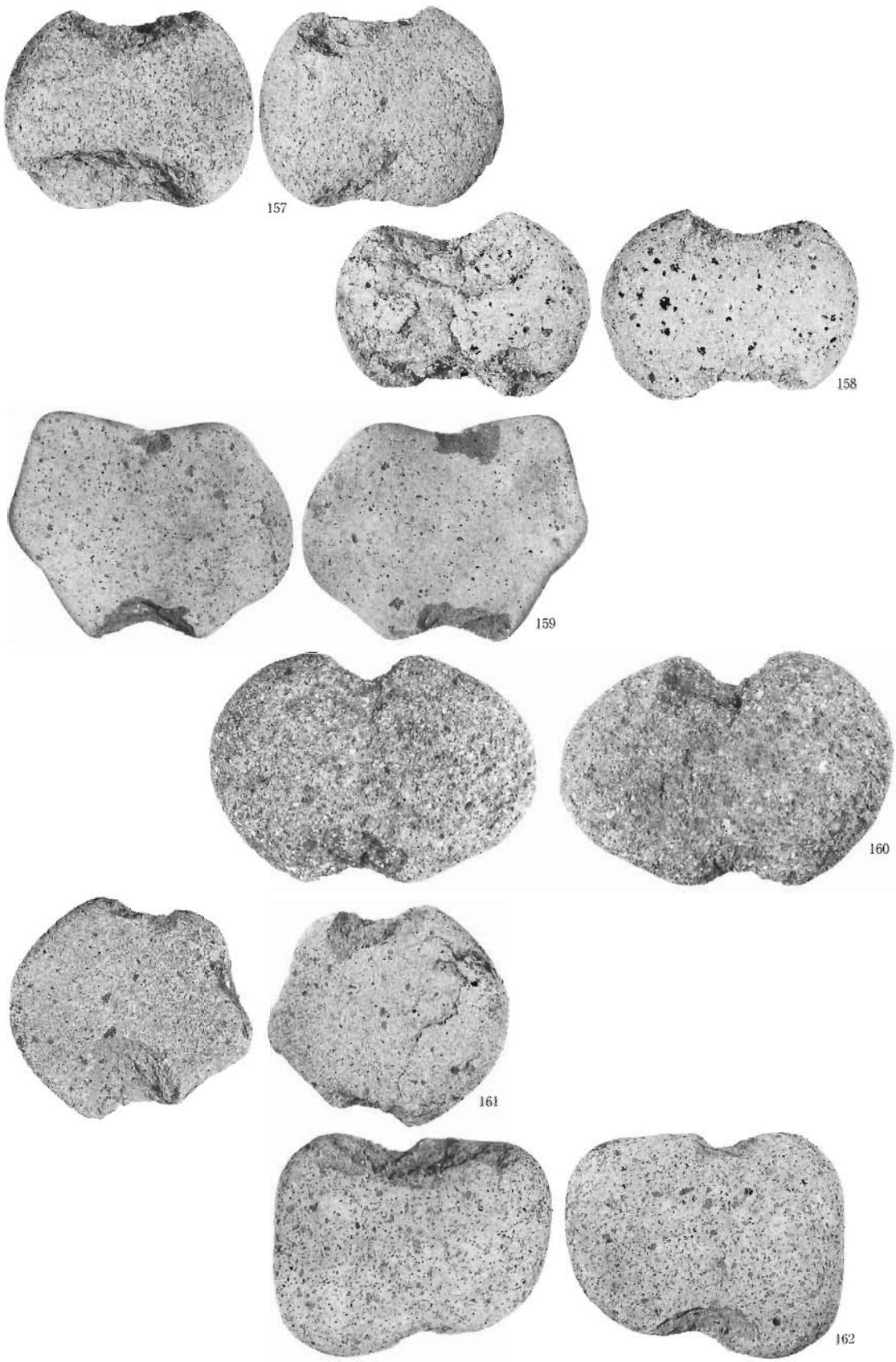
149


150

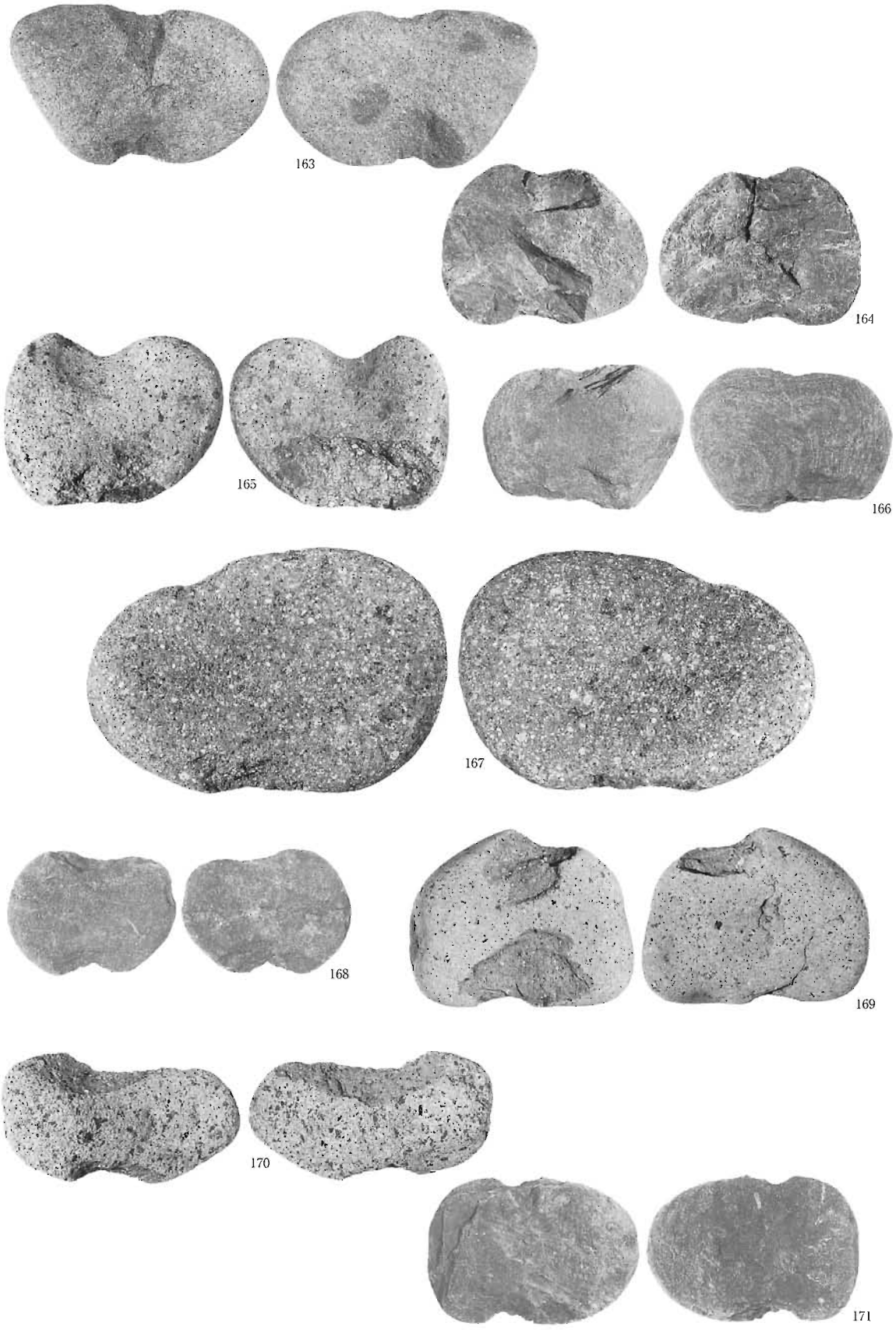
写真図版71　遺構外出土遺物(32)



写真図版72　遺構外出土遺物(33)

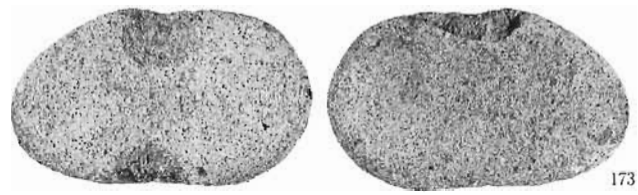


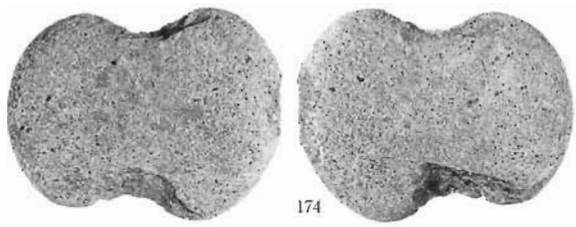
写真図版73　遺構外出土遺物(34)

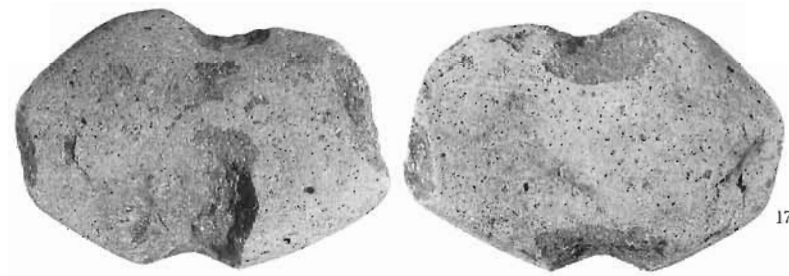


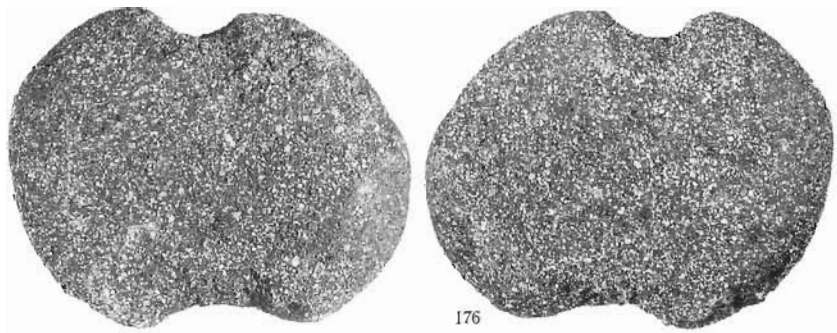
写真図版74　遺構外出土遺物(35)

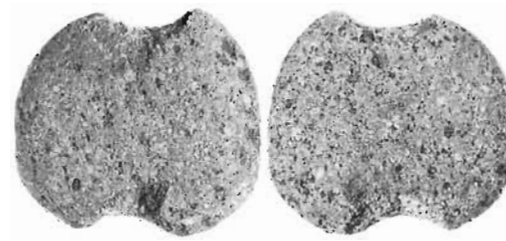
172


173

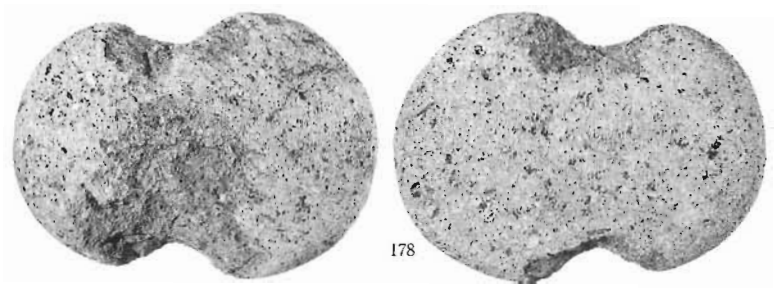

174


175

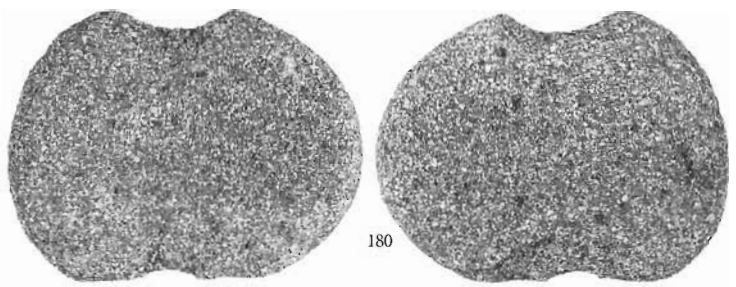

176

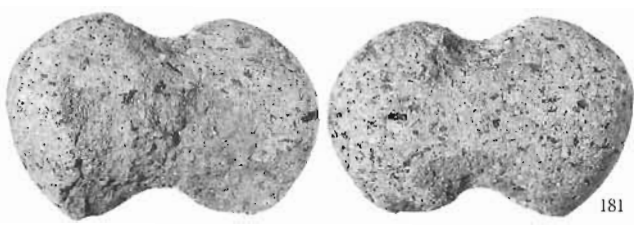

177

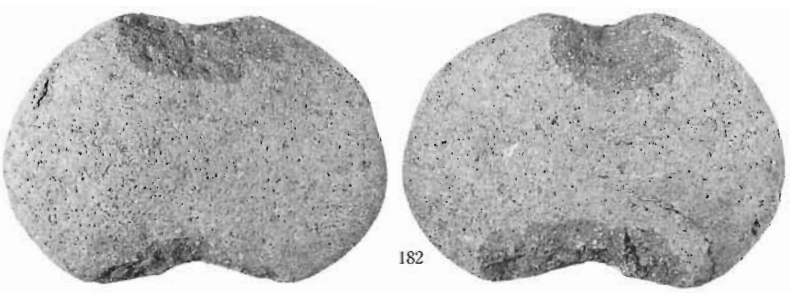
写真図版75　遺構外出土遺物(36)


178

179

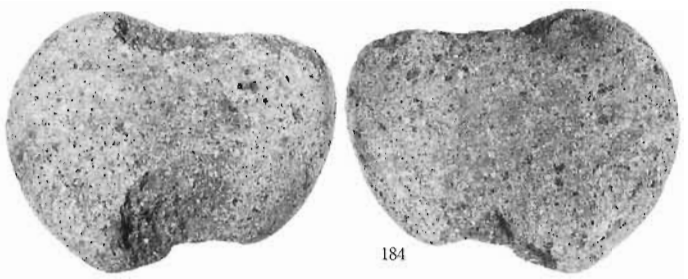

180

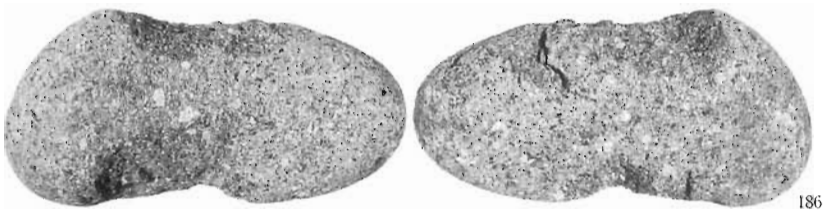

181

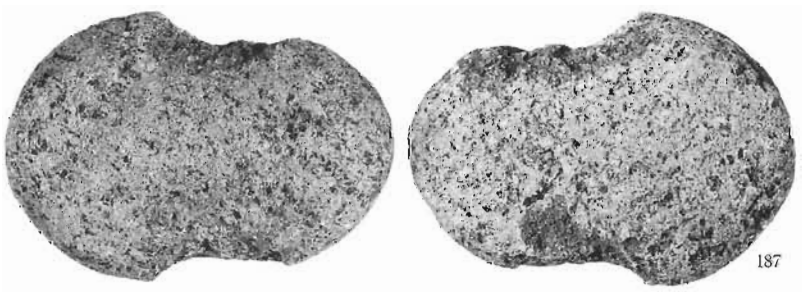

182

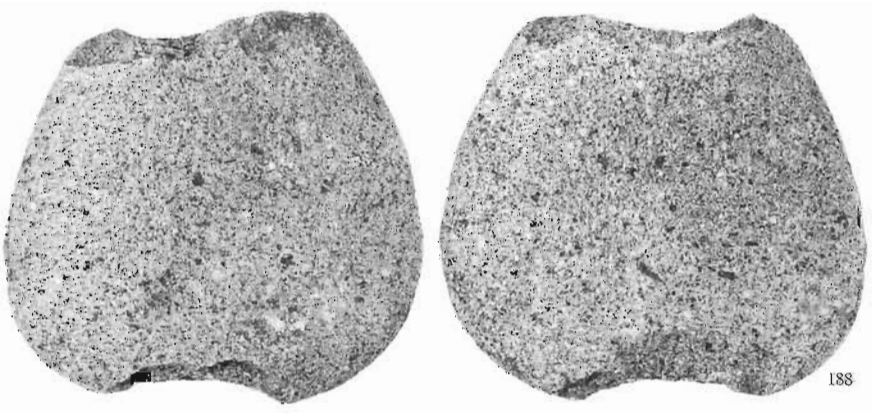
183

写真図版76　遺構外出土遺物(37)

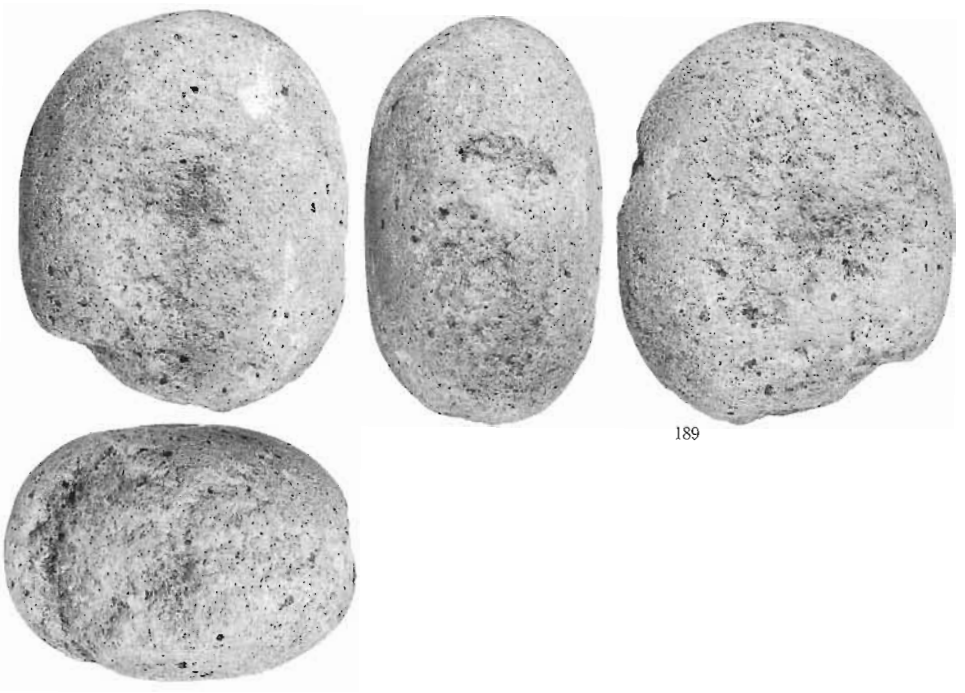




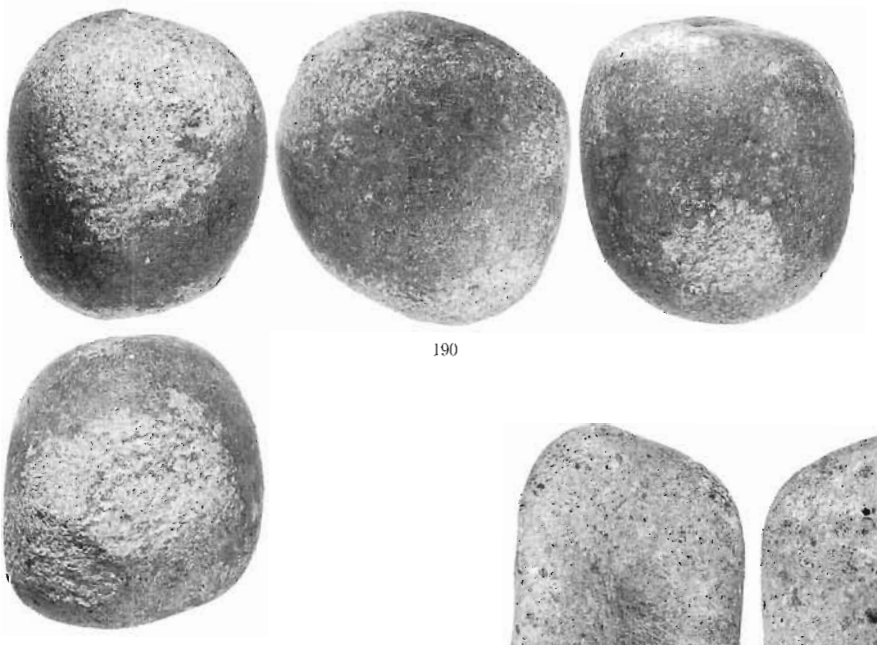




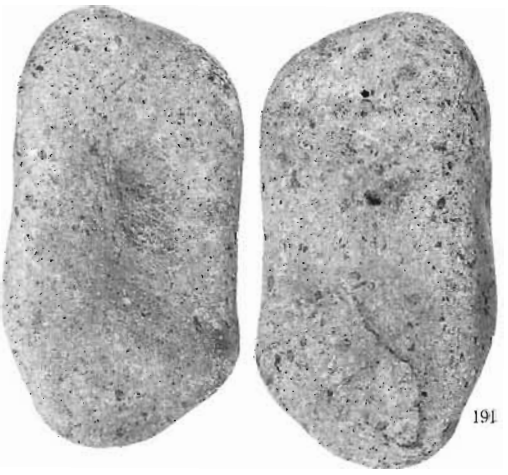
写真図版77　遺構外出土遺物(38)



189



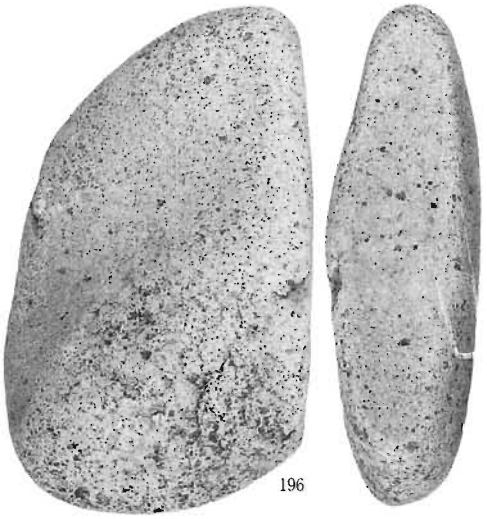
190



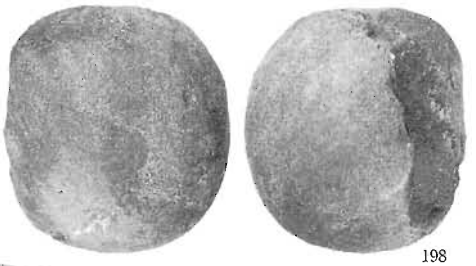
191

写真図版78　遺構外出土遺物(39)

写真図版79　遺構外出土遺物(40)

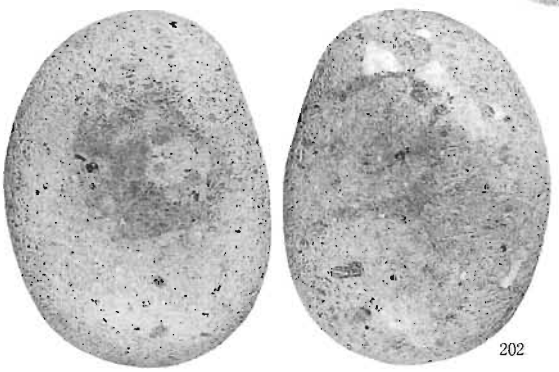

196

197


198

199

200


202

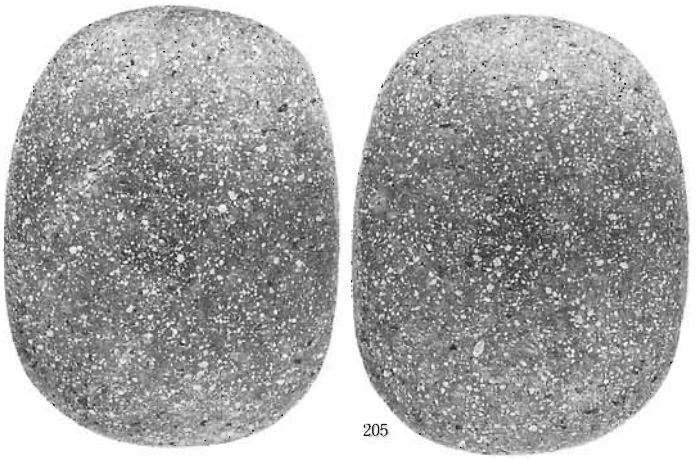
写真図版80　遺構外出土遺物(41)

201

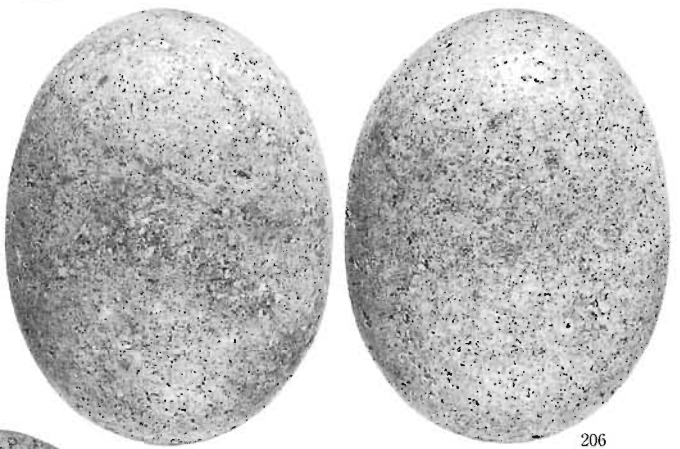
203

204

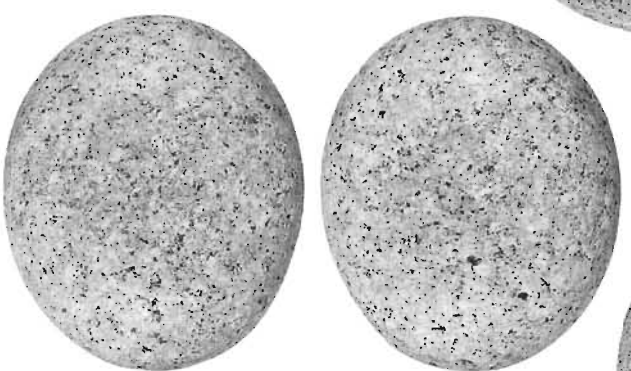
写真図版81　遺構外出土遺物(42)



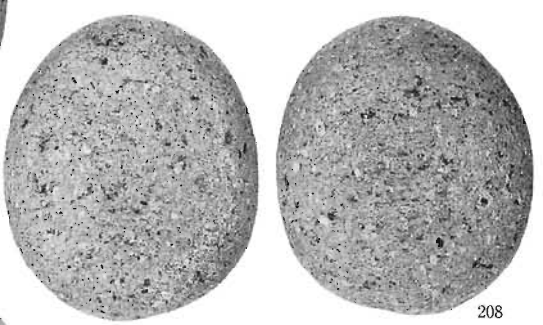
205



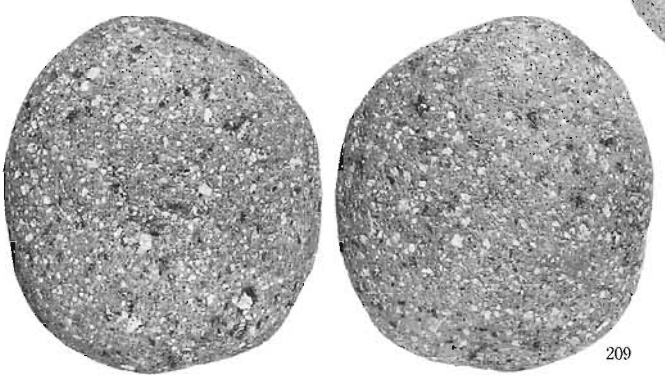
206



207

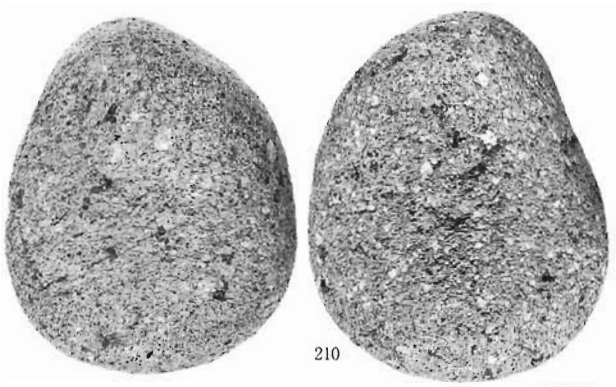


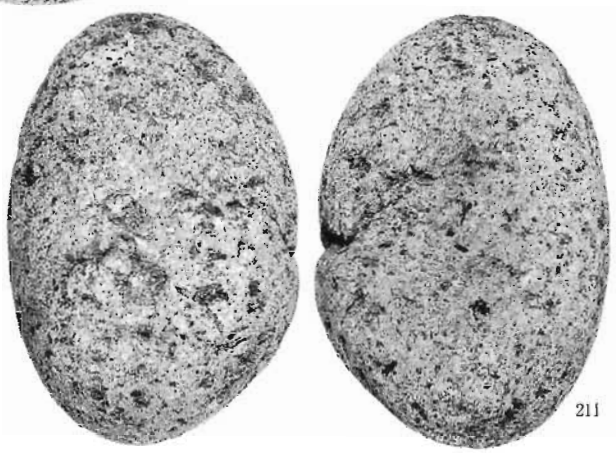
208

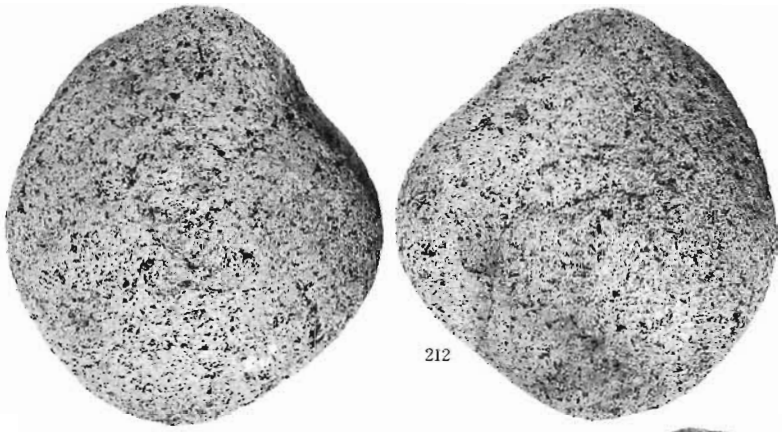


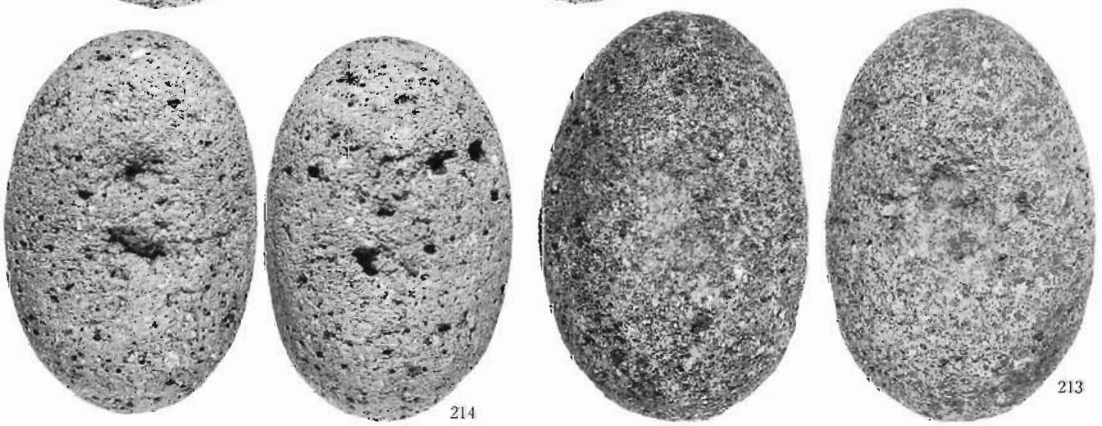
209

写真図版82　遺構外出土遺物(43)



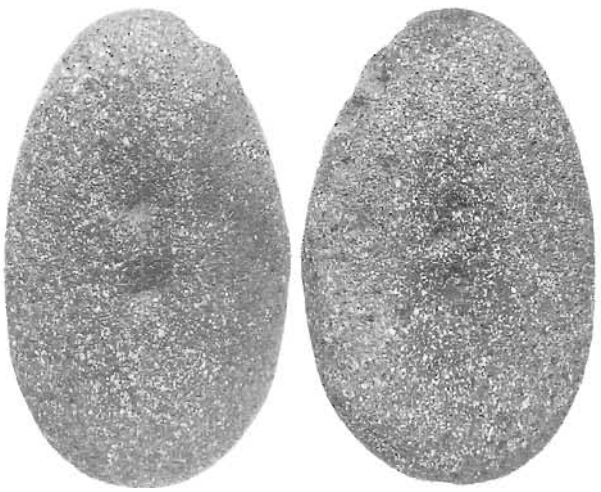






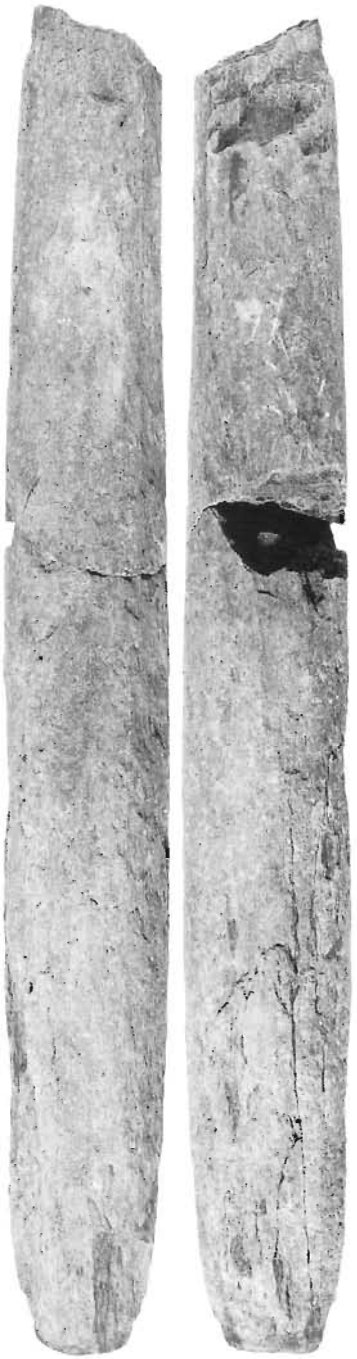
写真図版83　遺構外出土遺物(44)

215



216

217



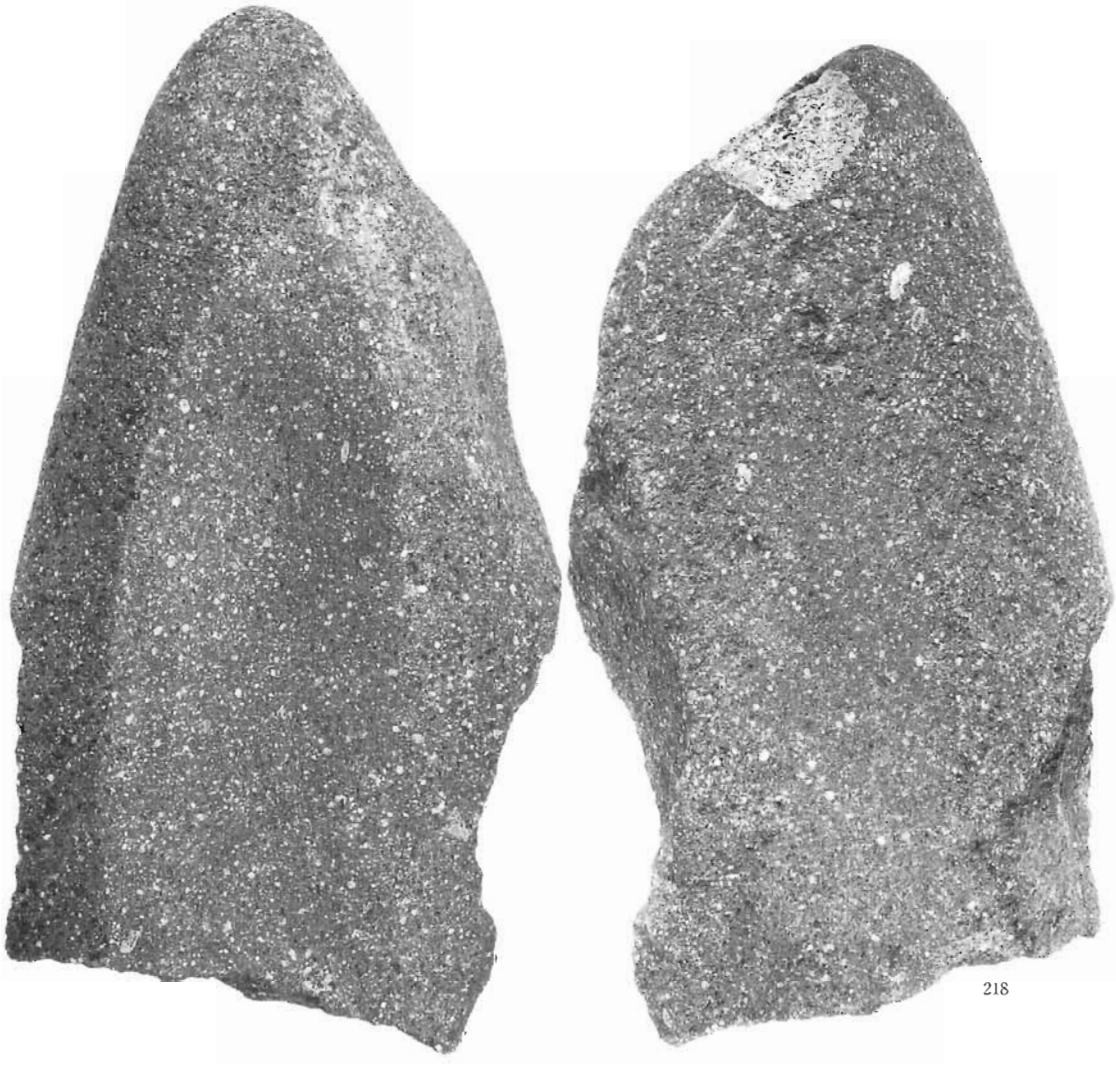
219

写真図版84　遺構外出土遺物(45)

220

221

原寸



218

写真図版85　遺構外出土遺物(46)

報　告　書　抄　録

ふりがな	あさいしいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	浅石遺跡発掘調査報告書
副書名	主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第403集
編著者名	菊池貴広
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019－638－9001
発行年月日	西暦　2002年11月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
浅石遺跡	二戸市似鳥字 嘔ノ坂19－1	03213	JE18-0396	40度 13分 53秒	141度 15分 28秒	2000 6.5～8.11 2001 4.7～7.6	3,790㎡	「主要地方道二戸安代線建設」

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浅石遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　4棟 掘立柱建物跡　1棟 包含層	後期中葉～後葉 後期中葉～後葉	縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡及び遺物包含層。 弥生時代中期～後期の遺物包含層。 東北地方南部・北部の影響を受けた土器が出土。
		弥生時代	竪穴住居跡　2棟 包含層	中期？ 中期～後期	
		縄文・弥生	土坑　20基		
		時代時期不明	掘立柱建物跡　1棟 柱穴状ピット　136基 畝間状遺構		

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　長　木村　昇　　副所長　高橋正儀

〔管理課〕

課長	韮澤正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山崎善光	〃	加藤美代子
〃	山岸直美	〃	湯沢邦子
主査	中嶋賢一	〃	伊藤滋子

〔調査第一課〕

課長	佐々木勝	文化財調査員	高木晃	文化財調査員	島原弘征
課長補佐	佐々木清文	〃	長村克稔	〃	中村絵美
〃	高橋義介	〃	星幸文	期限付調査員	坂部恵造
文化財専門員	小山内透	〃	杉沢昭太郎	〃	袰地剛
文化財調査員	吉田充	〃	村上拓	〃	玉山健一
〃	亀大二郎	〃	本多準一郎	〃	吉田真由美
〃	佐々木信一	〃	青山紀和	〃	小林弘卓
〃	早坂淳	〃	西澤正晴	〃	木村ひかり
〃	小松則也	〃	村木敬	〃	藤原大輔
〃	金野進	〃	福島正和	〃	川又晋
〃	野中真盛	〃	北村忠昭	〃	太田代一彦
〃	金子昭彦	〃	八木勝枝	〃	江藤敦
〃	阿部孝明	〃	米田寛	〃	立花公志
〃	阿部勝則	〃	丸山浩治		
〃	羽柴直人	〃	北田勲		

〔調査第二課〕

課長	高橋與右衛門	文化財調査員	濱田宏	期限付調査員	齋藤麻紀子
課長補佐	中川重紀	〃	安藤由紀夫	〃	吉田里和
文化財専門員	金子佐知子	〃	星雅之	〃	菊池賢
文化財調査員	赤石登	〃	佐藤淳一	〃	立花裕
〃	阿部眞澄	〃	半澤武彦	〃	駒木野智寛
〃	飯坂一重	〃	皆川英香	〃	原美津子
〃	鈴木裕明	〃	溜浩二郎	〃	石崎高臣
〃	久慈泰彦	〃	丸山直美		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第403集

浅石遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成14年11月22日
発行　平成14年11月29日

発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話（019）638－9001・9002
ＦＡＸ（019）638－8563
印　刷　三陽印刷株式会社
〒020-0811　岩手県盛岡市川目町23-1 盛岡中央工業団地
電　話（019）651－1321

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2002